黒い大晦日！"魔王"秋山成勲、聖地に死す……!?

enterbrain MOOK

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

やれんのか！大晦日！2007

K-1 PREMIUM 2007 Dynamite!!

大みそか ハッスル祭り2007

UFC79 ラスベガス大会

年末四大イベント 徹底詳報号

2008 SPRING 780yen

M-1グローバルが今夏日本上陸へ！
皇帝にまた会える！
エメリヤーエンコ・ヒョードル

魔界から奇跡の生還!!
あの"魔王"秋山成勲を戦慄撃破!!
三崎和雄

亡国PRIDEにKAMIKAZE吹いた!!

"ミスターやれんのか！"が
七難八苦の大晦日完走!!
青木真也

ジャイアンが勝手に選ぶ
2007年MMA大賞、発表！
ダナ・ホワイト UFC代表

アメリカでもやれますよ!!
UFC至上主義対談が実現！
郷野聡寛×長南 亮

狂乱の格闘ウォーズを徹底総括!!
大晦日"無礼講祭り"座談会

『ハッスル』に六次元殺法がサク裂!!
仰天の"倒立"デビュー！
池谷幸雄

バック・トゥ・レスリング!!
ハッスルの真の姿に肉薄！
TAJIRI／安生洋二／島田二等兵

kamipro Special 2008 SPRING KAMIKAZE吹いた!!
印刷・製本／大日本印刷株式会社

CONTENTS

新年あけましておめでとうございま～す!!

いつもよりよけいに回しておりま～す!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2008 SPRING

表紙写真／菊池茂夫

大晦日！2007』に
AZE吹き荒れた!!

に 何をもたらすか――？

の宴!!

『やれんのか！大
狂乱のKAMIKA

この熱はマット界に　何

狂気の

三崎和雄

「秋山成勲は男でした」

“国民”の期待を一身に背負い“魔王”秋山成勲を討伐!

大晦日、夢の舞台で“魔王”陥落!　その討伐を断行した男こそ、06年PRIDEウェルター級GP王者・三崎和雄である。会場の大歓声に包まれる中で勝利を勝ち取った三崎だが、いったいどんな思いでこの試合に望んだのか。その心情から、「日本人は強いんです」発言の真意まで、時の男に直撃した。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫
試合写真／山口比佐夫、平専英

日本人の誇り

Kazuo Misaki

――衝撃の快勝、おめでとうございます！

三崎　ありがとうございます。

――試合から3日経ちましたが、もの凄い反響なんじゃないですか？

三崎　自分の中ではいたって変わらずですけどね。もちろん知り合いとか、応援してくれた人たちから直接連絡をいただいたりとかはありますけど、とくに自分でそれを確認しているわけでもないですし（笑）。

――そうなんですか。三崎vs秋山戦というのは、いろんな意味で試合前から話題になっていましたが、まずは試合を終えてどういう気持ちですか？

三崎　まず、ホッとした……感触なのかなあ？　正直、僕自身あの試合までもの凄いキツい重圧の中で過ごしてきましたんで、精神的にどっかで嫌だなと思ってる部分もあったと思うんですよ。だけど、それを越えたという意味ではホッとしてる部分もありますね。

――今回の試合だけは絶対に負けられないという思いは強かったですか？

三崎　勝ちたいという思いは当然ありましたけど、それは誰だって勝ちたくてリングに上がってるわけですからね。ただ勝ち負けよりも、今回は秋山さんと一対一で向かい合いたい思いが一番強かったんですよ。勝負は神様が決める結果であって、今回一番大切だったのはやっぱり秋山さんと一対一で睨み合いたいという気持ちですね。

――その秋山戦を闘いたいと思った根源はどこにありました？

三崎　一番大きかったのは、デニス（・カーン）の負けです。あれで僕の中の大きなものを180度変えましたね。

――いわゆる1年前のヌルヌル事件には許せない思いはあったけど、一方で他人事でもあった。それが他人事にできない状況になったというわけですね。

三崎　秋山さんとは生きる道がまったく違うんだなという感覚を持ってたんで、僕の人生の中で交わることはないだろうと思ってたんですけど、それがあのデニスの負けを境に「自分が行かなければ誰が行くんだ」という思いに変わったんです。天から「おまえが行け」と指令がきたような感じで。

――PRIDEウェルター級GP準優勝者の次は、もう優勝者が行くしかない、と。

三崎　PRIDEのプライドですよね。ここで行かなければ絶対に後悔すると思ったんです。

――ただ、決断をする上では相当の覚悟が必要ですよね。今回はPRIDE全体を背負って、もしくは格闘技界の命運すら背負ったような感じじゃないですか。

三崎　それは結果への期待だと思うんですね。勝たなければ喜んでもらえないということだったと思うんですけど、僕の中では仮に結果を出せなかったとしても、僕はそこで自分の気持ちとみんなの気持ちを代弁して秋山さんに伝えたかった。そういう場所がほしかったんですよ。

――そこには自分のすべてを捧げるぐらいの思いもあるわけですよね。

三崎　それは今回だけじゃないですけどね。やっぱり試合の日は何があるかわからない状況で当日会場に向かいますから。だから家をしっかり片づけて、もう帰ってこれないかもしれない家をあとにして出る。いつも、それぐらいの覚悟でリングに上がってますからね。

――そこまで覚悟を決めましたか。

三崎　あくまで僕は生きるということを大切に考えてまして、たとえば神風特攻隊であったり、侍であったり、命を落としてきた先人たちの前で恥ずかしい死に方をしたくないと思ってるんです。そういった意味でも、いまこの格闘技というのはまっとうしなければいけないと思います。

――先人に恥じない試合……ですか。それは、特攻隊や侍のように常に死を意識することで自分の精神を保ってる部分もあるということですか？

三崎　似た部分はあると思います。戦争の兵士たちの気持ちとファイターの気持ちは非常に通じるものがあると思うんですね。先人たちの死をムダにしてはいけないし、やっぱり自分たちもまた命の大切さを伝えていかなければいけないと思ってますよ。

――そうでしたか。先ほど聞いたように秋山戦は多大なる重圧で恐怖感もあったと思うんですけど、その一方で多くの人たちに期待されているというのは誉れであったという感じですか？

三崎　試合当日はみんなの期待は重圧ではなく、僕のパワーに変わりましたからね。だから、無限大に自分が力をもらった感覚というんですか。僕はいつも自然体をテーマにしてるんですけど、太陽、月、海、風、そういった自然の一部に自分がなったような気持ちでしたね。そんな感覚でみんなのエネルギーが身体に注ぎ込まれたというか。

――他人のために闘うというのは、ある種プロの醍醐味でもあると思うんですけど、その部分の満足感はありますか？

三崎　あのー、正直、満足感はないんですよね。

――あっ、そうなんですか⁉

三崎　なんか……ホントにいつもと変わらず、試合が終わったんだなって。次は自分に何ができるかなというぐらいの感覚ですね。なんだろうな……急いでるわけじゃないんですけど、もう歩いて行ってしまってるんですよ、僕の心がどんどん先に。だから後ろを振り返って、そこにしばらく座ろうって気もないですし。

――そういう意味では、最後のフィニッシュのキックが反則なんじゃないかっていうような意見が出て、再戦が取りざたされていますけど。

三崎　ああ。人から聞いて「へえ、そういうふうになってるんだ」って感じですけどね。でも、正直まったく興味がないですね。

――興味がない、というのは？

三崎　故意ではないですけど、もし自分の蹴りが反則だという結論であれば、僕も謝らなければいけないとは思います。だけど、だからって再戦ということになるのかな？　と僕は思うし。そんな軽いもんじゃないだろうって。さっきも言ったように、勝ち負けの決着をつけるためにリングに上がったわけではないですから。

――再戦の必然性を感じない、と。

三崎　たとえば、この先秋山さんがほかの舞台で活躍して、僕もなんとかいい状態をキープできて、またそういう気運があるのであれば闘うときがくるかもしれないですよ。それは強い者と闘いたいという動物的な本能で。だけど、もちろん逃げるつもりはまったくないんですけども、今回の結果を受けての再戦というのは僕の人生に必要あるのかなって。だって、そこが最終ゴールではないですからね。

――あくまで秋山戦は通過点だということですね。では、あらためて試合を振り返ってもらいたいんですけど、相対してみた秋山成勲はどうでした？

三崎　これはねえ、僕が思ったとおりでしたね。

――ほう！　思ったとおりというと？

三崎　ホントにねえ、強かったですよ（しみじみと）。僕はいつも強い弱いをどう判断するかというと、動物なんですよね。テクニックやフィジカルは僕の中でさほど問題ではないんです。もちろん試合をする上で必要な技術はありますけど、やっぱり動物性が強い人間が僕は怖いんです。秋山さんはそれがもの凄くある選手だなとは前々から思ってましたけどね。

――野性動物はオス同士が向かい合った瞬間にどっちが強いかわかるといいますけど、そんな感覚ですか？

[12.31 やれんのか! 大晦日! 2007]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○三崎和雄vs秋山成勲×
(1R 8分12秒 KO)

秋山とは対照的に会場の大歓声を浴びリングに上がった三崎。緊張感漂う探り合いの末、秋山の右ストレートがヒットしダウンするも、ここからトップギアに入ったがごとく三崎が反撃。秋山の顔面に左フックをぶち込むと、すかさず顔面蹴りが炸裂！“魔王”討伐に会場は地鳴りのような歓声をあげた。

三崎　ええ。だからホントに強い者同士はいきなりガッといかないんですよ。犬なんかもそうですけど、危険な犬ってまったく動かずに目だけキョロキョロ動かしてる。だから秋山さんとのコンタクトも非常に少なかったと思うんですよね。

――そういえば、三崎選手はゴング前もなるべく秋山選手のほうを見ないようにしてましたよね。

三崎　ああ、それはね、見ちゃうとカッカカッカしちゃうんですよ（笑）。僕、リングに上がるまでは、一回マックスにテンション上げるんですよね。エンジンをガーッと吹かしてレッドゾーンまで持ち込んで。でも、リングに上がるときは回転数をゼロに近いぐらいまで落として、ホントに無の状態にするんです。そうすると、いつ何が襲ってきても、すぐにレッドゾーンまでエンジンが入る状態になるんですよね。

――じゃあ、見ちゃうと速攻で襲ってしまうかもしれなかった、と。確かに三崎選手は入場のときも「この人、大丈夫かな？」というぐらい気合い入ってますもんね（笑）。演出を決めていく郷野さんとはまったく違うというか。

三崎　逆に、ああいうことができる郷野さんはホンットにうらやましいですよ（笑）。

――レッドゾーンに入りながら踊れませんもんね。でも試合を観て感じたのは、スタンドだと誰とやってもだいたい三崎選手が取りたい距離を取ってる感じがするんですけど、今回は秋山選手がググン前に出てプレッシャーをかけてましたよね。こういうシーンは初めてだなと思ったんですけど、実際にプレッシャーって感じてました？

三崎　もちろんどんな選手でもプレッシャーは感じるんですけど、相手が何を考えてるか、どういう呼吸をするのかとか、そういう感覚は自分が押してても下がってても変わらないんですよ。そういう意味では圧力は感じなかったですね。

――試合では先に三崎選手がダウンした場面がありましたよね。

三崎　骨格なのかなんなのか、響く選手っているんですよね。僕は骨だと思ってるんですけど、蹴りにしても芯まで響く。で、あの瞬間は僕も何かを仕掛けるときだったと思うんですけど、あのパンチは非常に重かったですね。

――でも、そこで持ちこたえたのは……。

三崎　（さえぎって）そこは魂です。たぶん、意識は飛びましたよ、あのとき。気づいたらマットがあって、「ああ、完全に殴られて倒れてるな」って。でも、瞬時に意識が戻ると「レフェリー、止めんなよ！」ってなって（笑）。その瞬間、殴ってる秋山さんを下から狙えるっていう頭がまず働いたんですね。たぶん向こうもそれを察したんで、すぐに離れたんでしょうけど。

――しかし、あそこから何か三崎選手のスイッチが切り替わった感がありました。

三崎　郷野さんがよく僕に言うんですけど「おまえは第2エンジン持ってるからな」って。なんかあの瞬間は第2エンジンが作動して、ちょっと「この野郎！」って気持ちになったんですよね。

――へんな話、一皮むけたというか、三崎和雄の新しい魅力がガッと出たような感じでしたよね。

三崎　昔はケンカ魂だけで試合してたんですよね（笑）。でも今回も、僕の個人的な思いだけで言ったらケンカなんですけどね。正直、これがリングだろうが、外だろうが、ど

こだっていいって思ってましたから。

――最後のフィニッシュの場面は鮮明に覚えてますか？

三崎 なんとなくは覚えてますけど……、やっぱり倒すパンチってあんまり手応えってないんですよね。おもいっきりガツンと当てたパンチのほうが意外と効かないもんなんですよ。だから、倒したって感触のパンチではなかったんですけど、まあ、あとは勝手に身体が動いた感覚でしたね。究極のところはあまり覚えてないですけど、やっぱり相手が向かってくるっていう感触があったから蹴ったんだと思うし。これはもう自分の中での感触なんで、ちょっと伝えづらいですけど。

――それに、勝った瞬間は……。

三崎 （さえぎって）あの瞬間は、生きてるのか死んでるのかすらもわからなかった。試合が終わって菊田さんと抱きついてるときに、たぶん「夢か?」って菊田さんに聞いてると思うんですよ。パンチをもらって一回マットを見てますからね。でも、あとで見たら、髙田さんをコーナーまでブチ込んでたりしてましたね（笑）。

――なんでビンタされてるんだろうなって思ったりしませんでした？（笑）。

三崎 あれね、僕、髙田さんに「張ってください」って言ったんですよ。やっぱり自分の中で節目としてあの試合をしたかったんで。でも……意味わかんないですよね？

――観てるほうも、意味はわからないけど、パッションは伝わってきました（笑）。

三崎 だから髙田さんに電話して「すいません、取り乱してしまいました」って連絡はしたんですけどね（笑）。

――そうでしたか。試合後はマイクがありましたけど、あれも考えて言ったというよりも思ってることがドーッと出たという印象でしたけど、真意はどこにありました？

三崎 あのー、僕は試合が終わったらすべてクリアにしたいんですね。だから、起きたことについてあんまり話したくはないんですけど、でも僕が言った言葉がすべてです。僕は自分の心を映し出す鏡をいつも心の中に持ってるんですけど、やっぱり自分の気持ちに正直でいたい。だから、人を裏切ることはやっぱり僕には許せなかったんですよね。僕も柔道をずっとやってきて武道の精神で僕は助けられてるし、今日まで生きてくることができた。そういう精神を伝えたかったんだと思います。

――最後に秋山選手と向かい合ったのは、そういう意味がありましたか。

三崎 でも、一つ言いたいのは、あの状況って秋山さんにとっては完全にアウェーじゃないですか。でも、あの場所に立って僕の対戦を受けてくれた。これは男ですよ。並大抵の忍耐力、精神力じゃできない。もう、こんなに素晴らしい男はいないなって思いましたね。だから、勝手な言い方ですけど僕としてはまた一人戦友が増えたなって感覚なんですよね。

――極限の試合をした者同士だからこそ、秋山選手の尊敬できる面も誰よりも感じたということですね。

三崎 はい。「強い男」だな、と思いました。だからこそ「もったいない」って言ったらおこがましいですけど、彼自身の力で信用を取り戻してほしいなって思ったんですよ。だからこそ、マイクであ
あいう言葉が出たんじゃないかと思います。

――ただ、三崎さんの決めゼリフの「日本人は強いんです」が、ちょっと誤解されてる部分もあるみたいなんですよ。

三崎 ……ああ、そうか。僕はもちろん国籍云々のことを言うつもりなんて毛頭ないんですよ。なんというか、僕はね、人種はどうでもいいというか、結局は人間なんです。アメリカだろうがブラジルだろうが、どこだって一緒。僕が伝えたかったのは、やっぱり戦争にしてもなんにしても、最終的に闘う目的は世界平和だと思うんですよね。だから、平和のために僕も何か役に立てばいいなと思ってるんですけど、そのためにはまず自国を見直さないといけない。それが僕の考え方なんですよ。そういう意味で日本人に誇りを持ってもらおうと思って「日本人は強い」と言ったんですよね。

――なるほど、なるほど。

三崎 たとえば、いま自分が何をしたらいいかわからないような若者っていっぱいいますよね。そういう人たちが僕の試合を観て、「あ、日本人って凄いな」って思ってもらいたいんですよ。「君たちにも先人から受け継いだ日本人の血が流れてるんだよ」と。ただ、今回はシチュエーション的に誤解を招くことも確かにあったかもしれない、それは本当に謝罪したいと思います。

――自分のアイデンティティとか自分に誇りを持ってもらいたいということですね。

三崎 僕自身、日本で生まれ育ってこの血が流れてる限り日本という国を愛してるし。かといってほかの人種は受け入れないのかって、まったくそんなことない。みんなで幸せに平和にやっていきましょうよってことが一番ですから。

――さて、これで名実ともに日本の期待を背負う存在になりましたけども。

三崎 あまり期待されても困るんですけどね（照れながら）。僕はどういう状況になっても自分のスタイルや信念、本質は変えることはできませんから。もちろん人を裏切るようなことはしませんけども、政治、ビジネス関係なく、後悔のない生き方をしたいし。まあ、どう期待されてるのかわからないですけども、応えられるように頑張っていきます。

――これからどんな試合をしていきたいですか？

三崎 やっぱり魂を強烈に伝えるような試合をしたいですね。今回は……伝わったかどうかわかりませんけど、毎回毎回それを超える試合をしていきたいと思います。

――常に戦場に出ていくときの気持ちは一緒だ、と。

三崎 そのとおりですね。

――わかりました。08年も期待してます！

【08年1月3日／都内・グラバカ柔術クラブにて収録】

戦争にしてもなんにしても、最終的に闘う目的は世界平和だと思うんですよ

Kazuo Misaki

みさき・かずお■1976年4月25日、千葉県出身。01年にパンクラスでプロデビューし、PRIDEには04年『武士道・其の参』から参戦。06年ウェルター級GPでは、ダンヘン、デニス・カーンらを破り見事優勝。今回の『やれんのか！』では"魔王"秋山成勲から白星を挙げ、喝采を浴びた。178cm、84.9kg。

魔王は死んだのか

〝黒の大晦日〟レポート

文／田中太陽

一夜限りの夢祭りに、およそふさわしくない男が一人いた。好試合を見守るファンたちも、皆どこかでその男の存在を意識させられていた。男の名は秋山成勲。会場に漂うセンチなムードを黒く塗り潰さんとして、〝魔王〟と呼ばれた男はいま、静かに出番を待っている。

第4試合の勝者となった石田光洋に対し、会場中から温かな大声援が注がれた。ここまで地味ながらも高水準な試合が続き、なおかつ選手それぞれの物語は充分に観客へと伝わっている。すべてのMMAファンに愛されたPRIDEは今日、最高のかたちで幕を降ろすだろう。

だが、お祭りムードはここまでだ。〝あの男〟の出番が近づくにつれ、会場はいままでの試合とまったく意を異にする緊迫感に包まれてゆく。ファンの想いが実現させたこの夢舞台へ、ファンにすべてを拒絶された選手がいま降り立たんとしている。いよいよ〝黒き魔王〟秋山成勲の登場である。

ちょうど一年前のこの日、秋山は〝日本MMA界の英雄〟桜庭和志と対峙していた。そこで決して許されぬ罪を犯したことにより、すぐそばまできていた〝新たなる英雄〟の座を永遠に手放してしまったのは周知のとおりである。そしてこの事件を皮切りに、秋山の本質である〝怪物性〟が次々と露呈してゆく。

そもそも秋山をスーパーヒールたらしめた要因は、「身体にクリームを塗る」という反則の質そのものではない。問題はその罪から逃れようとしたことと、試合ぶりがあまりにも凄惨すぎたことにこそあったのだ。ファンは罪を認めようとしない秋山の姿勢を〝悪〟と認識し、反則を伴なった残虐ファイトに恐怖を覚えた。

さらには相手が桜庭という英雄的存在であったこと、秋山自身も桜庭に対してリスペクトを表明していたことなども事態に拍車をかけ、秋山へのバッシングは燃え上がる一方となった。

　そしてFEGが秋山に下した処分は「無期限の出場停止」というもの。これによる謹慎は"みそぎ"として意味がなくもなかったが、問題はその明け方であった。

　2007年11月、『HERO'S』韓国大会にて秋山の復帰が決定した。かねてより「秋山に対する処分は在日韓国人差別である」と主張してきた韓国ファンの後押しと、強い日本人選手がどうしてもほしいFEGの思惑を利用し、日本のファン不在のまま秋山は復帰を決めたのだ。これが国内で叩かれないわけもなく、沈静しかけていた秋山バッシングは再び燃え上がり始めた。今度は「許す？　許さない？」といった議論を伴なわずに、である。もはや国内から、秋山を支持する声があがることはなかった。

　しかしながら、PRIDEウェルター級GP準優勝者であるデニス・カーンを復帰戦で打ち倒したことにより、秋山はまたしてもMMAの中心に舞い戻ってきてしまったのだ。

　その勝ち方があまりにも凄絶であったがゆえ、ファンは"強者"としての秋山をハッキリと恐れ始めた。秋山の負ける姿は見たいが、秋山と贔屓の選手が闘うところは見たくない。

　桜庭との決着戦すら誰からも望まれないという異常事態の発生である。怪物的な強さと悪魔的な黒さを合わせ持つ"黒き魔王"が、ここに誕生した。

　そうして"魔王"となった秋山の国内復帰戦、『やれんのか！』第5試合がいままさに始まらんとしている。対戦相手はPRIDEウェルター級GPチャンピオン・三崎和雄。王者vs魔王である。

　白と黒のカラーを強く打ち出した煽りVが流れると、会場の盛り上がりは早くも最高潮に達した。秋山の映像にはブーイングが、三崎の映像には歓声がそれぞれ浴びせられる。もはや構図はベビーvsヒールのプロレス的図式をも超え、善vs悪のハルマゲドンにまで達してしまっているかのようだ。この異常な雰囲気の中、魔王は魔王でいられるのだろうか？　王者は王者としていられるのだろうか？　一抹の不安が残る。

　しかし秋山の入場は、寒気がするほどいつもどおりであった。秋山の入場曲はもともと『PRIDE・GP』のテーマ曲でもあり（煽りVでもチクリと刺されていた）、この場、この雰囲気で使うにはかなり勇気がいる曲のはずだが、そのまま変えずにきた。正座して一礼のパフォーマンスも普段どおり。この男、太い！

　割れんばかりのブーイングに包まれながら、微塵の動揺も見せずに花道を進む秋山。そのあまりにも堂々とした、見方によってはふてぶてしくすらある力強い足どりからは、観客に対する引け目などいっさい感じられない。いったい秋山にとって"アウェー"とはなんなのか？　思えば在日韓国人として生まれた秋山にとって、日本という国はすでにアウェーだった。韓国に渡り、柔道選手としての栄光を目指すも、そこで待っていたのは在日差別だった。再び日本に戻り、腕一本でようやくつかんだ『HERO'S』というホームグラウンドも、自らの過ちであっさりと手放してしまった。あるいは人生そのものがアウェーであった秋山にとって、この程度のブーイングなどアウェーのうちに入らないのかもしれない。

　対する三崎は、大声援に包まれながらの入場。彼もまた、これほどの歓声を浴びるのは初めてだろう。地味なチャンピオンと言われ続けた三崎をここまでのベビーフェイスに仕立ててしまうのだから、秋山のブラックパワーはたいしたものである。

　この日もっとも"勝敗"に特化した闘いは、こうして始まった。拳をアゴの高さに構え、ジリジリと圧をかけてゆく秋山の姿はどこかヒクソン・グレイシーを彷彿とさせる。三崎は秋山の周りをグルグル回らされる格好となった。

　6分経過直前、秋山のパンチが初めてクリーンヒットする。倒れた三崎をパウンドで仕留めにゆくが、ここは三崎がしのいでスタンド復帰。8分過ぎ、今度は三崎のパンチがまともに入った。秋山がダウンし、怒号のような歓声が起こったその瞬間、起き上がりに合わせた三崎のキックが秋山の顔面にヒットした。打ち鳴らされるゴング、総立ちとなる観客席。負けた！　秋山が負けた！　魔王の目指した覇道はいま、PRIDE王者という"勇者"の手によってここで断たれたのだ。

　なるほど、確かに素晴らしき物語だった。観客が魔王を活かし、魔王が勇者を活かし、勇者が魔王を殺すという上質なエンターテインメントであった。あるいは秋山が本物の人外であったなら、この結末はハッピーエンドと呼んでよかったかもしれない。しかし秋山成勲はまごうかたなき人間であるがゆえ、当然ながら感情がある。秋山を魔王たらしめた、黒くうずまく巨大な激情がある。その恐るべき"黒き胸中"は、三崎の大胆なマイクパフォーマンスをどのように捉えたのだろうか？

　勝者に肩をつかまれ「俺はおまえを絶対に許さない！」と言われた。MMAの歴史において、このような扱いをされた敗者は存在しないだろう。あげく、勝者の立場から一方的に「心が伝わった」ことにされ、自らの罪に関する説教までされた。さらに三崎は「日本人は強いんです！」と言い放ったのだ。日本にも韓国にも受け入れられなかった秋山に対し、三崎は日本人であることを背景に己の勝利を謳ったのである。恒例の決め台詞とはいえ、これを秋山がどう聞いたかだ。

　強さと栄光を求めるがあまり、スポーツマンとしては歪みすぎてしまった秋山が、これらの言葉をいいように受け止められるはずもない。侮辱された。否定された。そして、またしても差別された。勝者は何を言ってもいいのか！　秋山ならこのように聞くだろう。ならば力と栄光のみを追い求め、勝者こそが正義と定めて突き進んできた秋山の"修羅の道"は、この敗北をもってますます加速する。

　魔王はこの日、確かに死んだ。しかし、結果を求め、勝ち続けることでしか肯定されなかった秋山の戦闘潮流は、思えば常にこのような位置から始まっていた。差別や逆境によって培われてきた"黒き力"こそ秋山の根源であるとするなら、この敗北はまさしく肥やしにほかならない。「勝てば官軍」をまたしても己が身で思い知った秋山は、いまこそ修羅となってその怪物性に磨きをかけるだろう。

　ただでさえ強大であった秋山の"黒"はいま、再び静かにその質量を増し続けている。そして近い日に必ず現れるであろう"黒き修羅"を、我々はただ怯えて待ち続けるほかないのである。"黒の道程"は、まだ終わらない。

『やれんのか！』開催の立役者は2008年もMMA界のキーマンだ！

エメリヤーエンコ・ヒョードル

Emelianenko Fedor

「あの歓声がある限り 私は日本で闘い続けます」

**この男の参戦なくして、『やれんのか！』の開催はなかった。
我らがPRIDEヘビー級チャンピン、エメリヤーンコ・ヒョードル！
PRIDEトップファイターの中で一人、UFCに背を向け日本を選んだ最強皇帝は、
今回も大巨人チェ・ホンマン相手に圧倒的体格差を克服し激勝。その強さをまざまざと見せつけた。
2008年も日本で闘うと宣言した皇帝を元旦に直撃。2008年もこの男がキーマンだ！**

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫　試合写真／山口比佐夫、平工幸雄

——ヒョードル選手、あけましておめでとうございます！　最高に気分のいい新年を迎えられたんじゃないですか？

ヒョードル　はい。とても気分がいいですね（微笑）。

——昨日の試合後は、いつも以上に嬉しそうな感じに見えたんですけど、ヒョードル選手にとっても今回の勝利は格別でしたか？

ヒョードル　そうですね。じつは今回、多くの友だちがロシアからわざわざ応援に駆けつけてくれたんですよ。試合中、彼らの声援も聞こえましたし、そういうこともあって、ああいった表情になったんじゃないでしょうか。

——なるほど。今回、友だちを日本に呼んだっていうのは、何か特別に意味があったんですか？

ヒョードル　自分で招待したっていうよりも、彼らが来たいって言いだしたんですよ。

——あ、そうなんですか。やっぱり一度は日本でヒョードル選手の試合を観てみたい、と。

ヒョードル　そうですね。彼らはまだ日本に来たことがありませんでしたし、生で試合を観て、かなりのアドレナリンを感じてくれたんじゃないですかね。

——あんな大きな会場で、あんな大歓声を浴びてるヒョードル選手を観るっていうのは初めてだと思うんですけど、試合後、何か感想は言ってましたか？

ヒョードル　あんなにも多くの人に声援を受けていることに驚いていたようですね。そんな私の姿をある種、誇りにも感じてくれたようです（ニッコリ）。

——とくに今回は、いつも以上の大歓声だったと思いますけど、それは感じました

［12.31 やれんのか! 大晦日! 2007］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○エメリヤーエンコ・ヒョードルvsチェ・ホンマン×
（1R 1分54秒、腕ひしぎ十字固め）

最強vs最大、MMA版ハンセンvsアンドレは予想以上のド迫力の一戦となった。ホンマンはヒョードルのタックルを二度も押し潰し、グラウンドで上になることに成功。一度はヒョードルの腕十字も持ち上げて逃れた。しかし、二度目の十字がズバリ極まってタップ。ヒョードルは強さを見せつけ、ホンマンもMMAファイターとしての可能性を感じさせた。

か?

ヒョードル　感じましたね。あの声援、あの会場の雰囲気があるからこそ、私は日本に戻ってきたんです。それは自分にとっても嬉しいことですから。

――では、その声援がある限り、日本で闘い続けてくれますか?

ヒョードル　もちろんです（微笑）。

――ありがとうございます（笑）。では、あらためましてチェ・ホンマン戦の感想を聞かせてください。

ヒョードル　とにかく身体が大きく、力が強い選手でしたね。身体の大きさと力の強さは、私がこれまで闘った中でもトップクラスだと思います。だから力では敵わない部分があって、彼に倒されたりしましたけど、自分のテクニックを駆使すれば勝てる自信はあったので、関節技で仕留めることができました。

――では、チェ・ホンマンは予想以上に強かったわけですか?

ヒョードル　予想以上ということはないですね。基本的に私は対戦相手を冷静に分析してから試合に挑むので、過小評価することはないですし、だからこそ試合中に驚かされたり、パニックになったりすることはほとんどありません。ただ、私が組みついて彼を倒そうとしたとき、彼が逆にテイクダウンに持っていったことには驚きました。彼はもっとスタンディングで闘うスタイルをとるんじゃないかと思ってましたからね。

――ボクもヒョードル選手が二度もテイクダウンを奪われたのには驚きましたよ。

ヒョードル　でも、二回目のタックルのときは、ロープさえなければ私が彼をテイクダウンしていたと思います。彼はロープに寄りかかるような感じで防いでいましたからね。

――ホンマンのパウンドはどうでしたか? ほとんど打撃をもらってないはずなのに、少し顔が腫れていますけど。

ヒョードル　いや、これはパンチが当たって腫れたのではなく、グラウンドでマットにこすられて、こんなふうになってしまったんです。

――とくに効いた攻撃はなかった、と。

ヒョードル　ありませんでしたね。先ほども言ったように、彼はとにかく身体が大きく、力が強かったので、難しい相手ではありましたけど、効いた攻撃というのはありません。

――最初に仕掛けた腕十字固めは逃げられてしまいましたけど、あれはホンマンの腕が長すぎてポイントがずれて極まらなかったんですか?

ヒョードル　じつは一回目もかなり極まってたんですよ。彼の腕からボキボキっという音が聞こえてきましたから。でも、彼に持ち上げられたときに自分のポジションが少し変わったことで、角度も変わってしまって、もう極まらない状態になったので、よけいな力を使わないように自分から手を離したんです。そして二回目は同じ失敗を繰り返さないように、しっかりと極めました。

――あれだけ大きな相手は初めてだったと思いますけど、大きな選手用の対策みたいなものは試合前にとってましたか?

ヒョードル　基本的に試合の準備はいつも同じです。レスリング、寝技、ボクシング、ムエタイ……すべてのテクニックを磨くようにしています。でも一応、自分のスパーリングパートナーに、チェ・ホンマンがやってきそうな攻撃を真似してもらってたので、その結果でしょうね。

——やはりホンマンのヒザ蹴りとかは警戒してましたか？

ヒョードル　それは警戒してました。でも、スタンドでもパンチというのは力ではなく、スピードや精度がものをいうので、そういう意味では自分のほうが優位に立てるのではないか、という感覚はありましたね。

——ホンマンは総合格闘技2戦目だったんですが、彼はちゃんと練習をしたら、総合でも通用すると思いますか？

ヒョードル　そうですね。これから強くなるチャンスはいっぱいあると思います。とにかく力が強いので、その力をいい方向に持っていけるテクニックを身につけることができれば、かなり勝ち続けられる選手になるんじゃないかと思います。

——では、最高の新年を迎えたいま、今年のプランや目標を聞かせてください。

ヒョードル　基本的にこの競技で達成できることはすべてしたと思っているので、とにかく勝ち続けることが目標ですね。そして、誰が相手でも倒すことができる技術を身につけたいです。

——次の試合はもうだいたい決まっていますか？

ヒョードル　2月の頭に、ロシアでコンバットサンボの選手権に出場します。そのあと、2月末か3月ぐらいに『M—1グローバル』の大会が、おそらくアメリカのシカゴであるので、そこに出場する予定です。

ランディ・クートゥアーとの試合は近い将来、必ず実現するでしょう

Emelianenko Fedor

1976年９月28日、ウクライナ出身のロシア人。サンボと柔道で実績を挙げ、00年リングスに初来日。初代ヘビー級、無差別級の２冠王となる。02年よりPRIDE参戦。ノゲイラを倒しPRIDEヘビー級王者となり、04年にはPRIDEヘビー級GPも制した。MMA世界最強の男。182cm、104kg。

——けっこう連続で試合があるんですね。でも、ヒョードル選手はMMAの世界チャンピオンで、ファイトマネーもチャンピオンにふさわしい額を得ていると思うんですけど、なぜファイトマネーの出ないコンバットサンボの試合に出るんでしょうか？

ヒョードル　サンボというのはロシアの国民的スポーツですし、（プーチン）大統領も子どものときからサンボをやっています。私自身、サンボが大好きです。そしてサンボから生まれたコンバットサンボは、私がロシアを代表する選手としてこれから広めていく使命のようなものを感じているので、これからも出場し続けたいと思っています。

——プロのファイトとはまったく別の価値観で出場しているわけですね。ところで、昨日はミルコ・クロコップも日本に来ていましたけど、彼とはバックステージかどこかで会いましたか？

ヒョードル　いえ、会ってません。

——そのミルコやノゲイラ、それからヴァンダレイなど、かつてのライバルたちはみんなUFCに行ってしまいましたけど、彼らの動向はいまでも気になりますか？

ヒョードル　できるだけ気にかけるようにはしています。チームメイトではないので、彼らを応援しているというわけではありませんが、戦友として頑張ってはほしいですね。

——UFC代表のダナ・ホワイトが、UFCからのオファーを断ったヒョードル選手の悪口をいろんなところで言っているのですが、『M—1グローバル』を大きくして、見返してやりたいという気持ちはありますか？

ヒョードル　私も含め、『M—1グローバル』の幹部たちは、これからどんどん発展させてMMAのナンバーワンの組織になりたいともちろん思ってます。ダナ・ホワイトが自分の悪口を言ってることは知っていますけど、会ったこともない人間についてネガティブなことを言い続ける彼の神経というのは、まったく理解できないですね。

——前UFCヘビー級チャンピオンのランディ・クートゥアーとヒョードル選手の試合を多くの人が期待していますけど、彼と闘いたい気持ちはありますか？

ヒョードル　ランディとはぜひ闘ってみたいですね。『M—1グローバル』としても、いま彼と交渉しているところです。ランディ自身も私と闘いたいと思っているようですし、あとはUFCとの契約がネックになっているだけなので、近い将来必ず実現すると思います。

——おぉ〜、それは楽しみですね！　では最後に、2008年も『やれんのか！』の続きのようなイベントが開催されたら出場してくれますか？

ヒョードル　はい。もちろん出場したいと思いますし、『M—1グローバル』としても、日本でイベントを開きたいと思います（ニッコリ）。

——今年もよろしくお願いします！

【08年1月1日／都内・某ホテルにて収録】

青木真也

Shinya Aoki

「つらいことはあったけど、いまはホッとしてます」

暗闇のトンネルから抜け出した〝ミスターやれんのか！〟を直撃!!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／梅木麗子
試合写真／山口比佐夫、平専英、平工幸雄

昨年4月の『PRIDE・34』以降、暗闇のトンネルの中を歩き続けていたバカサバイバー青木真也。やっと出口の光が差し込んできたかと思ったら、JZカルバンの欠場という痛恨すぎる落とし穴が待っていたからたまらない！
それでも青木真也は歯を食いしばって完走した。その姿から見えたものは、"PRIDEの沈黙"に向き合った青木真也その人の生き方であった。大きな区切りをつけた青木は何を思うのか。

——ワオ木さん、あけましておめでとうございます！

青木 おめでとうございます!!……って、朝早くないですか？ まだ8時ですよ、元旦の8時！ ちょっと前に『やれんのか！』が終わったばっかりですよ。

——おそらく2008年で一番早いインタビュー取材ですね。というか、青木さんが前回のインタビューで、試合が終わったら『富士そば』で打ち上げをやろうと言ったから、ボクもこんな朝っぱらから取材に来たんですけど。

青木 まあ、元旦に『富士そば』に行くのはいいですけど、まさかDEEPジムに泊まるとは思いませんでしたよ……。

——え？ 昨年はマンガ喫茶で今年はDEEPジム!?

青木 はい！

——『やれんのか！』のメインイベントを務めた男が？

青木 ……はい。これは凄い落差ですね。クククク！

——ダハハハハハ！ 「一流ホテルを用意しろ！」とかワガママ言っても許されるのに。

青木 いやいや、一流ホテルなんて、とんでもない！ "ミスターやれんのか！"とか言われましたけど、ボクはしょせんこんな扱いですよ……うん（遠い目で）。

——誰に対してのメッセージなんですか、いったい（笑）。それはさておき、念願だった『やれんのか！』が終わった感想はどうですか？

青木 なんか………、ホッとしてますねえ。うん……（しみじみと）。

——青木さん、もの凄く実感がこもってますね。

青木 試合はスッキリ極めることはできなくて、ファンのみんなにはホントに申し訳のない内容になっちゃったけど、とりあえず勝てたからホッとしてます。あと、川尻選手や石田選手やマッハ選手とか、ライト級GPをやりたくてもやれなかった4人がみんな勝ちましたし。

——そういえばそうですね。

青木 ボクもそうですけど、みんなカッチカチでしたけどね、動きは。

——あたりまえですけど、やっぱりプレッシャーはありますよね。

青木 プレッシャーというか、試合前からいろいろありましたからねぇ。もうボヤいていいですか？ 新年早々！

——どーぞ、どーぞ（笑）。

青木 まず相手が変わるでしょう。相手の情報はないでしょう。試合順は変わるでしょう。相手がフタを開けてみたら強かったでしょう。DEEPジムに泊まるでしょう。……つ、つらい!!

——ダハハハハ！ おまけにカルバン戦が流れたこともあって、念願の地上波放送デビューもなくなって（笑）。

青木 ここまでついてないとある意味、おいしいですけどね！ でも、（対戦相手だった）JZの欠場はホントにたまらなかったなあ……。

——ファンもガックリですよ！ 『やれんのか！』を象徴するカードがなくなっちゃったわけですからね。実際、欠場の話を聞いたときはどう思いました？

青木 「しょうがねえなあ……」って思いましたね。ここでボクがキレたらもっと大変なことになるわけだし、だから、冷静になろう、と。

——大会直前のことだから、気持ちの切り替えは大変だったと思うんですけど。

青木 そこはそれこそ「やれんのか？」ですよ！

——じゃあ代役が誰であろうとやってやる！ という感じで。

青木 でも、思っていたより（相手のチョン・ブギョンが）凄く強くて！ 構えとか動きもよくわかんなかったし、試合直前に煽りVを観たら「強いんじゃないの？ コイツ」って。

——なんか"FEGの秘密兵器"だった

川尻選手や石田選手やマッハ選手、ライト級GPをやりたくてもやれなかった4人が勝ってよかった

[12.31 やれんのか! 大晦日! 2007]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○青木真也vsチョン・ブギョン×
(2R終了 判定3-0)
大会オープニングで感極まり、涙を見せた青木が地上波生中継による試合順の変更のためメインに。相手はシドニー柔道銀メダリストで寝技の達人。変則の腕十字であわやのシーンを作り出し、驚異的な粘りを見せた。

ウソだと言ってくれっ!! 12月23日、J.Z.カルバンの負傷欠場が緊急発表!! 大連立の象徴的なカードが大会直前にて消滅するアクシデントだ。青木は時折、声を詰まらせながらも気丈に前向きなコメントを残していたが、はたしてこの一戦は近い将来、実現するのか。リングはどこで？

らしいんですよ、彼。終わったあとに言うのもなんですが（笑）。

青木　まあ、あの強さは総合に慣れれば慣れるほど、失なわれていくものですけどね。いまは総合というものをよく知らないから、腕十字一本に懸けるしかないし、それが武器になってましたけど。

――確かにあの変則の腕十字は凄かったですよね。

青木　最初の腕十字で（腕の靭帯は）バチバチ鳴ってましたし、ホントに危なかったんですよ。でも！　あれでタップしたらカッコ悪かったでしょうね〜。

――確かに（笑）。

青木　そうなったら完全に出オチじゃないですか。恥ずかしいですよ、それ!!　「大晦日開催、スゲエ嬉しい！」「俺こそが『やれんのか！』」とか言ってるヤツが、『バカサバイバー』を熱唱しながら入場して、それであっという間にマットを叩くなんて。

――ダハハハハ！　吉本新喜劇じゃないんですから。

青木　もう気力でガマンしましたよ。見栄ですよ、見栄!!

――でも、それくらいあの腕十字はヤバかったというわけですね。

青木　二回目（の腕十字）は全然大丈夫でしたけど。クラッチしっかり組んで、抜けた瞬間に反転できたんで、全然余裕でした。

――青木さんはPRIDEでは4連続で1ラウンド一本勝ちだったじゃないですか。内容的には完勝とはいえ、今回は青木さん自身が空回りしてしまったところはあったんですか？

青木　わかりません、それは！

――ヒョードルvsホンマン戦を地上波放送するために試合順が急きょ変更されて、青木さんの試合がメインイベントになったこともプレッシャーに？

青木　うーん、急に順番が変わったことでイライラしたのかもしれないですけど、そこは全然大丈夫でした。だって、もう4月からさんざんな目に遭ってきたわけですからね。ククク！

――でも、最後に「桜咲くころ、夢の続きを……」なんて垂れ幕がありましたから、今年はいいことありそうですね。

青木　（猛然と）そんなこと言ったって、4月以降の流れを見てれば、どうなるかわからないですって!!　ホントにぃ。

――ダハハハハ！　またまた実感がこもってますね（笑）。

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。変幻自在のグラウンドテクニックを持つ天才グラップラー。風の便りによると、桜咲くころにカルバン戦が内定しているそうです。180cm、73kg。

Shinya Aoki

厳しいことばかりでしたけど、青木真也はここからですよ、ここから!!

青木　でも、あれですよね、ボクとの試合が内定してるとかJZは言ってるんですよね？

――はい。谷川さんも3月15日の『HERO'S』でこの試合をやりたいと言ってますね。

青木　そうですか。でも、こっちは知らぬ存ぜぬですから！

――あ、ワオ木さんは何も聞いてませんか（笑）。

青木　だいたいアイツ、謝罪会見のために来日して、それからブラジルに帰って、また大晦日にやって来たんですけど、彼女を連れてきてるんですよね。「アオキ、本当に悪かった！」って謝ってる横にオンナがいるんですよ。失礼しとるよ、本当に！

――ダハハハハハハハハハ！

青木　もう切腹モノのことをやってるのに。ボクの懐の深さに感謝してほしいですよ、もう！　まあ、でも、彼も春にやるって言ってるんだからやるんでしょう

――いやあ、試練は続きそうですね、2008年も（笑）。

青木　修行ですよ、修行。厳しいことばかりでしたけど、青木真也はここからですよ。ここから！　まだまだここから突っ走ろうと思ってますけどね。

――青木さんはいままで旧PRIDEのスタッフについていくって言っていましたが、今後はどうなんですか？

青木　ついていくでしょう。でも、今後スタッフがどうするのかもわからないから、とりあえずホッとするしかないです。ホッと一息入れて、またどういう方向にするか考えようかな、と。

――とりあえず、内定しているらしいカルバン戦に向けて（笑）。

青木　ククク！　桜が咲くころに内定しているらしいカルバン戦に向けてやるしかないですよね。

――でも、カルバン戦って『やれんのか！』でやるのと、いまの『HERO'S』でやるのはだいぶ違いますよね。

青木　そんなに違うんですか？

――ええ。雰囲気もそうですけど、観る側からすれば、かなり違いますよ。

青木　ボクはなんでもいいです！　とにかく試合がやれれば！

――試合がやれるだけで満足（笑）。

青木　そう！　なんて言うんですか。もうね、4月から大晦日までにいろいろありすぎて、ある意味"悟りの境地"に到達しましたよ（無表情で）。

――ダハハハハハ！　そう考えると、けっこう贅沢なことを言っているかもしれないですよね。

青木　まあ、ファンやマスコミには贅沢なことをいっぱい言ってもらったほうがいいんじゃないですか。で、ボクができる贅沢は『富士そば』でチーズカツ丼を食べることくらいですよ！

――じゃあ、そろそろ『富士そば』に行きますか！

青木　行きましょう！　今年はいいことがたくさん起きるように頑張りますので、『kamipro』読者の皆さん、これからも応援してください！　『富士そば』、バンザ〜イ！

【08年1月1日／早朝のDEEPジムにて収録】

というわけで、喜び勇んで『富士そば』へ向かったワオ木さん。その模様は112ページでご確認ください！　2007年の青木真也を象徴するような打ち上げになっております。バンザーイ！

格闘大連立の象徴

青木真也vs J.Z.カルバン 消滅顛末記

文／橋本宗洋　撮影／菊池茂夫

2007年の格闘技イベントとして最高の盛り上がりだったと断言できる『やれんのか！ 大晦日！ 2007』だが"もし、あのカードが実現していたら"という思いも残る。

言うまでもなく、青木真也vsJZカルバン戦である。ファンのあいだで大反響を巻き起こしたこの対戦だが、大会直前の12月23日、カルバンの左内側靭帯断裂による負傷欠場が発表された。実行委員会がカルバン負傷の報を聞いたのは、実際に負傷したのと同じ17日のことだったという。

ところが、ブラジルの格闘技サイト『TATAME』には、「12月5日にヒザの手術をした」というカルバンのインタビュー記事が掲載されていた。もちろん、谷川貞治FEG代表はこの情報を否定。大会に合わせて来日したカルバン自身、会場のインタビュースペースで「12月5日は手術をしたんじゃなく、MRIを撮ったんだ。そこで手術をしようと決めたんだ」と語った。だが、それでも疑問は残る。12月5日の段階で手術が決定していたなら、なぜ欠場発表が23日までずれ込んだのか……。

大会翌日、カルバンにインタビューを試みた。ケガを押しての来日を「ボクはファイターであると同時に大の格闘技ファンだからね。それにファンのみんなに顔を見せたかったし、アオキにも謝りたかった」と語るカルバン。フィアンセとぴったり寄り添って質問に答える姿はどこまでも無邪気だ。

彼の説明によれば、ケガをしたのは9月の『HERO'S』ミドル級トーナメント直前のこと。痛みを感じつつも2試合を闘い、2本目のベルトを手にブラジルでの休養に入る。そこに届いたのが青木戦のオファーだった。

「ケガはあったけど、オファーは受けたよ。青木はボクが前から闘ってみたい選手だったから。でも、練習を始めるとやっぱり痛みが出てきてしまう。それでMRIを撮ったんだ。その時点で手術すると決めた」

では、そのとき欠場が決まっていた？

「いや、手術は試合後にするつもりだった。それで練習を続けていたら、17日の練習で完全に靭帯が切れてしまった。そこでドクターストップさ。ドクターには『MRIを撮った時点で"試合をするな"と言っただろ！』って怒られたよ（苦笑）。でもボクは、どうしてもアオキと試合がしたかったんだ。そしてアオキに勝つには、ハードなトレーニングをするしかなかった」

『TATAME』による"誤報"については、カルバンはこう説明する。

「あの記事を書いた記者は、ボクじゃなく父親から話を聞いたんだ。父はリオから離れた田舎に住んでいて、最近はあまり会う機会がない。その父に『病院で検査して、今度手術することになった』って話をしたら『病院で手術してきた』と勘違いしたみたいなんだ。その勘違いが、記者にも伝わってしまった」

アオキ、本当に悪かった!!

父親の談話が本人のコメントとして掲載されるというのは、日本では信じられないことだが……。海外の記事では、日本の基準では"飛ばし"と受け取られるようなものが少なくない。真実である可能性はともあれ"そういう情報がある。だから載せる"というスタンスなのだろう。

選手への取材も本人に直接アポイントを取るスタイルが主流。所属団体やマネージャーを通すことは少ない。それが自由な取材活動につながっているのは確かだが、一方で怪しげな情報が氾濫することにもなる。

ただ、カルバンから"真相"が聞けたからといって、青木戦を観られなかったファンの失望、カルバンと闘えなかった青木の失意を埋め合わせることができない。同時に、この一件で主催者サイド（FEG）を責めることも難しいだろう。「ケガしてるけど試合は受けるよ」、「MRIを撮って手術することにしたけど、試合はやるよ」。選手はそんなことを逐一報告しないはず。報告するとしたら「ケガをしてしまって試合ができない」ということだけで、つまり主催者側は常に後手を踏んでしまうのだ。

ただし、青木vsカルバン戦は普通の対戦とはワケが違った。大晦日の目玉カードであり、"大連立"の象徴だったのだ。"しょうがない"とは口が裂けても言えないし、今後もこんな事態があったとしても、それを簡単に受け入れるわけにはいかない。

青木vsカルバン戦は、3月の『HERO'S』で実現すると言われている。カルバン自身、それを楽しみにしているようだ。だが、"大連立"の第一弾カードとして『やれんのか！』で対戦するのと、仕切り直して『HERO'S』で闘うのとでは意味合いが違ってくる。カルバンは言った。

「正直言えば、アオキっていうスペシャルな相手とは大晦日のスペシャルな舞台で闘いたかったね」

『HERO'S』での青木vsカルバン戦は"大晦日の夢の続き"ではない。それは新しい何かのスタートでなければならず、『やれんのか！』とは違うテーマがなくてはいけない。大事なのは二人が実際に闘うことだけではなく、そのことをファンに感じさせることができるかどうかなのだ。

キミは“じっとるケ殺法”の意味をしっとるケ!?

青木、思わぬ苦戦の裏には……!?

世界のTKも鳥肌立った!

『やれんのか!』解説者・髙阪剛が

三崎vs秋山 青木vsブギョンを徹底解剖!!

現役引退後、“鳥肌立った”でおなじみの髙田統括本部長とともにPRIDE解説者として好評を得ていた髙阪剛が『やれんのか!』の解説を担当。今回、大会直後のTKを直撃し、大注目の三崎vs秋山戦、急きょメインとなった青木vsブギョン戦を徹底解剖してもらいました!

構成／橋本宗洋　撮影／平工幸雄

試合が始まってまず思ったのは、秋山の強さですね。リングで二人が対峙してるのを観たときに、85キロの選手であれだけ圧力があるっていうのはタダゴトじゃないなって。秋山はデニス・カーン（の動き）を左ジャブ一発で止めてましたよね。それが凄く不思議だったんですよ。確かに秋山の左は強いんだろうけど、それにしたっておかしいな、デニスを止められるもんなのかなって。でも、目の前で観てわかりましたよ。あの圧力ならデニスも止まるわって（苦笑）。

秋山は体幹からにじみ出る圧力があるんですよね。そして軸がブレずに、常にバランスの取れた状態で闘ってる。だから、相手は「穴がないな」っていう印象を受けてしまう。三崎がダウンしたときは「ああ、三崎もか……」、「術中にはまっちゃったか……」っていう思いが頭をよぎりましたね。

あのとき三崎は意識が飛んでたと思うんですよ。でも、そういう状態の中で距離をとって、立ち上がりましたよね。普通だったら、ああいう場面では抱きついたり、「落ち着くまで待とう」ってなるもんなんですよ、選手は。だけど三崎は、そういうことが一切、自分の中で許せなかったんだと思うんですよね。意識が戻った瞬間に「オレは攻めなきゃいけない!」って、そう思ったんでしょう。その姿勢がね、もう……「気持ちが強いな、この男は!」っていう。

お互いの高い技術力の攻防があって、秋山の体幹からにじみ出るような圧力を三崎が味わって、先に三崎がダウンを取られた。でも、そこから

三崎が気持ちで巻き返す。そういう展開になってきたところで、フィニッシュの左フックが出たんですよ。秋山も、ああいう場面で左フックのカウンターを取ることができる選手なんですよ。それだけの技術を持ってる。でも、あの場面では三崎のパンチが当たったんですよね。それは、三崎の倒そうとする意思が、かなり明確だったからでしょう。たぶん、あと2センチ三崎の踏み込みが浅かったら、あのパンチは当たってないと思うんですよ。その2センチ踏み込めるか踏み込めないかっていうところに三崎の気持ちが出ていたし、それが勝敗を分けましたよね。

試合中よく見せていた三崎の〝その場飛び〟の動きにも、気持ちとか集中力を感じましたね。あれは飛びヒザのフェイントと同時に相手のローキックを打たせなくしてるんですよ。秋山は左のリードジャブと一緒に、ノーモーションから右のローを打てる。秋山はあれだけ作り込んだ上半身をしていながら、腰がしなやかなんですよね。だからステップを使わなくても、その場で腰を回転させてローを蹴ることができる。そのローを意識してしまうと左のジャブが見えなくなるし、左ジャブばかり意識していると右のパンチをもらってしまう。秋山の右ローと左ジャブ、右のフィニッシュブローっていうのはワンセットで相手を悪循環に追い込むんです。三崎はそうなるのを嫌って〝その場飛び〟をしてたんだと思いますね。

ただ、試合の中でそういう動きをああも自然体でできるっていうのは凄いことなんですよ。一回や二回ならともかく、何回も続けて、相手のリズムを崩して自分のリズムを作るっていうのは難しい。普通はそこまで意識が回らないんですよ。それができたっていうのは、三崎がそこまでの域に達してたというか、普通の状態を超えたところで闘ってたんだろうと思いますね。

試合が始まって秋山の強さを痛感していただけに、三崎の逆転KOにはよけいに驚きましたね。あれだけ打ち抜くパンチをもらってダウンした人間が、逆転ってなかなかできないもんなんですよ。「カウンター取られたら……」、「また倒されたら……」って、どうしても思ってしまうんですよ、選手って。でも三崎は、そういう恐怖を、前に出ること、攻撃することでねじ伏せてしまったんです。

それと同時に感じたのは、三崎が仲間を本当に信頼してるんだなってことです。試合をしてるのは三崎なんですけど、そこに彼を支えてきたGRABAKAの仲間とか、「頑張れよ」って言ってくれるファンの存在が見え隠れするんですよね、凄く。それはなぜかっていったら、普段の練習とか生活の段階から、仲間や応援してくれる人との結びつきが本当にしっかりしてるからでしょう。三崎の試合は、だから試合を通じて生き方が見えるんですよ。「オレは勝つんだ」っていう気持ちの強さとか、仲間への信頼とか、あのフィニッシュにはそういう人間くさいところが出てましたよね。人間くさい左フック（笑）。

秋山はもの凄い、生き物として規格外のポテンシャルを持ってるんですけど、そういう秋山に対して三崎は〝人として〟勝ったっていうかね。そういう部分が見えたんですよね、この試合では。

これまで、もの凄い数の試合を観てきて、自分でもやってきたわけですけど、人の試合を観て、そこまで鳥肌が立ったのって初めてですよ。

秋山のパンチでダウンを喫するも、最後はTK曰く「人間くさい左フック」で逆転KO勝利を飾った三崎。大会後に沸き上がった、トドメのサッカーボールキック問題の行方は？

三崎の勝利が告げられた瞬間、菊田らセコンド陣はもちろん、スカパー！中継の解説を務めていた郷野も興奮してリングイン。三崎はグラバカ勢一人一人と涙の抱擁を交わしていた。

これまで、もの凄い数の試合を観てますけど、あそこまで鳥肌が立ったのは初めてです

★

青木の苦戦は、最初の十字がすべてでしたよね。チョン・ブギョンがまず仕掛けたのは、下から腕を抱えて、カンヌキの状態にして極める技だったんですよ。V1アームロックみたいなかたちですね。その技だけだったら、青木は肩の関節が柔らかいから大丈夫なんですよ。でも、相手はそこから十字に変化していった。青木は、最初の技に対して腕をねじ込むことで防御してたんで、よけいに深く十字が極まっちゃってたんですよ。あれはほぼ完璧なかたちでした。観ていて本当に驚きましたけど、一番驚いたのは青木でしょうね（笑）。あの場面で「こいつ強え！」ってなって、青木のペースが完全に狂ったと思いますよ。少なくとも心拍数は上がってたでしょうね。

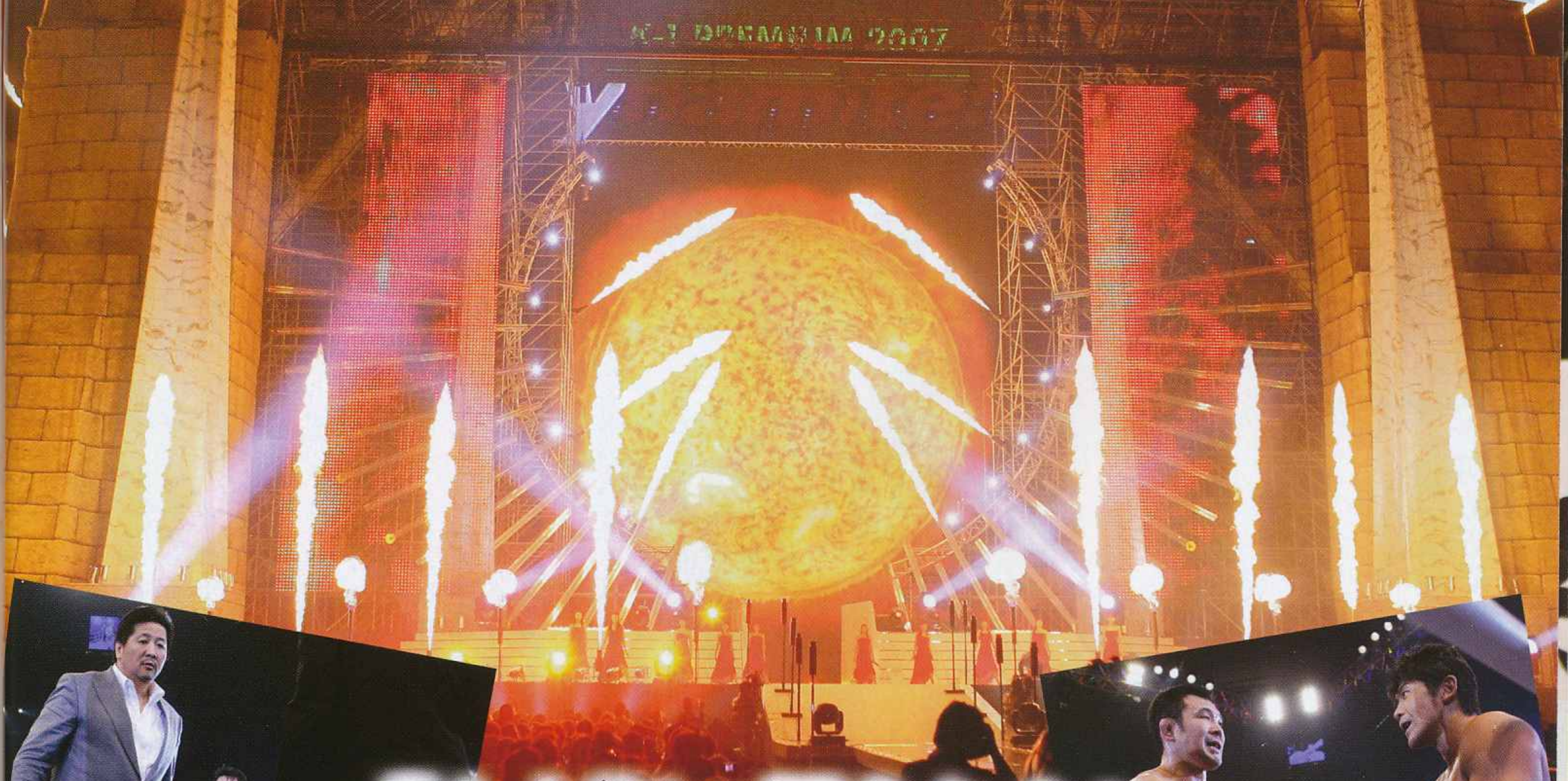
青木のアキレス腱固めは、完全に一本を取りにいってましたね。でも相手も防御がうまかったし、青木も十字で腕のダメージがあって、極めきれなかった。そういう中で、常に上のポジションをキープしていたのはさすがでしたけどね。足関節って、失敗するとポジションを取られる危険性が高いんで。だから自分の寝技ができていたとは言えるんですけど……極めきれなかったですからねえ。

極められかけるピンチがあって、それをしのいでパウンドで勝った。こういう内容だと、たぶん青木は悔しいと思いますよ。時間が経つにつれて、悔しさが増してくると思う。最初の攻防、相手の動きに合わせてカウンターで関節を極めるっていうのは、本来なら青木が得意としていて、青木がやりたいことですからね。それを相手にやられてしまうと、自分の武器を盗まれたような感覚になるんですよね。

それにしても……「いるなぁ！」って感じがしましたね（笑）。まだまだ世界には強い選手がいるんだなって。驚きましたよ、本当に。

【08年1月1日／『やれんのか！』終了後、会場内にて収録】

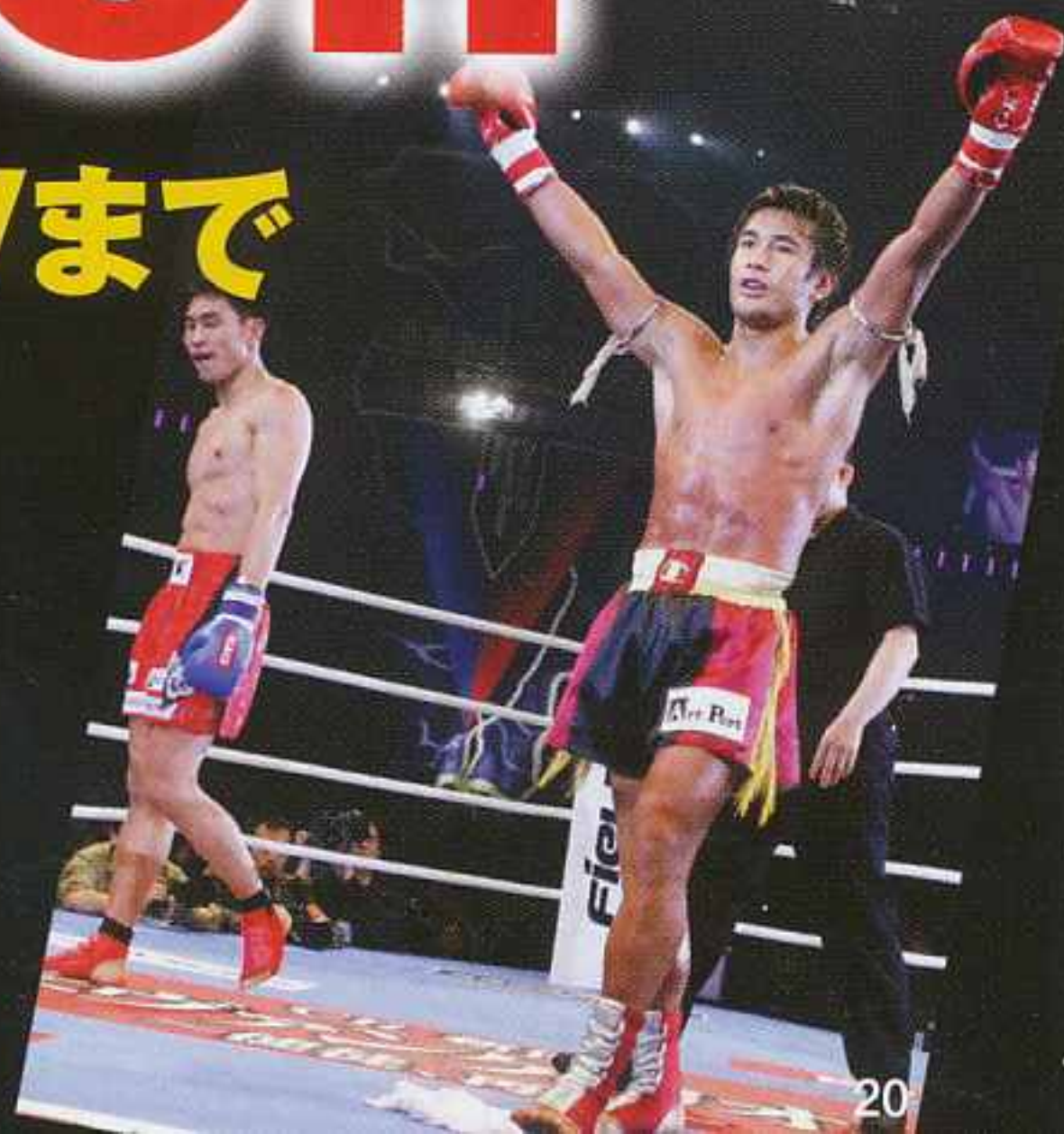
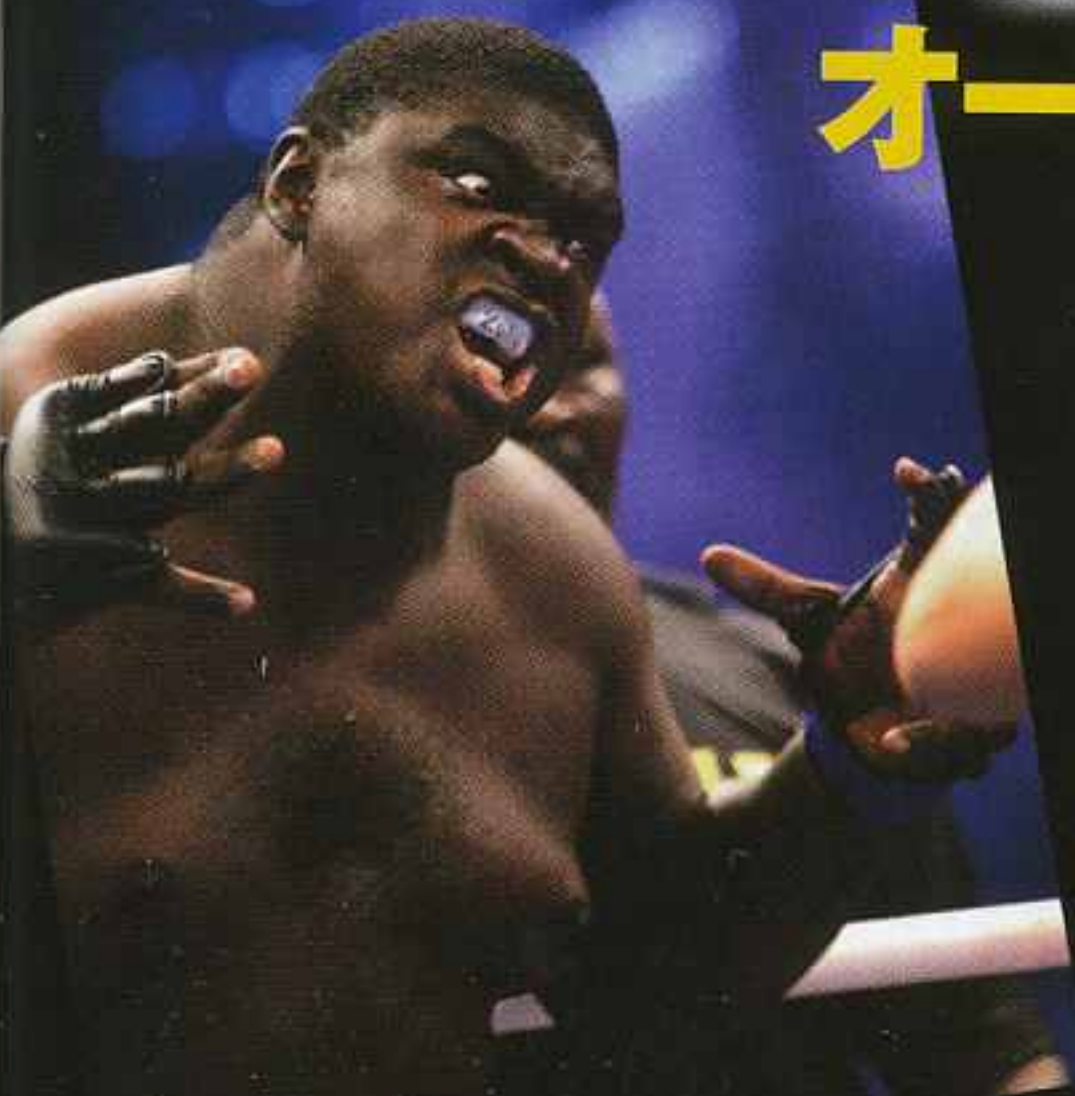
大会前、谷川代表が「ブギョンはユン・ドンシクを極めるらしいですから。腕十字も独特なテクニックを持ってるみたいなんで期待できると思います」と語っていたが、まさにそのとおりの試合運びを見せたブギョン。次の試合も楽しみだ！

※ヒョードルvsホンマン、瀧本vsブスタマンチなどなど、『やれんのか!』その他の試合のTK解説は『kamipro Hand』で更新！ こちらも要チェック!!

テレビじゃ観られない

これがホントのDynamite!!

オープニング～『やれんのか!』PVまで 怒濤の10時間ドキュメント

今年は大晦日唯一の格闘技番組として、さいたまからの2試合も含めて放送された『Dynamite!!』。だが、会場の京セラドーム大阪には番組の枠に入りきらないネタがてんこ盛りに詰まっていた！ オープニングファイト開始から「やれんのか！」パブリックビューイング終了までなんと10時間のあいだに、いったい何があったのか？ 現場でこそ感じられた、これが「テレビに映らなかった『Dynamite!!』」だ!

構成／高崎計三　大会撮影／乾晋也　PV撮影／阿修羅チョロ

高橋克典の「ダイナマーイッ!!」で長い長いイベントの幕開け!

格闘技記者をやっている以上、大晦日に仕事をすることを嘆いてはいけない。たとえそれが、九州の実家にヨメと幼い息子を置いて単身、移動することになってもだ。……というわけで、大阪で『Dynamite!!』、さいたまで『やれんのか!』とファン注目の格闘技大会が行なわれる12月31日、自分はkamiproo編集部の依頼により京セラドーム大阪入り。29日にいったん帰省して、福岡から直で大阪入りだ。考えてみればこれまでの大晦日は03年の『猪木祭り』以外は全部、『男祭り』取材だった。初の『Dynamite!!』取材、14時スタート!

14時15分。予定より若干遅れて、オープニングファイト第1試合、「K−1甲子園リザーブファイト」がスタート。さあ、長い長い大晦日の始まりだ。何しろ本戦だけでも13試合、このオープニングファイト2試合を合わせて15試合もあるんだから、どれだけ時間がかかるんだって話。

一応、プレスルームに貼られている予定表には、終了予定は午後9時とある。「余裕を見て、この時間には必ず終わる予定」とのことで、22時からは関係者の打ち上げも始まるし、もちろんテレビ中継の都合もあるから終わらないと困るらしい。さて、予定どおりいくのかどうか。

オープニングファイトだからって、油断してはいられない。第2試合には元千葉ロッテマリーンズでK−1トライアウトから上がってきた立川隆史が出場だ。あとから聞けば、地上波中継枠にも入っていたとのこと。なら、本戦でもよかったんじゃないの? ま、立川のためにロッテ応援団が多数押し寄せていたので、早い時間から来てもらうという効果はあったのかもしれないが。

この2試合終了後、15時までの短いインターバルには、場内ではオシャレーな感じのサルサが流れていた。メインのビジョンも、それに合わせるかのようにサイケな画像が繰り返されている。うーん、これから格闘技の祭典が始まるという感じはしないなあ。まあいいけど。

で、15時。まずスペシャル・ナビゲーターの高橋克典が登場し、短い前口上のあとに「ダイナマーイッ!」の叫びとともに入場式が開始! メインビジョンが左右に開くと燃えさかる太陽がドドーンと現れ、選手たちが入場。ラストでは火柱が全開になったが、この瞬間、アリーナ最後部にいてもかなりの熱風がやってきた。これ、ステージにいる選手たちは相当熱いだろうに。うん、熱は伝わった!(違う)。

「K−1甲子園」一回戦2試合が終わって第3試合、宮田和幸vsヨアキム・ハンセンが始まったのは16時15分頃。開会式があり、2試合とも判定だったからといっても、このペースだと13試合終わるのは22時近く? プレスルームにタバコを吸いに訪れる一部関係者の顔には、早くも疲労の色が。ちなみにそのプレスルーム、スポーツ新聞系の記者が記者クラブ専用室にいたのを差し引いても、明らかに普段より寂しい。やっぱり、どのメディアも主力は『やれんのか!』に割いているのか? ということは、ここにいる自分って……いや、考えまい考えまい。チームワーク、チームワーク。

去年の大晦日はヌルヌル事件で過去に例を見ない大騒動に見舞われた京セラドーム大阪だが、今年も事件が! 田村潔司vs所英男の試合後、前田日明SVと田村のあいだで小競り合いが勃発したのだ。しかし、正直プレスルームのモニターではよくわからず。ちょうどこの試合後に「ミニ休憩」が入ったので、一旦引きあげてきたカメラマンたちが興奮気味に様子を伝えてくれた。ちなみにこの件に関しては、当事者及び主催者サイドへの取材はほぼシャットアウトされた。まあ、昨年ほどの騒ぎになるような事件でもないしな。

ミニ休憩。さすがに13試合もあるので、休憩も一度では済まない。ま、観客は独自の判断で適宜、「トイレ休憩」を取っているが、運営・中継・報道などの関係者はそうはいかない。だからホントに「ミニ休憩」と、予定表にも書かれていた。これが終わって、「K−1甲子園」決勝戦が開始されたのがだいたい18時。おっ、けっこう順調じゃん。

中盤戦はK−1ルールの試合が続く。第10試合の「魔裟斗vsチェ・ヨンス」の試合が行なわれていた19時20分、九州の実家でテレビ中継を観ているヨメからメールが届く。「まだ1試合も放送されてないよ。あ、今から開会式」。えっ、番組は18時に始

これまでの『Dynamite!!』に比べると、スペシャルゲストはやや少なめだった今大会。ニコラス・ペタスの入場時には親交があるというジャズシンガー・綾戸智絵が生歌で花を添えた。

開会式冒頭に登場し、「ダイナマーイッ!」のかけ声とともに選手を呼び込んだ今大会のスペシャル・ナビゲーターの高橋克典。いくつかの試合ではリングアナウンサーも務めた。

普段のビッグマッチだと、こんなにプレスルームがスッキリしていることはまずない。大阪に来た記者たちも、2大会分観られて満足だったというウワサも……。

『Dynamite!!』本戦は21時に終了。『やれんのか！』PVに大興奮……はナシ!?

まっているはず。いままでずっと前フリだったのか……。軽い衝撃。こちらではその試合のあと、本休憩が入って残りは終盤3試合だけだというのに！

休憩も思ったほど長くもなく、20時に始まったラスト3試合（サップvsボビー、KIDvsヤヒーラ、桜庭vs船木）がいずれも一本・KO決着だったこともあって、予定の21時にはキッチリ終了。さすがだ、さすが『Dynamite!!』。しかしここまで約7時間にわたって試合が行なわれているわけだが、ここまでくるとマヒするというか、もう長いんだかなんだかよくわからない。おそらく観客も関係者もみんな、同じような感覚にとらわれていたのではないだろうか？　これぞダイナマイト・ハイ!?

そういえば、今年の『Dynamite!!』は芸能人の投入が、例年に比べて少なかった気が……。前述の高橋克典以外は、ニコラス・ペタスの入場時にジャズシンガーの綾戸智絵が生で歌ったぐらい。一昨年に登場した矢沢永吉はあまりにも特別だったとしても、もうちょっとお祭りらしい演出がほしかったような……。入場でいえば、昨年は須藤元気やチェ・ホンマンが観客を楽しませていたが、今年はどちらもいないし、それに代わる芸達者もいなかった。まあ真剣勝負のリングに向かう選手にそれを望むのが間違いではあるんだが、「紅白の裏番組」としてはもうちょい華やかでもよかった気はする。ま、いろいろあるんでしょうが。

15時開始の本戦は予定どおり、21時に終了。昨年と違って、閉会式も和やかな雰囲気で行なわれた。6時間13試合（オープニングファイトを入れると7時間15試合）の長丁場も、大晦日だと許せる気がするから不思議？

本戦終了後、アリーナの観客がスタンドに移動して「やれんのか！」のパブリックビューイングが21時30分に開始された。

そんなわけで閉会式も無事終了し、ここで帰路につく人も。まあ、生だから観に来たという人もいるだろうし、初詣やら何やら、いろいろあるし。だけどそのまま席に残っている人もかなりいる。そう、『やれんのか！』のパブリックビューイングですよ！

ここでリングに上がったMC役のお笑い芸人KICK☆らから、アリーナの観客はスタンドに移動するようアナウンスがある。じつはこの時点まで、パブリックビューイング（PV）がどのようなかたちで行なわれるのか、報道陣も含めてほとんど知らされていなかった。結局、何試合が観られるのかも。FEG派遣選手の絡むヒョードルvsホンマン、三崎vs秋山は当然としても、他の試合は流れるのか？　観客の移動中には、それも含めて全カードが読み上げられた。しかしさいたまの開始時間からもう1時間以上経っているし、どうなるのか？　いまイチわからないまま、21時半からPVはスタート。

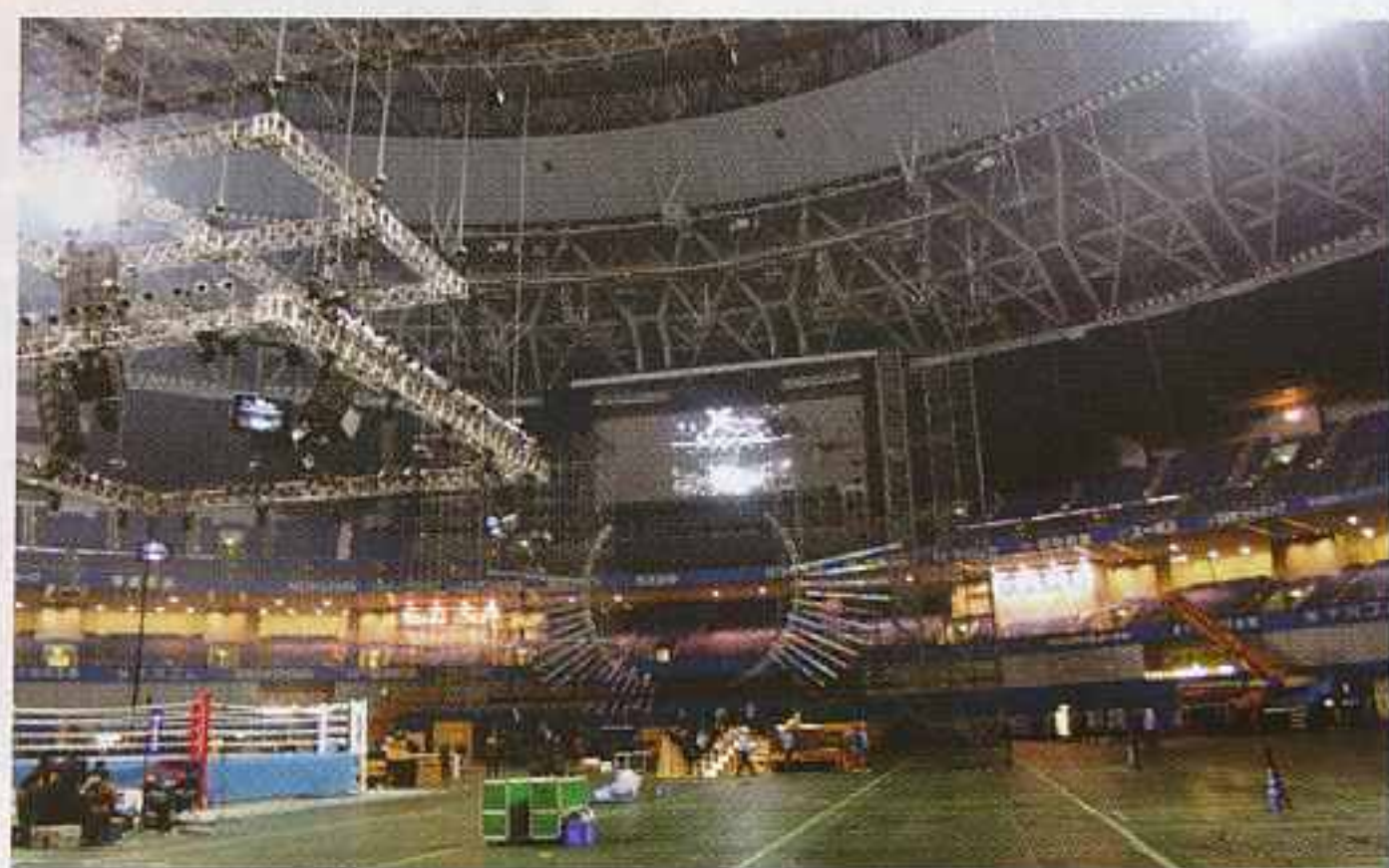
場内6ヵ所に設置された巨大モニターに最初に映し出されたのは、石田vsメレンデスの一戦。それもダイジェストではなく、本格的な放送だ。ビジョン越しにも伝わる試合の熱気に、思わず見入る客席。終了の瞬間には、拍手も起きた。

PVが始まるとほぼ同時に、アリーナではパイプイスなどの撤去作業が始まった。あ、全員スタンドに移動したのは、同時進行で撤去を進めるためなのね。人海戦術で、テキパキと片づけられていく場内。PVが終了する頃には、リングと入場ゲートを残してガラーンとした状態になった。PVに残ったファンは、ここでも普段見られない光景を見られたわけだ（って、そこに注目した人はいなかっただろうが）。

さて、21時55分、いよいよ注目の三崎vs秋山が開始。秋山の入場時、さいたまの会場で起きている大ブーイングがスピーカーを通してもハッキリと聞こえてくる。ここ大阪では合わせてブーイングか、「K−1側＆地元」ということで擁護の声が起きるか……と注目していたが、ハッキリ言って何もナシ！　アレ？　「さいたまには行けないけど、せめて映像越しでも現地と一体になりたい！」という熱心なファンは、ほとんど見られない……。うーん、予想外。

秋山がKOされた瞬間には大きめの拍手も起きたが、続く三崎のマイクアピールには、「パチパチパチ……」という程度。この試合に関しては場内からもっといろんな反応が起きるんじゃないかと思ってたんだが、もしかして他人事!?　それでもこの試合を楽しみにしていたお客さんはやっぱりけっこう多かったようで、終了後にはかなりの数のお客さんが席を立った。ま、この時点で22時過ぎ、最長で8時間以上も観戦していることになるわけだしね。

その後、マイク・ルソーvsローマン・ゼンツォフ戦が流れたのはビッ

アリーナの片隅でＰＶを見ていた小路晃。サップのセコンドについたあとで新幹線でさいたまに移動し、カウントダウンのセレモニーに参加する予定だったが、間に合わず大阪に残ることに……。「残念です……」（小路）

アリーナの観客がスタンドに移動したのは、アリーナ部分の撤去を同時に進めるため。最終的にはリングだけを残して、イスがすべて撤収された。さいたまの試合だけでなく、会場撤収という珍しいものも見られた!?

ＰＶ開始当初のスタンド。こちらの観戦者数は発表されていないが、思ったより多くの観客が残った。ここまで開始から６時間以上経っていることを考えると、やっぱり熱心なファンということになる。ＰＶサイコー!?

ヒョードルvsホンマンには観客興奮！ そして急きょカウントダウンも！

クリ。ホントに全試合やるのか！　しかし大阪の観客には（さいたまでも？）ほとんど需要はなく、フィニッシュの場面でも反応はまったくナシ……大阪で「シーン現象」が！　この一戦と、川尻vsアゼレード、瀧本vsブスタマンチの3試合はダイジェスト放映。ここまで残っているのはかなーり熱心なファンに違いないから、もちろんありがたい措置ではあった（何より自分にも）。これで、本当に全試合観られるだろうことはほぼ確定したし。

若干の間を置いて、ヒョードルvsホンマンが開始。あれ、これメインじゃないの？　よくわからないが、とにかく始まった。あとで聞けば、さいたまでも休憩後にいきなり聞かされたらしいが。だがこの変更は、大阪のお客さんにとっては吉と出た。その理由はあとで。

スタンドの客席は少し寂しくなってきてはいるものの、両選手がコールされると拍手が起き、二人が向かい合うとその身長差に大きなどよめきが起きる。ホンマンがテイクダウンするとさらに沸く。あれっ、さっきの三崎vs秋山より反応がよくないか？　そうか、こっちのお客さんはやっぱり、『やれんのか！』的世界観よりも『Dynamite!!』的世界観のほうがなじむわけだ。確かに、ヒョードルが仕掛けた二度の腕十字、それもフィニッシュになった最後のそれには、三崎が秋山を倒したときよりもかなり大きな歓声が起こった。立ち上がって拍手しているファンもいる。なるほどねえ。

この試合が終わったあとも、出口への人の動きは激しくなった。すでに23時前だし、観たいものは観たし、帰るか帰るか、という感じ。うーん、あと2試合あるんだけど……。

途中で、このPVは23時半までの予定と聞いていたのだが、このままいくとどう考えてもその時間には終わらない。どうやら、先のヒョードル戦からはリアルタイムでの中継になっていることも判明したが、会場の方は大丈夫なんだろうか？　と、いらぬ心配が頭をよぎる。かといって、試合を残して中継がブチッと切られちゃうのもやだなあ、と……。

ちなみに、筆者はこのPVのほとんどを、アリーナの片隅から観戦。客席の反応も見やすかったからだが、選手や関係者がいたら感想を聞きたいと思っていた。だが、打ち上げが始まっている（らしい）こともあり、最初の頃に小路晃がいたのみだった。話を聞くと、『やれんのか！』の最後のセレモニーに顔を出すため、即行で関東に戻る予定だったが、間に合わなくなってしまったとのこと。関係者を含め、数人は早い時間に移動したようだが、第11試合に出場のサップのセコンドについた小路にはそれは不可能だった。ご愁傷さまです……。

さすがに時間も遅いため、その後もだんだんと人が減ってしまい、24時直前にメインが終わる頃には、スタンドに残った人はチョボチョボになってしまった。メイン、青木真也の入場時には立ち上がって手拍子をしていたファンを4人ほど確認。ああ、熱狂的な『やれんのか！』ファンも、いたにはいたんですね（単に青木の大ファンなのかもしれないが……）。

最後の最後まで残った観客のために、意外な演出が！　メイン終了後、さいたまでバタバタと始まったカウントダウンに合わせ、大阪のリング上にもKICK☆が再び登場。一緒にカウントダウンをすることになったのだ！　KICK☆のブログによると、これはまったくの予定外だったらしい。そのためか「あけましておめでとう！　来年もよろしく！　みんなよいお年を！」と言ってしまい、ツッコまれるKICK☆。でも、それこそさいたまの高田本部長らと一体になれた（？）このプチ・ハプニング演出には、お客さんも満足げ。いやあ、お疲れさまでした！

1枚のチケットで2つのイベント、計23試合（！）が観られ、カウントダウンにまで参加できた大阪のファン。オープニングファイト第1試合からPVメインまで10時間、全部観た人がいたのかどうかは不明だが、もしいたとしたらこの日、一番格闘技を満喫した人ということになる。

07年、外食業界では「メガ」ブームが起きたが、この日の京セラドーム大阪はまさに「メガ格闘技」だった。メガマック、メガ牛丼と両方食べたことがある自分としては、あの食後感に近い〝完走感〟が感じられたのは確か。ううう〜、確かにお腹いっぱいです。ごちそうさまでした！

さいたまのメイン終了後、ＰＶのＭＣを務めたお笑い芸人のＫＩＣＫ☆がリングに上がり、さいたまと同時にカウントダウン。ここまで残っていた観客は少なかったが、最後にさいたまと一体になれた!?　ともあれ、お疲れさまでした！

『K-1 PREMIUM
2007 Dynamite!!』
大阪・京セラドーム大阪

○桜庭和志 vs 船木誠勝×
（1R 6分25秒
チキンウィングアームロック）

桜庭vs船木、田村と前田SVは一悶着！

“2007年のUWF”証言集

緑の深い選手&関係者は……

言えんのか!?

2007年のマット界関連のヒット本といえば『1976年のアントニオ猪木』が思い浮かぶ。それとは無関係だろうが、昨年の大晦日の『Dynamite!!』はメインで桜庭vs船木、さらに田村vs所、おまけに（？）リング上で前田日明HERO'Sスーパーバイザーと田村が一悶着を起こすなど、さながら“2007年のUWF”といった感じであった。そんなわけで、選手&関係者に聞く“2007年のUWF”、言えんのか!?

構成／阿修羅チョロ　撮影／乾晋也

桜庭のよきライバル

金原弘光

『kami-pro』本誌で連載中のコラムも大好評の金ちゃん。昨年は「あと1試合で引退」を表明するも、なかなか試合が組まれず、結局引退は撤回。桜庭とはUインター時代のよきライバル。

船木さんもそうだけど、田村さんや桜庭とも今年は闘ってみたいね

「試合を観て思ったのは、グラウンドの攻防がほとんどなかったのがちょっと残念だったけど、船木さんのスタンドはよかったんじゃない。桜庭も入りづらそうな感じだったんで。あとは試合が5分3ラウンドだったら、また違ったんだろうけど、10分・5分っていうのは桜庭みたいなグラップラーには有利だから、それがモロに出ちゃったみたいな試合だったね。

でも、船木さんは凄く若々しかったし、肉体も凄かったし、コンディションはいいんだなっていう感じはしたよね。あとは反応とかの問題であって、あれだけの試合数をこなしてる選手はブランクとかは関係ないんじゃないかなって……いや、でも、よく考えたら7年って長いよなぁ。そういう意味では俺も最近はブランクがあるんでね（笑）。引退を撤回したからには、それこそ船木さんとも闘ってみたいよね。やっぱり俺らの世代って、前田、髙田、船木っていう選手に憧れて、この業界に入ってきてるし、船木さんとは接点がなかったから。あとは、同じ日に所くんと闘ってた田村さんや桜庭とか、昔の仲間ともひさしぶりに闘いたいなって思ってるんで、関係者の皆さん、今年はよろしくお願いします！（笑）。

あ、そういえば『Dynamite!!』で、前田さんと田村さんがリング上で揉めちゃったんでしょ？　その話を聞いて、やっぱり前田さんっていつまで経っても前田日明というか、素直すぎるなぁって、あらためて思ったよね（笑）」

船木をコーチした男
菊田早苗

約7年半ぶりに現役復帰となった船木をコーチしたグラバカのボス。大晦日は自身も試合に向けてトレーニングに励むも、結局、試合は組まれず『やれんのか!』で三崎のセコンドについた。

ブランクっていうより、極めっこやってたときの癖が出たのかも

「ん～、なんと言えばいいんだろう。ちょっと、ぶっちゃけ、この試合については語りにくいですよねぇ（苦笑）ただ、僕から言えるのは、まあ結果論なんですけど、もうちょっと船木さんはガンガンいったほうがパワーとかテクニック的にも、よさが出たのかなぁと思いましたね。下になって寝てる時間が長かったのは気になりましたね。猪木×アリ状態のときも、自分から立って、スタンドからリセットできるチャンスがあったように思えたんで。

あと技術的に言えば、やっぱり最後の腕絡みの前に自分で両手をロックしちゃったのが痛かったかなぁ。ロックすると逆にアームロックに入りやすくなるし、回転して腕十字にいかれる可能性も高いので、あれは最後の防御手段。あの前の体勢でポジションを変えることが、船木さんならできたはず。あれは7年半のブランクっていうより、極めっこやってたときの前の癖が出たのかもしれませんね。

今回の試合は、船木さんの魂を見せられれば、それでよかったんじゃないかと思ってたんですけど、そこまでいけなかったと思うし、本人も出しきれなかったと感じると思うんですよ。そういう意味では、次の試合が本当の意味で真価が問われると思うので、期待したいですね。もっとできるのは間違いないですから。

えっ、前田さんと田村さんがリング上で揉めたんですか。自分はそのシーンは見てないんで、なんとも言えないですね。なのでノーコメントでお願いします（笑）」

クワックワッ!
ミヤマ☆仮面

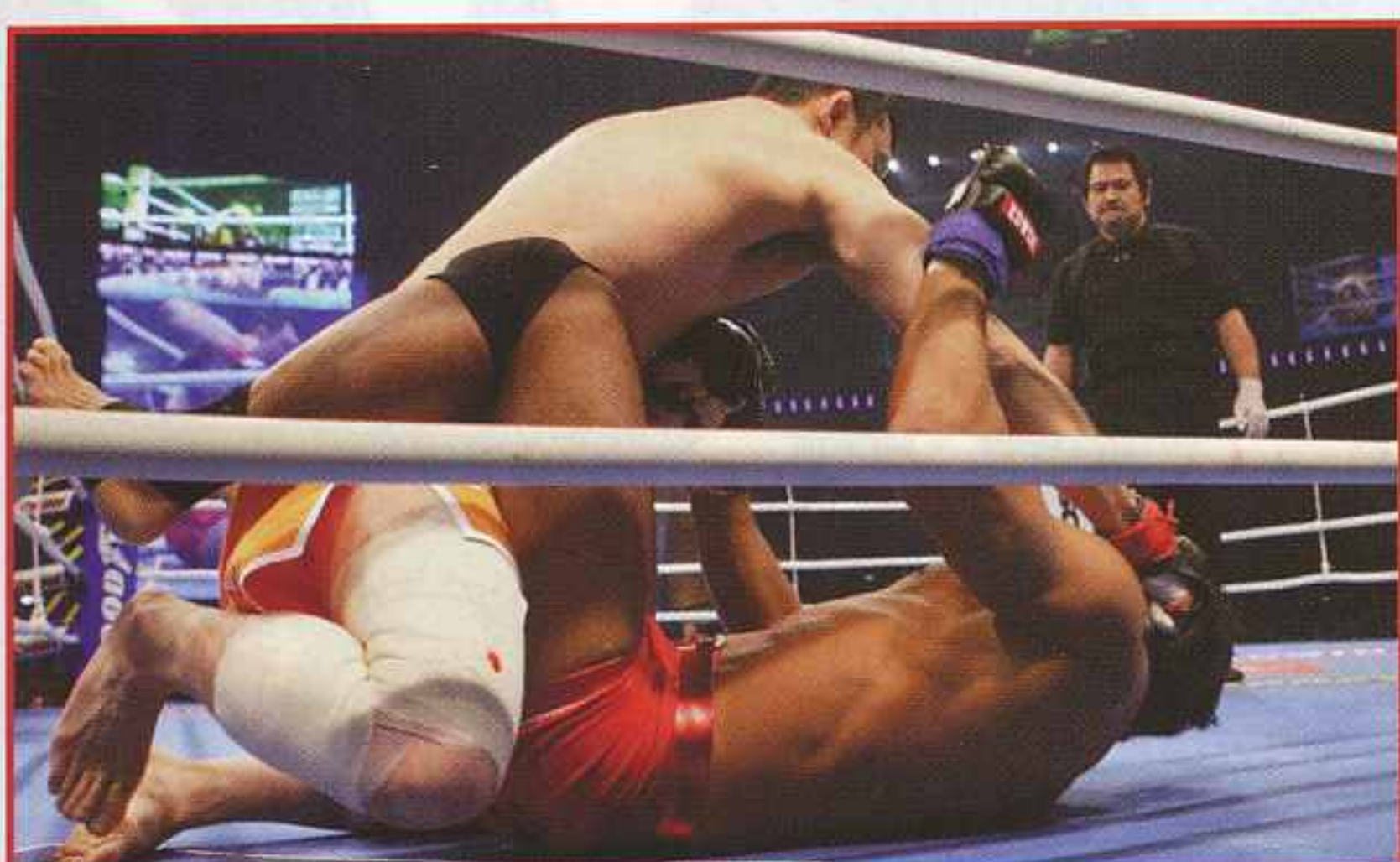
森とクワガタをこよなく愛するクワレスラー。変身前の姿は新生UWFでは船木の後輩にして、Uインターでは桜庭の先輩にあたる垣原賢人。愛息はちびミヤマ仮面として活躍中でクワッ！

船木さんが現役を続ける限りファンとして応援し続けるでクワ～！

「今回の試合は、十数年ぶりに愛媛の実家に帰って、そこで観たんですけど、僕にとっては先輩と後輩が闘うわけですから、なかなか観たくない総合の試合だったというのが本音ですね（苦笑）。試合に関して言えば、やっぱり7年半のブランクが出たのかなぁって思いましたね。プロレスの世界でも1シリーズ欠場しただけで試合勘は鈍ったりしますから。それでも、さすがは船木さんっていうか、あの身体はメチャメチャ、カッコよかったですね。現実は厳しいだろうなっていうのはありますけど、僕としては船木さんが現役を続ける限りは、一ファンとして応援し続けますから、今後も頑張ってもらいたいです。

あと大晦日の試合で言えば、やっぱり秋山選手！　ああいう結果になったのは前に『kamipro』さんで言いましたけど、僕が住んでいる相模湖の森に心の浄化をしに来なかったのが敗因でしょう。〝ミヤマ☆仮面の森〟っていう森作りを去年の10月からしてるんですけど、なにぶん、ちびミヤマ☆仮面と二人でやってるので、なかなか作業が進まないんですよ。だから、秋山選手には、いまからでも遅くない。心の浄化も含めて手伝いに来い、とアピールしておきます。森の中は最高クワよ。

あと、ついでに言わせてもらえば、去年の12月とかに、プロレスのリングで虫を潰したりした試合があったと聞きましたけど、虫を愛するミヤマ☆仮面としては、今度そういう試合があるって聞いたら、ガチで止めに行くでクワ～～!!」

大会前の公開練習では、日本刀を振り回しての居合い特訓を披露し、マッドネスぶりを見せつけた船木。試合では得意の打撃で前に出た船木だったが、サイドポジションからのアームロックで一本負け！　明日また生きろ!!

数年前までは「日本人相手だと顔を殴りづらいので、できれば闘いたくない」と言っていた桜庭だが、05年大晦日のミノワマン戦以降は、秋山、柴田、そして今回の船木戦と日本人との対戦が増えている。次の相手は誰だ？

最強レフェリー
和田良覚

Uインター、リングス、パンクラスとU系3団体のレフェリーを務めた唯一の男。現在は総合やキックなど格闘技のリングを中心に活躍しつつ、IGFでは大巨人相手に奮闘中だ。

船木選手の肉体はトレーナーの私から見てもとても素晴らしい！

「自分は『Dynamite!!』では審判をやってるし、いまはサクのトレーナーもやってるし、船木選手も新生UWFの頃からの知り合いですし、非常に語りづらい試合なんですよねぇ（苦笑）。

今回の試合に関して言うと、大会前は、あのフィジィカル嫌いなサクが凄くフィジィカルトレーニングをやってたんですよ。ただ、試合の1ヵ月以上前に古傷のヒザをやっちゃって、ほとんどグラウンドの練習はできてなかったんで、そこは心配だったんですけど、結果的には一本取りましたからね。ブランクもあったとは思うんですけど、サクに完璧にサイドポジション取られちゃったら、船木選手じゃなくても一本取られちゃいますよ。それぐらい力も強いし、テクニックもありますからね。

あとやっぱり、二人ともメインイベンターとしての責任も感じてるし、プロ意識も高い選手同士ですから、試合後のコメントでもわかるように内容的に満足してないところもあるんでしょうね。とにかく、それだけあの体勢からのサクは強いってことです。それにしても、船木選手の肉体はトレーナーの私から見ても素晴らしかった。それに男前だし、何よりも華があるしカッコよすぎ!!（笑）。試合勘が戻ったら、次の試合は期待できると思います。

え、アキラ兄さんとタムちゃんの件？　いや～、それも語りづらい話ですねぇ（苦笑）。まあ、ああいうことはないにこしたことはないですけど、もしあったら今回のように身を挺して防ぎたいと思います（笑）」

元Uインター取締役
鈴木健

かつて、髙田、桜庭、田村らが所属したUWFインターナショナルの取締役として大活躍。現在は都内・用賀の串焼『市屋苑』（03-3707-3223）のオーナーとして、日々ハッスル中！

今回負けたことで、船木の身体からヒクソンが抜け出たと思う

「最初に船木のファイティングポーズを見て、「あれ、どこかで見た構えだな？」と思ったけど、それはヒクソンの構えに似ていたんだよね。7年半前のあのときから、船木はヒクソンのことをかなり研究したと思うけど、いまの総合の世界は凄い勢いで進化してるでしょ。たとえ、いまヒクソンが出てきたとしても、最近の選手にはそう簡単に勝てないだろう。今回の船木は7年半の歳月を経ても、ヒクソンの亡霊に取り憑かれていたんじゃないかと感じたんだよね。ただ、今回負けたことで、船木の身体からヒクソンの亡霊は抜け出たと思う。

試合から数日後、桜庭に電話したら『船木さんはパンチもキックも重いし強いし、ヤバイと思った』って言ってた。パンクラス設立当初、船木と鈴木は足関節にこだわっていると聞いていた。で、Uインターの場合は、常にポジショニングを徹底的に磨き抜いていた。今回はそれが試合で出たんじゃないのかな？

桜庭戦は船木にとって新しいバーリ・トゥードのデビュー戦だと思うんだよね。船木は好きな選手の一人でもあるから、早く最近の闘いに慣れて、勝利し続けるまでは絶対にやめてはならないと考えるし、私はその日を心待ちにしている。

前田さんとタムちゃんが揉めたっていう件に関しては、詳しい状況はよくわからないけど『最近の前田さん、どうしちゃったのかな？』って感じ。ただ今回の大会もスーパーバイザーとして関わっていたわけだから、あくまでも中立を貫かないとね」

大晦日“無礼講”祭り座談会

『やれんのか!』『Dynamite!!』『大みそかハッスル祭り』に海の向こうの『UFC79』まで!
“奇跡の一日”となった07年大晦日の動向から、08年の行方は見えたのか?

撮影/平工幸雄(『やれんのか!』)、乾晋也(『Dynamite!!』)、Josh Hedges(UFC)
構成/真下義之

座談会出席者

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から変態的プロレスファン&UWF信者を経て、『kamipro』編集部へ。“変態座談会”のエースとして活躍する34歳。07年大晦日は『UFC79』のラスベガスから『やれんのか !』のさいたまにハシゴする離れ業に挑戦。

松澤チョロ
本誌編集部件電気部。なぜか07年後半から“阿修羅”名を語り、一部では“ホームレス編集者”疑惑もささやかれる35歳。07年大晦日はインディー好きの定番、『プロレスサミット』を断腸の思いでパスし、大阪の『Dyna mite!!』に出張。

司会/ジャン斉藤
本誌編集長。“雀鬼”こと桜井章一の内弟子を経て、『kamipro』編集部へ。永久電機などアントン関連事業の調査をライフワークとする32歳。07年大晦日は『大みそかハッスル祭り』から『やれんのか!』のメガ昼夜興行をハシゴ観戦。

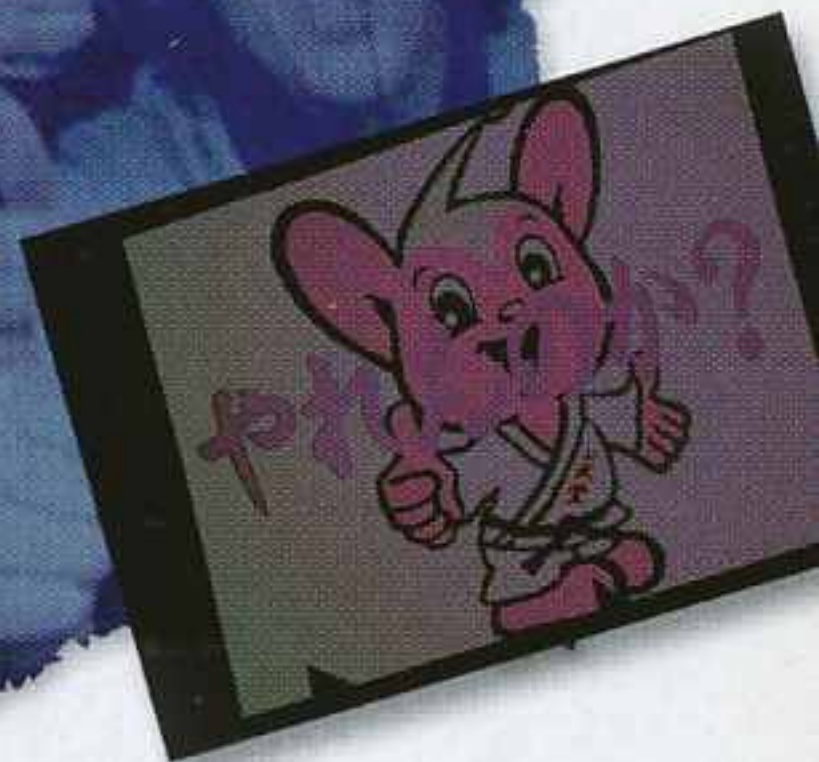
UFC帝国の勢い止まらず!全盛期のPRIDEに匹敵!?

——『kamipro』読者の皆さま、あけましておめでとうございます! 我々はいま正月返上でこの速報号の作業に従事しております。

ガンツ 今回の大晦日決戦も本当に凄かったねえ。『UFC79』に『ハッスル祭り』、『Dynamite!!』に『やれんのか!』。あまりの忙しさに専門誌はともかく、一般マスコミからは大ブーイングが飛んでるという。

チョロ ホントにいいかげんにしてよ! おかげで今年は後楽園の『プロレスサミット』も新木場の『プロレス・ターミナル』も行けなかったんだから……。

——プ、プロレス・ターミナル?

チョロ あ、知らない? 『プロレス・ターミナル』というイベントはですね、〝ニセ大仁田〟こと森谷……。

――（さえぎって）いや、けっこうです（笑）。

ガンツ まあ、インディー好きのチョロさんが『プロレスサミット』に行けないほど忙しい、と（笑）。でも、まさか俺も太平洋を股にかけて〝ハシゴ観戦〟することになるとは思いもしなかったなあ。

チョロ ガンツはUFCから『やれんのか！』にハシゴしたんでしょ。

ガンツ そうなんです。詳しくは108ページの旅日記を読んでもらうとして、『UFC79』の感想を一言でいうと「UFCサイコー!!」。いまのUFCはズバリ言って、全盛期のPRIDE並みの凄まじい熱がありますよ！

チョロ へえ～。そんなに凄いんだ。

ガンツ 会場のムードも試合内容もカンペキ。PRIDEは豪華なカードが最高のタイミングで実現する最高の舞台で、試合も想像を超えるものを連発してたんだけど、それに匹敵してるなあ。

チョロ ライブでUFCを味わったことないから……いや、一回だけあったなぁ……（しみじみと）。

――当時の『kamipro』最高出張経費をかけてUFC取材をしたのに、16ページ丸ごと落としたやつだ（笑）。

チョロ まあ、俺の嫌な思い出はおいといて、要はガンツはアメリカにかぶれてるってことでしょ。

ガンツ いやいや、今回の『UFC79』はとくに凄まじかったよ！ だって、最近のUFCは〝勝敗至上主義〟で連勝しないとチャンピオンにたどりつけないこともあって、どうしても〝負けないための試合〟が多くなってたんですよ。ところが！ 今回のシウバとチャックはひたすら殴り合う男の勝負。野球でいえば豪速球の直球か、ホームラン狙い！ シウバなんか小細工なしで、血だらけで前に出るだけだったもんなぁ。「これが俺たちのヴァンダレイ・シウバだ！」と全世界に叫びたいような試合だったんですよぉぉぉぉぉ！

――と、思わずターザン化してしまうほど凄かった、と（笑）。

ガンツ うん、豪ちゃん（かわいらしく）。

――（無視して）結果だけ見ると、「PRIDEファイターがまた負けた！」という感想になるけど、ヴァンダレイは自分の魅力を全開で発揮したってことですか？

ガンツ そのとおり！ PRIDEファンは「UFCファンのアメ公め！ 俺たちはこういう試合をずっと観てきたんだ！」って胸を張っていいよ。でも最後は「こんな楽しみを奪いやがって！」という悔しさも湧いてきたけど（笑）。

――あ、それはホントにそう！ こっちはネットPPVで観ていたんですけど、PCからシウバの入場テーマ『Sand Storm』を聴く悲しみといったらなかったですもん。もう生で聞くことはないんだろうなぁって。しかも翌日の大晦日にはミルコの『WILD BOYS』を『ハッスル祭り』で聴く不思議さ（笑）。

ガンツ 何かがおかしいよ、本当に（笑）。

チョロ 俺はなんとも思わないなあ。『Sand Storm』は大鷲（透）の試合でしょっちゅう聴いてるから。

――（無視して）日本のファンには実感しづらいでしょうけど、UFCの勢いはますます加速しているってことですね。

ガンツ 大爆発してるねぇ。さらにメインのジョルジュ・サンピエール（以下、GSP）vsマット・ヒューズは「これぞUFC！」って試合だった。「いまの最先端がここにある」と思ったし、技術から何から、残念ながら「日本は遅れてる！」と思っちゃうほどのショックだったね。アメリカ、サイコー！ ヒャッホ～!!

――なんか芸風が〝明るい高島学〟みたいになってますねぇ。

ガンツ 確かに最近、俺も白髪増えてきたしな……。そんなことはどうでもよくて、マジメな話、GSPはスーパースターが生まれるときのマグマが噴き出す寸前の空気が出てる。じつはここ数年のUFCは今回、予定されてたマット・セラvsマット・ヒューズのような『TUF』のコーチ同士の闘いが目玉だった。でもマット・セラが欠場になって、代役がGSPと発表したら、逆にファンが大喜びしちゃったのよ。

――つまり、プロモーションが提示するものや、一般層に通りがいいもの以外の魅力もしっかりと根づいているということですね。

ガンツ それくらいUFCの構造自体に奥行きが出ている。だから、おもしろい！ みんなもなんとかしてUFCを観られる方法を考えたほうがいいよ。いままでUFCを〝MMAのメジャーリーグ〟と書いてたのは多少の謳い文句的な部分もあったじゃない？ でもいまは名実ともに文句なしのメジャーリーグだね。

チョロ そこから日本の『やれんのか！』を観てみるとどうなるの？

ガンツ 申し訳ないけど、『やれんのか！』の〝神風〟的な盛り上がりが「こんなもんだっけ？」と思っちゃうくらいだったよねぇ（と肩をすくめて）。

チョロ なんかイヤな感じだなぁ～。このアメリカかぶれが！

ガンツ だって、ヴァンダレイvsリデルなんて、試合前から試合後まで観客総立ちだよ。まあ、『やれんのか！』でも中山（健児）ドクターにあんな大声援が飛ぶのは異常だし、島田（裕二）さんへのブーイングも恒例とはいえ2万人が〝お約束〟を守るのも凄いですけど（笑）。

チョロ いっそUFCから、『Dynamite!!』のヒンヤリした空気感を感じてほしかったなぁ～。

ガンツ そんなにヤバかったんですか、『Dynamite!!』（笑）。

ダイナマイッな騒動勃発！ 前田トロフィー事件とは？

チョロ ボクは何回も『Dynamite!!』に行ってるし、本誌読者の評価は頭ごなしに認めないって風潮も感じるんだけど、現場ではバラエティに富んでて毎年楽しめるんだよ。ボーッと観ている

あのテーマがオクタゴンに鳴り響いた！『Sand Storm』流れる中、シウバが堂々入場！ 試合前にはブーイングも起こったもののMMA史上に残る激戦を展開したあとは場内総立ち、"我らがヴァンダレイ" はUFCファンの心も鷲づかみにした。

UFCの見どころの一つがファンを入れて行なわれる前日公開計量。今回はリデルとシウバが一触即発の乱闘騒ぎ！ UFCデビュー戦となったソクジュも、相手のLYOTO以上の歓声を集めて、すっかりご満悦。

「GSP！ GSP!」セミのチャックvsシウバ戦の余韻にひたる会場を切り裂くようにジョルジュ・サンピエールのコールが爆発。試合でもヒューズを圧倒したGSPはUFCの新時代のスーパースターを証明。

「UFC、サイコー！」と吠えたくなるオクタゴンガールズ（写真はアニアリーちゃん、22歳）。彼女たちはオーディションで選抜、ここからタレントとしてデビューする者もいるというからUFCのブランド力は本物だ。

ぶんには。
——ボーッと観てないで取材してくださいよ（笑）。

チョロ　でも今年はちょっちキツかったなぁ。個人的に一番盛り上がったのもパブリックビューイング（PV）の三崎（和雄）vs秋山（成勲）だし。

ガンツ　なんで大阪まで行って、さいたまの試合で盛り上がるんですか（笑）。でも、今回はテレビに映らなかった部分がおもしろかったみたいじゃない？　前田日明のトロフィー事件とか。

チョロ　えっ！　テレビに映ってなかったの？（とわざとらしく）。

ガンツ　ボクはチョロさんの「前田が田村にトロフィーを投げつけた」ってメールが大晦日で一番興奮しましたね（笑）。

チョロ　あれね、プレスルームでモニターを観ていたんだけど、最初、記者陣はほとんど気づかなかったの。最初は俺も「田村は和田（良覚レフェリー）さんに怒ってるのか」と思ってた。そのあとリングサイドのカメラマンから、「前田が田村にトロフィーを投げつけたぞ！」って聞いて、「これは去年のヌルヌル事件、一昨年の中尾キス事件に続く大事件か！」と大興奮したんだけど……。そのあとの広がりがいまいちなんだなぁ。

ガンツ　コアなファンが会場に行ってないからブログでも話題になってないし、その模様はテレビにも映っていないし。

チョロ　オフィシャルサイトでも〝なかったこと〟になってるし。田村サイドもこの件に関してはノーコメントを貫いてるんだけど、要は前田と言い合いになっても、秋山みたいに、のちのち試合で決着をつけられるわけでもないし、言い合いになったところで誰も得をしないっていう思いが強いみたいで。

ガンツ　というか、最近の前田日明SV自体〝なかったこと〟になってるんじゃないか、と（笑）。

——そういえば、前田SVは去年の『Dynamite!!』の会見には一度も出てないですし。でも、何に怒ってたんですかねぇ。

チョロ　前田は田村に「何、カッコつけとんのや！」とか言ってたみたいだけど、それが試合内容なのか、試合後の振る舞いを指すのかは前田本人に聞かないとわからない。というか、聞きたくないけどね。怖いから（笑）。

——まさか『kamipro』の前田日明〝変態〟座談会にムカついてたってことはないですよね（笑）。

ガンツ　いや！　あれを読んで逆に「こういう前田日明らしさが求められてるんだ」と勘違いしちゃったんじゃないの？……という話を新年早々、変態メンバーの井上（崇宏）さんと話したんだけどね。「ボクらのアキラ兄さんが呼びかけに応えてくれた！」と熱く抱擁しながら（笑）。

——新年早々、何をやっとるんですか（笑）。UWFというテーマで『Dynamite!!』を振り返ると、田村潔司vs所英男や桜庭和志vs船木誠勝は思いのほかスイングしなかったですよね。

ガンツ　彼らしかできない動きのある試合だったらいいんだけど、田村がどっしり構えて横綱相撲だったぶん、所の良さが出なかったよね。で、こんな感じの試合、どっかで観たことあるな、と思ったら、かつての前田vs田村なんだよ（笑）。

——あ、いまの田村がかつての前田で、所がかつての田村の立場（笑）。

大晦日〝無礼講〟祭り座談会

所との"U対決"に勝利した田村へのプレゼンターとして前田日明SVがリングイン。かつて田村に金無垢のロレックスを自腹で贈呈したこともある前田が、この日は「カッコつけんな！」とトロフィーを投げつける暴挙！　この理不尽行動に田村も「なんなんですか？　意味わかんないですよ」と噛みつくも前田は相手にせず。

ガンツ　そう。今回の田村は強かったけど、その強さって体格差をフルに利用した押さえ込む強さ、これってまさに前田日明の闘い方でしょ。それで怒ったのかなぁ？（笑）。

チョロ　マネするな、と（笑）。船木は「7年間で進化した」という話も出てたし、期待してた人も多いと思うんだけど……。なぜか〝ラッセ〟のマスク（ねぶたをイメージしたみちのくプロレスのレスラー）を被って入場したところは進化してたけど。

ガンツ　あの宇宙人っぷりは、船木健在の証でしょう！

——入場といえば、サクのパフォーマンスにはどういう意味があったんですか？　あの『帰ってきたウルトラマン』は。

チョロ　あれはブラジルに練習に行って、「帰ってくる」という前フリと、ひさびさに復活する船木にも……。

——（さえぎって）あ、もうけっこうです（笑）。

チョロ　谷川さんも「サクちゃんの入場は微妙でしたね」って言ってたなあ。

ガンツ　というかぶっちゃけ、ここ数年、ずっと微妙ですよ！（笑）。

——微妙というかなんというか、ヴァンダレイや（ヒカルド・）アローナ戦にはあまりにもヒリヒリする勝負論があったから、「もういいよ、サク。試合に集中してくれ！」という切なさを持って直視できたんですよ。たとえば、秋山との再戦で『帰ってきたウルトラマン』をやるならこっちも燃えるんですよ！

ガンツ　これはシチュエーションの問題だよね。いまの桜庭は身体つきやローキックの鋭さを見ても、ここ数年一番調子がいいと思うから、燃えるマッチメイクをしてほしいんだけどなあ。

チョロ　その『Dynamite!!』で一番、熱があったのは山本KIDの試合だったんだけど……、そのあとPVで流れた石田（光洋）vs（ギルバート・）メレンデスが流れた瞬間、内容的にも熱量的にも大会を上回っちゃった気がした。

ガンツ　たった一試合で！（笑）。

三崎の〝魔王〟征伐でさいたまは無礼講状態突入！

ガンツ　確かに『やれんのか！』は開始前から客が完全にできあがってましたけど。20時スタートとはいえ、あんなにオープニングからギッシリ埋まっているイベントないよね。

——残念ながら権利の関係なのか、「ダン！　ダン!!　ダダン!!!」のオープニングテーマは流れずじまいでしたけど。イベント終了後の舞台撤収のときに士気を高めるためなのか、大音量で流れてましたよ（笑）。

ガンツ　それでも『やれんのか！』は〝神風〟が吹きまくった神興行だったけど、正直に言えば、もっともっと爆発するんじゃないかなって思ってたんだよね。

——あ、それは同感ですね。マイナス要素としては青木真也vsJZカルバン戦という〝核〟のカード

12.31『Dynamite!!』京セラドーム大阪大会、全14試合をイッキにレビュー！

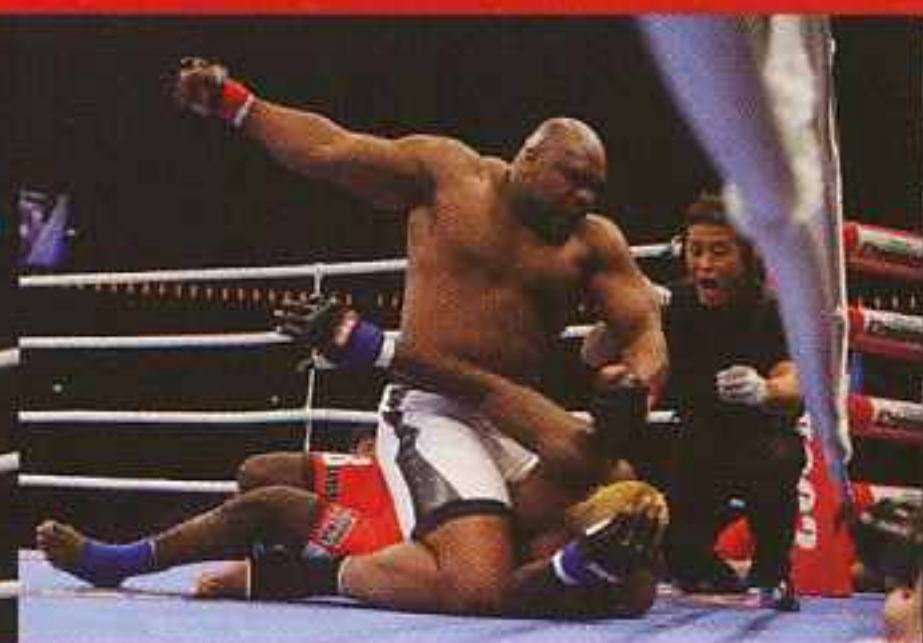
○田村潔司 vs 所英男×
（3R 3分08秒 アームバー）

大会前、田村から「Uスタイルルールで」という仰天の申し出があったもののルール変更はないまま当日を迎えた“赤パン”対決。試合は両者こだわりのUを体現する“回転体”ムーブ炸裂と思いきや田村は強烈なミドル連発、体重差を利用したスタイルで所を圧倒。そして、そのときリングサイドにいた前田日明は……。

○桜庭和志 vs 船木誠勝×
（1R 6分25秒 チキンウィングアームロック）

桜庭が打ち出した“みちのくNo.1決定戦”に備えて、船木は青森のねぶた的な衣装を引きずりながらのド派手な入場で船木らしさ爆発。一方の桜庭は阪神の“盟友”下柳剛と『帰ってきたウルトラマン』で入場。だが注目の38歳対決はあっけない桜庭の完勝劇に。試合後は「年だけど頑張りましょう」と励まし合った両雄だった。

○山本KID徳郁
vs ハニ・ヤヒーラ×
（2R 3分11秒 KO）

花くま先生も大注目の一戦。計量に失敗のヤヒーラはギャラの30パーセント没収＆減点１からスタート。これで発奮したか、試合はアブダビ王者らしからぬ打撃中心の攻防。KIDが左フックKO勝利も、最後のキックが反則裁定に。

○ボブ・サップ
vs ボビー・オロゴン×
（1R 4分10秒 KO）

谷川代表も「一番、視聴率を獲る！」と自信のボビーvsボブ対決。ボビーは金髪に染めてデニス・ロッドマン化。視聴率的に短時間決着は避けたかったが、サップはパウンド連打でたちまち圧勝。試合後はK-1の継続参戦も表明。

○魔裟斗
vs チェ・ヨンス×
（3R 0分51秒 TKO）

公開計量では夫人の矢沢心さんを同伴するなど、余裕シャクシャクだった魔裟斗。ボクシング世界チャンプと真っ向から打撃勝負も危なげなしの勝利を挙げ、Ｋ－１甲子園には「若さが全然ない」とダメ出しするカリスマぶり。

○武蔵
vs ベルナール・アッカ×
（3R 1分26秒 KO）

大会前には『関口宏の東京フレンドパーク2』（TBS系）に出場、同チームで力を合わせた両雄だがリング上では話は別！　テコンドーやカポエラ経験のあるアッカが怒濤のラッシュも、攻め疲れを待った“我らが武蔵”が貫禄勝利。

[K-1甲子園 U-18日本一決定トーナメント決勝戦]

○雄大
vs HIROYA×
（3R 判定2-1）

大ファンであるタレントの香里奈が自宅に応援！ などTBSの支援体制も万全。優勝が期待されたHIROYAだが、やはり甲子園には魔物が棲んでいた！ ジムで住み込み生活するハングリーな16歳、雄大が判定勝利で初代U-18王者に。

[K-1甲子園 U-18日本一決定トーナメント1回戦]

○雄大
vs 久保賢司×
（延長 判定3-0）

あの武田幸三も絶賛の“リトル超合筋”で、顔は武蔵似というじつにK-1イズム溢れる雄大（16歳）はアマチュア無敗の強者。“甘いもの大好き”なプロ8連勝中の久保保賢司（18歳）を撃破して、プロデビュー＆決勝進出！

[K-1甲子園 U-18日本一決定トーナメント1回戦]

○HIROYA
vs 才賀紀左衛門×
（3R 判定3-0）

「モノが違う！」と本誌がプッシュした“最強中学生”藤門嘩裟が「義務教育中ということで」無念の欠場、代打のイケメン高校生・才賀紀左衛門（本名・18歳）はトリッキーな蹴りで奮闘も“主役候補”のHIROYA（16歳）が決勝進出！

○ズール
vs ミノワマン×
（3R 2分13秒 TKO）

微妙に元PRIDE勢同士の一戦。体重差に危険もささやかれる中、ミノワマンは一本背負いでブン投げる火事場のクソ力！　だがズールの怪物性の前に轟沈。勝利のズールはおもしろ顔でカメラにアピール、上機嫌で引き揚げていった。

○ニコラス・ペタス
vs キム・ヨンヒョン×
（2R 0分41秒 TKO）

大連立もいいけど大巨人もね！ IGFもビックリの2メートル戦士、キム・ヨンヒョンに対するニコラスはジャズシンガー・綾戸智絵さんの生歌で入場。大巨人攻略の定石、ローを連発して見事に大巨人狩り！

○メルヴィン・マヌーフ
vs 西島洋介×
（1R 1分49秒 KO）

戦前、無口な西島が「マヌーフのボクシング技術は6回戦レベル」と挑発！ だが試合ではマヌーフの怒濤の打撃に轟沈。マヌーフは「6回戦ボーイと言われ、マジでムカついた」と怒りの原動力を告白。

○ヨアキム・ハンセン
vs 宮田和幸×
（2R 1分33秒 チョークスリーパー）

地上波でなぜかトリとして放送されたこの一戦は、“大連立”で実現した『やれんのか！』的好カード。成長著しい宮田のハンセン食いが期待されるも最後はハンセンが前方回転式のチョークをズバリ！

○立川隆史
vs 井上由久×
（1R 1分43秒 KO）

大応援団を引き連れ、元千葉ロッテの立川がすべり込み参戦！　相手の井上は前日会見で「息子が重病にかかってる」と号泣。「息子のために」と勝利宣言も立川の野球仕込み（？）のローの前に撃沈。

[K-1甲子園 U-18日本一決定トーナメントリザーブファイト]

○村越凌 vs 藤本新×
（1R 2分00秒 KO）

めざせ、甲子園！　アニメ『タッチ』の浅倉南役の日高のり子のナレーションで盛り上げたK-1甲子園。リザーブファイトは村越凌（15歳）が、才賀が本戦に繰り上がり急きょ出場の藤本新（17歳）に見事KO勝利。

大晦日“無礼講”祭り座談会

が消滅したり、さらにテレビの関係で試合順が変わってしまったりとか。

ガンツ　PRIDEって、地上波があったときも常にライブ第一主義だったけど、今回初めてテレビが優先されて興行のデザインがイジラれちゃったわけでしょ。煽りVも試合順が変わったせいで、マッハの試合のとき、残り2試合なのに、「残り3試合」と煽られたり。普通ならジ～ンとくるところで、誰もがツッコんじゃって。それが残念というか、「もうPRIDEじゃないんだな」ってあらためて感じちゃったな。

——ただ今回に関しては、そうでもしないとイベント自体が成り立たなかったという、やむえない事情もあって。

ガンツ　それくらいPRIDEクラスのイベントをやることは難しいってことだよね。

——そもそもPRIDEらしいヒリヒリする勝負論が持ち込まれたのは、FEGとの格闘大連立による秋山成勲の投入もあったからですし。

ガンツ　しかし、凄かったねぇ、秋山の〝魔王〟ぶりは！

——あんなヒールは見たことないですよ。勝った三崎も凄いですけど、こっちは最初から最後まで〝魔王〟に釘づけでしたから！

ガンツ　この試合は、髙田（延彦）が北尾（光司）を成敗した試合とそっくりなムードだったね。でも、三崎の劇的KOはあのときの髙田を超えてるし、秋山のヒールっぷりも北尾を超えてるね。

——確かに北尾って、「ボクは反省してます」というムードを上っ面だけでも感じさせてくれたじゃないですか。でも秋山は謝罪ムードなんて皆無ですからね（笑）。

ガンツ　入場で大ブーイング受けたでしょ？　あのときの秋山の顔を見てやってくださいよ。場内を見回しながら〝上から目線〟で「おまえらアホやのぉ～！」って顔してるから。もう頭の上にフキダシ出てたもん！

——ダハハハハ！　あと〝魔王〟が凄いと思ったのは、入場のグローブチェックしたあと急に小走りになったんですよ。何かと思ったら、ちゃんとテーマ曲に合わせてリングインしてる（笑）。

ガンツ　凄い余裕だよね、あの雰囲気で（笑）。

——だいたい、デニス・カーン戦後、あらゆる媒体から取材のオファーが殺到していたと思うんですけど、復帰後の初取材がなんと（MSN自動車情報の）『カーセレブ特集』ですからね（※アドレスは31ページ下段参照）。ちなみに魔王ベンツの車体カラーは、やっぱり黒でした（笑）。

ガンツ　ガハハハハ！　でも三崎の気合いの入りようも凄かったよねぇ。人間ってこんなにハイテンションになれんのか？　って。あの三崎のテンションはへんな話、パンツ脱いじゃいそうだったもん！

——どんなたとえですか（笑）。正直、三崎和雄という選手個人にはこれまであまり思い入れがなかったけど、「秋山憎し!!」で三崎を死ぬほど応援するファンは多かったでしょうね。

ガンツ　ホント星のめぐり合わせってわからないよ。長州力流に言えば、「俺の人生にも一度くらいいいことがあってもいいだろう」と。でも、試合後のマイクも興奮をチャラにしかねないほどのインパクトがあったけど（笑）。

——あのマイクはホントにヤバイですって！　退場しようとする秋山を引きとめて放った言葉が「俺はおまえを絶対に許さない!!」なんですよ（笑）。

ガンツ　「でも、おまえの心が俺にも届いた」と続くけど、最初は「勝った直後に〝許さない〟はないだろう」って感じになるよね（笑）。

——そのあとの「柔道サイコー」「日本人は強いんです」も確実に勘違いされますよね。実際に韓国のメディアはさっそく「国内格闘技ファンもチュ・ソンフン（秋山の韓国名）と同じように屈辱を感じており、報復を願っている」「三崎は反則王だ」と感情的に書きたてて。ちなみに「チュ・ソンフンは日本で悪の化身という印象を与える〝黒魔王〟と呼ばれている」とも書いてますが、そう呼んでいるのはウチだけですのであしからず（笑）。

ガンツ　最後の三崎のキックがけっこう騒がれてるみたいだけど、俺は全然問題ないと思うけどな。頭部へのサッカーボールキックが禁止っていうのは、防御できない状態で蹴られたら危険だから禁止なのであって、秋山はヒザも着いてないし、手も上げるところだったんだから。それにもし、あれで三崎が反則負けになったとしても、それこそ「ケンカでは勝ちました！」って言えばいいんだから（笑）。

チョロ　KID vs ハニ・ヤヒーラ戦でも、KIDがパンチでKOしたあとに、サッカーボールキックがあったんだけど、あの試合は勝敗には影響がなかったということで、平（直行）審判部長が試合後にKIDにイエローカードを提示して、その場で収まったという（笑）。

試合後、秋山を引きとめた三崎は「俺はおまえを絶対に許さない!」とマイクで断罪。不思議な間のあと「おまえの心が俺にも届いた」とたどたどしく秋山を激励。トンデモ発言で微妙な空気……と思いきや異常興奮の場内は大歓声で後押し。

『やれんのか!』試合&TOPICS

○桜井“マッハ”速人 vs 長谷川秀彦×（2R 判定3-0）

試合順変更で急きょセミとなったこの試合。減量苦のマッハが動きに精彩を欠き、“2000種類のサンボ技を持つ男”長谷川も本領発揮ならず。決定打のない判定結果に、マッハはノーコメントで会場を去った。

○石田光洋 vs ギルバート・メレンデス×（2R 判定3-0）

こちらも1年ぶりの石田の復帰戦は超ハイレベルな攻防に。メレンデスがデスバレーボム気味に突き刺せば、石田も脳天から落下させる危険技で反撃！　最後はフライvs高山戦ばりのドツキ合いまで展開。

○瀧本誠 vs ムリーロ・ブスタマンチ×（2R 判定2-1）

『戦極』の旗揚げ会見では009チックだった髪型を短くして入場した瀧本は、ムリーロの変幻自在の寝技をしのぎまくり、積極果敢な打撃でダウンまで奪うスリリングな大激戦を展開し、殊勲の判定勝利。

○川尻達也 vs ルイス・アゼレード×（2R 判定3-0）

「やるに決まってるでしょ！」と1年ぶりの復活で気合い満点の川尻は怒濤の鉄槌ラッシュで圧勝！　だが攻防のない“固い”試合に「デビュー戦みたい」「気持ちがフワフワしてた」と反省しきり。

――いまさらですけど、興奮した三崎の代わりに郷野（聡寛）が場を仕切っていれば、うまくまとまってましたよね。「俺、闘う人。アンタ、しゃべる人」という〝染之助・染太郎状態〟にして（笑）。

チョロ　でも、そんなグダグダでもお客さんは大興奮なんでしょ？

――だから、あの試合ってお客さんも含めて秋山本人以外はまるで余裕がなかったと思うんですよね。秋山憎しの感情、そこにPRIDEの喪失感がないまぜになって、侵略される恐怖感がPRIDEのナショナリズムというべきものを呼び起こした。それだけPRIDE再開を待たされたエネルギーは凄かったんだなと思ったのと同時に、あの秋山に対してならどんな仕打ちをしても許されるという特異な空間だったんだなあ、と。

チョロ　じゃあ、もうお祭りだから無礼講!!　という感じ？

――完全に無礼講。あの日限りの点にしないと、何かとんでもない自体になりそうな熱狂ぶり（笑）。

ガンツ　でもね、あの熱狂を生み出す力があったのがPRIDEや、『やれんのか！』の一番の強み。あの熱は今後の格闘技界に必要不可欠でしょう！　あとはイベンターがどうハンドリングしていくかですよ。

チョロ　それにしても、去年の4月以降、PRIDEが沈黙してからの展開って、ホントに脚本があるような感じだよね。三崎vs秋山戦の内容もそうだけど。

――この先に続く大河ドラマの最大の焦点は、成敗された魔王がどんな〝黒い復活〟を遂げるのかですよ。

ガンツ　成敗されたはずなのに、「反省して一から出直し」なんて気持ちはさらさらなさそうなのが素晴らしいよね。だから秋山はジェイソンだな！　さんざん悪夢と惨劇を展開して、人間たちが命からがら退治したはずのに全然死んでないんだもん。きっと、もう次回作の構想を練ってるよ（笑）。そして、今回は溜飲が下がったけど、ストーリー的には秋山を倒さなきゃいけない人がいるでしょ？

――ホントは桜庭にやってほしかったんですよ！

ガンツ　ねえ。三崎であそこまでの熱を生んだんだから、桜庭が『やれんのか！』の世界観の中で秋山と闘ったら……、想像しただけで鳥肌立った!!

チョロ　その『やれんのか！』って、もうやらないの？

ガンツ　最後にビジョンに「桜の咲く頃に会いましょう」というメッセージ幕が出たんですよ。3月に『戦極』があるから「それかな？」って思ってるファンもいるみたいですけど、水面下ではいろいろと動きがありますね。

――『やれんのか！』の会場で『M-1グローバル』のサポーターズクラブのチラシが配られたりしたし。今夏には日本上陸が有力視されてますね。

ガンツ　あと『やれんのか！』はFEGに吸収されると見ているファンも多いけど、そういう展開にならないと思うけどね。

チョロ　でも、FEGからすれば、あの『やれんのか！』の求心力はなんとしてもほしいところでしょ。

ガンツ　あのファンの熱を感じれば、イベンターなら誰でもそう思うでしょうしね。大阪とさいたまで、これだけ盛り上がったわけだから一本化したらどうなるんだろうね。たとえば、去年できなかったライト級グランプリを『HERO'S』と『やれんのか！』陣営で組んでやったら、正直観たいよ！

――そういう大きな場で青木たちには報われてほしいですよね。青木なんてカルバン欠場会見のとき、会見のテーブルやイスを一人で片づけているんですよ。そんなファイターは見たことないし、幸せになってほしいですよ（笑）。

チョロ　ところで大晦日の話題なのに『ハッスル祭り』と『プロレスサミット』にはまったく触れてないけど？

ガンツ　じゃあ、チョロさんがまとめてしゃべってください。

チョロ　え～っと、簡単にまとめると、金村（キンタロー）がミルコのハイキックをノーガードで受けて、失神しちゃって。そのあと後楽園の『プロレスサミット』のメインに出るハズだったから、出る・出ないで大変な騒ぎだったみたいだね。

ガンツ　ただミルコも金村を「彼はホントに大丈夫なのか？」って心配してたみたいだけど。

チョロ　ミルコは『やれんのか！』の会場に姿を見せなかったけど、金村を心配するあまり『プロレスサミット』の会場へ……？　というオチでいかがでしょう。それとも『プロレス・ターミナル』で……。

――（さえぎって）あ、もうけっこうです（笑）。

【08年1月1日／『kamipro』編集部にて収録】

新年カウントダウンを高田本部長の「やれんのか！」の合唱で迎えると場内のくす玉から「今年もやれんのか！」の幕。ビジョンには「桜の咲く頃、お会いしましょう」と意味深な文字が。はたして夢の続きは見れんのか？

大会エンディングでは吉田秀彦もマイクを握り「ファンと年を越せて幸せです。今年はたくさん試合しますんで、そちらも足を運んでください」と『戦極』のほうでもやれるかな？　とプチアピール。

“ミスターやれんのか!”青木の煽りVには道衣を着たマッドなピーポ君が出現！　中指を突き立てて大行進する秀逸な3Dアニメが展開、道衣には青木の所属する“公武道”のロゴも入ったこだわりぶり。

「ダン、ダン、ダダン！」は鳴り響かなかったが、レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンの『ゲリラ・レディオ』に合わせ、高田本部長が太鼓を打ち鳴らすという衝撃的なパフォーマンスに場内大喝采。

あの佐藤大輔氏が「泣かせます！」と断言したオープニングVは当日会場に入場するファンの姿、そして選手が“集結”し、最後はヒョードルの笑顔とともに“WE ARE BACK”の文字が浮かんだ。

「ヤァレェンノカッ！」とあの巻き舌も大復活！　リングアナはレニー・ハート＆ケイ・グラントにおまかせ。もちろん太田真一郎アナの名調子も健在。最後は煽りVの立木文彦ナレーターもリングに登場。

※MSN自動車『カーセレブ特集』 http://car.jp.msn.com/carlife/special/dec2007/interview/akiyama1.htm

ハッスル祭り→やれんのか!の芸術的変身を見よ!!

大晦日 最も長い さいたまの一日

文／松下ミワ

SAITAMA SUPER ARENA

試合前のイベントにてRGに悲しい現実が……

プロレス&格闘技ファンにとって一年で最も長い一日、大晦日が始まった！ 晴天に恵まれたこの日、第一部『ハッスル祭り』の開場時刻である11時30分には早くも群衆が広がっていた。じつに気合いが入っている！ ワイワイと賑わうのはさいたまスーパーアリーナ前、「ハッスル神社」が特設されたけやき広場だ。試合開始前にHGとRGのサイン&握手会、そしてスコット・ノートン&ジャイアント・シルバの握手会が行なわれていたのだが……、せっかく整理券を手に入れたのに、RGの握手を拒否する人が約2名。さいたまは早くも温まっている。

そんな人の流れを観察しながら場内へと突入すると、今度は会場から"猪木"の声。「俺に前説をさせるなんて、『ハッスル』も偉くなったもんだな。ムフフフ……」とリング上ではアントキの猪木がマイクを握っているではないか！ この前説が"充実"しすぎて、なんと試合開始時間の13時になってもスタートせず。いきなり波乱（もしくは予想どおり）の"巻き"状態となったのだった。

そんなこんなで大盛り上がりの『ハッスル祭り』が終了し、16時30分くらいに一度会場の外に出てみると……あら、ビックリ!! なんと会場周辺のあらゆるパネル、一部売店、そして神社までもがすべて『やれんのか!』仕様になっているではないか！ なんたる早業。

昼夜興行でいかにして会場チェンジを図るのかがこの日の見どころの一つであったが、じつに見事な仕事だ。ただ、「ハッスル神社」が「やれんのか!神社」に大変身したその脇の飲食コーナーでは、なぜかラーメンメニューだけが消滅……（右写真参照）。残念ながら、ラーメンは喰えませんでした。

HGとRGのサイン&握手会のエンディングソングとしてRGの入場曲『Lifetime Respect』が使われた。そのセンスが素晴らしい。

ハッスル神社

やれんのか!神社

ハッスルパネル

やれんのか!パネル

ハッスル売店

やれんのか!売店

魔王グッズにまさかの群集 その理由とは!?

しかし、『ハッスル』グッズと『やれんのか!』グッズの売店が並列している中、『ハッスル』会場から出てきたお客さんが『やれんのか!』売店に長蛇の列を作っていたのが印象的。やっぱり"ハシゴ族"は相当いるなと推測される光景である。そして、もう一つグッズエリアで気になったことといえば、なんといっても秋山成勲の「スワロフスキーTシャツ」。お値段、なんと4万7300円なり！ ご購入の方がいたのかどうかは不明だが、異色度100パーセントのこのTシャツにファンはもう興味津々!! とにかくみんな並んで写メを撮りまくるという異常事態を巻き起こしていた。後日、秋山のブログをチェックすると「女性ものもありますよ」と前宣伝していたではないか。ちなみに女性用のお値段は2万2500円！ う〜ん、どーせなら"魔王"キャラに乗っかって両方4万4444円で堂々と売り出してほしかった！

その後、一度会場内のプレスルームへ。『やれんのか!』開場時間の19時が近づき、再び外に出てみると……。これは驚きだっ!! いまだかつて見たことのない人の波。初詣よりも凄い勢いである！

初詣といえば、こんなことも。一夜限りの夢舞台『やれんのか!』も終わり、日本がすっかり新年を迎えた深夜1時すぎ。ようやく会場をあとにすることになったのだが、駅に向かう途中の「やれんのか!神社」をのぞいてみると、早くも初詣をしている人たちがいるではないか。こんな特設神社に2008年を委ねていいのか他人事ながら一抹の不安を覚えたが……、日本人は神社を見ると条件反射的に参拝する習性があると聞いたことがある気がするので、ま、いっか！

さいたまから編集部へ向かうも、電車の中は『やれんのか!』のお客さんがたくさん乗っているようで、まだまだ興奮冷めやらず。こっちも『ハッスル祭り』から『やれんのか!』まで、とにかくいっぱい観すぎて混乱状態に陥る元旦深夜だったが、ズバリ感覚としてはまだぜんぜん大晦日。もはや、いつまでが大晦日だったのかは説明できないが、とにかくこの日が一年の中で極端に長く濃密な一日だったことは言うまでもない。

嗚呼、さいたまよ、お疲れさま。そして、どうぞ今年もよろしくお願いします。

『ハッスル祭り』の会場前には女子レスリングの伊調姉妹、そして写真では逃してしまったが、吉田沙保里の姿もあった。

この群衆を見よ！ 高い位置から見ると、まさしく人間絨毯。この光景はさいたま新都心駅まで限りなく続いていたのだった。

イッツ・ノット・ア・ジョーク!!

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ザッツ★アメリカン

ニュースで振り返る

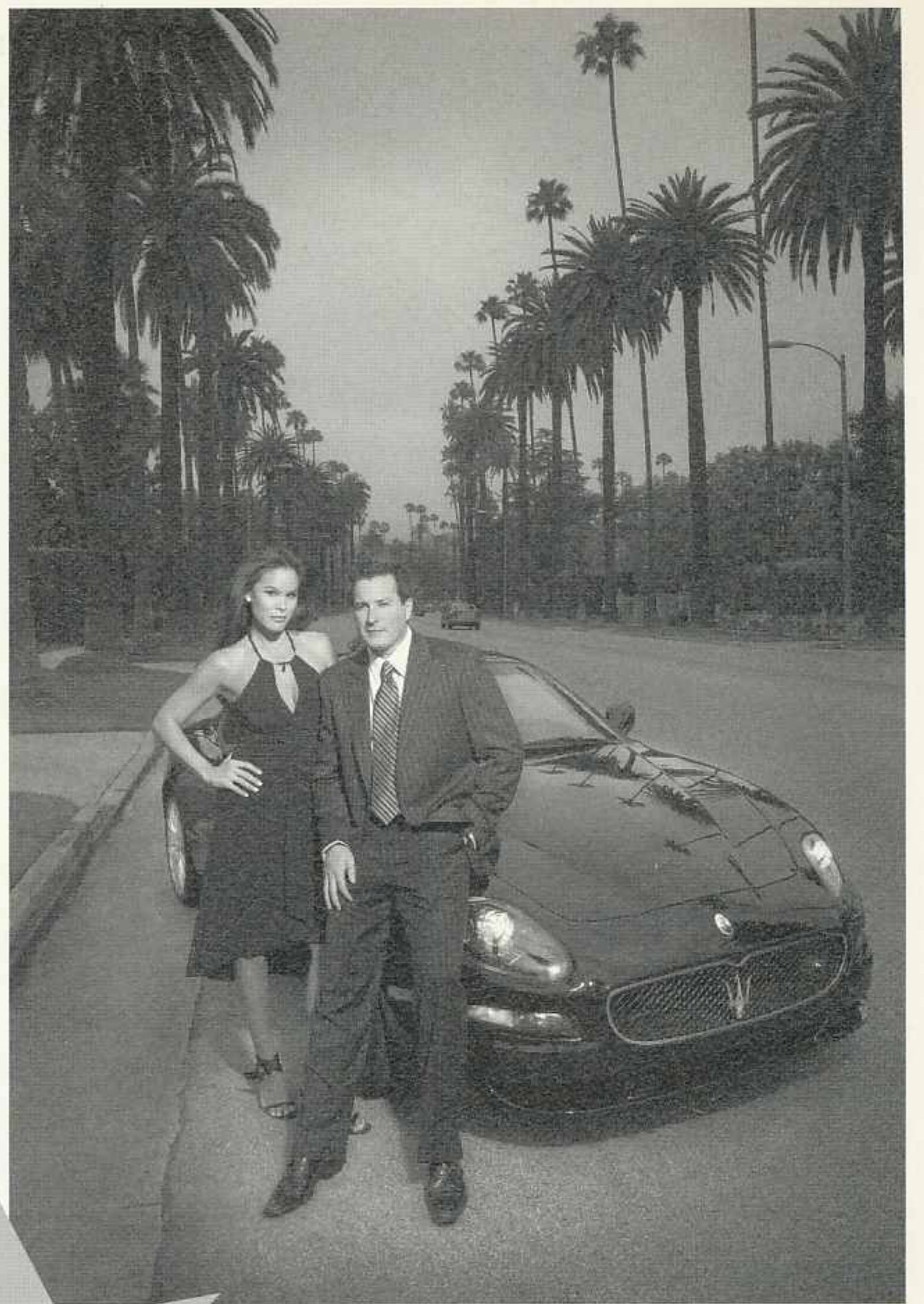
底抜け USA 2007

日本にあったMMAの中心が、すっかりアメリカに移ってしまった2007年。UFCの帝国化とPRIDE買収から、巨大資本をバックにした新団体の設立、そしてステロイド&ドラッグまみれの仰天情報まで、海の向こうから日本のマット界を直撃したニュースをあらためて振り返ります!

撮影/Red Devil、Bodog.com、Josh Hedges(UFC)、Scott Petersen、Ken Pishna、Dave Mandel

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

出張版

USA COOL宅急便

カルビン・エアーは実在した！
皇帝ごと格闘技界を大人買い!!

—今年も、アメリカMMA界の一年間を振り返りま～す。ナビゲーターは、携帯サイト『kamiproHand』で、当コーナー『USA cool 宅急便モバイル』を担当しているケビン・マスク！ よろしくぅ！

ケビン 今年もいろいろあったねぇ～（しみじみ）。

—何、いきなり感傷に浸っているんだよ！ さっさと進めるよ!! では、いってみよう！

☆ミルコ移籍の波紋

ケビン 2007年を象徴するような出来事として、『PRIDE無差別級GP』を制覇したミルコ・クロコップが、06年の年末にUFCへの移籍を発表！ 年明けにはデビュー戦が決定したね。

—このニュースが流れたのは、『PRIDE男祭り』直前のことだったからよけいにショッキング。

ケビン アメリカのファンは、せっかくのミルコの移籍にピンときてなかったけど（笑）。ライト層が多いからしょうがないんだけどさ。でも当時、高笑いして喜んでいたダナ（・ホワイトUFC代表）だったけど、結果的に、青写真どおりにミルコは活躍できていないね。

—いまのところ2連敗中だから。

ケビン 関係者によると、ダナは1試合目でいきなりミルコとUFCヘビー級王者を闘わせるつもりだったらしい。でも、3試合目にタイトルマッチをやりたいというミルコ側の意向に合わせたら、その前にミルコがつまずいてしまったというわけだ。PRIDEを背負いつつ、アメリカに敗れたという意味で、やはり、ミルコは2007年のMMAシーンを象徴する選手だった言えるかな。

☆ボードッグはどこへ行く？

ケビン 『PRIDE無差別級GP』覇者ミルコがUFCに転向した中、PRIDEヘビー級王者、ヒョードルに手を出したのが、ボードッグ総帥のカルビン・エアー。

—エアー様は、本当に実在するのかどうか疑われてたけどね。

ケビン 実在するよ！ アメリカのメディアにも出ていたし。なんで、ムダにミステリーな存在にするんだよ！

—いまの日本は陰謀みたいに言えば、ジャーナリストを気どれるんだよ。しかし、昨年の前半は、ボードッグに勢いがあったね。

ケビン 確かに。ヒョードルを4月のロシア大会に参戦させた以外にも、アブダビ無差別級王者、ホジャー・グレイシーにとんでもないファイトマネーを支払っていたことが発覚したり、UFCとの契約で揉めていたブランドン・ベラを大金で引き抜こうと画策したり。それに、写真に写ったエアー様は、常に美女をはべらせていた。

—最後のは、全然関係ないだろ！ でも、その後、蜜月関係だったボードッグとレッドデビルが決裂したのは、ビッグニュースだったよ。

ケビン レッドデビルのワジム会長によると、共同開催したボードッグロシア大会で掲げられたレッドデビルのロゴがボードッグのロゴより小さかったことが決裂の原因らしい。

PROFILE

ケビン・マスク
USA cool宅急便米国本社勤務。本誌携帯サイト『kamipro Hand』で『USA cool宅急便モバイル』を担当。本誌にも、当連載のナビゲーター、スコット・ピータソンに代わって、たまに出没。日米の格闘技事情に精通している。

デューク東郷
USA cool宅急便日本支社勤務。かっとばしドライバーとして、ケビンをたまにミスリードしつつも、聞き手を務める。

USA2007 あんなことこんなこと

1月

■ミルコ、『UFC67』でのデビューが決定!!
06年末にUFC参戦が発表されたミルコだが、2.3『UFC67』でオクタゴンデビューが正式決定。このミルコの移籍をきっかけに、日本からの人材流出が危惧されるようになった。

■カルビン・エアーは実在した!!
オンライン・カジノを運営するボードッググループの総帥カルビン・エアーが日本のメディアに初登場!! 個人資産1150億円をもって、ヒョードルの参戦をブチ上げた。

2月

■エリートXCが旗揚げ!!
旗揚げ前から、時価総額160億円を誇ったエリートXCがミシシッピ州で第1回大会を開催。その後、M&Aを積極的に行ない、ハワイのKOTCや、イギリスのケージ・レージなどを次々と買収。韓国のスピリットMCに出資するなど、規模としてはUFCに次ぐ勢力となった。

■PRIDEの象徴、アメリカで敗北!
PRIDEの二大王者、ヴァンダレイ・シウバと五味隆典が華々しくアメリカデビュー!! しかし、ヴァンダレイはKO負け。五味は一本を取られるという結果に。

■フィッシュマンがPRIDE買収を表明
ラスベガスのカジノ界に強いパイプを持つ“アメリカのPRIDEの父”エド・フィッシュマンが突如、PRIDE買収を表明！ 当時、DSE側は実際にオファーはなかったと否定したが、その後もフィッシュマンは、「私に売っていれば、UFCと違って、PRIDEの日本事務所が閉鎖されることもなかった」などと発言し、未練を見せた。

UFC&PRIDE連合に対抗！ FEGとエリートXCらがアライアンス結成!?

――ウソつけ！　それは事実だけど、それだけじゃないだろう。物事を矮小化するなよ！

ケビン　そうだっけ？　あ、ワジム会長によると、なんでもボードッグは独自にロシアでビジネスをしようともしていたらしいね。

――ん～？　レッドデビル抜きでは興行ができないでしょう。

ケビン　いやいや、ビジネスといっても、そっちじゃない。本業のオンライン・カジノのほうなんだ。ロシア国内でテレビCMも開始。それに対してワジム会長は「彼らはロシアに進出するための足がかりに私たちを使っただけだ」と怒りをあらわにしたんだ。

――「藤波、俺はおまえのかませ犬じゃない！」と。

ケビン　なんのことだよ！　それにワジム会長によると、レッドデビルがロシア大会を実質的に運営していたのに、カルビン・エアーが、来場したプーチン大統領やジャン＝クロード・ヴァンダムらVIP勢に対して、ボードッグが大会を仕切っているような行動をとったらしく、さっきのロゴの件も含めて、不快だったらしい。「あんな不誠実な連中と二度と組むことはない!!」と話していた。

――またしても、話がスケールダウンするな（笑）。

ケビン　もっとも、ボードッグとの関係を切ったウラには、『M―1グローバル』の旗揚げも関連していただろうね。

底抜け★
USA 2007

プーチン大統領も来場!! ボードッグロシア大会にヒョードル参戦！

3月

■アントンがIFLで失脚！
アメリカ新興団体IFLの"国際大使"に任命され、監督としても東京サーベルズを率いていたアントニオ猪木が、いつの間にか、その職を解かれていたことが判明！　後任のケン・ヤスダコーチによると、チームの編成権を与えられていたアントンが、まったく運営を行なわなかったためとのこと。

■ランディが現役復帰
43歳（当時）の「"鉄人"ランディ・クートゥアーが現役復帰し、いきなりヘビー級王者、ティム・シルビアを撃破！　UFCデビュー戦を白星で飾ったミルコとのスーパーカード実現の機運が高まったのだが……。

■FEGがアライアンス結成！
PRIDEとUFCが資本統一会見を開いた3月27日、海の向こうでは、FEGがエリートXCと『Dynamite!! USA』発表会見を開催。約10万人のキャパシティを誇るメモリアム・コロシアムでの開催にファン、マスコミは驚いたが、大会同日は、主催者発表で"約"5万4000人の観衆が集まった。

4月

■プーチン大統領も観戦！ ボードッグ旗揚げ!!
カルビン・エアー様が語っていたとおり、PRIDEヘビー級王者、ヒョードルがボードッグに参戦！　さらにその会場には、ロシアのプーチン大統領、イタリアのベルルスコーニ前首相までもが招待された。ロシア格闘技界の実力を世界に示した。

■まさか！ ミルコ衝撃のKO負け
UFC2戦目を迎えたミルコが『UFC70』でガブリエル・ナパオン・ゴンザガと対戦。グラウンドでのヒジで追い込まれ、最後はハイキックでKO負けするという衝撃の決着となった。

■サップがまたしてもドタキャン!!
06年5月のK-1オランダ大会でバンデージを巻いたまま逃走したサップがついに復帰！　……するはずだった4.21『ケージ・レージ21』ロンドン大会。しかし、サップは主催者とK-1の急接近に危険を感じ、「オマエたちは俺を見捨てようとしている」というメッセージを残してドタキャン。

5月

■ダンヘンがオクタゴンに乱入!!
PRIDEミドル級&ウェルター級二冠王のダン・ヘンダーソンが5.26『UFC71』のメインイベント終了後に乱入！　新UFCライトヘビー級王者クイントン・"ランペイジ"・ジャクソンとの対戦が決定。その後、この闘いはいつの間にか"UFCとPRIDEの王座統一戦"となっていた。

■UFCvsボクシングは不発……
PRIDE買収後、拡大イケイケ路線のUFCがケーブルテレビ局HBOの契約獲得に向けて、プロボクシングとの対抗戦を企画。しかし、HBO社内でのUFC推進派だった同社代表がドメスティック・バイオレンスで逮捕され、失脚したこともあり、この話は立ち消えとなった。

—つまり、レッドデビルからすれば、ビジネスパートナーを変えただけとも言えるよね。

ケビン そう。『M-1グローバル』はニューヨークの店頭上場企業が親会社で、その資金力もバツグン。ボードッグが法規制によって、オンライン・カジノ事業で苦しむ中、冷静な判断をしたとも言えるね。とにかく、『M-1グローバル』は日本の団体との協力関係も含めて、今年のUFC追撃が楽しみだよ！

—ボードッグはもういいのかよ！

☆ひっくり返った谷川代表

ケビン 2007年のアメリカMMAシーンで日本から話題を最も提供したのは、なんといっても『Dynamite!! USA』。

—『ダナ・ホワイトをひっくり返らせる』とFEGの谷川さんは語っていたけど、ひっくり返ったのは日本のファンだよ。

ケビン そう。まず最初にひっくり返ったのは、『Dynamite!! USA』を開催するにあたって、発表したアライアンス！ 大会を共催したFEGとエリートXCが、ほかにもケージ・レージやストライク・フォースなどの名前を挙げて、連盟結成を高らかに宣言したんだけど、すぐさま各社が連盟入りを否定する声明を続々と発表したんだよ。

—なんで、事前交渉してなかったのかなぁ（笑）。

ケビン ボードッグは、「突然、航空券が送りつけられてきた」と困惑していたけどね（笑）。そうやって、連盟に味方をつけようとする一方で、ライバルとなるUFCには「ホイスと闘わせるから、マット・ヒューズを貸してくれ」とオファーしていたらしい。

—さすがサダハルンバ！

ケビン UFCがPPV販売記録を大幅に更新した同じカードを組んだときに、逆にホイスを貸し出したことを恩に着せたわけだけど、ダナは「ホイスの取り引きで、いくら払ってやったと思ってるんだ。〝借り〟があるのはFEGのほうだろう」とバッサリ拒否。返す刀で、「ジョーク団体と手を組むとはK-1も落ちぶれたもんだな」とまで言い放っていた。

—ダナの言葉には破壊力があるね。

ケビン で、もう一つひっくり返ったのは、メインイベントとして組まれたチェ・ホンマンvsブロック・レスナーの試合。ホンマンの脳に腫瘍が見つかったことで、アスレチック・コミッションから許可が下りずに、出場できなくなってしまった。

—谷川さんが「検査機器にホンマンの頭が入らなかった」と言っていたことで、ホンマン幻想が妙に高まったよね（笑）。

ケビン で、ホンマンが出られなくなったのを、アスレチック・コミッションと結託したUFCのしわざと考えたのかどうかはわからないけど、デニス・ロッドマンが開会セレモニーで「UFC、クソくらえ！」と挑発！ あわてた谷川さんが試合後の会見で謝ることになった。

—んあ〜！ 谷川さんもひっくり返りっぱなしだった、と（笑）。

☆〝ジョーク団体〟の実力

ケビン アメリカMMA新団体の台頭といえば、2月にエリートXCが旗揚げ戦を開催。ボクシング業界にいたゲーリー・ショウが率いるその運営会社、プロエリート社は旗揚げ前から株式を公開していたんだけど、なんと、その時価総額が約1億ドル以上あった。

6月

■チェ・ホンマンに脳腫瘍……!?

『Dynamite!! USA』のメインイベントに出るはずだったチェ・ホンマンの脳に腫瘍が発見され、出場停止に。麻生外務大臣や馳浩衆院議員までもが出場に向けて、カリフォルニア州知事のアーノルド・シュワルツェネッガーに働きかける事態に発展したが、結局、処分は覆らなかった。

■ロッドマンがダナにF●●k You!!

ホンマン欠場のピンチを救うべく、"悪童"デニス・ロッドマンが、『Dynamite!! USA』に登場。開会セレモニーでは突如マイクで「UFC、クソくらえ！」と挑発し、関係者をあわてさせた。将来的にMMAデビューするとも一部で報道されたロッドマンだが、その後参戦に関する動きは見られない。

7月

■ノゲイラがUFCデビュー!!

「PRIDEを愛しているが、自分の将来を考えなきゃいけない」と語り、UFC参戦を決めたノゲイラが7.7『UFC73』でヒーリングと対戦。デビュー戦を白星で飾った。

■ジョシュがブログでPRIDE離脱表明！

ノゲイラに続き、06年PRIDE躍進の立役者、ジョシュもPRIDE離脱を宣言。その後、UFCやエリートXC、ボードッグらと参戦交渉を行なったと報道されたが、いまだに総合の試合は行なっていない。

■ソクジュ、エリートXC移籍報道過熱！

"PRIDEの超新星"ソクジュにエリートXC、さらには同団体を経由しての『HERO'S』参戦のニュースが駆けめぐった。しかし、その話は実現せず、UFCと契約。

8月

■ヴァンダレイ、UFCとついに契約！

UFC参戦のタイミングを巡って、「逃げた！」「逃げていない！」などとお互いに挑発合戦を繰り広げていたヴァンダレイとダナがついに契約書にサイン。両者がサインを交わすシーンは、UFC公式ホームページを通じて世界中に動画配信された。

■「PRIDEはメチャクチャだ」！

米資本による買収後、一向に再開の兆しが見られなかったPRIDE。進まない地上波契約交渉に業を煮やしたのか、8.25『UFC74』の大会後、ダナは「PRIDEはメチャクチャだ。とても大会が開催される状態じゃない」などと、放送禁止用語を交えながら、報道陣にぶちまけた。

"悪童"ロッドマンがK-1参戦!!
ダナ・ホワイトに「F●●k you!!」

「PRIDEはメチャクチャだ！」2007年の暴言大賞はこの男に決まり！

——日本円にして、約115億円！　一度も大会を開いてなく、集客力も何もわからないのに、ムチャクチャな話だよね。

ケビン　当時はただ、「これからMMAブームが来そうだ！」というだけで株価がグングン上がってたからね。その現象は、エリートXCと同じく株式を公開していたIFLも同様。

——IFLは確か、都市別リーグ戦をやっていたところだよね。

ケビン　そう。そんな誰も気にしないようなリーグ戦をやっているような団体でさえも、株価は高騰していた。

——で、いまの株価はどうなの？

ケビン　それが、見事なまでに、両社とも相当に下がっている。プロエリートは他団体への買収攻勢を繰り返して、投資家へその活動をアピールして資金を集めたはいいけど、利益は上がらず、株価はじわじわと下がっている。一方のIFLは去年の前半だけで15億円もの損失を出してかなりヤバい状態。一時は15ドルあった株価がその30分の1にまで下がっているからね。

——それって、ほとんど倒産寸前なんじゃないの（笑）。ダナが常日頃から、〝ジョーク団体〟とけなしていたとおり、実態がなかったわけだ。

ケビン　IFLでは、責任をとって、トップも交代したしね。

——ところで、IFLでは我らがアントンが〝国際大使〟を務めていたけど、どうなったの？

ケビン　そんな話もあったねぇ（笑）。イノキは監督として、東京サーベルズを率いていたけど、まったくチームを運営してなかったことで解任された。

——さすが、アントン。「じつはIFLなんてやりたくない」なんて日本では発言していたけど、ホントに触ってねえんです、という状態だったわけだ（笑）。

☆クレイジーホースが復活！

ケビン　一昨年フロリダ州で誘拐、監禁、暴行容疑で逮捕されていたチャールズ・〝クレイジーホース〟・ベネットが、いつの間にか出所して、エリートXCの旗揚げ戦に出場していたんだ！

——確か、保釈金は65万ドル（＝約7500万円）という、とんでもない金額が設定されているという報道だったから、当分、彼の姿を見ることはないと思っていたけど。

ケビン　ひさしぶりにファンの前に姿を現わすことができたクレイジーホースだけど、じつは事件の被害者で、告訴したのは彼の元ガールフレンドだった。

——DV（ドメスティック・バイオレンス）ってやつだ！

ケビン　だから、〝身内のトラブル〟ということで、実際の保釈金は3000ドル。プラス、罰金を加えて合計4500ドル（＝約52万円）を支払っただけで済んだらしい。

——よかったんだか、悪かったんだか。

ケビン　でも、ベネットは「彼女に尽くそうとしていたのに、彼女がオレにした仕打ち（＝告訴）はひどいものだった。オレをトラブルに巻き込みやがって」なんて発言していて、反省の色をまったく見せていない様子。

——バカは死んでも治らない、と（笑）。

ケビン　逮捕といえば、熱血筋肉3兄弟のフィル・バローニもフロリダで逮捕されたんだ。

——まったく、どいつもこいつも！

ケビン　でも、ベネットのケースとは違う。バローニはレストランでガールフレンドと食事をしたあと、駐車場で地元のチンピラに絡まれたんだ。

——バローニみたいな、ムキムキの男に絡むヤツも凄いけどね。

ケビン　バローニはガールフレンドにちょっかいを出そうとしたチンピラたちをぶっ飛ばした。で、そのまま勢い余って、駆けつけた警官ともトラブルになって、警察の留置所で過ごすことになってしまった。

——さすが、熱血番長。ムダに熱いね（笑）。それで、こういったことが再発しないようにコンプライアンス

底抜け★ USA 2007

9月

■ショーグンまさかの敗戦！
“PRIDEミドル級GP覇者”の肩書きを持ち、世界中のランキングで93キロ級最強を謳われたショーグンが、UFCデビュー戦でまさかの黒星。9.22『UFC76』大会後の会見でダナは「見たか!? UFCこそナンバーワンだ」と吠え続けた。

■中村カズにマリファナ陽性反応
『UFC76』でのショーグン敗戦のショックに落ち込むPRIDEファンに追い打ちをかけるように、同大会で中村カズから大麻の陽性反応が検出。カズが所属するジェイロックは「脳内に出血があるとも言われたが、日本で検査したところ、出血はなかった。今回の検査も間違いではないか」と反論。

■PLAYBOYマンションでMMAイベント
米『PLAYBOY』誌オーナー、ヒュー・ヘフナー所有の有名なマンションで、ストライク・フォースがMMA初となるイベントを開催！　会場には、大会実現に向けて活躍したと言われるエド・フィッシュマンも来場しており、そのセレブ人脈を見せつけることとなった。

10月

■“IT長者”マーク・キューバンがMMA進出！
“オンライン・カジノ長者”カルビン・エアーをもしのぐ資産を持つ“IT長者”マーク・キューバンが『HDNetファイト』を旗揚げ！　自身が経営するHDNet局の有力コンテンツとして、今後もMMAシーンに投資していく姿勢を見せた。

■皇帝獲得！『M-1グローバル』発進!!
莫大な契約金を含むUFCからのオファーを蹴ったヒョードルが選んだ先は、新団体『M-1グローバル』！　また旗揚げ会見には、ヒョードルと並び、CEOに就任した名ブッカー、モンテ・コックスも登場。選手供給のパイプも示し、UFCへの対抗勢力たりえることアピールした。

■ランディ、UFCを電撃離脱！
UFCでの待遇に不満を示したランディがベルトを保持したまま電撃離脱！　当初は映画への出演や、ジム経営、サプリメント・ビジネスに集中するという姿勢を見せていたが、その後『M-1グローバル』への参戦が濃厚となった。

説明会が開かれたわけだ。

ケビン　それは、FEGの話だろ！　アマダ（天田ヒロミ）の暴行事件の余波を受けたのは。

――ファイターの皆さん、くれぐれもムチャしないように！

☆止まらないステロイド禍

ケビン　去年はステロイドを巡るトラブルが多かった。一番ショッキングだったのは、『Dynamite!! USA』で桜庭に勝ったホイス・グレイシーにその陽性反応があったこと。

――とてもステロイドを使用している身体には見えないけどね（笑）。

ケビン　もちろん、ホイスは使用を否定したんだけど、家族とバカンスに出かけることを優先。抗議せずに罰金3000ドル（＝約35万円）と1年間の出場停止処分を受け入れたんだ。

――身の潔白よりもバカンス優先！（笑）。確かに、どうせ1年ぐらいは試合をしないんだろうけど、それ印象悪いよ！

ケビン　でもアスレチック・コミッションの裁定を覆すために抗議するのは大変な労力とコストがかかるんだ。ホイスも「無実を主張するためには、弁護士も雇わないといけないし、検査の専門家も雇わないといけない。そうなると1万ドル（＝約115万円）はかかる。罰金を払ったほうが安い」とまで話している。

――35万円の罰金で済むなら、それでいいってことか。大物なのか？　ケチなのか？　よくわからなくなってくるよ（笑）。

ケビン　でも実際に、ステロイド疑惑でコミッションと争ったファイターたちは、あまりいい思いをしていない。去年はフィル・バローニやUFCライト級王者のショーン・シャークが公聴会で争ったけど、結局、判決が覆されることはなく、出場停止期間が短くなっただけだった。

――グレー決着に持ちこんでも、痛みは同じということか。

ケビン　シャークはその間に試合ができなかったり、スポンサーが離れたりして、50万ドル（＝約5750万円）を失ったと話しているし、バローニは訴訟費用だけで2万ドル（＝約230万円）もかかったらしい。

――泣く子とアスレチック・コミッションには勝てないというわけね。

☆MMAファイターに薬物汚染!?

ケビン　去年はステロイド問題も大きく騒がれたけど、薬物問題も大きな注目を集めたね。

――日本人となじみのあるところでいえば、2月の『PRIDE33』で五味隆典と闘ったニック・ディアスがマリファナの使用により、アスレチック・コミッションにその勝利を無効にされてたよね。

ケビン　ディアスは、そのワルなキャラクターもあって、まったくアメリカのファンはなんら動揺しなかったけど（笑）。

――チェックが厳しいと言われてるアメリカで、そんなことしなきゃいいだけなのに（笑）。

ケビン　ところが、その後も薬物事件はボロボロ出てくる。4月の『UFN』でメインを務めたメルビン・ギラードが薬物使用疑惑でアスレチック・コミッションから8ヵ月間の出場停止処分を受けて、2100ドル（＝約24万円）の罰金を科せられた。

――ギラードは何を使用したのさ？

ケビン　アスレチック・コミッションの公聴会に出席したギラードの証言によると、大会6日前の3月31日に友だちとパーティを開催。そのとき、友だちの誘いに応じてコカインを吸引した。

――試合前に何をやってんだか！（笑）。

ケビン　そのせいかどうか、ギラードはジョー・スティーブンソンと対戦して、1ラウンドで秒殺負け。

――ま、あんまりいい影響はないよね（笑）。そんなことより、日本人にとってショックだったのは、9月の『UFC76』で中村カズから大麻の陽性反応が出たことだよ!!

ケビン　まぁ、べつにいいじゃん。ペナルティも「3ヵ月間の出場停止プラス500ドル（＝約6万円）の罰金」と実質的にはないと言っていいぐらい軽い。なんで当時、日本のメディアが大騒ぎしていたのかわからないよ！

――騒ぐだろ、普通に！　アメリカでは大麻が合法の地域もあるし、マサさんも遠征時に吸ってたらしいけど、日本ではけっこうな問題になるの!!　カズはブログで「吸っていません!!」と抗議してたけど。

ケビン　でも実際にアスレチック・コミッションに処分不服の申し立てをしなかったから、そのまま、ペナルティが確定したよ。名誉のためだけに何百万円もかけて、弁護士をつけて争うわけにいかないから、しょうがないだろうけど。

――でも、“ピュア・ホワイト”を唱える安田会長のためにも、その無実の罪を晴らしてほしいけどなぁ。

☆エド・フィッシュマンの暗躍

――“アメリカのPRIDEの父”エド・フィッシュマンもずいぶん話題を振りまいたよね。

ケビン　DSEのアメリカでのパートナーだったエドが2月に“PRIDE買収”を表明したことが発端。

――DSE側は「フィッシュマンからそ

11月

■ロレンゾが異例の記者会見

ランディにギャランティの支払いシステムを暴露されたことで、対応に追われることになったUFC。普段は表に出てこないオーナーのロレンゾ・フェティータまでもが会計責任者を連れて会見を開催。小切手や帳簿までをも公開して、「ボーナスをもらっていない」というランディに反論。この捨て身の作戦により、UFC側は「ランディは搾取されていた」というイメージを覆し、広報合戦を有利に進めることに。

■ヒョードルが大晦日参戦を表明！

『M-1グローバル』と契約したヒョードルだが、突如、ロシアM-1の公式ホームページで、大晦日に日本で闘うことを表明。日本のファンが大喜びする中、内部で調整がついてなかった『M-1グローバル』側は大あわてすることとなった。

■郷野、長南がUFCデビュー！

11.7『UFC78』に二人の日本人PRIDEファイターが参戦！　DJ GOZMAで入場して観客をドン引きさせた郷野だが、試合では見事に一本勝ち。一方、長南は強豪カロ・パリジャン相手に敗北。明暗を分けることとなった。

12月

■ジョシュがフィリピンに飛来！

“PRIDE離脱”後、闘う場所を求めてさまよっていたジョシュが、いつの間にかフィリピンの大会でコーチとしてチームを率いている事実が発覚。同大会をプロモーションする「Platinum FC」はマカオやラスベガスなどでの世界ツアーを計画していることも判明。

■ランペイジが『TUF』のコーチに就任！

ダンヘンとの“王座統一選戦”を制したものの、拳を負傷したランペイジが『TUF』のコーチに就任することに。同時に、次戦ではショーグンを倒したフォレスト・グリフィンとのコーチ対決が決定した。

■ハイアンが変死……

強盗罪で逮捕されたハイアン・グレイシーが独居房の中で変死。ブラジルの警察当局は、マリファナとコカインの薬物反応があったことを明かしたが、死因については、調査中とした。

MMA史上初! PLAYBOYマンションでストライク・フォースがイベント開催!

んなオファーは受けていない」と否定していたけど。

ケビン　その後、結局、PRIDEがUFCに買収されるとエドは自分が買えなかったことを残念がるとともに、PRIDEの顧問契約を結んでいたことを持ち出し、契約不履行でDSEを訴えたんだ。

――その裁判はどうなったの?

ケビン　フィッシュマンが言うには、最終的に、彼の言い分が認められて和解したらしい。

――じゃあ、真相はわからない、と。

ケビン　ただ、フィッシュマンがPRIDEのような団体を作ろうと、あちこちで動いているのは事実。ストライク・フォースがPLAYBOYマンションで大会を開催したときには、そのあいだを取り持ったとも言われているし、ジョシュ・バーネットのスポンサー的な動きもしているようだ。それに今年の2月にはマカオでイベントを立ち上げるらしい。

――あと『HERO'S』を買収したいとかも言ってるね。(笑)。

ケビン　確かに。でもパンクラスからエドに身売り話があったことは本当らしいよ。エドがマスコミに話して、それが携帯サイト『kamipro Hand』に載っているから、団体側はビックリしたらしいけど。

――ウチ的には逸材なので、おもしろいから放っておこう(笑)。

☆UFCクライシス

ケビン　2007年最大のアメリカのニュースは、ランディ・クートゥアーがUFCへの不満をブチまけて、ヘビー級のベルトを持ったまま電撃退団したことだね。

――捨てゼリフも凄かったね。「あの世で反省会をやろう!」と。

ケビン　なんのことを言ってるんだよ!とにかく、ランディは「UFCを11年間も支えて、尽くしてきた私に対して、リスペクトが感じられなかった」とダナを批判する発言を繰り返したんだ。

――〝UFC一のジェントルマン〟として信頼の厚いランディだけに、UFCのダメージは大きかった、と。

ケビン　さらにUFCにとって痛かったのは、ランディが会見で「試合後のロッカールームでボーナスとしてチェックが支払われているが、それはUFCの裁量によるもので、ちゃんとした契約書もない」なんてことを話したこと。

――不透明な経理があると、UFCそして、規制の厳しいカジノを運営している、オーナーのロレンゾ・フェティータとしてはまずいよね。

ケビン　UFCもその対応をせざるをえなくなり、ダナに加えて、ロレンゾや会計責任者まで会見に出席して、PPVボーナスの仕組みをマスコミに公開することになったんだ。

――ファイトマネーの総額を明かさないことで、ほかのプロモーションに選手を引き抜かれないようにしたり、〝入札合戦〟に陥らないようにしてきたUFCには大きなダメージだね。

UFCスキャンダル勃発!! ランディの内部告発でロレンゾに危機!

ケビン　長引く争いを避けて、和解に向けて動いたUFCは試合をオファーしたんだけど、ランディは「もう引退した。試合をする気はない」とあっさり拒否。でも、ヒョードルを擁する『M-1グローバル』に近い『HDnet』に出演して、「UFCとの契約が終われば、ヒョードルと闘う」とまで話したんだ。

――「世界最強」とたたえつつ、参戦交渉をしていたヒョードルが踵を返したときは、「ベスト5にも入らない」なんて発言したダナだけど、今度はなんて言うのか(笑)。今年もファンを楽しませてくれることを願います!

底抜け★USA 2007

目指すはウェルター級王者！　オクタゴンでやれんのか!?

UFC至上主義対談

郷野聡寛×長南 亮

知る人ぞ知る郷野の“ファミレス事件”の真相が明らかに!!

11.17『UFC78』で揃ってオクタゴンデビューをはたした郷野聡寛と長南亮。『武士道』のリングを主戦場にしていた二人が、PRIDE消滅後に選んだのはUFCだった。“DJ GOZMA”と“殺戮ピラニア”、見た目は真逆のイメージが強いが、じつは共通点もかなりあるのだ。そんな二人にUFC話はもちろん、知る人ぞ知る郷野の“ファミレス事件”の真相から、長南夫人と郷野の意外な関係まで大放出だーッ!!

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／吉場正和　試合写真／Josh Hedges（UFC）

——エ〜、今回は先日の『UFC78』でオクタゴンデビューをはたした、お二人の対談ということで、よろしくお願いします!

長南＆郷野　よろしくお願いします。

——郷野選手は一本勝ち、長南選手は敗れてしまいましたが、お子さんが誕生ということで、お祝いの意味も込め、郷野さん指定のしゃぶしゃぶ屋からお届けします。

郷野　『kamipro』さん、予算は大丈夫なんですか?

——はい、なんとか……というか、郷野さんは一本勝ち賞で600万円近い大金を手にしたとうかがいましたので。

郷野　…………（無言）。

長南　（郷野に向かって）今日はご馳走になります!（ニッコリ）。

郷野　オイ、ちょっと待ってくれよ（笑）。そういうこと言われると思って、あんまり人には言わないでいたんだけど。

長南　あちこちで書かれてましたし、バレバレですけどね（笑）。

——長南さんは大会前に無事、女の子が生まれたそうで。確か、美彩（みさ）ちゃんでしたっけ?

長南　そうッス。11月1日に生まれました。予定日は試合後だったんですけど、予定より、だいぶ先に生まれちゃって。

郷野　大会前にビザの申請に行ったら偶然、長南と同じ日で、そのときに「子どもが生まれました」って聞いて。年下が父親になったんだって思って、ちょっと複雑な心境でしたけどね（苦笑）。

——年齢的には郷野さんが二つ上で、プロ格闘家としては、だいぶ先輩になるわけですよね?

長南　もう全然先輩ですね。

郷野　だから（桜井）マッハが長南に倒されたときは、けっこう衝撃でしたね。新しく出てきた選手に俺らの仲間がやられた的な。マッハは僕と同期なんで。

長南　俺は総合を始めたのが23歳で、普通に（U−FILE CAMPに）入会して始めてるんで。スタートはかなり遅かったですから。

郷野　じゃあ、最初に俺を認識したのがどのへんだか興味あるなぁ。

長南　修斗の試合とか普通に観てましたよ。須田（匡昇）選手との試合とか、ガイジンとやってるのとか。あとパンクラス時代も会場で観てるし。かなり観てますよ。

郷野　俺が長南を認識したのは、一番最初はウチの（石川）英司と試合したときかな。そこで初めて知りましたね。俺からしたら出始めの若い選手で、ウチの英司とやってるレベルの選手って感じだったけど、気がついたら、いまやGRABAKA以外で一番接点が多い選手になってて。一番身近な選手になってきてますね。

——長南さんは最初はU−FILE所属でしたけど、U−FILE的には、ちょっと異質なタイプでしたからね。

郷野　やっぱり田村（潔司）さんとはソリが合わなかった?

長南　まあ……そういう部分もありますね、先日のカード発表からいってもまったく合わないですね（キッパリ）。

郷野　まったく合わなかったんだ（笑）。

長南　はい。でも、ああやって目立っちゃうのがちょっと悔しいですよね。大きい相手に向かっていく田村さんは凄いと感じてたけど、リングスの階級問題に苦言してて、ルールや階級も整備されたいま、何キロ軽い選手とやるんだって話じゃないですか。自分らがやってることと、あまりにもかけ離れてて。やっぱり離れてよかったんじゃないですか（笑）。

郷野　大丈夫ですか、『kamipro』さん?（笑）。

入場シーンを全カットしたのは、唯一、UFC、グッジョブですよ（笑）（郷野）

——話題を変えます（笑）。いま格闘技界は大連立だとか、いろいろ動きがある中で、お二人が選んだのはUFCだったわけですが、実際に試合をしてみていかがでした？

郷野　自分はUFCを選んでよかったと思いますね。アメリカでけっこうモテましたから（笑）。

——決め手はそこですか（笑）。

郷野　相手は看護婦とかなんですけどね（笑）。なんか向こうは、いい身体してる人が好かれるみたいで。病院でも黒人の看護婦さんが……まあ、おばさんですけどね。ウチの母とたいして変わらないような方に「スイートボーイ」とか言われたし（笑）。

——ダハハハ！　ジャパニーズ・センセーションならぬスイートボーイ（笑）。

郷野　あとレストランのウェートレスにも……それも黒人の50歳ぐらいのおばさんなんですけど、ポストカードをもらって。そこに「LOVE」って書いてありました。ヘタクソなハートマークと一緒に（笑）。

——じゃあ、UFC参戦を決めたのは間違いじゃなかった、と（笑）。

郷野　う〜ん、そこの部分に関しては、ちょっと微妙ですけどね（笑）。

——しかし、残念ながらDJ GOZMAの入場パフォーマンスはUFCではドン引きだったみたいで。

郷野　いや、考えてみたら、ドン引きとか以前の問題でしたね。まったく認識がされてなかったっていうか。

——ドン引き以前の問題でしたか（笑）。

Akihiro Gouno

郷野　ドン引きっていうのは、盛り上がった感情が下がってくことじゃないですか。その感情まで達してなかったような気がしますね。行く前に、わざわざUFCに問い合わせたんですよ。「第一試合だったら、まだ客入ってないですよね。だったら俺、パフォーマンスはやらないでいいかなと思うんだけど」って。そしたら「一試合目から客はけっこう入ってるし、盛り上がると思うから、気にしなくて大丈夫じゃない？」みたいな返事がきたんですよ。それでやろうと思って、いざ出てったら会場はスカスカなわけですよ（笑）。

——もう、あとには引けないですもんね。

郷野　そう。で、トラブルで音楽も途中まで流れなくて、中途半端なところで曲の盛り上がりがきちゃって。それがちょうど通路の角のところで、俺はどっち向いて踊ればいいんだって（笑）。もう、あらゆる負の連鎖が起きましたね。

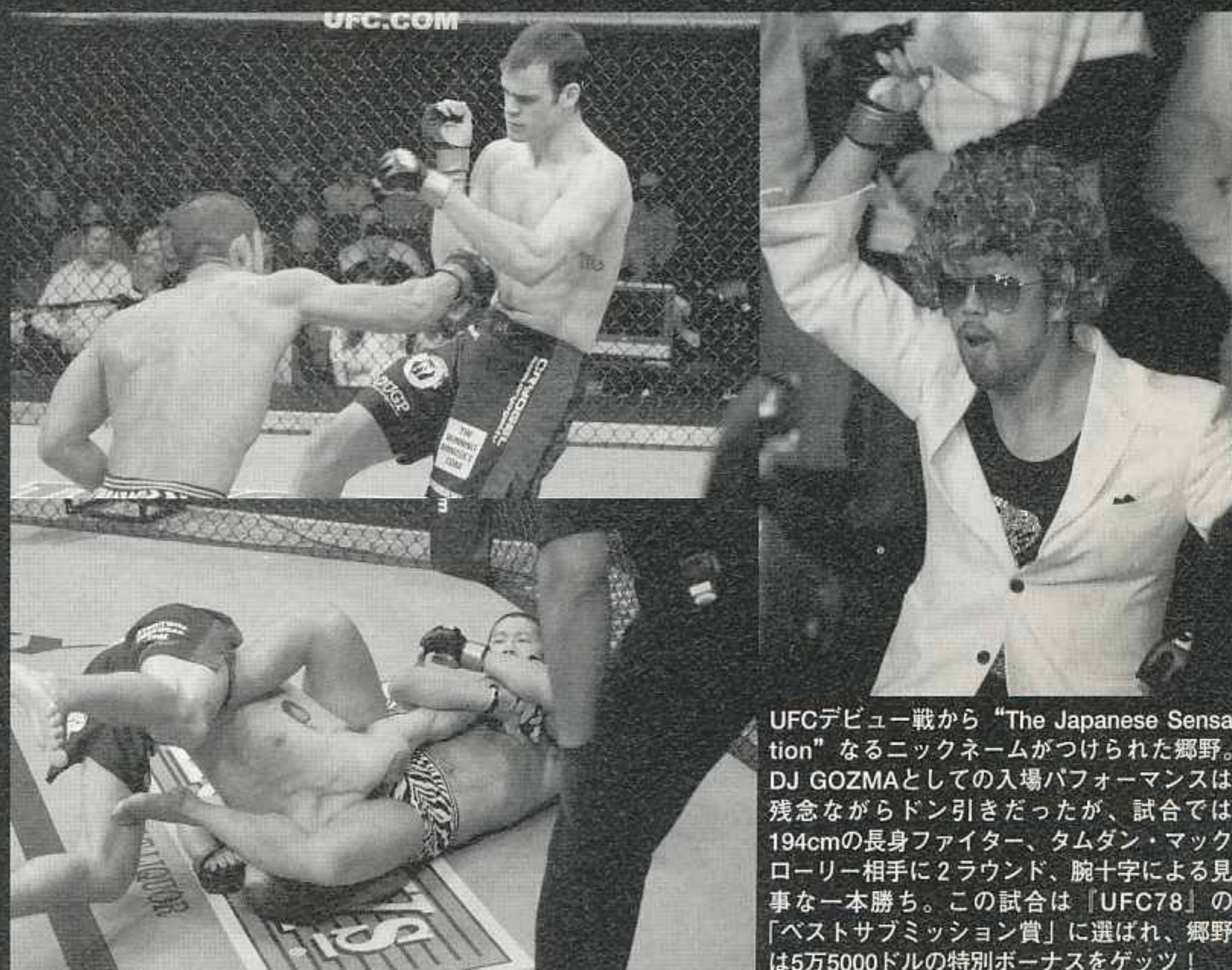
——日本ではUFCは簡単には観られない状況ですけども、PPVでも入場シーンはカットされてたみたいですからね。

郷野　今回は入場に限らず、いろいろ勝手が違って苦労したんですけど、入場シーンを全カットしていただいたところだけは、唯一、UFC、グッジョブですよ！（笑）。

——そこだけは（笑）。今回がお二人にとってのUFCデビュー戦だったわけですけど、過去にUFCミドル級王者のアンデウソン・シウバに一本勝ちしているのもあって、試合順も含め長南さんのほうが評価が高かったみたいですね。

長南　でも自分は代役だったんですよ。最初は自分の相手のパリジャンはヘクター・ロンバートとやる予定で、自分はチアゴ・アルベスっていう、また強いヤツがいるんですけど、そいつとやる予定だったんです。それがヘクターがビザの関係で出られなくなって俺に回ってきただけで。結局、俺はやられ役要員だったんですよ（苦笑）。

——やられ役だったんですか。

長南　ポスターとか見ても、メイン級の選手の中で俺一人だけ写真がなかったし。結局は会場の雰囲気とか、話とかしてる中で

UFCデビュー戦から"The Japanese Sensation"なるニックネームがつけられた郷野。DJ GOZMAとしての入場パフォーマンスは残念ながらドン引きだったが、試合では194cmの長身ファイター、タムダン・マックローリー相手に2ラウンド、腕十字による見事な一本勝ち。この試合は『UFC78』の「ベストサブミッション賞」に選ばれ、郷野は5万5000ドルの特別ボーナスをゲッツ！

今回のUFCデビュー戦は結局、俺はやられ役要員だったんですよ(苦笑)(長南)

感じたのは、「わけわかんない日本人を倒せ！」みたいな空気でしたね。

郷野 そういう空気は感じたよね。

長南 小谷（直之）とかに聞いたら、日本人とかアウェイの選手はけっこうやられるみたいなんで。勝ってほしいほうと負けてほしいほうの扱いは全然違うらしくて。

郷野 俺にも負けてほしかったのかなあ？　おかしいなあ。俺、「入場が非常に気に入られてるから呼ばれた」って聞いてたけど（笑）。で、長南がいきなり強豪なのに、俺は無名の若手だったんで「もしかして、とりあえず俺をお披露目して、俺をスターにしてくれるのかな」って、そんな淡い期待を一瞬抱いたら、そんなことはない。普通に第一試合で、誰も試合観てない感じだったし。言われてみれば確かに俺も負けてほしい側の選手だったかもしれない。

――まあ、いまのUFCに出てる選手で弱い選手はいないんでしょうけどね。

長南 今回の相手は周りからも「強い、強い」って言われてましたけど、実際に闘ってみたら、あんまり強いとは思わなかったですからね。負けといてあれですけど（苦笑）、手応えはつかんだんで、次はしっかり結果を残そうと思います。

郷野 まあでも、UFCを選んだあとで、『やれんのか！』の開催が決まったりとかあったけど、あっちがうらやましいとか、待ってればよかったっていうのは、正直まったく思わなかったですね。そういう意味ではUFCを選んで正解だったなって。

Ryo Chonan

長南 それは自分も一緒ですね。『やれんのか！』は大成功してほしいけど。

郷野 そう考えると、なんかおかしなことをやってやろうとは思ってるけど、軸はやっぱり競技寄りなんだよな、俺は。エンターテインメントより競技寄りっていうか、そこは確認できた。そう考えると勝てば上がっていける道筋もあって、メンツも凄いし、やりがいはUFCが一番あるなって。

長南 地上波がつくとか、テレビがどうしたっていうのは、みんな日本だけの話じゃないですか。アメリカのMMAの権威と日本のMMAの権威っていうのは、いまはアメリカのほうが全然上ですからね。一般のアメリカ人にUFCに出たとか、出るとか言えば「凄い」とリスペクトしてくれますね。逆に日本では試合終わって帰ったばかりなのに、「最近、試合してないですね」みたいなことを言われるんですよ。

郷野 それはあるよね（笑）。

長南 日本で有名になりたいって考えの人もいるとは思うんですけど、でも俺はUFCで頑張るからって感じなんで。返ってくるものはあっちのほうが大きいし、凄いやりがいを感じてるし。自分は日本で目立ちたいっていうのは、ちょっと違うんじゃないかな、と。

郷野 俺は目立ちたいけどね（笑）。でもどっちか選べっていうときは競技を取るっていうか、そこは長南と考えが近いのかなって。表面的には見た目は全然違うけど、軸の部分がやっぱり近いなっていうのは感じるよね。古い話だけど、岡見（勇信）が『武士道』のトーナメントに出たら優勝できるとか言ったときに、一番最初にそれに噛みついたのが長南だったんで。

――ああ、ありましたね。確か『GONKAKU』の岡見さんのインタビューでの発言に長南さんが噛みついたっていう。

郷野 あれもよく言ってくれたって思ったし。競技者としての感性が近いなっていうのは凄い感じてましたね。アメリカでも長南が知り合いの整体師の先生に、俺のことも診てやってくださいみたいに言ってくれて、試合の前にお世話になって凄い助かったし。今後もそういうふうに協力できると

長南のUFCデビュー戦の相手は柔道出身のUFC常連の強豪ファイターのカロ・パリジャン。長南は蹴り足を取られ何度かテイクダウンを許したり、パンチをもらうシーンもあったが、「あんなにマットが滑るとは思わなかったです。負けといてあれですけど（笑）、パンチも『軽っ！』って思ったし、金網の闘い方はできてたと思うんで、次は自分の持ち味を出した上で結果も残します」と宣言した長南。次戦に期待だ！

ころはしていこうと思うし、いろんなことがあるたびに距離が近づく感じだね。
――昔はウチの雑誌で現・長南夫人の臼杵（彩子・元DSE広報）さんと郷野さんの対談を企画したこともあったんですけどね（笑）。臼杵さんが好きなタイプとして「ヒゲで坊主で、選手だったら郷野さん」って言ってたことがきっかけで。
郷野　ありましたねぇ。いや〜、でも裏で長南と付き合ってるとは考えたこともなくて。もしその対談をやってたら、あとで「アイツ、なんも知らねえよ」的に思われたんだろうなぁ（笑）。
長南　郷野さんのファンだっていうのは、初めてウチの嫁と飯食ったときに言ってたんですよ。それで付き合うようになってから対談の話があるって聞いたんですけど、彼女は広報としての立場で「郷野さんと対談の話がきた」って、ちょっと浮かれてたんですよ（苦笑）。
――それは複雑な感じですよね（笑）。
長南　その頃はもう結婚の話もしてたんで、「おまえ、いま郷野さんと対談して来年、長南と結婚って流れ的におかしいだろ」って言ったんですけど、そしたら「私が度量のちっちゃい広報だと思われるのが嫌だ」とか言いだして（笑）。
郷野　裏でそんなことがあったんだ（笑）。
長南　俺がそういうことを言ったら「まあ、近々『武士道』の大会があるわけじゃないし」って言って。それでまあ、翌年結婚するっていうのもあったんでNG出したみたいなんですけどね。決定的に自分のほうから「やめろ」とは言ってないです。
郷野　でも、一番度量の小さかったのは、あとで長南が臼杵さんと結婚するって聞いて誰よりもビックリした俺ですよ（笑）。何も知らない俺が対談やってたら、また失礼なことしてたかもしれないし。いま考えると、プロらしい判断だったと思いますね。
長南　自分もそうなんですけど、嫁も郷野さんの火薬庫的なキャラ時代のほうがいいって言ってましたね。いまの余裕感のある郷野さんより、ジャージの郷野さん時代のほうがタイプだったらしいですね。そこらへん、夫婦で似てるのかなって（笑）。
郷野　そこで仲のよさをアピールされてもねぇ……。
長南　いやいや（笑）。
郷野　なんか俺、そういうのが多いんですよ。ちょっといいかなとか思ってる人が、じつは自分と近い人とすでにでき上がってて、あとで知らされて一生懸命、余裕の態度をとってる自分が小さいなぁって……。
――まあ、女性関係はともかく、かつて某格闘技雑誌で「ファミレスで値段を気にしないで注文できるようになりたい」っていう郷野さんの有名な発言がありましたけど、その夢はかなったんじゃないですか（笑）。
郷野　あ〜〜〜〜！（と突然頭を抱える）。
長南　どうしたんですか、突然（笑）。
郷野　いや、今日はそれをネタにしようと思ったんですよ。あれはね、もちろんしっかりした記事を書かれる記者の方もいっぱいいらっしゃると思うんですけど、僕が言いたいのは格闘技の記者の力量のなさ！
――ん？　なんか思わぬ方向に話が進んでいるような気もしますが？
郷野　あの〝ファミレス事件〟もですね……。
長南　あ、事件だったんですか（笑）。
郷野　俺にとっては大事件だよ！　あの頃は、まだ原稿チェックをするって概念が俺自身になくて。インタビューを受けたら、次は発売日にその本を見て内容を知るっていうのがあたりまえで。それで、〝ファミレス事件〟のときは、ホント驚愕でしたよ。

誰が、「ファミレスで値段気にしないで食べるのが夢」なんて言いますか！（郷野）

――言ってないことが載ったりとか？
郷野　言ってないですよ！　だいたい、誰が「ファミレスで値段気にしないで食べるのが夢だ」なんて言いますか！
長南　確かに夢はないですよね（笑）。
郷野　その記者は、俺が何回言っても俺の名前の漢字を間違えるんですよ。「郷野聡寛」の「寛」をずっと「覚」って書いてて。
長南　どことは言いませんけど、専門誌でも試合レポートとかどうしようもないところが多いですからね。出してる技が間違ってるとか、そういうのは凄く多いんで。
――ウチというか、ボクはそういうのが怖いんで、なるべく詳しい試合展開とかはスルーするようにしてるというか……。
長南　でも、そこらへん、『ｋａｍｉｐｒｏ』は試合の空気は読んでるし、細かいことは書かないじゃないですか。
――まあ、ウチは競技よりも人間自体に興味があるので（笑）。
郷野　まあでも、いまでもこうやってほじくり返されることがあるわけじゃないですか。やっぱりね、俺らも負けたら言い訳は

12.12 DEEP後楽園大会のリングに佐伯繁代表とともに上がった長南はUFCに専念するため、保持していたDEEPミドル級王座の返上を発表。これに伴ない新王者が来年2月からの8人トーナメントで争われることとなり、出場選手として桜井隆多、白井祐矢、福田力、中西裕一、松井大二郎、石川英司の6選手が発表となった。

こちらが11月1日に誕生した長南家の長女、美彩（みさ）ちゃんだ。ご存知の方も多いと思うが、長南夫人はPRIDE広報やハッスルのPRも務めた臼杵彩子さんです。

自分もファミレスで値段を気にせず注文できるようになりたいです（笑）（長南）

許されないわけじゃないですか？　媒体もね、誤字脱字すら許されないと思うんですよ。それに人の名前を間違えるっていうのは一番失礼！　しかも「ファミレスで値段を気にしないで食べるのが夢だ」なんて……、もうイメージダウン甚だしいよ！

長南　でも、夢がかなったんじゃないですか？　グフフ（笑）。

郷野　コノヤロー！（突如、長南にヘッドロック）。

——ぶり返すつもりはありませんが、それに近いような発言をしてたりとかは？

郷野　ぶり返してんじゃん！（笑）。弁明させていただくと、畑山（隆則・元WBA世界スーパーフェザー&ライト級王者）が当時「そんなに俺は贅沢したいとは思わない。ファミレスで値段気にして注文するような生活は嫌だけど、そうじゃなくて普通に好きなものを食べれるぐらいの生活ができればいい」っていうことを言ったわけですよ。「俺もそんな感じです」って言ったら……。

——それが、自分の発言のように書かれていた、と。

郷野　そうそう。もう大損害ですよ！

——ちなみにマスコミとして、ギャグとか言ってスベったときに突っ込むのは問題ないんでしょうか？（笑）。

郷野　それは問題ないです。そこは、どんどん言ってくれ、と（笑）。

——了解しました。では最後に、お二人の今後の目標を聞かせてください！

郷野　やっぱ、やるからにはチャンピオンになりたいですね。

長南　次の相手の（ジョン・）フィッチは現時点で、この階級の最強だと思いますよ。

郷野　俺もそう思う（笑）。マット・ヒューズとかよりもイヤだよね。デカいし。

長南　穴があんまりないんですよね、スタンドもできるしテイクダウンもできるし。

郷野　2戦目にして大ピンチですね。勝って副賞もらっていい気になってたら、そんな相手をぶつけられて……。

長南　でも、勝ったらベルトは圏内だと思いますよ。出る杭は打つ的なカードかもわかんないですけど、そういうのに勝っていったのがアンデウソンですから。強いヤツをバンバン当てられて結果出していって。

——いまやミドル級のチャンピオンですからね。長南さんは、ゆくゆくは郷野さんとUFCのオクタゴンで直接闘えるようになりたいって言われてましたよね。

長南　そうですね。アメリカ人たちに日本人の強さを見せたいですね。「あの日本人とこの日本人、どっちが強いんだ？」っていうところまで持ってかないと。

郷野　向こうで「あの二人が闘ったらどうなるんだ？」って思わせることができたら凄いと思うよ。そういう意味では、至れり尽くせりの日本でやるよりも、うまくいかない海外でやったほうが人間としても男としても幅が出ると思うんでね。向こうではうまくいくことなんて1個もないと思って行ったんで、いくら試合前のメディカルチェックに行くのに道に迷って3～4時間かかろうが、「スゲェなあ」ぐらいでデーンと悠然と構えてられたんで。「あ、俺、けっこう成長したな」って思ったし。

長南　俺はそのとき即行寝ましたけどね。起きてたらバカらしいから寝ちゃえって。

郷野　成長したと思って帰ってきたのに、レジで前のヤツが小銭出すのに手間取ってると、すっげえイライラするんだよなぁ。

長南　それ、成長してないですよ（笑）。

郷野　そう、してなかった（笑）。そういう意味でもアメリカのほうがいいですね。日本ではダメです、カリカリしちゃって。

長南　自分は次の試合は3月ぐらいだと思ってるんで、とりあえず結果を出したいです。また潰しのカードがくるかもしれないけど（笑）。あとファミレスで値段を気にせず注文できるようになりたいです（笑）。

郷野　また、ぶり返してるよ（笑）。

——お二人の活躍を期待してます！　というわけで郷野さん、ご馳走さまでした！

長南　ご馳走さまでした！

郷野　な、なんでだよ!?

【07年12月19日／都内・歌舞伎町『Dining&しゃぶしゃぶ—和らび—新宿本店』にて収録】

Akihiro Gouno

Ryo Chonan

ごうの・あきひろ■1974年10月7日、東京都東久留米市出身。96年、修斗でプロデビューをはたし、その後はパンクラス、『PRIDE武士道』、全日本キック等で活躍し、07年11月にUFCデビュー。DJ GOZMAでの入場パフォーマンスもすっかりおなじみに。GRABAKA所属。176cm、77kg。

ちょうなん・りょう■1976年10月8日、山形県鶴岡市出身。01年、DEEPにてプロデビュー。06年2月に桜井隆多を下しDEEPミドル級王者に（07年12月返上）。その後『PRIDE武士道』で活躍したのち、07年11月の『UFC78』でオクタゴンデビュー。Team M.A.D所属。175cm、77kg。

“ジャパニーズ・センセーション”再び!?
郷野の次の相手は77kg級最強戦士!!

インタビュー中でも語られているとおり、郷野聡寛の次の試合はUFC3月大会でのジョン・フィッチ戦。長南が「いまの77kg級で最強」と評するフィッチは、超激戦区のウェルター級でディエゴ・サンチェスら強豪相手に7連勝と絶好調。かつて、伝説の金網大会「X-1」にも出場経験のあるフィッチに勝って、郷野は一気にタイトル戦線へ躍り出ることができんのか？　入場とともに注目!!

さらば悪童

ハイアン・グレイシー独房に死す

撮影／乾晋也

狂犬の軌跡
ハイアン・グレイシー 日本全戦績

2000.8.27 PRIDE.10
○vs石澤常光（1R 2分16秒 TKO）

石澤（ケンドー・カシン）のPRIDEデビュー戦の相手として、ハイアンが日本初登場。じつはハイアンにとっても初のバーリ・トゥード公式戦だったが、いきなり元レスリング全日本王者の石澤のお株を奪うタックルでテイクダウンを奪い、スタンドに戻るとパンチのラッシュでKO。寝技で極めるグレイシーのイメージを覆す狂気の闘いぶりで、強烈なインパクトを残した。

2000.12.23 PRIDE.12
×vs桜庭和志（1R終了 判定 3-0）

デビュー2戦目でホイラー、ホイス、ヘンゾというグレイシー一族のトップクラスを総なめにした“グレイシーハンター”サクと対戦。しかし、ハイアンが右肩を負傷したということで、10分1R制に試合時間を変更。全身に青いテーピングを巻いて“ケガ人”を必要以上にアピールするハイアンは、10分間、なんとかサクの猛攻を耐え、“殊勲の”判定負けをつかんだのだ。

2001.07.29 PRIDE.15
×vs石澤常光（1R 4分51秒 KO）

石澤のリベンジマッチを受けたハイアン。一度、完勝した相手だけに試合前日に来日するナメっぷりを見せていたが、試合はいきなり片足タックルでテイクダウンを奪われグラウンドでもコントロールされ防戦一方。すると突然、脇腹を押さえて「タイム」を要求。結局、肋骨骨折の疑いでレフェリーストップとなったが、またしても“完敗”だけは免れたハイアンだった。

すでに新聞やWEBサイトのニュース報道でご存知の方も多いと思うが、〝グレイシー最凶の喧嘩屋〟ハイアン・グレイシーが、ブラジル現地時間12月15日、サンパウロ市内で死亡した。

地元メディアによると、ハイアンは自動車の窃盗と窃盗未遂容疑で逮捕、拘置所の独房に拘留されているあいだに変死したという。死因は現時点で確定されていないが、発見当時に脈拍がなく、心臓発作で亡くなった可能性もあり、逮捕時の尿検査では微量のコカインやマリファナが検出されたという。

ハイアン・グレイシーは74年生まれで、死亡時の年齢は33歳。前田光世に柔術を教わったカーロス・グレイシーの次男であるホブソン・グレイシーの四男。兄弟には次男ヘンゾと三男ハウフがいる。

ストリートファイト500戦無敗を自称し、傷害事件や、警察沙汰のエピソードには事欠かないなど、〝サムライ〟のイメージで売っていたグレイシー一族の中では極めて異色な存在だった。

格闘家としての実力は、正直それほど評価されていなかったが、一族への誇りは人一倍強く、「グレイシー柔術を守るためなら手段を選ばない」という考えの持ち主でもあった。だからこそ、一族の人間である自分が完敗するわけにはいかないという思いから、桜庭戦では身体中にテーピングを施し〝ケガ人〟をアピールし、石澤戦では〝アクシデントでの負傷〟をアピールし、レフェリーストップ負けも選んだのだろう。

そして、「グレイシー一族はマフィアと同じ。ファミリーの人間が負けたら倍にして返す」と、桜庭和志との再戦、吉田秀彦との対戦を執拗にアピールしていた（そして中村カズの対戦アピールはひたすら無視した）。

プライベートでもハイアンはこれまでいくつもの傷害事件を起こし、ブラジルのマフィアにも命を狙われていたとも言われているが、今回の事件に直接関係があるのかはわかっていない。

〝悪童〟の名をほしいままにした男が、独房で死去。あまりにも彼らしすぎる最期にいまは言葉もない。〝くそったれ〟の人生に合掌しつつ、今夜はハイアンがなぜか入場テーマ曲として使っていた小柳ゆきの曲を鎮魂歌として聴くとしよう。

そういえば、その小柳ゆきの曲名は『ｂｅ ａｌｉｖｅ』。直訳すれば「生きてください」というのだから、なんと皮肉なことか……。

（堀江ガンツ）

2002.09.29 PRIDE.22
○vs大山峻護（1R 1分37秒 腕ひしぎ十字固め）

この試合の一カ月前、ホイスが吉田秀彦に“疑惑の完敗”を喫したことで打倒・吉田に立ち上がったのがハイアン。吉田戦へのハードルとして、同じ柔道出身の大山峻護との対戦となったが、ここでハイアンは狂気の強さをひさびさに発揮。腕十字で大山の腕を負傷させ、さらに負けた大山にツバを吐きかけ、「オマエは女だ！」と罵声を浴びせる悪童ぶりを全開させた。

2003.10.05 PRIDE 武士道
○vs浜中和宏（1R 7分37秒 TKO）

記念すべき初の『PRIDE武士道』で、当時、髙田道場のホープとして売り出されていた浜中と対戦。ニーノ・シェンブリを判定で破った浜中有利と思われたが、ハイアンは寝技で主導権を握ると、スタンドに戻りヒザが外れてダウンした浜中の顔面を蹴り上げ、踏みつけ、完全にKO。この一戦で自信喪失した浜中が一時、引退にまで追い込まれるほどの残忍な勝ち方だった。

2004.5.23 PRIDE 武士道 ―其の参―
○vs美濃輪育久（2R終了 判定 2-1）

「日本vsチーム・グレイシー、3vs3対抗戦」の大将として、美濃輪と『PRIDE武士道』のメインで対戦。じつはイメージと違い慎重な闘いぶりのハイアンは、寝技で美濃輪をじわじわ苦しめ判定勝ち。試合後はいつものように「ヨシダ、サクラバ、オレと闘え！ 1対2でもいいぞ」とアピール。これに対し桜庭は「じゃあ、1対2でお願いします」と返したのだった。

©YUKIO HIRAKU

2004.12.31 PRIDE 男祭り 2004 ―SADAME―
○vs安生洋二（1R 8分33秒 腕ひしぎ十字固め）

94年にヒクソンに道場破りを挑み返り討ちに遭った安生が、10年ぶりにグレイシーと対戦。打撃勝負に出たい安生に対し、ハイアンは冷静に片足タックルからテイクダウン。寝技で終始主導権を握り、腕十字で安生に一本勝ちした。そして、試合後に中村カズがハイアン戦をアピールするも、ハイアンはカズを完全無視して、例によって吉田戦をアピールした。

波乱の一年を一気にフラッシュバック!!

ニュースで振り返る マット界2007

文・構成／高崎計三、編集部

んあ〜
去年はずいぶん
株を上げたなあ

2007年
1»2月
を振り返る！

秋山"黒の事件"が格闘技界を揺るがす ミルコUFCデビュー、シウバは王座転落！

前代未聞の事件に異例の処分決定！ だが、その後も火の手は一向に収まらず

07年、日本格闘技界はスタートからいきなり、大波乱に見舞われた。言うまでもない、秋山成勲による「黒の事件」である。06年大晦日の『Dynamite!!』メインで桜庭和志戦に勝利したものの、試合中・試合後に桜庭が「すっごい滑るよ！」と秋山の異物塗布疑惑を猛アピール。当初は多汗症を主張していた秋山だったが、FEGおよび審判団の再調査で「保湿クリームを塗っていた」と告白。秋山は謝罪するとともに試合結果はノーコンテストに修正され、秋山やこの試合に関わった審判員らにギャランティ没収などの処分が下された。また、主催者側が約1週間後の17日、桜庭同席で再度会見。秋山には無期限出場停止という処分が追加されることとなった。

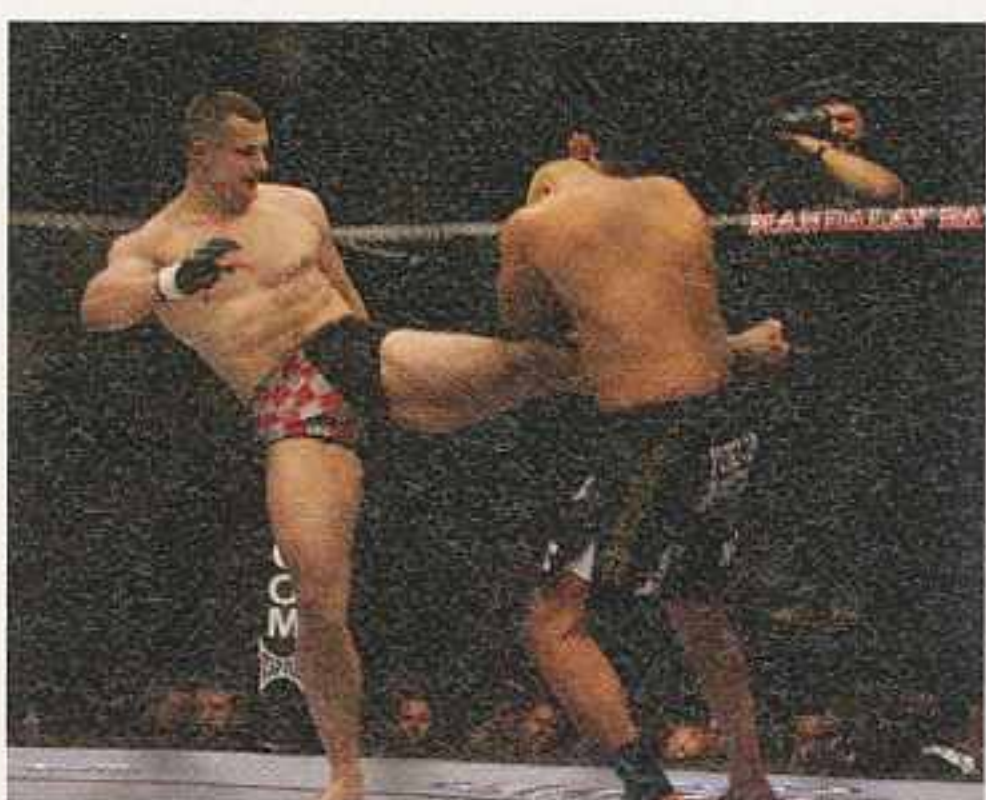
しかし、試合直後から燃え上がっていたネットを中心とする世論は、この処分に納得しなかった。関係者のブログが次々に炎上するなどの副産物的事象も巻き起こしつつ、1月11日に前述の調査結果および処分が発表されても批判の声は止まることを知らなかった。

この異例の「処分追加」の裏には、いくつかの背景がある。まず、何よりも"被害者"が桜庭和志だったこと。日本の総合格闘技を支えてきた桜庭が大舞台でこのような目に遭ったことで、秋山への批判がさらに増大した。またその批判が大会・放送局にも向けられ、さらにはスポンサーにも影響が及んだことも大きい。FEGが徹底的な調査と対応に踏み切ったのは、桜庭とスポンサーへの配慮という一面が大きかった。

この一連の騒ぎは、良くも悪くもネット時代を象徴するものだったが、本誌はこの事件勃発後から、悪の魅力を追求すべく、「わるいやつら」特集を大展開。人生の裏街道を知りつくすアウトロー作家・安部譲二をはじめ、『ワル』の原作者・真樹日佐夫、凶器のスペシャリスト・松永光弘など、錚々たるメンバーに"わる"について徹底的に語り尽くしてもらったのだった。

ただ、反則行為という意味では、これまでにも異物塗布などの違反はあったが、この一件によって他のプロモーションも含め、格闘技界全体が競技としてのチェック機能を厳しく問われることになったのは確か。結果として、一連の騒動による格闘技そのものへのイメージダウンは否定できず、一年のスタートから暗雲たれ込める状況になってしまったのだった。

一方、2月のラスベガスにはPRIDEファイターたちが続々と登場した。前年末にUFC移籍が明らかになったミルコ・クロコップは2月3日、ラスベガスでUFCデビュー。エディ・サンチェスを相手に1ラウンド、TKO勝利を収めた。この時点ではミルコのオクタゴンでの活躍が期待されたが……。

24日にはPRIDEのアメリカ進出第2弾大会が開催され、メインではヴァンダレイ・シウバがダン・ヘンダーソンにKOされ、PRIDEミドル級王座から陥落。ヘンダーソンがウェルター級との2階級制覇に成功した。またいずれもノンタイトル戦ながら、ライト級王者・五味隆典がニック・ディアスに、ウェルター級GP王者・三崎和雄がフランク・トリッグに敗れる波乱も。だが、この結果もその後PRIDEが見舞われた"大波乱"の予兆でしかなかった。

UFCデビュー戦、ミルコは「♪ダン、ダン、ダダン!!」のPRIDEのテーマで入場！　このミルコを皮切りに、PRIDEファイターは続々とUFCへ移籍。"対抗戦"的なムードを高めていったのだった

話題賞 カルビン・エアー

個人資産1000億超の"闇の帝王"最近はいったい、何やってるの？

"闇の軍団"ボードッグ総帥。同プロモーションが１月にパンクラスと提携発表、コスタリカ大会に選手が派遣されたことがきっかけとなって、にわかに日本での注目度が急上昇。とはいえ、目を引いたのは1000億円を超えるといわれた個人資産や、やけに役者っぽい出で立ち、そしてムダに大金を投じた大会運営など、「お金持ち」な部分ばかりだった。その後、ボードッグ・ファイトの活動が縮小したことで格闘技ファンの目に触れる機会もなくなったが、『買収して～ん』と迫っていた本誌もすっかりご無沙汰。再びＭＭＡ戦争の表舞台に現われることはあるのか……。

今期の主役 越中詩郎

『アメトーーク!』をきっかけに大ベテランが大ブレイクだって！

デビュー28年目の大ベテランが、ひょんなことから大ブレイク！　もともと絶大な会場人気を誇っていた越中だが、テレビ番組『アメトーーク!』でケンドーコバヤシが越中への偏愛ぶりをアピールしたことがきっかけで、「やるって節」や多彩なケツ攻撃が再びクローズアップされた。そのクライマックスは５.２後楽園でのＩＷＧＰ王座挑戦。敗れたものの、入場時にこみ上げる涙をこらえる様は07年プロレス界屈指の名場面だ。しかし、06年の長州小力→長州力の例といい、いまや世間でのレスラー人気はお笑いからしか作られない時代なのか？

新エースはこのボクですヨォ!? RGが07年初っぱなから大暴走！

RGで振り返る2007

06年後半から本格的に『ハッスル』の戦場へ躍り出たRGが、07年初っぱな、調子に乗っていきなり"新エース"宣言！ 1、2月はちょうど『ハッスル』が"充電期間"に入っていた時期だったが、ムダに考える時間を与えられたRGは「『kamipro』の読者コーナーで18歳の高校生がボクのことほめてました（真剣に）」と本誌に宛てられたたった一枚のハガキを鵜呑みにし、「07年、時は来た！ って感じですヨォ!!」と勝手に『ハッスル』を背負う覚悟を決める。しかしその翌月から、ある意味、本当に"エース級"＆"命懸け"の活躍を繰り広げることになるのだが……。

ギスギスしがちな秋山会見でも「ボクも実験」発言でなごみのとき！

サダハルンバで振り返る2007

年明け早々、未曾有のトラブル処理に追われたサダハルンバ。一連の会見では事が事だけにお得意ののんき節はとても出せる状況ではなかったが、それでも秋山の保湿クリームを説明するときに「私もこれ、塗って実験してみたんですけども……」と何気に凄い発言で出席者を驚かせた。あのクリームを自分で塗って、「うーん、やっぱり滑るよぉ～」と言っているサダハルンバを想像してしまう。疑惑追及でギスギスした雰囲気になりがちな会見の場を、意図せぬところでやっぱり和ませてしまう力は、さすがとしか言いようがない！　よっ、サダハルンバ！

今期のトピックス3連発

1/24 過激な発言、大連発!! 前田日明ブログスタート！

我らが日明兄さんがついにブログ開設！　当然、過激な内容になると期待されたが、いきなり「ヤーサンの金に目が眩んで勘違いした日沈君」や「便所のプ○○ス」など、山口日昇氏や本誌のことと思われるユーモアあふれる文章を連発。さらに故人に対して「バカは死ななきゃ治らない」と言い放つなど「さすが前田！」と一部の狂信的ファンのみを狂喜させた。この勢いで08年こそはぜひ「やるやる詐欺」状態の第二次リングスをスタートしてほしい。

2/9 UWAI STATIONに志村けんと研ナオコ登場！

線路なき線路を迷走……もとい、爆走するＵＷＡＩ ＳＴＡＴＩＯＮの会見に、なんと志村けんと研ナオコが登場し、〝プチシルマン〟ドン荒川や〝体操のお姉さん〟トモちゃんらとプチシルマ体操を披露。当日は大相撲の北の湖理事長が観戦に訪れるなどリング上以外がやたら豪華な大会だったが、肝心の試合では不完全燃焼試合が続出。あまりのつまらなさに怒ったファンが上井駅長に涙の抗議をするという前代未聞の事態となったのであった。

2/25 K—1トライアウト開催するもなぜか入江秀忠が乱入!?

メンバーのマンネリ化が叫ばれるＫ—１が選手発掘に着手！『ＴＵＦ』のフォレスト・グリフィンよろしく、このトライアウトでは明日のスター誕生が期待されたが、なぜか入江秀忠が受験。「俺はこのリングで最後の勝負をかける。谷川、俺をＫ—１に出せ！」と谷川Ｐに猛アピールするも、あえなく不合格。このトライアウト自体が『ＴＵＦ』というより『元気が出るテレビ』の「プロレス予備校」状態になってしまったのだった。

マット界はみだし事件簿

- ▼1月25日　テレビ朝日系番組「アメトーーク！」でガンダム芸人vs越中芸人を放送
- ▼1月27日　ボードッグとパンクラスが業務提携
- ▼2月1日　髙田総統が『ハッスル』を買収
- ▼2月13日　魔裟斗が女優の矢沢心と結婚。「まーくん」と呼ばれていることを告白する
- ▼2月10日　ボブ・サップが『ケージ・レージ』に乱入。4・21の同大会出場が決定するが……
- ※ＧＫ情報……1月→3年Ｇ組でドラゴン夫妻の授業。2月→アブドラー・ザ・ブッチャーの授業

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

社会正義を気どった一部のジャーナリストもどきが「マスコミは現状をちゃんと報道してなかった!!」などと、のたまっているが、ウチは06年2月からＵＦＣバブルの現状や、ボードッグなどのＭＭＡ新興勢力の動きを詳しく伝える連載（ＵＳＡ Ｃｏｏｌ宅急便）をスタート。日本マット界に及ぼす脅威をさんざん煽ってきてたし、同年10月の時点で〝大津波の襲来〟（外資のＰＲＩＤＥ買収説）をどこよりも早く匂わせていたんだよ！　そしてこの大晦日増刊号、新年号の表紙もＰＲＩＤＥの〝Ｘデー〟を念頭に置いた表紙作りをしていたが、まさかここまでの天変地異が起こるなんて！

No.108 07年2月号

UFCのオフィシャルショットから。気難しいミルコがこうして"キメカット"を撮影させるのは本当にまれなことなんです。

No.107 07年1月号

珍しいミルコの笑顔。じつはこの表紙、『ファミ通』があるゲーム企画でクロアチアを訪問した際に撮影したものを使用。

Special 07年冬号

『PRIDE男祭り』に登場した"ワル五味"が表紙!! コピーは五味のマイクの「やっぱりPRIDE、やめらんないね！」から。

2007年3月を振り返る!

幻に終わった「MMAワールドシリーズ」構想 PRIDE、ロレンゾに運営権を譲渡……

急転直下の「超重大発表」に衝撃走る ここから日本MMAの混迷が始まった

06年6月の「フジテレビ・ショック」以降、PRIDEの危機は何度となくささやかれていた。大晦日には例年どおり『PRIDE男祭り』を開催して06年を乗り切ったものの、存続を危ぶむ声はあちこちから聞かれていた。そこに、3月23日金曜日の夜遅く、各媒体に1枚のリリースが流れてきた。

「史上最大の発表」

翌週27日の夕方から六本木ヒルズ・アリーナで会見を行なう旨のお知らせだが、これが通例より早く流されたのは、この会見がファンも交えての公開形式だったからだ。

このリリースから当日までのあいだ、一部媒体では「UFCがPRIDE買収」と報じたりと、発表内容についてさまざまな憶測が流れた。そして迎えた当日、明らかにされたのは以下の事柄だった。

●DSEはロレンゾ・フェティータにPRIDEの運営権を譲渡。榊原信行代表は4月の大会を最後に退く。

●ロレンゾは今後、UFCとPRIDEのオーナーとなる。これはPRIDEがUFCの下部組織になることを意味するのではない。

そして、榊原代表からバトンを受け継いだロレンゾは、UFC代表ダナ・ホワイトを迎えると、UFCとPRIDEが真っ向から激突する「MMAワールドシリーズ」のビジョンを提示した。しかも、特製の煽りVつきでだ。さらには2団体の対抗戦第1弾として、4月大会で藤田和之vsジェフ・モンソンが行なわれることも発表された。ロレンゾ、ダナ、モンソン、高田延彦統括本部長、藤田が並ぶ姿は確かに"全面戦争"の始まりを予感させた。

この会見で、報道陣、そして平日の夕方にもかかわらず集まった大勢のファンに提供されたのは、「輝かしい未来」だった。PRIDEの闘いが世界規模の対抗戦に移行することで、運営権が外資の手に渡るショックをカバーして余りあるもの……のはずだった。会見の最後、ステージに上がった日本人選手たちはみな、変わらぬ闘いを繰り広げていくことを約束した。その姿に、集まったファンの多くは安堵して帰路についたに違いない。

その当時から、「あの発表はファンの目をそらそうとしているだけ。実際は単なる"買収"だし、これからPRIDEは彼らの手でどうされるかわからない」という論調もあった。だがこの会見と前後して、ロレンゾとダナはDSEスタッフ全員の前で会見内容と同じことを熱弁している。少なくともこの時点では、あそこで提示された未来図は実現を前提としたものだったのだ。

あとの項であらためて触れるが、結局この「輝かしい未来」は現実にはならず、ファンが代わりに与えられたのは絶望だけだった。だがこの時点では、誰も会見の内容を信じる以外になかったのである。これを機に、日本の総合格闘技界は本格的な混迷期に入っていくことになる。「業界最大手」であり、「世界最高峰のリング」であったPRIDEが存続に関わる激変を迎えたのだから、それも仕方ないだろう。そのPRIDEがどう変わってしまうのか、それとも変わらずに残ってくれるのか――。誰もその答えがわからないまま、手探りで進んでいくしかなかったからだ。

「愛娘の"嫁ぎ先"が見つかりました」と本誌独占インタビューで語った榊原氏。このときは、まさかあのトルシエとからむなんて思ってもみなかった!?

話題賞 セレブ小川

本当にしょっぱいのは誰だ!? 2カ月オンリーの衝撃キャラ!

07年のハッスルは、「高田総統による買収」という衝撃（？）ニュースで幕を開けることになったが、その影響で誕生したのが“モンスター・セレブ”小川直也だった。金の力であっさり寝返った小川は、こともあろうか坂田亘らハッスル軍の仲間に「おまえらがしょっぱいから……」と仰天発言！　え、それ言ったのはどの口？　と誰もが思ったのは言うまでもない。以後、“しょっぱい”が彼らの闘いのキーワードになるが、6月に小川は無期限離脱してIGFに参戦。最初から最後まで唐突だったセレブ小川は、風のように『ハッスル』のマットを横切っていったのだった。再登場はあるのか？

今期の主役 ロレンゾ・フェティータ

PRIDEファンには憎いハゲタカ? その裏でこんなエピソードが！

会見ではあふれる「PRIDE愛」をアピールし、今後もなんら変わることなくPRIDEが存続すると強調したロレンゾ。だが、その発言が額面どおり受け取られなかったのも事実だ。結局、彼のもとでPRIDEは復活することなく“消滅”してしまったのだから、ファンにとっては「やっぱりアイツはハゲタカだった！」となるかもしれない。だがこのロレンゾ、じつは3月に来日した際に都内の格闘技ショップを訪れ、山ほどPRIDEグッズを買い込んで帰ったという。もちろんポケットマネーで！　やっぱりファンだったの？　だったら、よけいに復活させてほしかったが……。

うわ〜ん、RGが死んじゃうよ〜! 狂虎タイガー・ジェット・シン戦勃発

RGで振り返る2007

07年初試合、3.15『ハッスル・ハウスvol.22』でRGに用意されたのは、なんと“インドの狂乱”タイガー・ジェット・シンだった!! RG、いままでありがとう!　と叫ばずにはいられないこのカード同様、実際の試合も「RG相手にそこまでやるのか!?」と予想を上回るハードな当たりに。ついにはRGの額から鮮血が噴き出すというとんだ事態まで勃発。強制的ではあるにせよ、とても芸人とは思えないこの身体の張りよう……。「イジメに負けるな、俺を見ろ！」というRGの名言が脳裏をよぎったのもつかの間、3日後には何事もなかったかのように試合を組まれるRGだった。

アメリカでアライアンス発表! しかし足並みは揃わず……!?

サダハルンバで振り返る2007

PRIDE「重大発表」会見と同じ3月27日（現地時間）、サダハルンバはロサンゼルスで、やはり重大な発表を行なっていた。同地で10万人規模の『Dynamite!! USA』を6月に開催するというのだ。さらに共催のプロエリートをはじめ、ボードッグ、ストライク・フォースなど世界のMMA団体が「アライアンス」を組織すると発表されたが、これには名前の挙がった団体が次々に異を唱え、さらにダナは「ジョークイベント」と一蹴。この大会を巡る混乱は、発表直後から始まっていた。サダハルンバは「みんな、なんでそんなこと言うのかなあ〜」と困惑……。

©FEG.Inc

今期のトピックス3連発

3/3 超おバカなプロレス興行『ますだまつり』開催！

SPWF所属のますだいすけが立ち上げた、超おバカ興行『ますだまつり』。それがフジテレビの深夜番組『100人目のバカ』で紹介されプチブレイク。北沢タウンホールに超満員の観衆がバカを観に来るという世も末な現象が起こった。大会は「超能力者vs霊能力者」や「地球vsレスラー」といった期待にたがわぬバカ試合を連発。二人揃ってマスクで口を覆うバレバレの変装でお忍び観戦した関根勤&麻里親子をおおいに喜ばせたのであった。

3/14 『週刊ゴング』が休刊……その後、二派に分裂か!?

プロレス雑誌の代名詞として月刊時代含め40年近くものあいだ、ファンに親しまれてきた『ゴング』がついに休刊。これまで何度も休刊の噂があったが、経営環境の悪化や発行元社長が民事再生法違反容疑で逮捕されるなどの不祥事に見舞われ、1168号をもってその歴史の幕を閉じることとなった。その後は“G二派”としてGK金沢隊長を中心とした『Gリング』、“ドクトルルチャ”清水勉編集長の『Gスピリッツ』がそれぞれ創刊されることに。

3/18 ショック!! 我らが金原弘光が「あと一試合で引退」を発表！

©パンクラス

3・18パンクラス後楽園大会で、新鋭・川村亮と対戦し、大熱戦の末KO負けを喫した金ちゃん。試合後「あと一試合で引退しようと思います」と突然の引退宣言を行なった。だがその後、前田日明に「俺の前でもう一試合やれ」と言われたが実現せず、秋山成勲との対戦をアピールするも実現せず、結局、引退試合すら決まらないから引退宣言を撤回して現役続行という、嬉しいやら切ないやら、ここでも金原イズムを爆発させたのであった。

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

スクープとなった“PRIDE終幕”は、もともとは別ネタを追ってる最中に偶然にもゲット。そのネタというのは、『PRIDE・34 KAMIKAZE』にあの桜庭和志が電撃出場し、田村潔司と対戦するというもの。なので、サク本人の様子をうかがうために、3・12『HERO'S』名古屋大会に急きょ出張。根っこはプロレスラーのサクだから、本当であれば何かサインがあるかもしれないと踏んだのだ。試合はもちろん試合後のコメントスペースでも、サクの一挙手一投足に注目していたが、試合を終えた安堵感から超リラックスモード。まったくわかりませんでした！

No.109 07年3月号

歴史的な表紙の「O」の文字にかかるアダモちゃんがたまらない。この号のキリン特集は各地から絶賛の声。

Special 07年春号

ホントはホジェリオに激勝したソクジュにするはずだったが、一晩寝て起きたら冷静さを取り戻しました！

マット界 はみだし事件簿

▼3月3日　前田日明が結婚
▼3月4日　『UFC68』でランディ・クートゥアーがティム・シルビアを破り、ヘビー級王者に君臨
▼3月9日　サイモン猪木が新日本プロレスの社長を辞任
▼3月14日　IGFが正式に会社登記される
▼3月24日　ニック・ディアス戦敗戦後、五味隆典が全日本コンバットレスリング選手権で復帰。73キロ級で優勝をはたす
▼3月27日　『Dynamite!! USA』に向けソフトバンクグループがFEGのビジネスパートナーに
▼3月27日　岩手県知事選に立候補したザ・グレート・サスケの選挙ポスターの盗難が頻発していることが一部で報じられる
※GK情報……3月→越中詩郎の授業

2007年
4»5月
を振り返る!

新体制へ移行のはずがライト級GPは延期! みるみる散り散りになっていくPRIDE

ヒョードルはボードッグに参戦、ミルコは敗北、状況はいよいよ混迷!

一つのリングに集っていた世界最高峰のファイターたちが、散り散りになっていく……。PRIDEファンにとって07年は、その様子を黙って見守るしかないというつらい一年だった。いや、正確には〝それ〟は、06年大晦日の「ミルコ・クロコップ、UFC参戦発表」に始まっていたのだったが。

ミルコのUFC転出、3月の六本木会見と前後してPRIDE関係者、ファンをやきもきさせたのは、ほかならぬその頂点に立つ王者、エメリヤーエンコ・ヒョードルの去就だった。06年に活動を開始し、その暮れにバンクーバーで初のPPVイベントを開催した〝謎の団体〟ボードッグが、以前から交流のあったヒョードルを3月のロシア大会に参戦させると発表していたからだ。

PRIDE側は、かねてからヒョードルの他団体参戦を否定していたが、結局4月に延期されて開催されたロシア・サンクトペテルブルグ大会にヒョードルは出場、超満員の観客の前で2階級下のマット・リンドランドを下し、故郷の観客の大歓声に応えた。

毎年末、その一年を漢字一字で表わしたら……という発表が行なわれるが、それにならえばこの4月のPRIDEは、「散」だろう。まず8日、『PRIDE・34』が「DSE最終興行」として行なわれ、榊原代表がPRIDEのリングに別れを告げた。それから約1週間後の14日が、前述のボードッグ・ロシア大会。

さらに1週間後の21日には、ミルコ・クロコップがUFCイギリス大会で第2戦に臨むも、ガブリエル・〝ナパオン〟・ゴンザガに衝撃のKO負け。この試合に勝てばヘビー級王者（当時）ランディ・クートゥアーへの挑戦が決まっていたために、このニュースはよけいに強いショックをもって日本に伝えられた。この大会には同じくPRIDEで活躍していたファブリシオ・ヴェウドゥムも初参戦、こちらもアンドレイ・アルロフスキーに敗れてしまった。

日本ではDSE開催のPRIDEに別れを告げざるをえず、そしてそこで頂点を争った2選手は遠い外国でそれぞれ闘っている。一方は勝ったものの今後の去就が明らかでなく、もう一方は期待虚しく敗れてしまった。

さらにPRIDEでは日本人ヘビー級の旗頭である藤田和之が、ジェフ・モンソンに敗北。ファンにとってはまさに、一連のショックをどう処理していいかわからないほどのショック・コンボだったことだろう。

ただし、希望の灯が何もなかったわけではない。それがさいたまのリングに降臨した最後のサプライズ、「桜庭和志登場」であった。田村潔司とリング上で並び立ち、あいだに立った榊原代表は〝悲願〟だった両者の対戦を新体制下で実現できるよう、望みを託した。

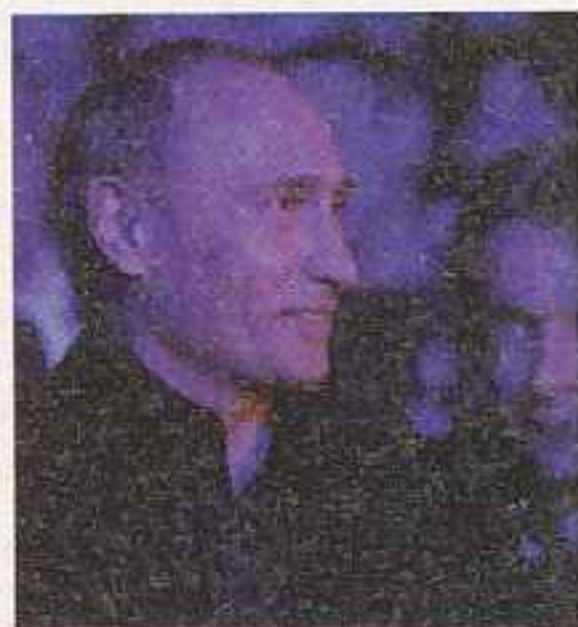
この対戦は現在まで実現に至ってはいないが、このときの「桜庭貸し出し」が12月の「大連立」につながったことを考えれば、やはりその意義は大きかった。

だが、この時点ではまだPRIDEの受難は続く。引き続いてファンにもたらされた知らせは、「ライト級GP延期」という、にわかには信じられないものだったからだ。こうしてPRIDEは、〝消滅〟への道を否応なくたどらされることになる。

06年秋頃からささやかれていた皇帝ヒョードルのボードッグ参戦。これには『M-1』の全面的な協力があったが……。両者の関係はあえなく崩れ、のちに皇帝の『やれんのか！』参戦につながるのであった。

話題賞

プーチン大統領

超セレブがリングサイドに！ ロシア幻想が急激に沸騰！

4月のボードッグ・ロシア大会は何かと話題を呼んだが、なんと言っても最大のサプライズはプーチン・ロシア大統領がリングサイドで観戦したことだろう。勝利したヒョードルをたたえたプーチンは、その後官邸に選手たちを招待して会食。友人のベルルスコーニ・前イタリア首相、ジャン＝クロード・ヴァン・ダムらとヒョードルのショットは得体の知れない豪華さだった。ロシア政権とまでつながったボードッグがいったいどんなことになるのか、大きな話題となったが、どうやらプーチン登場はM-1の力によるところが大きかったようで。しかし彼の登場は、衝撃ニュースだった！

今期の主役

ソクジュ

アフリカン・パワー炸裂！ その余波でキリンにも注目が

2月の『PRIDE.33』ラスベガス大会でノゲイラ弟を秒殺KOし、驚きのPRIDEデビューをはたしたソクジュ。そのときはあまりの短時間決着に「本当に強いのか？」との声も聞かれたが、続く『PRIDE.34』ではヒカルド・アローナにも激勝！　これでもう、誰もがその強さを認めないわけにはいかなくなった。K-1系ではオロゴン兄弟、ベルナール・アッカらがアフリカ人の強さをアピールしていたが、PRIDEにも超ド級のアフリカ旋風が吹き荒れたのだ。さらにその発言から、キリンの強さまでクローズアップ。本誌のキリン特集も、おかげさまで好評でした！

世界一"貧相"な飛びっぷり! フライングボディプレスを披露

RGで振り返る2007

「05年の『ハッスル・マニア』は自腹で客席からHGを観ていました……」と、相方HGとの"距離"を感じては、いじけるRGだったが、4.21『ハッスル22』ではついにHGとのタッグが実現! なんと"モンスター大将"天龍源一郎にフライングボディプレスをお見舞いするなど奇跡的に大健闘! その"貧相"な飛びっぷりは、もはや脳裏から離れないほどの印象に。だが、この日もやっぱり天龍のグーパンチで流血したRG。しかし、このときの傷を「見てくださいよ、これ! 天龍にグーパンチされた跡です!!」とケンドーコバヤシに自慢していたというから、本当にイヤらしい男である。

PRIDEに桜庭貸し出し！ 器の大きさにファン感嘆!!

サダハルンバで振り返る2007

DSE最後のPRIDEに花を添えた、桜庭和志の登場。前年に『HERO'S』に移籍していた桜庭があのリングに帰ってくることは、まさに最大級のサプライズだった。この陰には、サダハルンバの英断があった！　榊原代表からの要請と、桜庭の希望を受けて貸し出しを快諾したサダハルンバ。まさに「敵に塩を送る」この器の大きさに、PRIDEファンも大感激！　その評価は急上昇したのだった。だが当の本人は「なんでみんな、そんなに桜庭vs田村が観たいのかなあ～？」とあまりにも"らしい"発言。その後、田村が『HERO'S』に参戦したが、このカードを組む様子はない……。

今期のトピックス3連発

4/4 上井駅長が「文彦」から突如「二三彦」に改名！

UWAI STATION旗揚げ以来、駅長コスプレで、本誌・阿修羅チョロやペールワンズ総帥・井上崇宏を狂喜させてきた上井駅長が4月4日、53歳の誕生日を機になぜか「二三彦」に改名。本名「文彦」の字画が悪いことがきっかけらしいが、改名後、運気が好転するかと思いきや……。「プチシルマスペシャル」と銘打たれたディファ有明大会を最後に、上井駅の"第一章"が完結。しかし、第二章の発車のベルが鳴る気配はいまだないのであった。

4/8 ザ・グレート・サスケ 無念の岩手県知事選落選！

元岩手県議会議員ザ・グレート・サスケが、岩手県知事選に立候補。史上初の覆面知事誕生が物好きな人たちを中心に期待されたが、残念ながら落選に。これによりサスケは県議会を一時引退。これまでAV出演疑惑、政務調査費を使ったぶらり旅疑惑などにもめげず岩手のために邁進してきたが、今後はその変態パワーをプロレスとUFO研究に全力投球してくれそうなので、プロレス界と超常現象界にとっては、ある意味朗報でもあったのだ。

5/2 やってやるって!! 越中詩郎がIWGP挑戦！

風が吹いたって！ 男・越中詩郎（48）が、テレ朝系人気番組『アメトーーク！』で、ケンドーコバヤシら"越中詩郎芸人"たちのプレゼンにより突如大ブレイク！ あれよあれよという間に新日本の最高峰IWGP王座にも挑戦。試合前から爆発した大「越中コール」に越中は目に涙をためながら入場。敗れはしたもののベストバウト級の激闘を展開した。しかし、『プロレス大賞』ではなぜかノーエントリーなんだから、世の中絶対に間違ってるって！

マット界 はみだし事件簿

▼4月20日　ボブ・サップが『ケージ・レージ』出場をドタキャン
▼5月11日　山本KID徳郁が6月開催のレスリング選抜選手権出場を断念
▼5月17日　『ハッスル』が北方領土大会開催をブチ上げる
▼5月26日　昨年7月、大麻所持容疑で現行犯逮捕された嵐が謝罪会見。無我参戦を猛アピール
▼5月27日　『UFC71』にて、クイントン・"ランペイジ"・ジャクソンがチャック・リデルを破り、ライトヘビー級王者に君臨。その直後、ダン・ヘンダーソンがオクタゴンに登場し、UFC参戦を電撃発表
※GK情報……4月→武藤敬司の授業　5月→GKプロレス探検隊の隊長に就任。小松隊員を連れ、インリン・オブ・ジョイトイ&インリン様を探検

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!?

『kamipro』表紙の裏話

未来への淡い期待と、得体の知れない不安がマット界を覆いつくし始めた頃。この「夢の懸け橋、必要ですよ！」と「さまよえるPRIDE」という二つのコピーは、07年マット界を象徴しているものになったと思います。さりとて、そんな07年の主役候補だった田村潔司とミルコ・クロコップの二人は……世の中って思うようにいかないなあと痛感。両雄には08年の爆発に期待。余談ですが、田村が手にしているタイガーマスクの覆面。じつはサダハルンバ谷川さんがこのマスクを被った秘蔵ショットもあるんです。これは驚きだ！　いつか誌面で披露する日も来るでしょう!?　んあ～！

No.111
07年5月号

明け方、ロンドンからミルコ敗戦の報。それからPRIDE時代の写真をあさりにあさって、イメージどおりの写真を発見。

No.110
07年4号

撮影用に虎のマスクを都内のプロレスショップで緊急購入したら、なんと値引きしてくれましたよ。ありがとうございます！

2007年 6»7月 を振り返る！

大混乱の『Dynamite!! USA』から『HERO'S』"PRIDE化"の流れへ

7月大会にあの田村潔司が電撃参戦！谷川氏は「サプライズ」予告を連発！

PRIDEが先行き不透明な状況に陥った中、オポジションとなる『HERO'S』もまた、苦しんでいた。1月の秋山事件の余波もあり、3月に行なわれた名古屋大会ももう一つ爆発できず。そんな中、復活へのキーワードとなったのはほかならぬPRIDEだった。

まずその前に、予定どおり6月2日に開催された『Dynamite!! USA』ロサンゼルス大会について触れなければならない。正直、「予定どおり」だったのは開催日程だけだった、と言っても過言ではないほど混乱続きだった。

発表直後、「アライアンス」を結成したはずの世界のMMAプロモーションから次々に反論が出たのをはじめとして、大会前にはメインでブロック・レスナーと闘うはずだったチェ・ホンマンがメディカルチェックに引っかかり出場不可能に。さらにはホイス・グレイシーと「世紀の再戦」を行なう桜庭和志までもキャンセルになりかけた。さらに、谷川氏が試合直前まで出場を巡って揉めたユン・ドンシクの説得に、放送席から駆けつけるほどのドタバタぶり！

最終的に主催者発表された観客動員は5万4000人で、これは予想以上の健闘。その裏で1万枚以上の招待券が出回った（想像しただけでも凄い絵だ！）との情報もあり、そんなところまでやたらとスケールの大きさを感じさせたのだった。

ソフトバンクという大口スポンサーもつき、発表の時点では世界MMA戦争の流れを変えるかとまでいわれたビッグイベントだったが、レスナーや元NFLのジョニー・モートンなどの大物参戦がこれっきりになってしまったりと、あまりその後につながらなかったのは残念。08年、アメリカでのリベンジははたしてあるのだろうか？

翌7月、4ヵ月ぶりに開催された『HERO'S』から、PRIDEの影がちらつき始める。まずは田村潔司が参戦し、金泰泳と対戦。この一戦は「K-1対PRIDE」と煽られた。

さらに大会に先立つ会見では谷川貞治FEG代表が盛んに「サプライズ」を予告。そのたびに五味隆典をはじめとする元PRIDEファイターの登場がウワサされるようになる。

結局、この7月大会ではウワサが実現することはなく、「サプライズ」は船木誠勝の現役復帰宣言だったが、この後、9月大会では谷川FEG代表が「PRIDEっぽい試合」「PRIDEっぽいイベント」と、さらに強調。実際にミノワマンが参戦し、セルゲイ・ハリトーノフvsアリスター・オーフレイムの一戦が組まれるなどもあったが、PRIDEの選手が登場しただけではなかなかPRIDEの世界観を生み出すことは難しいようであった。

だが、PRIDEの動向が依然として明らかにならない中、日本のMMAビッグイベントとして『HERO'S』にかかる期待が増し、また『HERO'S』側も「日本格闘技界のために」という動機づけで動いた面があったのも事実だ。

それが最終的に実を結んだのが、年末の「大連立」ということになる。一時は激しく敵対した両陣営だったが、PRIDE危機～桜庭貸し出し～PRIDEファイター参戦～大連立という流れこそが、07年の格闘技界を端的に象徴することとなった。

"魔王"秋山成勲に牙を剥いた男、田村潔司が『HERO'S』へ電撃上陸。本格的に秋山制裁マッチのムードが高まっていたのだが……。金泰泳に判定負けという、なんとも出ばなをくじかれる流れとなってしまった。

話題賞

デニス・ロッドマン

“悪童”再びマット界登場も、やっぱり誰にも制御不可能!?

『Dynamite!! USA』のサプライズとして、会見に現われたロッドマン。当初は総合参戦の話もあったが、コミッションの許可が下りず、結局聖火リレーの最終ランナーとして開会式に登場。……はいいが、「K-1こそが真のアルティメット・ファイト。UFCはFU●Kだ！」とやってしまったから関係者一同ビックリ。UFCとはホイス・グレイシーをレンタルするなど（表面上？）良好な関係を保っているK-1なだけに、サダハルンバがあわてて謝罪するハメに。その後、彼が本格的に総合参戦というニュースもなく、いったいアレはなんだったの？ 今年の大晦日なんてうってつけだったんだが……。

今期の主役

ウォーレン・クロマティ

ハッスルに最強の助っ人登場！53歳、狂虎シンらに感動勝利！

6.17「ハッスル・エイド」への参戦が突如、発表されたクロマティ。かつて読売巨人軍で「史上最強の助っ人」と称され、7シーズンにわたって活躍した53歳は崔領二とのタッグでタイガー・ジェット・シン＆アン・ジョー之助組と対戦。試合前から因縁が深まる一方だったシンに攻め込まれるも、ホームランチョップ、「ビバ!! ジャイアンツ」などのオリジナル必殺技を炸裂させてアン・ジョー之助からフォール勝ち！ いまのところハッスル登場はこの一回のみだが、サダハルンバが『Dynamite!!』での元ロッテ・立川隆史の相手候補として名前を挙げるなど、再登場を望む声も多い。ジャイアンツふうのユニフォーム姿は、やっぱりハマりすぎだった！

インランプ横取り作戦大成功! グレート・ムタを登場させたヨゥ!

RG で振り返る2007

ここでもまた神がかり的な“リアクション芸”を披露! 6.17『ハッスル・エイド』の試合後、まさしくグレート・ムタの力で勝ち取った勝利を、さも自分の手柄であるかのごとく大はしゃぎするRGだが、調子に乗るこの男にムタはお約束どおり毒霧を噴射。すると、なんとRGは「くの字」で吹っ飛んだままリングから転げ落ち、ロープに逆さ吊りになるという驚愕のムーブを披露! 情けなさを通り越して、むしろ尊敬に値するこの姿。芸能人としての成長は正直よくわからないが、リアクションという点では加速的に腕に磨きをかけまくる男なのだった。

秋山問題で“目安箱”設置! 微妙な票数の影響はいったい!?

サダハルンバ で振り返る2007

「目安箱＝将軍徳川吉宗が庶民の要求・不満などの当初を受けるために置かせた箱」（広辞苑より抜粋）……6月のロスで復帰の計画もあったという“魔王”秋山だが、やっぱり国内では反対意見が多かった。そこでサダハルンバが取り出した秘密道具、それが「目安箱」！ 言葉の意味なんてどうでもいい、「賛成」票が多ければいい！ とばかりに7.16『HERO'S』の会場に設置されたが、結果は賛成が353、反対が273票。賛成がかろうじて上回ったものの、なんとも微妙な数字。ということで9月復帰は見送られ、10月のソウル大会で復帰決定！ 結局投票の意味は？

今期のトピックス 3 連発

6/23 野獣サップが帰ってきた! K—1オランダ大会で復活!?

サップが帰ってきたぜ〜！ 契約問題のトラブルを起こしまくり、K—1復帰は難しいと思われていた“野獣”ボブ・サップがドタキャン騒動を起こした地、オランダにて復帰戦を敢行した。サップは地元の英雄アーツと対戦するも秒殺KO負け。あまりにも不甲斐ないサップに観客は大ブーイング、谷川プロデューサーも「あの内容では和解できない。裏切られた気持ちでいっぱい」と肩を落としていた。んあ〜。

6/29 アングルもレスナーも来た! IGFついに発進〜ッ!!

“一寸先はハプニング”、“いつ何時でもズンドコ”等々、キャッチフレーズには事欠かないアントンの新団体IGFが両国で旗揚げ戦を行なったのが6月29日。観客動員は“実数発表”とのアナウンスつきで8426人と大方の予想を覆す盛況ぶり。ハッスルから旅立った小川直也や田村潔司などの参戦も注目を集めた旗揚げ戦だったが、メインのアングルvsレスナー戦が普通にいい試合で、ズンドコマニアは肩すかし!?

7/28 プロレスの神様 カール・ゴッチさん死去

オー・マイ・ゴッチ！ “プロレスの神様”カール・ゴッチが7月28日、フロリダ州タンパで死去。ゴッチさんといえば、選手だけではなく、コーチとして木戸修、藤原喜明、渕正信、藤波辰爾、佐山聡、前田日明、鈴木みのる、西村修ら多数のレスラーを育成したことでも有名。06年には無我ワールドの名誉顧問に就任していたが、数ヵ月後、団体名が変わってしまうとは天国の神様も予想できなかったに違いない。合掌。

マット界 はみだし事件簿

▼6月16日 『Dynamite!! USA』桜庭和志戦と闘ったホイス・グレイシーのドーピング疑惑が浮上
▼6月26日 WWEのスーパースター、クリス・ベノワ急死
▼7月7日 アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラがUFCデビュー。『UFC73』ヒース・ヒーリング戦で勝利を収める
▼7月9日 髙橋義生（当時）がパンクラスを退団
▼7月18日 前田日明が参院選・民主党の応援演説に繰り出す
▼7月23日 ミノワマン、デビュー10周年
※GK情報……6月→GBH（天山広吉、真壁刀義、越中詩郎）を探検。7月→武富士ダンサーズを探検

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

ダメモトでオファーしたら、あっさり実現した所英男と青木真也の“越境”表紙。それまでのPRIDEとK—1の関係を考えると感慨深いし、格闘大連立を先取りしたツーショットとも言える。ちなみにこの撮影がきっかけで、「青木真也が『HERO'S』に出るから『kamipro』が動いた」という噂に発展。おもしろいから放っておきました。ダナ・ホワイトは、この表紙が決定打となり“ジャイアン”キャラが定着。マット界から退いた榊原代表の穴を埋める、貴重なキャラクターに成長してくれたんじゃないか、と。谷川さんやドンキの安田会長、古くは川村社長といい、ウチは圧倒的な“ボス”が大好物！ みんなもそうでしょ!?

No.113 07年7月号

フランスのMMAマガジン『Figth Sport』の特写写真を使用。大がかりなセットを組んでの撮影。外国はやることがハデだなあ。

No.112 07年6月号

取材場所はリバーサルジム。PRIDEとFEGの広報が遭遇。ワオ木さんがいつもの軽口を叩かないかハラハラドキドキ！

2007年
8»9月
を振り返る!

PRIDE再開のメドは一向に立たぬ中 ファイターたちが世界で連敗ショック!

ミルコ連敗、王者ダンヘンも敗北 そして〝切り札〟ショーグンまでが!

「8月18日にさいたまでPRIDE復活」「10・11記念日を機にPRIDE復活へ」……メディアを飛び交う情報とは裏腹に、夏になり、秋になっても再開の報は一向に聞こえてこない。それどころか、PRIDEのリングを彩り、強さを見せつけてきたファイターたちはどんどんほかのリングに活路を求めていく。ファンにとっては、なんともやりきれない日々が続いた。

それでもファイターたちが世界のリングでめざましい活躍を見せてくれれば、「やっぱりPRIDEは凄かった!」と、なんとか気持ちを落ち着けることもできるが、現実には信じられない、信じたくない敗北劇が続くことになった。

8~9月の、主なPRIDEファイターの戦績は以下のとおり。

パウロ・フィリオ…8月5日、WECでジョー・ドークセンに勝ち、ミドル級王者に。

マーカス・アウレリオ…8月25日、UFCでクレイ・グイダに判定負け。

ミルコ・クロコップ…9月8日、UFCでチーク・コンゴに判定負け。

ダン・ヘンダーソン…9月8日、UFCでクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソンに判定負け。

ムリーロ・ニンジャ…9月15日、エリートXCでロビー・ローラーにTKO負け。

マウリシオ・ショーグン…9月22日、UFCでフォレスト・グリフィンに一本負け。

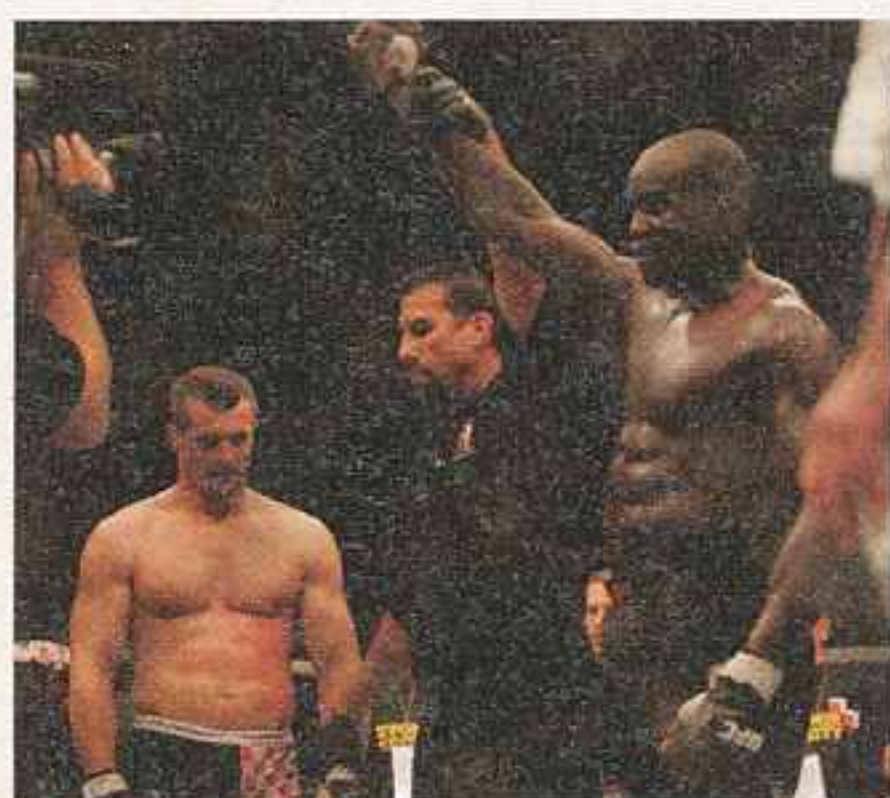
中村和裕…9月22日、UFCでLYOTOに判定負け(&ドーピング検査でのマリファナ疑惑)。

これに先がけ、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは7月にUFCに初参戦してヒース・ヒーリングに勝利してはいる。だが、まずこの期間だけでこれだけの選手が他団体に流出しているだけでもショックなのに、ご覧のとおりトップ選手が黒星続きという状況は、やはりショッキングなものだった。

その中でもショックが大きかったのは、ミルコの連敗とショーグンの敗北だろう。ミルコはゴンザガへのKO負けからの復帰戦で、相手のコンゴは「ここは通過してもらわないと」というレベル。そこでつまずき、長期休養を余儀なくされた。

そしてショーグンは、PRIDEミドル級で圧倒的な強さを発揮していた〝次代のエース〟的存在だった。試合後、じつは練習中にヒザのじん帯を断裂していたことが明かされたが、負けは負け。とくにこの9・22「UFC76」ではショーグン、中村、小見川、さらにPRIDE参戦経験のあるチャック・リデルも合わせて全敗、という屈辱的な一日となった。

また、9月8日のダンヘンvsジャクソンはPRIDE、UFC両王者による「統一戦」と銘打たれていたが、ここでもPRIDE王者のダンヘンが敗れた。相手のジャクソンも元PRIDEファイターだが、やはり記録として残るのは「PRIDE王者の敗北」だ。

世界MMA戦争の中心は、確実に日本からアメリカに移ってしまった。興行面だけでなく実力という部分でも「UFC」の名前が「PRIDE」を呑み込んでいく状況に、日本のファンはまさしく指をくわえて見ているしかない日々が続いた。そして月をまたいで秋も深まり始める頃、さらに絶望的なニュースが突然、届いたのだった。

レミー・ボンヤスキーら強力な布陣で調整したミルコだったが、まさかの2連敗……。このあと「ミルコ、引退危機」説がささやかれるほど、この敗戦は各方面にショックを与えた。

話題賞 武蔵

痛恨の金的蹴りで絶体絶命も周囲の見方にはある変化が……

8.5K-1香港大会は、武蔵にとって悪夢の舞台となった。アジアGP1回戦でパク・ヨンスに2度の金的蹴りを食らい、一時は戦闘不能に。再試合でKO勝利ははたしたものの結局トーナメントは棄権。サダハルンバをして「あんなに金的が腫れている人を初めて見た」と言わしめるほどの重傷だったわけだが、これで武蔵は開幕戦の出場権を失なう。一時は引退の可能性もささやかれたほどだったが、本誌では菊地成孔氏が独特の武蔵論を展開したのをきっかけに「武蔵を優勝させる会」を結成！ GP参戦ははたせなかったが、金的を機に再び存在感を発揮するあたり、さすが！

今期の主役 フォレスト・グリフィン

ショーグン撃退で日本でも注目 TUFパワー、ここに炸裂！

UFCファンには早くから認知されていたものの、日本のMMAを中心に見ていると「ああ、あのリアリティショーから出てきた選手でしょ？」という偏見（?）がつきまとっていたグリフィン。ショーグンの初参戦で迎撃役を任せるあたりがUFCマッチメイクのうまさというかズルさというか。それで実際に勝ってしまうのだからUFCとしては「してやったり」か。これで日本のファンも、彼にさらなる注目を向けざるをえなくなった。我らがショーグンは、『TUF』効果でそのキャラクターにも人気が集まっているグリフィンの踏み台にされてしまったのか？

RGで振り返る2007

モンスター・ボノ戦前の不用意な発言で曙さん大激怒！

RG、まさかのピンフォール勝ち達成！ そんな奇跡が勃発した9.13『ハッスル・ハウスvol.28』では、自分自身の活躍に図らずも男泣き。しかし「次はRGがピンでメイン」という発表には客席からまさかの拒絶反応。さすが、33歳妻子持ちにして"イジメ"に遭う男。ちなみにこの日、次回対戦相手のボノちゃんに「おまえ、ガマガエルみたいに倒れたり、おもしろな!」と言い放ったRGの暴言に、曙さんは本誌インタビューで「あれはホントにムカついた！ 別人だって言ってるのに!!」と本気で激怒していたことを告白。RGの周りでは、素敵なエピソードが絶えない。

サダハルンバで振り返る2007

金的に悩まされた2ヵ月間も……「あれは腸蹴り」の名解説！

香港では武蔵が金的に倒れ、続くソウルでのGP開幕戦ではメインのホンマンvsモー戦でホンマンの金的疑惑で混乱……と、シモの問題に悩まされたK-1。ここに一石を投じたのが、ホンマンの蹴りを「腸蹴り」と解説したサダハルンバだった。まあ結局、後日裁定が覆ってローブローだったことになるんだが、ここで空手の世界に実在する「腸蹴り」という技の名前を出せるあたりが、元『格通』編集長にして空手バカ一代世代のサダハルンバの真骨頂！ 最初は「そんな技あるのかよ！」と侮っていたファンも、「ホントにあったんだ……」と妙に納得したのだった。

今期のトピックス3連発

8/11 ファン"待望の"ユニット「レジェンド」始動！

8月の両国大会で長州力の呼びかけにより、共闘を宣言したのが、蝶野正洋、獣神サンダー・ライガー、スーパー・ストロング・マシンら、数年前の新日マットで一世を風靡したスーパースターの皆さま方。9月シリーズから行動を開始した長州たちは新ユニット名を"レジェンド"と発表。『東スポ』では"高齢者軍団"などと突っ込まれながらも、自ら"レジェンド"を名乗り、長州、蝶野らは今日も会場で大暴れ！

8/29 坂田亘&小池栄子が5年間の交際を経て結婚！

時は来た！ "破壊王"橋本真也さんが恋のキューピッドだったことで知られるカップルがついに結婚を発表！ 本誌では交際前の小池栄子がインタビューで「坂田さんはカッコイイ」と告白していたり、『FRIDAY』された下北沢の定食屋で坂田取材をしたり、何かとこのカップルとは縁深い。結婚発表から数ヵ月後、『ハッスル・マニア』で小池さん激似の妖精さんが坂田と愛のパワーを見せつけたのも記憶に新しい。

9/5~7 前代未聞の3連戦敢行！『マッスル』地上波放送も決定

今年はサブカル方面でも注目を集めた『マッスル』が9月5～7日まで前代未聞の北沢タウンホール3連戦を敢行！ プロレス興行では3連戦といっても別段驚きはしないが、台本のようなものが存在する『マッスル』で3日間別内容の興行を行なうというのは、かなりの大冒険。実際、主宰者のマッスル坂井は想像を超える産みの苦しみを味わうことになるが、その甲斐あってか初日には地上波中継の開始も発表！

マット界 はみだし事件簿

▼8月12日 "brother" YASSHIが『HEAT』にて総合デビュー

▼9月3日 谷川FEG代表が秋山成勲から届いた謝罪のお手紙を公開

▼9月15日『UFC75』にて、クイントン・"ランペイジ"・ジャクソンがダン・ヘンダーソンを破り、UFCライトヘビー級のベルト防衛に成功

▼9月17日 U-FILEが旗揚げ10周年

▼9月17日 JZカルバンが『HERO'S』ミドル級トーナメント2年連続王者に

▼9月29日『UFC76』LYOTO戦を闘った中村和裕が試合後のドーピング検査でマリファナ陽性反応に

※GK情報……8月→蝶野正洋とアリストトリストを探検。9月→ラッキィ池田&長州小力を探検

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

再起を懸けるミルコ・クロコップの取材のためクロアチアに潜入!! PRIDEでの試合はクロアチアでも中継されていたけれど、地元のタクシーの運ちゃんが「さいたまスーパーアリーナ」をホントに知っているのは驚いた！ 嗚呼、あの輝かしいリングはどこへ……。祝・結婚記念!! 一般紙をさしおき実現した坂田亘と小池栄子のツーショットは、締め切りギリギリ滑り込み収録。ホントはロシア現地で独占取材を敢行したヒョードルを表紙に予定してたんですが（コピーは「日本の皆さん、お元気ですか？」）、LOVE&HUSTLEのシールドがレーザービターンよろしく氷の拳を跳ね返したわけです。

No.115 07年9月号

坂田亘は裸に蝶ネクタイという格好で撮影するはずだったが……絶妙な違和感を出すためにそっちのほうがよかったかも。

No.114 07年8月号

クロアチア現地取材。合同トレーニングをするはずのレミーたちの到着が遅れてしまい、かなりタイトな取材になった。

やれんのか!
大晦日!2007
Supported by M-1 GLOBAL MIXED MARTIAL ARTS
2007年12月31日／さいたまスーパーアリーナ

2007年10月を振り返る!

あまりにも衝撃的だった〝PRIDE消滅〟旧スタッフは『やれんのか!』へと決起!

一度も大会を開催できなかった無念が「大連立」という奇跡を呼び込んだ!

それは、誰にとってもあまりにも突然だった。10月4日、PRIDE日本事務所閉鎖——これをもって事実上、日本で「PRIDE」の名を冠した格闘技イベントが再開されることは、なくなったのだった。あの六本木会見から半年強、ついに一度の大会も開くことなく、新会社設立の発表すらなく、PRIDEは〝死亡宣告〟を受けた。10・11「10周年記念日」を祝うことすら、はかない夢と消えてしまった。

スタッフは前日に集合をかけられ、電話会議で閉鎖を告げられた。さらにパソコンも携帯電話も一切持ち出せず、15分以内に退居するよう命じられた。4月以降、経費の使用もほとんど認められず、何を企画しようにもずっと待たされ続けてきたあげくが、これだった。そんな経営陣に、「記念日」など理解できようはずもないだろう。

だがあまりに理不尽な終幕は、当然の反動を生んだ。「このままでは終われない」……逆に足かせが外れ、解放された格好となった元スタッフたちがすぐに行動を起こしたのは、はたしてアメリカ・サイドにとって計算のうちだったか、それとも「たいしたことはできないだろう」と高をくくっていたか。

いずれにしても、彼らは動き出した。「PRIDE」というイベント名はもちろん、多くのものに関する権利がアメリカ側に移ってしまっており、制約でがんじがらめに近い状態ではあった。だが、彼らには何よりも大きな宝——やはり再開を信じ、待っていた選手たちがいた。青木真也、川尻達也、石田光洋、そして桜井〝マッハ〟速人だ。

さらに、「大晦日には日本で闘う」ことを熱望する男がもう一人いた。ほかならぬPRIDEヘビー級王者、エメリヤーエンコ・ヒョードルだ。彼の熱意が周囲を動かし、立ち上がったばかりの新組織『M—1グローバル』がこのイベントに協力するという大きな副産物を生んだ。

ヒョードル陣営は4月のボードッグ・ロシア大会参戦後、UFCとの交渉に首を縦に振らず、ダナ・ホワイトをほとほと困らせていた。最終的には交渉決裂、『M—1グローバル』と契約を結んだばかりだった。あとになってみれば、これらすべては彼が日本で闘うために敷かれたレールだったようにも思えてくる。

チケット発売のタイミングまでギリギリとなった11月21日、会場となるさいたまスーパーアリーナで『やれんのか! 大晦日! 2007』と題されたイベントの開催会見は開かれた。そこには前述の選手たちとともに、前日夜に協力を承諾したという髙田延彦・統括本部長の姿もあった。

この動きは、さらに大きな山を動かした。あのFEGが協力を約束したのだ。谷川貞治FEG代表が2度目の会見に同席し、髙田、モンテ・コックス・M—1グローバル代表、佐伯繁DEEP代表とともに「格闘技界大連立」を宣言。これらの組織は主催にも名を連ね、単なる選手貸し出しといったどころではないスケールでの協力関係となった。

この流れで、夢のカードが次々と実現。こうして日本格闘技界は、見事に「災い転じて福」となした。この一連の動きを、ロレンゾやダナはいったい、どのような思いで見ているのだろうか。

07年大晦日から08年格闘技界をおおいに期待させた大連立のニュース。ここから「『HERO'S』を含め、格闘技界の再編を目指したい」と語る谷川氏だが、いったいどんな構想を描いているのだろうか。

話題賞 前田日明

“PRIDE消滅”に思わず本音!? 「ざまあみろ！」発言で波紋！

PRIDE日本事務所閉鎖の翌日は、間の悪い（?）ことに『HERO'S』ソウル大会の開催会見だった。前田日明SVは囲み会見で「PRIDE消滅」について聞かれ、「ざまあみろ！だね」と積年の恨みを隠すことなく本音トーク！　これにあわてたのが、4月の桜庭貸し出し以来、PRIDEと雪解けムードにあったFEG。即日、『HERO'S』実行委員会　谷川貞治」の名前で「不適切な発言」についての謝罪文を公開した。しかしロッドマンといい前田といい、今年のK-1周辺は失言のオンパレード!?　そしてその後の大連立には、日明兄さんはどんな反応を見せたのだろうか？

今期の主役 秋山成勲

“魔王”ソウルでついに復活！ 前日には仰天発言も飛び出す！

国内では賛否（というより、かなり“否”寄り）両論巻き起こった秋山の復帰問題だが、『HERO'S』実行委員会はソウル大会で復帰戦を組むことでモロモロの懸念を一気に解消！　そして秋山本人は強豪デニス・カーンを衝撃KOして一気に快勝！　韓国ファンの大声援を受け、あらためて“魔王”ぶりを見せつけた！　さらに前日には問題となった保湿クリームについて「いまでも使ってます」とあっさり発言！　そのあまりにも堂々とした態度に、報道陣はスケールの違いを感じずにはいられなかった。強くて天然、この組み合わせこそがサイコー!?

RGで振り返る2007

意外な人物がRGを大絶賛！ しかし、悩み多きRGは……!!

9.22『ハッスル26』のボノ戦前に、じつは意外な人物がRGを絶賛していた！「来年の立ち技はRGを中心に回っていく！」と、まったくデタラメなことを断言し、RGをムダに喜ばせたその男こそ、“キック界のカリスマ”小林聡だ。RGに特訓を仕込む“師匠”もある小林の声を拾うべく、本誌はRGと小林の対談を敢行。煽り映像では「俺は『ハッスル』の神の子だから」などと調子に乗りまくっていたRGが、当対談では「インリン様はボクをガチで嫌っているような気がする……」と、本人以外は誰も気にしない微妙な胸の内を告白。負けるな、RG！

サダハルンバで振り返る2007

何かとあわただしい周囲をよそに寝る間も惜しんで韓流ブーム!?

ただでさえ主催大会が過密日程なところへ、前田「ざまあみろ！」発言、ソウルでの秋山復帰などなんやかやとあわただしいサダハルンバ周辺。普通のヒトなら目の前の仕事をこなすだけでテンテコ舞いだが、やっぱりサダハルンバはひと味もふた味も違う！　インタビューでは、いまどき（失礼）韓流ドラマにズッポリはまっていることをのんきにカミングアウト！　寝る間も惜しんでDVDを観ているというのだから、どこからそんなバイタリティが湧いてくるのか不思議にすらなってくる。やっぱり、マット界に君臨するにはこれぐらい底知れぬパワーがなければダメなのか？

今期のトピックス3連発

10/4 安田が自殺未遂……三途の川を渡り損ねる

“借金王”の愛称で生活苦もネタにしていた安田忠夫がまさかの自殺未遂。直前に「絵文字入りで『娘をよろしく』」とメールをもらった新日本の田山レフェリーが自宅アパートで練炭の煙と睡眠薬で意識不明だった安田を救出！　だがのちに安田は「ガスが止められ七輪でエア焼肉を楽しんでた」とノンキなコメント。本誌は安田に「3万2000円貸してる」金沢“GK”克彦隊長を聞き手に焼肉屋での復帰祝いの取材を敢行！

10/14 パンクラスで驚愕の行方不明騒動が勃発！

大会前々日にメインイベンターが行方不明!!という異様な事件がパンクラスで勃発！　アスエリオ・シウバのヘビー級王座に挑戦予定だったアルボーシャス・タイガーがリトアニア現地の空港に向かう途中で連絡不通！「警察とトラブル？」などウワサが飛び交う中、来日ならず。原因は「眼のケガ」を巡るマネージャーとの連絡の行き違いらしいが、なんとタイガーの無事が確認されたのは2ヵ月後！　遅すぎるよ！

10/18 西村修、無我ワールドから全日本プロレスに“亡命”！

マット界一の常識派、西村修が非常識な電撃移籍！　この日の無我ワールド・後楽園大会の試合終了後にタイツ姿のまま愛車で遁走し、全日本プロレス・代々木大会に乱入。翌日の朝から移籍会見という電撃ぶり。西村はこの移籍を「亡命」と表現し、“無我”の商標登録や道場も西村が所有といった内情も続々発覚。後藤達俊も離脱、ドラゴンは団体名を改名！とさらなる騒動の“震源地”となった。

マット界 はみだし事件簿

▼10月1日　ストライク・フォースがプレイボーイマンションでMMAイベントを開催
▼10月3日　アンディ・サワーがK－1MAX07年王者に輝く。その後、GKプロレス探検隊入りを表明
▼10月9日　我らが“金ちゃん”こと金原弘光がリングス金原道場を開設
▼10月12日　UFCヘビー級王者ランディ・クートゥアーがUFC電撃離脱
▼10月15日　ワールドビクトリーロード設立。日本総合格闘技協会会長にはレスリング協会会長の福田富昭氏が就任
▼10月22日『M－1グローバル』設立。エメリヤーエンコ・ヒョードルの参戦も発表され、CEOにはモンテ・コックスが就任
※GK情報……10月→シーザー武志およびシュートボクシングを探検

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

レッドデビルのワジムさんが日本での新イベント発進を匂わせて、谷川さんが五味隆典ではなく青木真也にラブコールを送ったりと、いま振り返るといろいろと意味深なカミスペ。しかし、表紙になった五味の去就が12月23日時点でいまだに定まらない。いったいどうなっちゃうの!?　PRIDEさようなら号は、ウチなりの“お葬式”のつもりで気合いを入れて作業。その途中でまさかの日本事務所電撃閉鎖。本当にお亡くなりに……あまりのドラマチックさに鳥肌立った!!　その後、“大晦日イベント”があると確信。お祭り騒ぎを起こすべく、発売日や取材体制を含めた“大晦日シフト”へ。

No.116 07年10月号

ある関係者いわく「kamipro最終号みたいな表紙だね」という感想。ズバリ、笑えないんですけど……。ンムフフフ！

Special 07年秋号

カミスペは3号続けて五味隆典が表紙に。この時点で五味の身体は大晦日に向けてかなり絞れているように見えたが……。

2007年
11»12月
を振り返る!

新体制移行で激動の一年だった『ハッスル』が『マニア』大成功で明日につながる爆発！

坂田&小池の「ラブ&ハッスル」で誰もが納得の感動エンディング！

PRIDE同様、一時は『ハッスル』も危機に陥っていた。07年最初の大会は3月。06年12月の『ハッスル・ハウス』2連戦から約3ヵ月の空白期間が置かれたことが、それを如実に物語っている。

もっとも、活動再開もじつに『ハッスル』らしいやり方だった。2月1日に髙田総統が、DSEが運営していた『ハッスル』をモンスター軍が買収したことを発表。買収金額は100億モンスタードルで、これが我々の経済価値としていくらになるのかはまったく不明。すべてにおいて前代未聞の買収劇となった。

その後、6月にハッスルエンターテインメント株式会社が発足、本誌編集長だった山口日昇が代表取締役となって、"現実レベル"（?）としても新体制に移行することとなった。さらに8月にはテレビ東京での地上波レギュラー放送も決定し、反撃態勢も整った。

リング上では、モンスター軍に買収されたセレブ小川が唐突に戦線離脱というハプニングはあったものの、従来の路線を強化しつつ新キャラクターや大物外国人なども交えて展開、ボブ・サップや曙までが登場してさらににぎやかかつ豪華に。そして坂田亘が交際中だった小池栄子と結婚したことも巧みに織り込まれ、そうした流れのすべてが11・25『ハッスル・マニア』に集約されていった。

すでに年間最大のビッグイベントとして恒例化していた『ハッスル・マニア』だが、今年はより大きな意味を持つことになった。この大会がテレビ東京で放送されることはもちろん、大会前には『大みそかハッスル祭り2007』開催、さらに同大会のテレビ東京でのゴールデンタイム中継も決定していたからだ。これにより、『ハッスル・マニア』に全力を傾けるのはもちろんのこと、『ハッスル祭り』へとさらなる勢いをつける意味合いも出てきたわけだ。

かくして『ハッスル・マニア』は、ザ・エスペランサーと"小池のダンナ"坂田の一騎打ちをメインに、モンスター・ボノ、ボブ・サップ、海川ひとみ、さらにはケロロ軍曹にマーク・ハントまでが入り乱れ、試合以外でもオリエンタルラジオに田中星児、はては"テレ東効果"でフードファイターのジャイアント白田までが登場する一大絵巻となった。

いまや既存のプロレス団体でも、お笑いタレントや他ジャンルの有名人が"絡む"ことは珍しくない時代となった。だが、『ハッスル』はこうした登場人物が「出てくればOK」という段階はとっくに通過している。そこに説得力と必然性がなければ、登場する意味はないのである。

その意味でこの『ハッスル・マニア』は、すべてのピースが納まるべきところに納まり、サプライズはサプライズとしてしっかりと機能していた。その極めつけが、メインでの「妖精さん」登場だ。「妖精さん」が登場することはわかっていたとしても、エンディングでは誰もが納得。それこそ、そこで掲げられた「LOVE&HUSTLE」が説得力をもって受け入れられた証拠だ。

観客動員も過去最多で、さらなる勢いを感じさせた『ハッスル』。この勢いが大晦日に、そして来年によりいっそうの拡大を見せることは間違いない。『ハッスル・マニア』の成功が、その予感を確証に変えた。

大晦日での地上波ゴールデン放送を前に、強力な追い風を巻き起こすこととなった『ハッスル・マニア』。一般紙・誌でも大きく取り上げられるなど、世間を巻き込む大イベントとなった。

話題賞 藤波辰爾

トラブル続きもあくまで笑顔 新団体名は「ドラディション」!

西村修の電撃離脱→全日本移籍で、スモールワールドから一気に火薬庫と化してしまった無我ワールド。さらに、「無我」の商標登録を西村が取っていたものだからドラゴン、ショック! そこで団体名変更だ。吉江は「ハッピープロレスリング」を提案、団体側からは「藤波ジャパン」「ドラゴンワールド」などの候補が挙がっていたが、結局「ドラディション」に決定! 発表でも笑顔のドラゴンだったが、この名前で、巻き返しのドラゴンスクリューなるか? ちなみに本誌編集部は城好きのドラゴンにちなみ「藤波幕府」を押していたが……ダメでした?

今期の主役 坂田亘

『マニア』のメインを見事完走! 公私ともに充実の一年!

たとえばほんの数年前でもいい。坂田亘が横浜アリーナのメインを張ることを、想像した者がいただろうか? しかも、紛れもない「主役」として。坂田は一般マスコミに取り上げられても、あくまで「小池栄子の交際相手」。『ハッスル』でもそのネタで引っぱられてはいたが、リング上の役割はあくまでも"いい仕事をするバイプレイヤー"だった。だが、今年の『ハッスル・マニア』では一気に主役に! 小川直也の無期限離脱、地上波放送開始などの状況、8月に婚約発表をしたことももちろんある。だが、一番はやはり本人の「天下を取る!」という気持ちの具現化なのだ!

『ハッスル祭り』にあやかって"ひさびさ"のゴールデン登場!

RGで振り返る2007

『ハッスル』で奇跡的な"活躍"を連発する一方、テレビでは見事に姿を見かけなくなった悲しき男・RG。だが、12.31『ハッスル祭り』がゴールデンタイムで放送されることが決定し、棚ぼた的にテレビ登場を達成! その発表記者会見で、またまたはしゃぎすぎたRGは「テレビ東京さんとRGは〜♪一生一緒にいてくれや〜」と例の奇妙なダンスを披露。さらに踊りながらズッこけるという、なんとも不安な予感を漂わせた。RGが現われる先では必ず不幸が起こるという都市伝説は有名だが、RG自身は一年の最後に芸能人としての幸せをつかんだのであった。

「大連立」の立役者として ファンの好感度グーンとアップ!

サダハルンバで振り返る2007

「政界で実現できなかった大連立を格闘技界で……」。このセンスこそが、サダハルンバ! こう言われると、なんだか格闘技界が政界より上のように見えるから不思議なんである。ともあれ『やれんのか!』に惜しみなく協力し大連立を提唱したことで、"天敵"ともいえたPRIDEファンからの支持率も急上昇! その後の会見でも魔裟斗らK-1代表選手を引き連れ「本気」アピール全開! このまま08年はサダハルンバを中心にすべてが回るのか? そして上昇した好感度はどこまで上がり続けるのか? ますます目が離せないサダハルンバなのであった!

今期のトピックス3連発

11/16 中邑らが"RISE"結成 結成会見でいきなり夕陽!?

中邑真輔、後藤洋央紀、ミラノコレクションA.T.、稔らが新ユニット結成! その名は"RISE"!『リアル・インターナショナル・スペシャル・エナジー』かつ『リアル・インターナショナル・スーパー・エリート』の略称でもあるという"RISE"は「新日本を上昇させる!」と結成会見で太陽を背に記念撮影。"朝日"ではなく、いきなり夕陽をバックにたそがれてしまう先行き不安な立ち上がりとなった。

©新日本プロレス

12/11 ホントにこれでいいの? 波紋を呼ぶプロレス大賞!

毎年、波紋を呼ぶ『東京スポーツ プロレス大賞』。MVPはノアの三沢光晴が初受賞。GHC王座の7度防衛が評価も、印象的な名勝負がないことに疑問の声も。また新人賞候補でなぜかIGFのタカ・クノウが次点だったり、上半期に大活躍した越中詩郎に一票も入らなかったり、選考委員の脚本家・内館牧子が「ドラマは私たちに任せてほしい」と『ハッスル』に噛みついたりと、どうにも謎ばかりの選考大会となった。

12/20 大きいことはいいことだ! IGFに大巨人が大集結!

一寸先はハプニング! IGFに突然の大巨人ブーム到来ッ! 12・20の有明コロシアム大会にモンターニャ・シウバ率いるブラジル巨人軍が参戦、これにサイモン猪木氏もサイモン巨人軍で対抗! と2メートル級の大巨人レスラーが続々と集結する異常事態。なぜかアントン総帥も「南極興行で価値が出るのはブラジル巨人軍!」と大巨人好きを告白。女だらけの水泳大会ならぬ、巨人だらけの有明大会となったのだった。

マット界 はみだし事件簿

▼11月23日 ZST旗揚げ5周年
▼12月2日 小橋建太がノア・武道館大会で復帰
▼12月8日 セーム・シュルトがK—1WGP3連覇を達成
▼12月12日 ストーカー市川がDEEP参戦。滑川康仁と闘うも、1ラウンド2分20秒、フロントチョークで敗戦
▼12月15日 ハイアン・グレイシーが謎の急死
※GK情報……11月↓"虎退治"は一方的な都合で欠席。ZSTの高校生ファイター・横山大輔&山田哲也を探検。12月↓ジャイアント白田を探検

編集長ジャン斉藤のマット界の一歩先行く!? 『kamipro』表紙の裏話

"大晦日シフト"のかいもあって、『やれんのか!』開催をスクープ。『GONKAKU』では、某スポーツ紙が抜いたことになってるが、まあ、おめえはそれでいいや。ウチはお祭り騒ぎをするだけ! というわけで、"お祭り男"青木真也がピンで初表紙。「ストイックな俺だけ見てくれ!」な格闘家が多い昨今、青木やGK隊長と絡む所くんとか"なんでもやりまっせ!"タイプは本当に貴重。タマもハミ出してくれるし。年内最終号は"魔王"秋山成勲! 4号にわたって黒魔王路線にアプローチしてくれた田中太陽氏はエライ。同企画担当の俺はもっとエライ!? ウチはほめれば伸びる雑誌です。

No.117 07年11月号

ロシア取材に行ったときにレッドデビルのワジムさんから直接もらった、ヒョードルのM-1写真。

Special 08年冬号

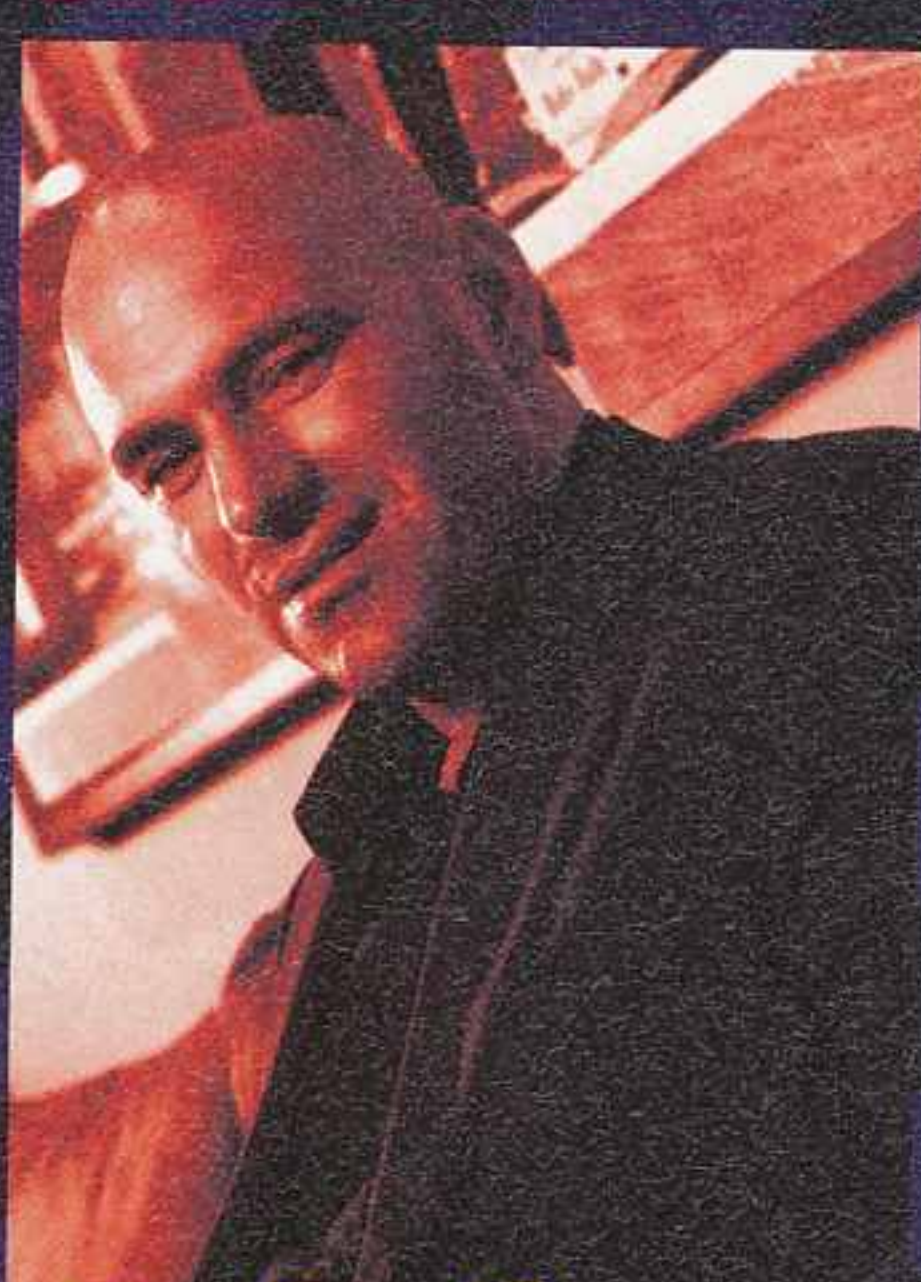
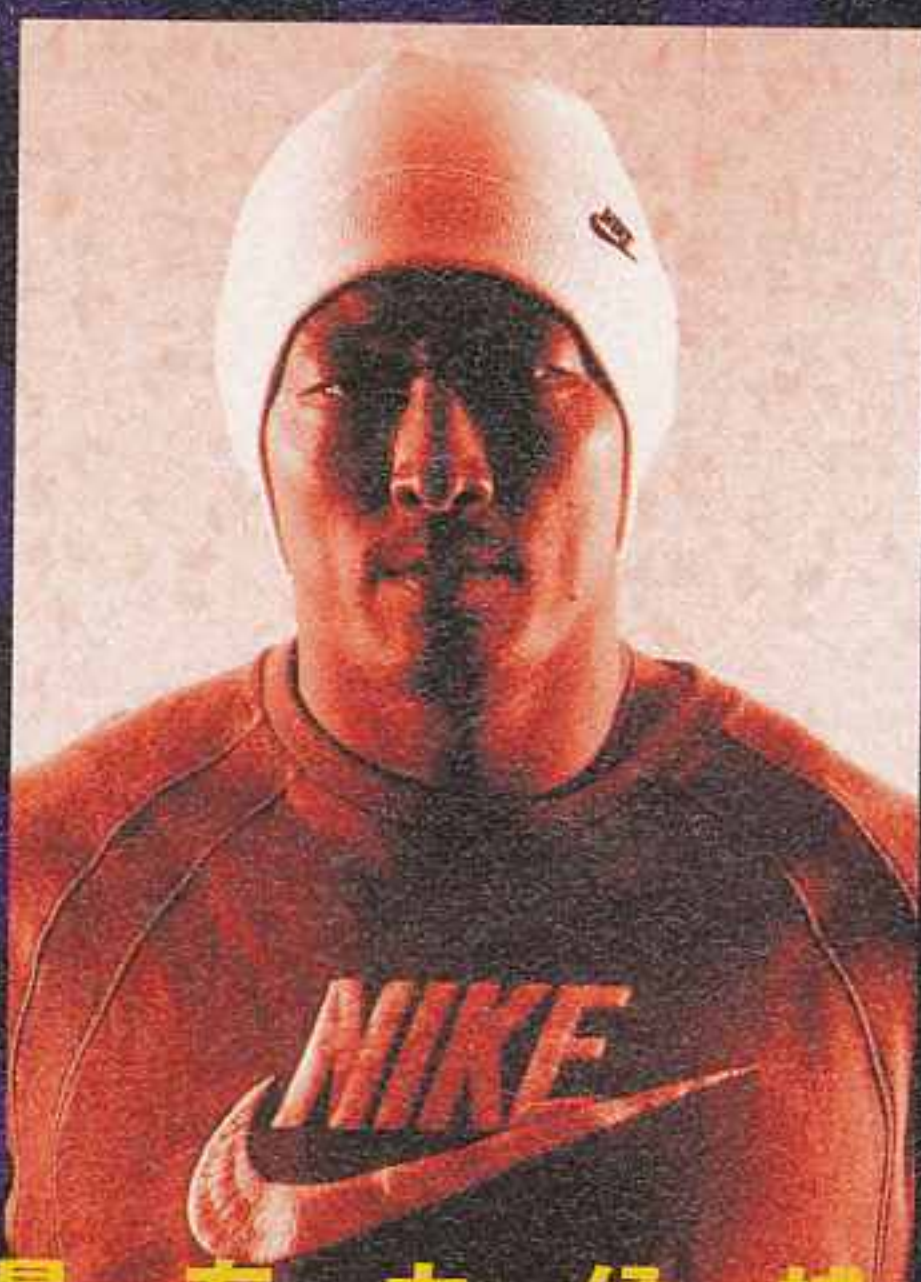
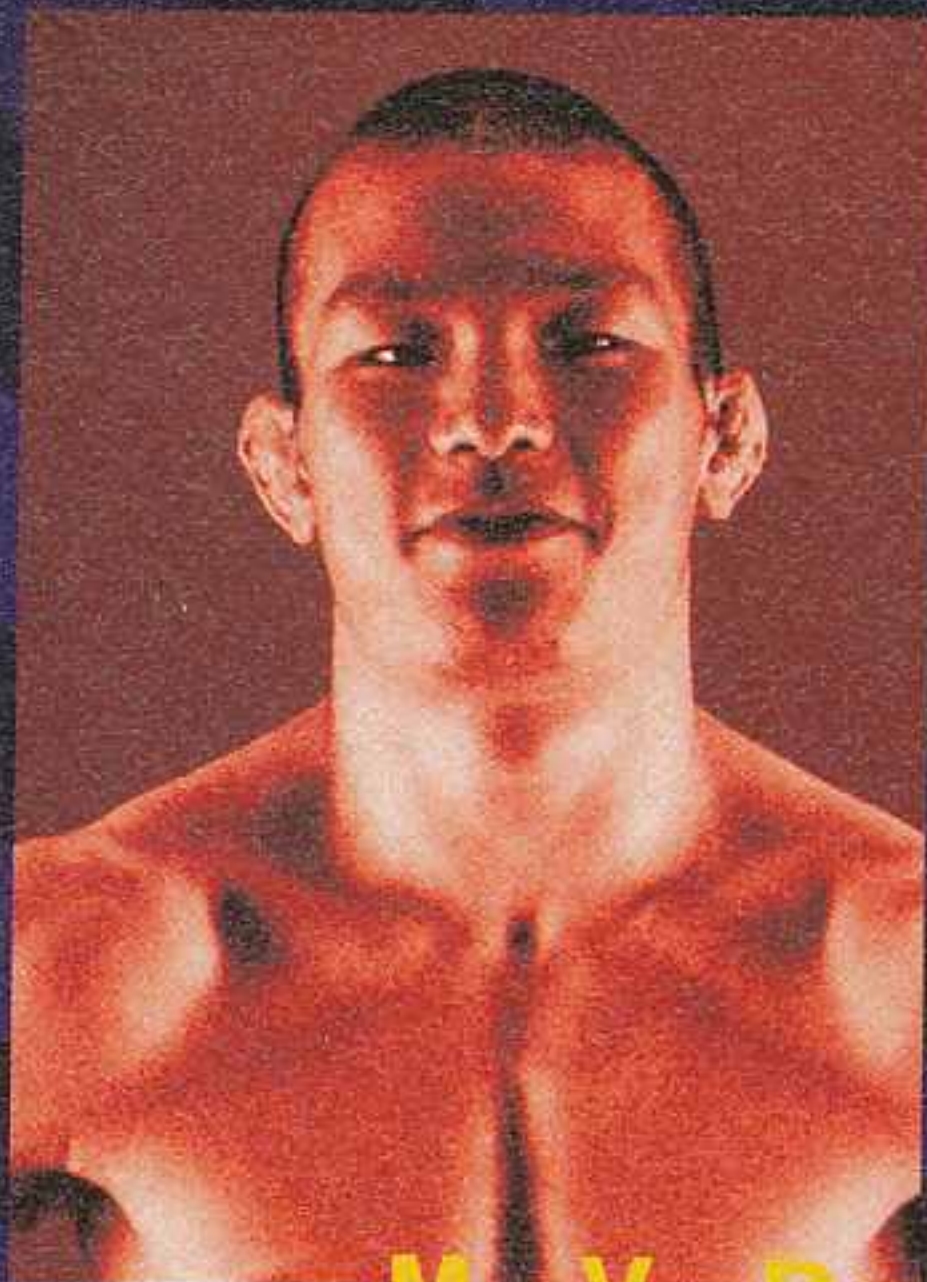
ワオ木さんのフンドシ表紙。これだから『kamipro』はいつまで経っても電車で読めない雑誌なんだ。

No.118 07年12月号

亀田パパではありません。10秒以上見続けると、ダークサイドに堕ちることをテーマにして作成しました。

今年もやってまいりました!!

kamipro Award

2007年グランプリは誰だ!?

MVP最有力候補はこの中にいる!?

毎年恒例、ワーストファイターも決めちゃいます!

ちなみに

07年 東スポ「プロレス大賞」受賞者はコチラ

【MVP 最優秀選手賞】三沢光晴
【ベストバウト 年間最高試合賞】小橋建太&高山善廣vs三沢光晴&秋山準（12・2ノア日本武道館）
【最優秀タッグチーム賞】真壁刀義&矢野通組
【殊勲賞】棚橋弘至
【敢闘賞】森嶋猛
【技能賞】関本大介
【新人賞】B×Bハルク
【話題賞】該当者なし
【カムバック賞】小橋建太
【女子プロレス大賞】該当者なし
【功労賞】カール・ゴッチ

1月22日(火)発売予定のkamipro 119にて大発表!!

07年上半期の結果はコチラ!

ベストバウト
ダン・ヘンダーソン vs ヴァンダレイ・シウバ
2.24『PRIDE.33』ラスベガス大会

ベスト興行
4.8『PRIDE.34』
さいたまスーパーアリーナ

MVP 越中詩郎

- 2nd ソクジュ
- 3rd ダン・ヘンダーソン
- 4th 榊原信行
- 5th 青木真也

これぞファイティング・オペラの真の姿!?

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

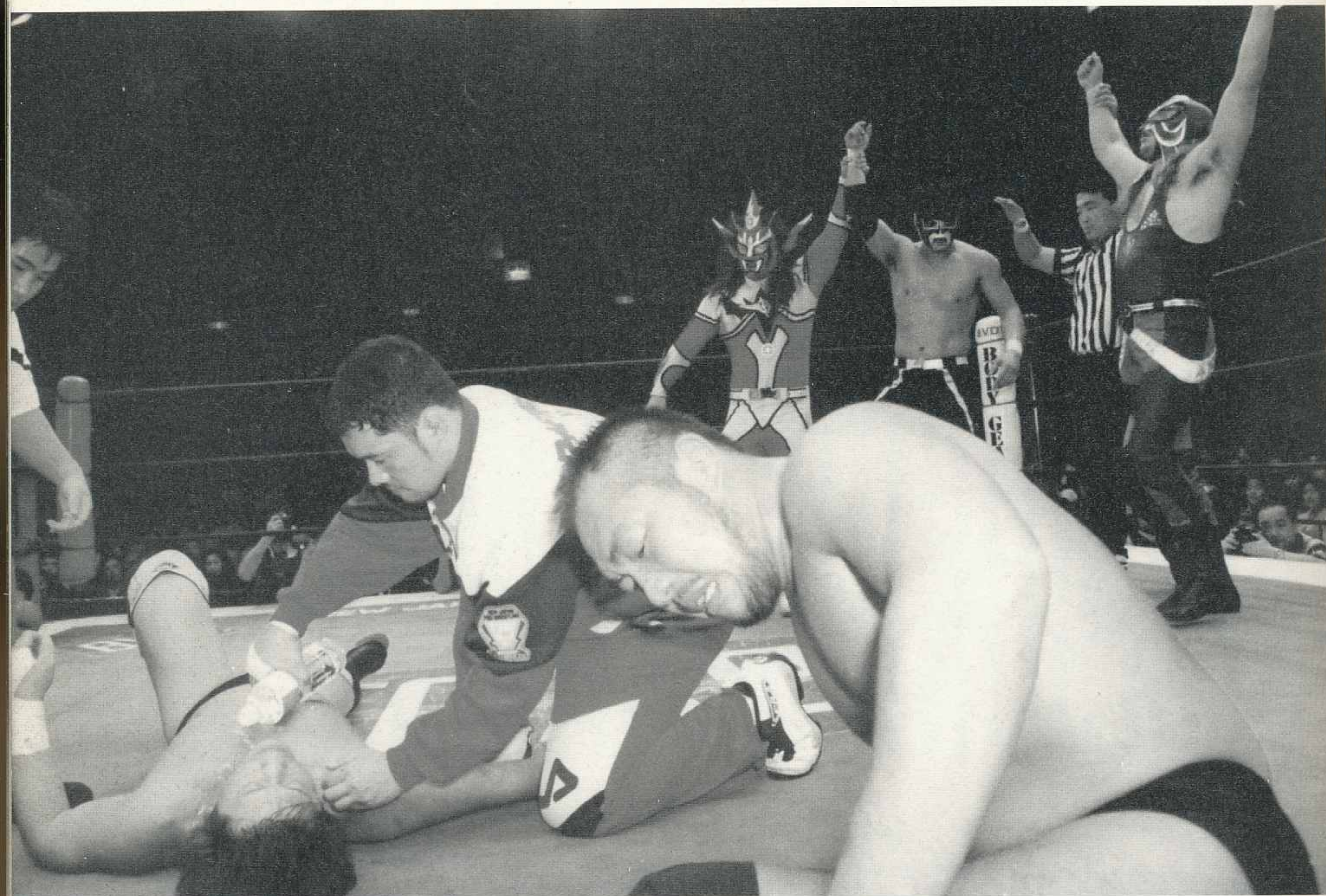
『ハッスル・マニア2007』は大成功!!　大晦日の『ハッスル祭り』もおそらく大爆発で幕を閉じているはずのファイティング・オペラ（この原稿は大晦日前に書いております）。芸能人だの特殊効果だのハデな仕掛けに目が奪われがちだが、じつは忠実なプロレスの姿がそこにあることをご存知だろうか。え？　知らないって。では、カレーを大食いしながら、この特集企画を読みましょう！

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

マットに頭をぶつけてピョンピョン跳びはねるだけがプロレスじゃないんです!!

TAJIRI

聞き手／坂井ノフ　聞き手／坂井ノフ撮影／平工幸雄、山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント

90年代の新日本プロレス黄金時代の一翼を担ったジュニア戦士たち。この素晴らしきムーブメントは意外なかたちで現在のマット界につながっている。

日本のプロレスは奇形な進化を遂げているような感じがする

TAJIRI　今日はなんの話をすればいいですかね。（CIMAが表紙の『週刊プロレス』のコピーを見ながら）「プロレスに限界なし」ってことですかね。

――でも、そのCIMA本人は「もう限界や！」って言ってますよ。

TAJIRI　ハッハッハ！　でも、ある意味、限界がきてますよね、プロレス。

――それはどういうことですか？

TAJIRI　いやね、ちょっと前に、プロレスマスコミから高評価を与えられている某団体の選手の試合を初めて観たんですけどね。もう完全に引いた！　なんじゃこれ⁉　って。もう試合構築の基本の「き」の字も知らないんですよ。

――ちなみにその選手って……。

TAJIRI　○○○○の○○選手です。

――ああ、確かにプロレスマスコミやファンからは高評価な選手ですねえ……。

TAJIRI　とにかくヒッドインですよ！　相手をトップロープに乗っけて、登って何をするのかと思ったら、失敗して二人とも真っ逆さまに落ちちゃって。

――うわっ～！　それは危ないですねえ。

TAJIRI　そのあと普通に起き上がってラリアットをやって勝っちゃう。もう意味がわかんない。サイコロジーはゼロだし、ストーリーはないし。それなりに体力はあって技の当たりも強いんだけど。あんな試合をKUSHIDAやチエがやったら、安生さんが怒り狂ってもう大変ですよ!!

――説教だけでは済まない（笑）。いまのプロレスって、とにかく技をどれだけスピーディに繰り出すか、どれだけ当たりが強いか、どれだけ危険かみたいなことを勝負してるじゃないですか。

TAJIRI　最悪ですね！　やってる側がそれをプロレスだと思ってるんでしょうけど。

――その源流をたどると、どのプロレスになるんですかね。

TAJIRI　やっぱり90年代の新日本プロレスのジュニアになるのかな。

――当時の新日本ジュニアから派生したものでいえば、WWEのエディ・ゲレロやクリス・ベノワもそこに当てはまりますよね。

TAJIRI　そうですね。だけどエディたちは、ちゃんとしたアメリカンプロレスの基本を持ってたじゃないですか。だから、正常なかたちで発展していきましたよね。レイ・ミステリオなんかもそう。

――しっかりメリハリはついてますね。

TAJIRI　もちろん、当時の新日本プロレスは素晴らしかったですけどね。やっぱり日本はね、土地柄なのか閉塞的な社会で、奇形な進化を遂げているような感じがするんですよ。

――いまのプロレスは、新日本ジュニアの奇形ですか（笑）。

TAJIRI　だって奇形が多いですもん、試合としては。

――要するに、いかに危険で、いかに飛んで動きまくるかという。

TAJIRI　意味わかんないですよ。ボクだって「なんでこんなことやってるの?」って思って見ちゃいましたからね。それだったら総合（格闘技）のほうが絶対にわかりやすいですよ。だって足を痛めたら必然的に足を狙うじゃないですか。

――そこは理にかなってますよね。

TAJIRI　でも、ボクもそんな〝意味のわからないプロレス〟をやってた時期があるんですよ。キャリア5年目ぐらいまでそうだったかな。でも、いろんな一流選手を見てきたから言えるんですけど、プロレスの成長段階ではそれはまだ幼児期ですよ。まだ成熟以前です、そんなスタイルは。

――ハイスパートなプロレスは成熟以前!

TAJIRI　ええ。「メキシコが世界で一番レベルが高いんだ」って、5年目までボクはそう思ってたんですよ。ところが違うんですよ。やっぱりWWEが一番なんです、間違いなく。それがわからないうちはまだプロレスの幼児なんですよ。

――その幼児期を抜けると、一人前になるんですか?

TAJIRI　まあ、簡単に言ってしまえば、一流のレスラーというのは何かというと、やっぱりお金を稼げること、そしてお客さんを呼べること。この二つを満たしているレスラーというのは、絶対に〝技だけの試合〟をやらないんですよ。必ず表情や仕草だとか、あと誰もが納得できる整合性のあるストーリーを見せていくもんですよね。たとえばメキシコでも凄い飛び技を使うことで一時的に人気がある選手はいますけど、ホントに人気が安定している選手というのは、（エル・）サタニコやネグロ・カサスにしろ、飛ぶだけの試合じゃないんですよ、絶対に。ミステリオの試合だって飛んだり跳ねたりだけじゃないんですよ。

一流のプロレスラーというのは絶対に〝技だけの試合〟をやらないんですよ

――派手なイメージがありますけど、実際は違う、と。

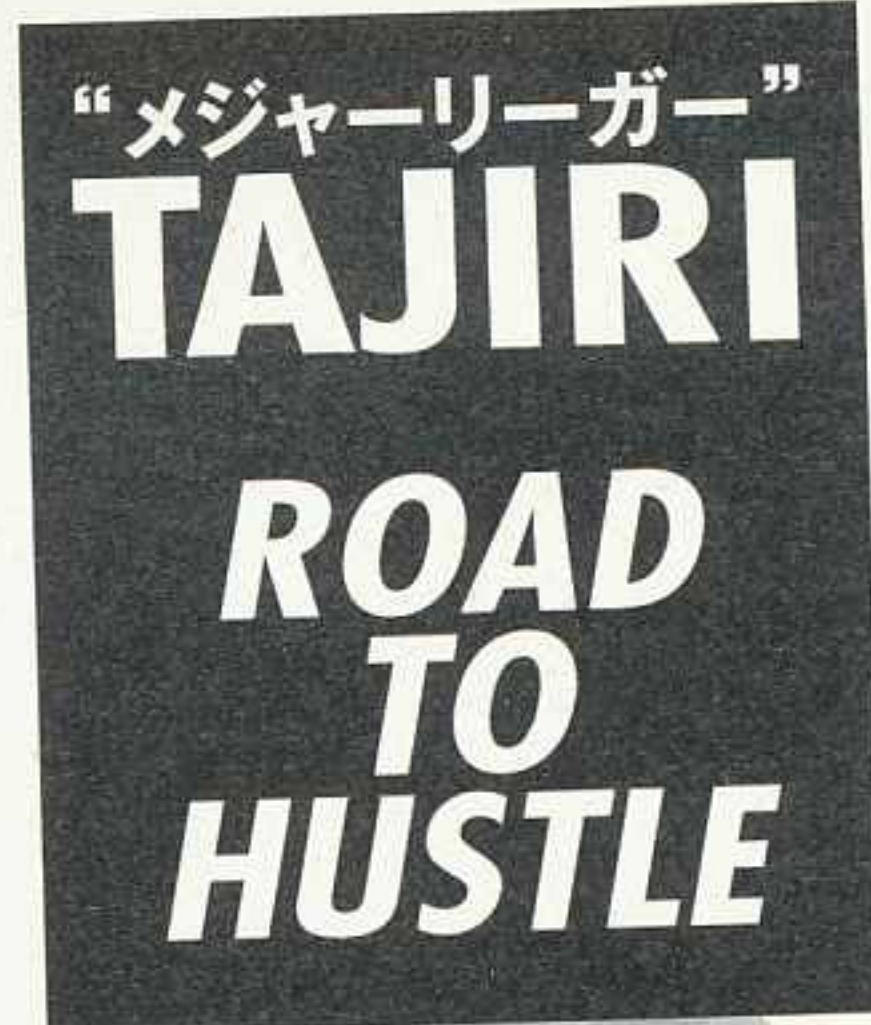
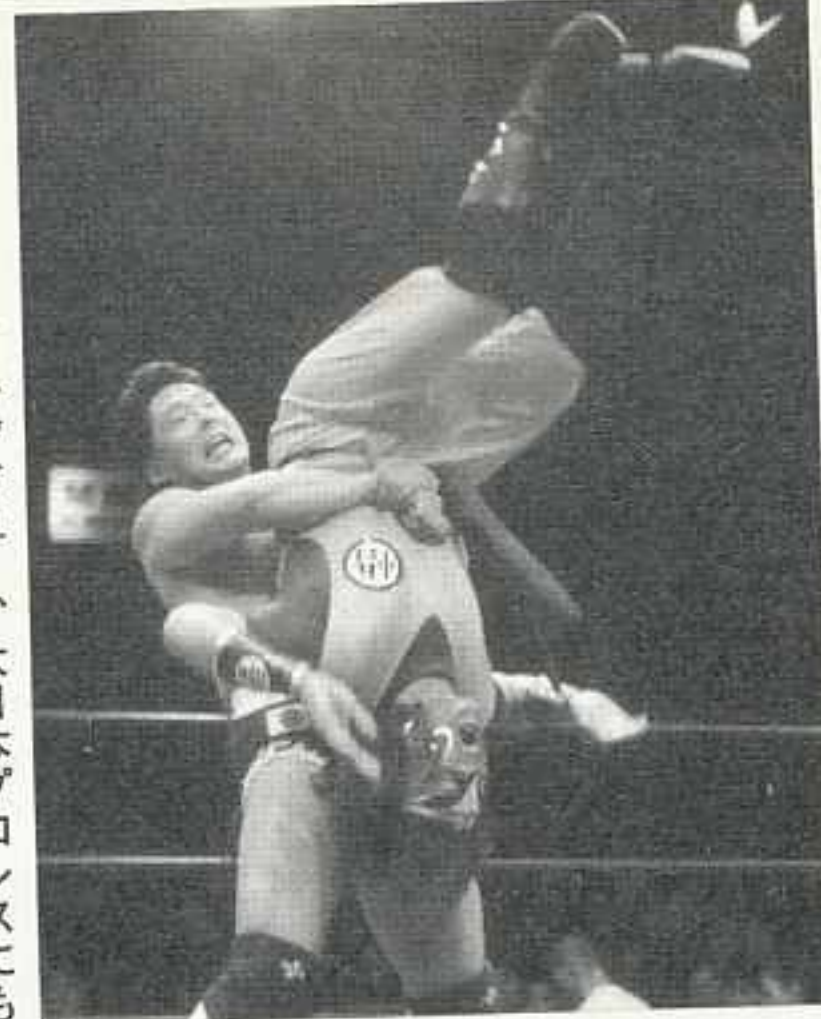
TAJIRI　たとえば、ミステリオは身体が小さいじゃないですか。大きな相手をロープに振ることもできないわけですよ。だから、いかにその相手をロープに振るか、あるいは振られたあと、どうやってやり返すかということを中心に見せてるんですよ。小柄なレスラーが大型レスラーに立ち向かっていくうえで、理論的な攻め方、勝ち方を追求して、徹底的にそれが合理的にできているのがミステリオの試合なわけで。

――そういえば、ミステリオが華麗に飛ぶのは試合の終盤が多いですね。

TAJIRI　そうです。だからWWEの試合っていうのはホントに理にかなった試合なんですよ。で、『ハッスル』の試合もそうなんですよ。でも、一部のマスコミは「『ハッスル』は手抜きだ!」みたいな書き方をするじゃないですか。もう、プロレスのどこを見てるんだって!『ハッスル』の整合性のある、理にかなった試合を見て「プロレスじゃない」と言うなら、じゃあ何がプロレスだ? って逆に聞きたいですよね。やっぱりマットに頭から落っこちてピョンピョン飛ぶのがプロレスなんでしょうかね。

――あと、一番『ハッスル』を否定しやすいのがエスペランサーのレーザービターンなんですよ。『週プロ』の編集長いわく

メキシコ

ウルティモ・ドラゴン（浅井嘉浩）への憧れから、TAJIRIはメキシコへ渡り、単身ルチャ修行を行なっている。メキシコのレスリングは飛んだり跳ねたりというイメージは強いが、それ以外の部分（間や仕草など）でアピールするという部分にも着目した。

大日本プロレス

IWA JAPANでデビュー、大日本プロレスにも在籍したTAJIRIだが「稼げる真のプロレスラーになるため」にメキシコへと旅立っていく。インディー団体での経済的な苦労を経験しているからこそ、TAJIRIには上昇志向と稼ぐことに対する強い意志があるのだ。

“メジャーリーガー”
TAJIRI
ROAD TO HUSTLE

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

「肉体を使わない技を出された以上、これはプロレスとして扱えない」と。

TAJIRI　けど、プロレスってどんどん進化していくもんなんですよね。たとえばエド・ストラングラー・ルイスの時代に、ラ・ケブラーダなんてものはたぶん誰も想像できなかったし、それこそレーザービターン級の衝撃だったんじゃないですか。

――もしかしたら、全否定されたかもしれませんね。「ラ・ケブラーダなんてプロレス技じゃない」とか（笑）。

TAJIRI　ありえますよ! だからね、なんでも進化しているわけで。ボクは思うんですけど、この前の『週プロ』の「カミングアウトしよう」っていう高田さんの表紙にしても、2～3年前ならこの雑誌が「カミングアウト」なんて活字を誌面に載せるなんて流れは誰も考えられなかった。それを2～3年後にやってるんですよ。だから感化されてないようでいて、だんだん変わってきてるんですよ、確実に。

――変わるのは全然ありだと思うし、あとは進化しているものを受け入れるか、受け入れないかだと思うんですけど、現時点のプロレスマスコミには『ハッスル』は受け入れる姿勢はないということなんでしょうね。

TAJIRI　でも、時間の問題でしょう!（キッパリ）。『ハッスル』を観てからこの世界に入った記者が書くようになったら、もうハチャメチャになるんじゃないですか。

――よけいな縛りもないでしょうし（笑）。

TAJIRI　あと気になるのは、いまはエンターテイメント的なことをやってる団体がほかにあるじゃないですか。そこの

団体はほめて書くくせに、なんで『ハッスル』だけは批判的に書くのかがわかんないですよね。

――まあ、書いてる当事者もわかってないと思いますけど（笑）。

TAJIRI　おそらくそういう人たちはね、成功しそうな人のことが、メジャー化していくものが嫌いなんですよ、とにかく。

――そういうねじ曲がった清貧主義を持ってるかもしれませんねえ。

TAJIRI　結局、いつまでも「ボクだけのプロレス」であってほしいんですよ。そういう発想でやってるとね、ますますプロレスがダメになりますよ。それにビジネスを否定したら、それは趣味の世界ですよね。だったらみんなボランティアでやるしかないじゃないですか。

――その勇気はないんでしょうけど（笑）。

TAJIRI　だから『ハッスル』からプロレスを観始めた人はへんな見方はしないと思うんですけど、一部のマスコミはなかなか『ハッスル』に入ってこれないじゃないですか。そういう人には、ホントに表面的な印象で判断しないで、試合をじっくり観てほしいですよね。どれだけ合理的に整合性のある、理にかなったプロレスをやっているのかってことを理解してほしいんです。

――でも、肝心のプロレスラーの中にも、理解力がある人とない人に分かれてますよね。

TAJIRI　それはやっぱり、外国で飢え死にするかもしれない経験をしないと。日本にいると、実家にいたり、適当にバイトしながらでもプロレスはできるじゃないですか。ボクもECWに入ってから、だんだんいまみたいなスタイルになっていくんですけど、それもホントに食うためにはどうしたらいいか？　って研究した末にたどり着いたんですよ。

――食っていくためのスタイルですか。

TAJIRI　そうなんですよ。必要なのはキャラクターであり、そこにいるだけでおもしろいのがホントのプロレスラーなんですよね。ボクはECWで飛んだり跳ねたりの試合を半年近くやってたんですけど、やっぱりそれじゃ上で使ってもらえなかったんですよ。やっぱり何か色がつくまでポーリー（ポール・ヘイマンECW代表）は見てたんでしょう。色がないとダメですよね、プロの舞台に立つ人は。

――キャラだけではないんですよね。「カラー」の色ではなくて、「色気」の色。

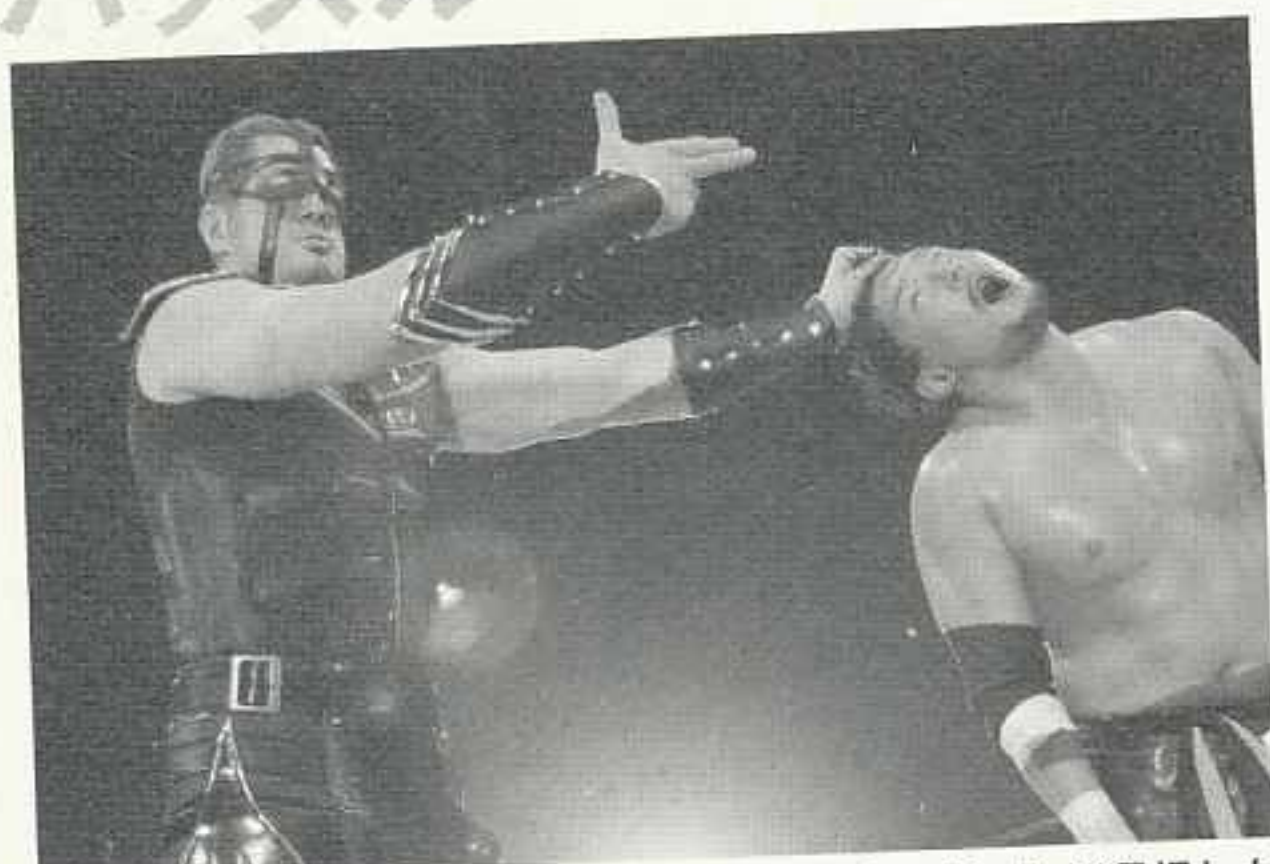
TAJIRI　そうなんです。キャラっていうのは目に見える部分だけでも成立すると思うんですよ。でも色（気）っていうのは感じるものじゃないですか、目で見るんじゃなくて。だからもっと深いものですよね。言ってみれば自分の心に触れてくるようなもの、それが色ですかね。どんな華麗な技をやるかとか、どんな危ない落とし方をするかとか、そんなことやったって目立ちもしないし、おもしろくもないし、客も食いついてこないし、お金も入らないし、おまけにケガをするし。

必要なのはキャラクターであり、そこにいるだけでおもしろいのがプロレスラーですよ

ECW

ビクター・キニョネスのつてでECWのトライアウトを受けたTAJIRIは見事に合格。ここで現WWEのスペル・クレイジーと幾多の名勝負を繰り広げる。当時ECWと提携していたFMWでもスペル・クレイジーが提供マッチを行ない日本のファンのド肝を抜いた。

WWE

世界最大のプロレス団体の中でTAJIRIは約5年間闘い抜いた。リック・フレアー、トリプルH、ストーンコールド、エディ・ゲレロ、レイ・ミステリオなどレベルの高いエンターテインメントプロレスの神髄に触れたことで、TAJIRIのプロレス哲学は確立されていった。

ハッスル

WWE離脱後、日本へ帰国した"メジャーリーガー"が選択したリングは『ハッスル』だった。テレビではとても放送できない"変質者"的キャラを演じるなど、移り変わりの激しいファイティング・オペラにおいて、欠かせない登場人物として定着している。

――いいことは一つもないですか！（笑）。

TAJIRI　一つもないですよ！　そもそもそんなのプロレスじゃないし。ホントにプロレスで稼いでる人って、相手にケガさせないんですよね。トリプルHの鼻に打つパンチなんか、2ミリ手前で止まるんですよ。

――もはや当たってるかどうかすらわからない（笑）。

TAJIRI　そういう意味では、これからのプロレスって、プロレスLOVEを持っていない映画評論家みたいな人に書いてもらったほうが、より発展的なものになるんじゃないかなと思うんですけどね。

――そこでちょうどいいテキストがあるんです。読売新聞ってご覧になりました？

TAJIRI　載ったのは知ってますけど、まだ見てないですね。

――12月2日付のラテ欄に『ハッスル・マニア』のコラムが載ってたんですよ。「レスラーの迫真の演技」っていうタイトルなんですけど。

TAJIRI　……（一通り読んで）なんか一般の新聞のほうが、よっぽど『ハッスル』の良さを伝えてますね。これを読んだほうがよっぽどプロレスを観に行きたいと思うんじゃないかな。

――そうなんですよね。限られた文字数だから凄くシンプルに書くじゃないですか。あと、悪く言えば「プロレスラーが笑い者になってますよ」というロジックがありますけど、べつにバカにしてるわけでもないですし。

TAJIRI　「だけどこれは凄いんだ」っていう感じは全体に出てますよね。これ、書いてる人がプロレスを好きなんでしょうね。

――で、一番最後の締めくくりで「この

トリプルHやショーン・マイケルズが海川ちゃんの試合を観たら絶賛しますよ。絶対に！

開き直りの前には低俗だという非難もおそらくむなしい」と。

TAJIRI　まさにそうですよ！　だから海川（ひとみ）ちゃんの試合とか「アイドルが試合なんかして」っていうのは、それこそ低俗な非難で。あの試合の整合性を見れば、そんな非難はむなしいはずだと思うんですけどね。きっとトリプルHやショーン・マイケルズがあの試合を観たら絶賛すると思いますよ。頭から落としたり、次から次に意味もなく派手な技やるプロレスは、途中で観るのをやめると思うんですけど、「これはディーバのお手本にする」くらいのことを言うと思いますよ。絶対に‼

――島田二等兵にしろ、海川ちゃんにしろ、表現力が凄かったですし。

TAJIRI　うん。ボクらが表現しているものを感じてほしい。ボクはね、ホントにこの『ハッスル』が世の中に広まったらね、社会がよくなってくんじゃないかと思うんですよ。

――しゃ、社会発展ですか⁉（笑）。

TAJIRI　うん。人間が人間らしい心を取り戻して。いまの若い子がへんなことばっかりやるのは、未来に対する明るい希望が持てないからじゃないですか。だから、生きてれば素晴らしいんだよっていうことを表現すれば、世の中がよくなっていくんじゃないかと思うんですよね。プロレス界を復興させるなんてそんなのちっちゃいことであって、じつは世の中全体をよくするために『ハッスル』をやってるんじゃないかとボクは思ってるんですよ、突き詰めると。

――『ハッスル』にはカッコいい大人像がいろいろありますからね。RGが「イジメられっ子には、俺を見ろと言いたい」っていいこと言ってましたし（笑）。

TAJIRI　そうそう。この中にはいっぱいいるでしょ、カッコいい大人の像。マンガ雑誌とか見ても、カッコいいキャラはいっぱいいますけど、実際にはなれないんですよね、生身の人間では。たとえば『デスノート』なんて凄くおもしろいんですけど、あれに憧れても人殺しにしかなれない。でも、昔の『タイガーマスク』や『あしたのジョー』は、実際になれたじゃないですか。

――レスラーやボクサーを目指したり。

TAJIRI　だからそういうものがいまの世の中に足りないですよね。エスペランサーみたいな人間は世の中にいないですけど（笑）、やってるのは生身の人間ですからね。

――確かにそうですね。頑張れば、エスペランサーになれる！（笑）。

TAJIRI　もし『ハッスル』の一員になれば、ファンタジーの世界の一員になれるわけじゃないですか。この世にいながらファンタジーの世界に身を置けるっていうのは、誰でも凄くやりたいことだと思いますよ。

――いいですね。頑張ればファンタジーの一員になれるって。

TAJIRI　でも、みんなにチャンスがある！　それこそ〝『ハッスル』のプロレスに限界なし〟！　そういう目で『ハッスル』を観て楽しんでほしいですね。

【07年12月3日／都内某所にて収録】

「アイドルがプロレスに挑戦！」なんていう色眼鏡で見られがちな海川ひとみの試合だが、動きから個性まで、プロレスにあるべき要素をしっかりと押さえている。まあ、色眼鏡で見ても楽しめるのだが。

TAJIRI■本名、田尻義博。1970年12月29日、熊本県出身。94年、IWA JAPANのリングでプロデビュー。大日本プロレスを経て、メキシコへ渡る。その後、アメリカのECWでトップとして活躍し、05年まで世界最大のプロレス団体WWEを主戦場としていたスーパースター。「ハッスル」ではサイコなキャラを演じることが多い。175センチ、94キロ。

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

無意味なものは排除して大会全体をデザインし直すそれが『ハッスル』のバック・トゥ・レスリングです

アン・ジョー司令長官

聞き手／坂井ノブ　撮影／平工幸雄、山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント

地味な技で観客を魅了するためには、サイコロジーを駆使して闘うしかない

"ミスター300%"
アン・ジョー
司令長官
ROAD TO HUSTLE

ハッスル発 バック・トゥ・レスリング Back To Wrestling

——先日の『ハッスル・マニア2007』の評判を聞くと、「泣いた」というファンが非常に多いんですよ。

安生　そうでしょう。だって俺も泣いちゃったからね！

——あ、そうだったんですか（笑）。

安生　バックステージで泣いちゃったから、不覚にも。しかもまだ（イベントを）やってる途中で。だからサングラスしててよかったなと思って（笑）。

——ハハハハ！　そんな裏話があったんですか！

安生　だって、裏でモニターを観てたらさ、妖精さんが跳ね返したじゃん、レーザービターンを。そのときの「いまこそハッスルするのよ！」っていう、あのセリフでブワーッてきちゃって。敵側が泣いてちゃマズイんだけど（笑）。

——確かに（笑）。

安生　でも、あのセリフを聞いたら『ハッスル』の歴史が走馬灯のように頭の中でグルグル回ってね。「いまこそハッスルするのよ！」なんて、坂田（亘）だけじゃなくて自分にも言われてるような気がしたからね……（しみじみと）。心に響いたなぁ。

——そう感じた選手や関係者は多いんでしょうね。

安生　しかし、「いまこそハッスルするのよ！」っていうのはホントに名言だね！　だいたい「ハッスルする」という言葉ってよく使われているけど、具体的にどんな意味を指してるのかわかんないじゃないですか。

——まあ、なんとなく肌で感じてきたわけですよね。

安生　そうそう。だからその意味が具体的じゃなくとも、凄く心に響きましたね、俺の中では。

——「ハッスルする」という、意味のわからないことをずっとやってきた安生さんからすれば（笑）。

安生　そうそう（笑）。誰かに「ハッスルするって何？」って聞かれても、「この3年間を観てくれ！」としか言えないし。これは結果論だけど、今回の『ハッスル・マニア』でやった内容を大晦日にやるべきだったのかなと思いますけどね。こんな素晴らしい完結編をやっちゃって、大晦日はどうすんの？　っていう感じですよぉ。

——しかも、あの無敵のエスペランサーも倒されちゃって。

安生　あれは試合内容も驚いたね～。『ハッスル』が目指しているものの究極型ですよ、ある意味で。

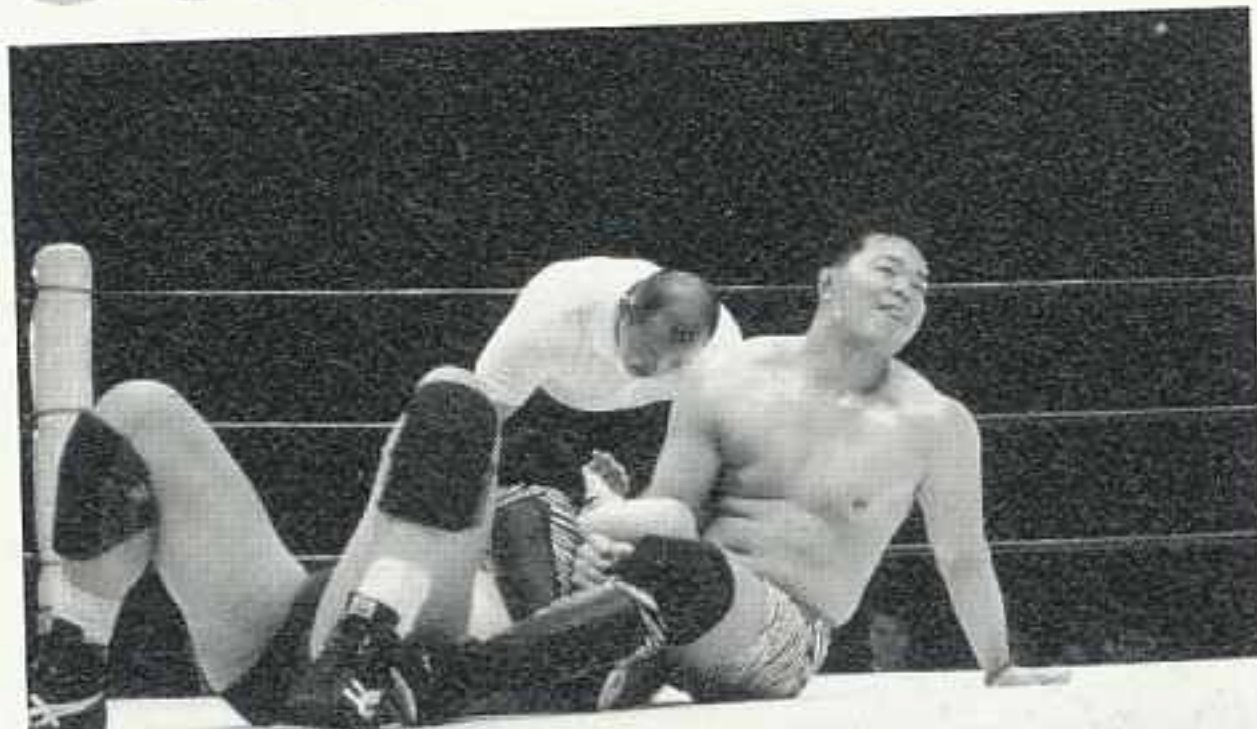
——あの試合が究極型！　具体的にはどんな部分ですか？

安生　ほとんど技を使うことなく12分という時間を使いきって、技に頼ることなく存在感を雰囲気でもっていく。つまんないと思った人もいるでしょうけど、それでも会場の熱を途切れさせないであれだけやりきったんだから。やっぱりエスペランサーというのはハッスル・レスリングの象徴です。

——ハッスル・レスリング！　名言ですね、それも（笑）。

安生　あれこそハッスル・レスリング。だって攻防自体は5秒ぐらいで終わっちゃったじゃないですか。

第二次UWF

第一次UWFでデビュー後、新日本プロレスを経て第二次UWFに旗揚げから参加した安生洋二。前座から中堅で活躍しながら、陰の実力者としての評価を高めていく。ムエタイのチャンプア・ゲッソンリットと互角の勝負を繰り広げるなど伝説を残している。

Uインター

第二次UWF分裂後、安生は高田延彦の新団体UWFインターナショナルでリング内外で活躍。Uインターは桜庭和志、金原光弘、高山善廣など現在のプロレス界・格闘技界を席巻するスターを輩出。彼らのサイコロジーはここで磨かれていったのだ。

——確かに試合自体はもの凄くシンプルでしたよね。

安生　でも、その奥に秘められた"間"を語り尽くしたら、本一冊書けるぐらいのものになりますよ。技だけをつまんで書いちゃうと、ホント短いもんです。

——パンチにキックに地獄突きにレーザービターン……、非常に限られた技しか使ってなかったですよね。

安生　それだけエスペランサーの表情や間が絶妙だったし、坂田も雰囲気を壊すことなく頑張ったんじゃないかと思いますね。

——そのエスペランサーは常に無表情でしたけど、その一点だけでいろんなものを表現していたんですね。

安生　うん。画面を通したら凄くわかりやすいんですけど、それをライブで観客相手に表現できたというのはちょっと凄いんですよね～。そういう意味で『ハッスル』に出ている演者っていうのは、俺はストーリーテラーだと思うんですね。

——ストーリーテラーの一番重要なポイントを挙げるとすれば？

安生　まずは声がよく通ること！

——エスペランサーはしゃべらないじゃないですか！（笑）。

安生　ハハハハ！　エスペランサーは別格ですから。もしくは表情が豊かであること。それから肉体的な資質がついてくる。まずは声と顔ですね。

——へえ～。一番肝心に見られがちな肉体的な資質は最後なんですか？

安生　そうですね。とにかく表現力の部分がある程度ないと、ただ蹴りが強いとかそういうことよりも、顔の動き、声、表情っていうのが凄く大事だと思うんですよね。ただ、逆のパターン

もあると思いますよ。肉体先行で表現力があとについてくるとか。でも表現力が飛び抜けてたら、たいていは問題ないですよね。

――たとえば、海川（ひとみ）さんみたいに運動経験がまったくなくても表現力さえしっかりしてれば、ハッスルでも通用する、と？

安生　海川ちゃんは運動経験はないけど、肉体的な資質はありましたよ。運動神経的なものはかなりいいもの持ってると思いますね。あと泣き顔がいいじゃないですか。

――それにアニメ声だし（笑）。

安生　それは女の武器としては最高なものを持ってますよ。で、今回の海川ちゃんの試合を引っぱったのはやっぱり島田（二等兵）さんですね。ホントに島田さんを大絶賛したい！　想像以上の表現力を持ってました（笑）。

――まあ、あそこまで〝小悪党〟を演じられる人は日本にいませんね（笑）。

安生　そうなんですよねぇ。印象としても凄く残ってるじゃないですか。島田さんには表情と声と動きがちゃんとある。それでもあの役割は、なかなかできることじゃないけど（笑）。

――PRIDEのレフェリーだったんですけどね（笑）。

安生　PRIDEのレフェリー兼ルール・ディレクターも『ハッスル』のためにやってきたんじゃないのかなって。進化して進化して、あのワンショルダーのコスチュームにたどり着いた（笑）。

――ハハハハハ！　当の本人は「プロレスはサイコロジーが重要だ。これはフロリダのマレンコ道場で教わった」って言ってるみたいです。

安生　ああ、プロレスで一番重要なのはサイコロジーですから。『ハッスル』はロックアップがあるわけでもないし、トップロープから雪崩式の技がバンバン飛び出すわけでもないし、サイコロジーだけで闘ってますから。そのへんでいえば、プロレスの真の姿に一番近いのは、『ハッスル』じゃないのかなって。本当にそう思ってますけどね。

――なるほど。でも、さっきのエスペランサーの話もありましたけど、『ハッスル』の試合って昔のプロレスみたいにシンプルですよね。

安生　そうなんですよ。たとえば、ヘッドロックだけで間を持たせるには表情がないと絶対に無理なんですよね。「微妙に効いている。もっと強く絞れば」「あともう一押しで勝てる！」っていう表現をヘッドロック一つで表現するのが本当のプロレスであり、そして『ハッスル』ですよ。

――そうすることによって、この技が出たら試合が終わってしまうという緊迫感や重みも出てきますよね。

安生　相手の必殺技が決まらないようにあの手この手を使って防ぐわけじゃないですか。「あ、必殺技がきそう！　だったらこう避けよう」って。そうやって見せるのが本来のプロレスですから。いまプロレスって言われるものは、お客さんを飽きさせちゃいけないということで、それぞれの団体が工夫をして、お客さんのニーズに合わせて変えていったものであって。極端なことを言えば、本来のプロレスの姿ではないわけですよ。

――なるほど。つまり、本来のプロレスの姿に各団体の〝色〟がついてるわけですね。

安生　そうなってますよね。大日本プロレスは大日本プロレスのプロレスがあるわけだし、ノアにはノアのプロレスがあるわけだし、『ハッスル』なら『ハッスル』のプロレスがある。で、『ハッスル』を作ってる人たちは、大技連発プロレスのおもしろさを感じない人たちの集まりみたいなもんですから。だから島田さんはよく「バック・トゥ・レスリング」って言うんですけど、まさに『ハッスル』ってバック・トゥ・レスリングしつつ、それプラス客層のニーズに応える要素を足してるんですよね。

――そういえば、安生さんがかつて在籍していたUWFインターも、かなりバック・トゥ・レスリングな要素が強い団体でしたよね。

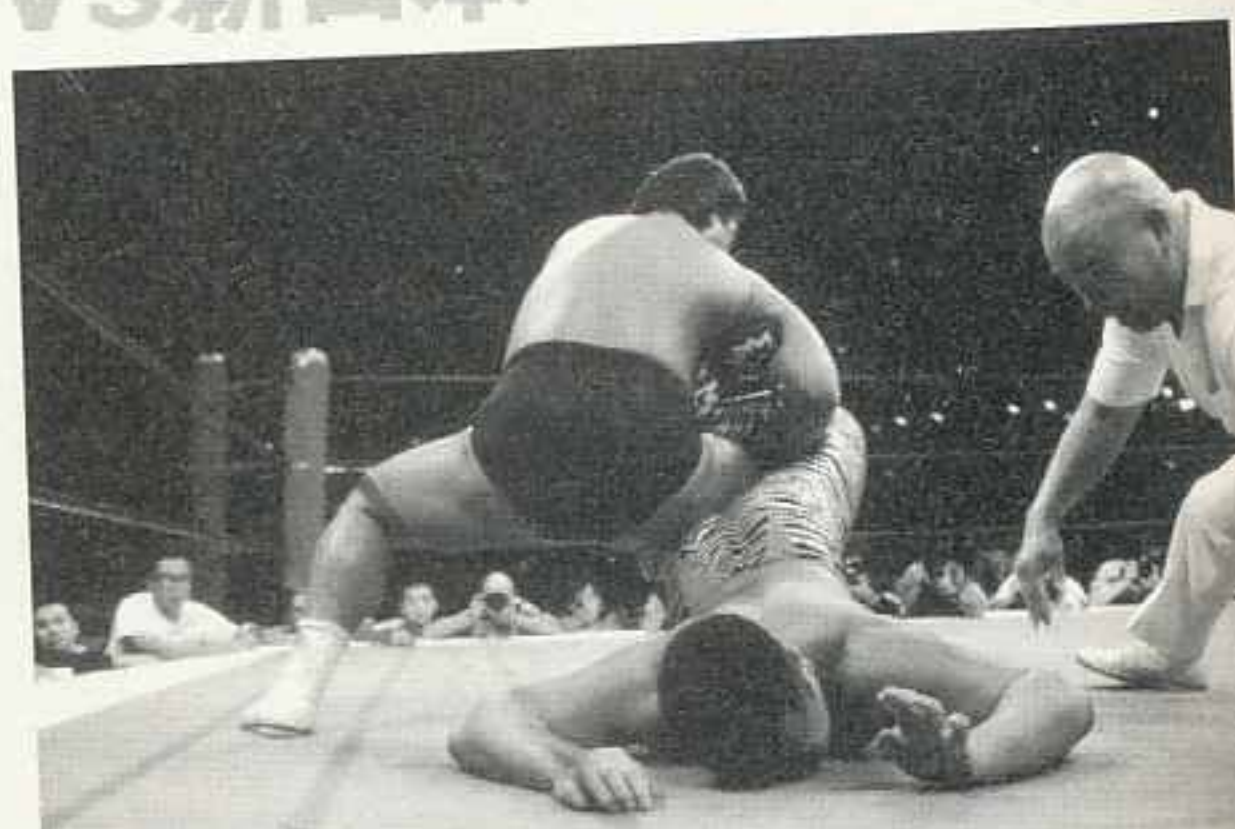
安生　バック・トゥ・レスリングなんですよ、ホントに。それでUインターの色を多少、加えてたんですね。それはムエタイのキックであったり、もっと完成度の高まったサブミッションであったり。そこにはプロレス流サイコロジーが当然あって、やっぱり出せる技が限られてるわけですから。

――U系の試合もシンプルですよね。

安生　地味な技で観客を魅了するには何が必要か？　サイコロジーで闘うしかな

相手の得意技が決まらないように防ぐ そうやって見せるのが本来のプロレスです

WJ

Uインター～キングダム崩壊後は全日本プロレスなどにフリーの立場として参戦。03年からはWJにもフリー参戦。リングの職人として、どこの団体でもいぶし銀の活躍。そして、我らがアン・ジョー司令長官として04年から『ハッスル』に登場。

ゴールデンカップス

安生は新日本、WAR、冬木軍との対抗戦で大暴れ。高山善廣と山本健一（当時）を率いてゴールデンカップスを結成。バラエティ対応可能なキャラで一般層へ浸透した。ちなみに、この写真は雑誌『リン魂』でダチョウ倶楽部と対談したときのもの。違和感がない。

vs新日本

リングス・前田日明との舌戦で「前田さんには高田延彦を出すまでもない。僕でも200パーセント勝てる」と言い放って安生洋二が初めてブレイクした。アン・ジョー司令長官のキャラクターの原型は、95年の新日本との対抗戦から大爆発した。

いんですから。だからある意味、Uインターで勉強してきたバック・トゥ・レスリングがいまの『ハッスル』につながってるんだと思いますよ。

――へぇ～っ！　それは意外なエピソードですねえ。安生さんがプロレスに開眼したのって、てっきりUインター以降なのかなと思ってたんですよ。新日本プロレスに上がったり、冬木（弘道）さんとやったときなのかな、とか。

安生　いや、まったく違いますね。Uインターからですよ。だって、まったくサイコロジーのないU系の試合を想像してくださいよ。きっと、もの凄くつまんないですから！

――確かにそうですね（笑）。

安生　最高につまんないですから（笑）。もう観てられないですよ、ホント。

――安生さんはUインターでは桜庭さんとか若手を指導する立場にあったと思うんですけど、そういうところは重点的に指導してたんですか？

安生　そうですね。当時は口酸っぱくサイコロジーを言い続けてましたね。1万5000人クラスの会場で伝えるためには、まず見せ方を考えないと。そうじゃないと単純につまんないものになりますからね。

――そういう意味で安生さんがプロレスのサイコロジー面で影響を受けたのって誰ですか？

安生　わかんないなあ。誰だろうな？　サイコロジー……誰に影響受けたかなあ？　………ヒロ斉藤かなあ？

――ハハハハ！　意外だなぁ。新日本プロレス時代ですか？

安生　違うなあ（笑）。ちょっと待ってください、誰だろうなあ？　まったく見当もつかないですねぇ。

――それは安生さんの地の部分だったりするのかもしれないですね。

安生　そうかもしれないですね。

――いま安生さんは『ハッスル』でも指導される立場ですが、こちらでも一番強調されるのはサイコロジーの部分だったりするんですか？

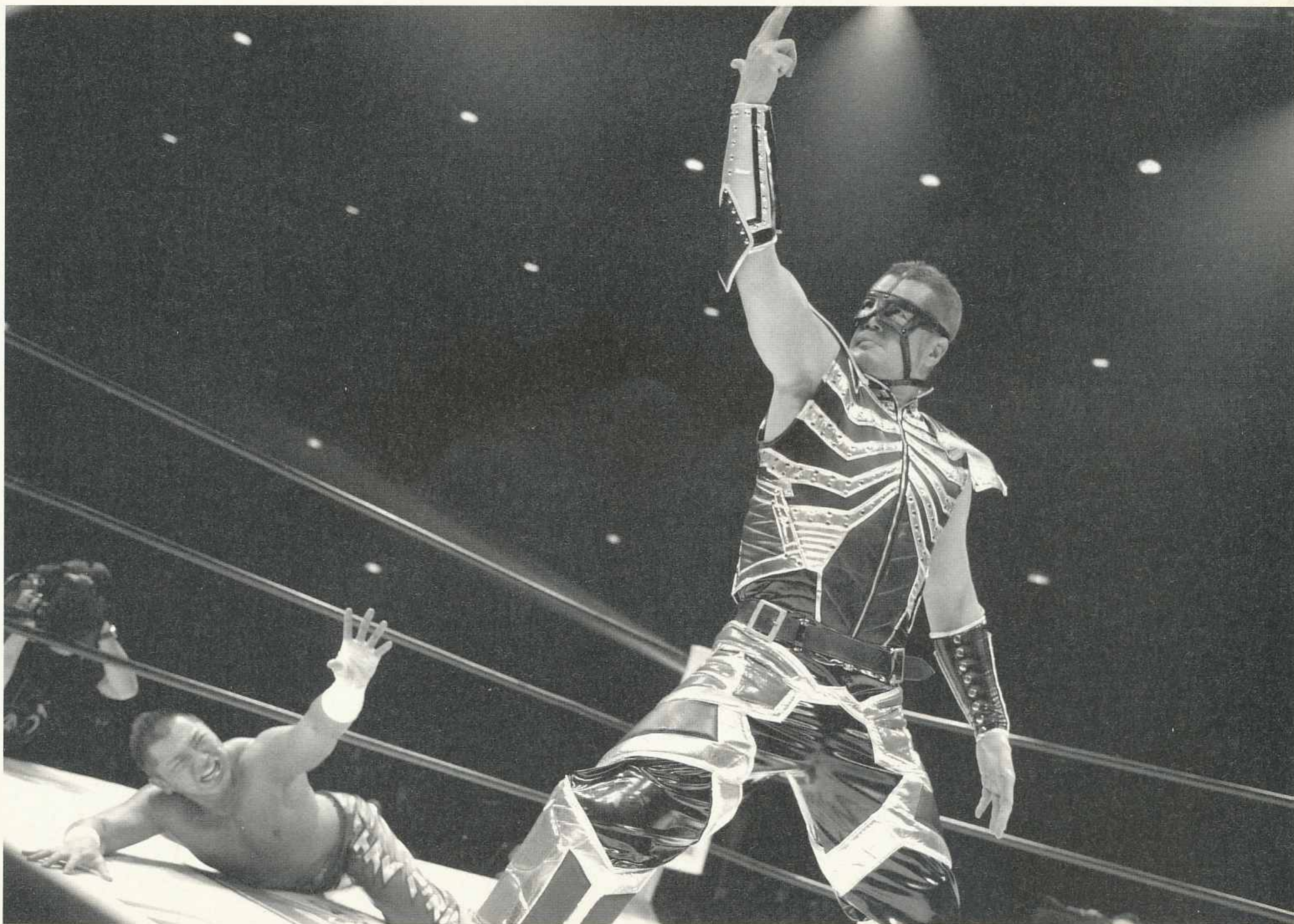
安生　やっぱり芸能人がやるとなると、肉体でどこまで表現できるのかっていうのがあった上で、表現として何が優れてるのかなっていうところをまず見ますね。容姿であったり、持ち芸であったり、個人の特徴を反映させないとまったく意味がないんで。

――持ち芸がどれぐらいなのかというのを見極める、と。

安生　だから資質が大事なんですよ。で、いま一線で活躍しているプロレスラーで『ハッスル』に向いてるのは誰かっていうと、そんなにピンとこないんですよ。プロレスをやってたから『ハッスル』で輝くかっていったらまた違いますし、技がうまければ逆に試合の光を消しちゃう部分もあるから。そういう意味では格闘技やってる人でも、そういう要素があればできますよ。人間的な魅力に溢れてたら、たぶん光れるんじゃないですかね。

――なるほど。どこから来たかじゃなくて、これからどこに向かうかによってもその人の輝き方が違ってくるということですね。

安生　そうですね、実際プロレス界で輝いてるスターって決して多くないと思いますし、逆に職人系では『ハッスル』に合う人はいますけどね。ここも表現力が

11.25『ハッスル・マニア』のエスペランサーと坂田の攻防はレーザービターンという必殺技をめぐる攻防のストーリーだった。これこそがベーシックなプロレスの構造である。

大事なポジションなんで。
――確かにそうですね。
安生　でも職人系ってプロレス界でホント大事にされないですからね。それもプロレス界がおかしくなる要素の一つだと思います。
――ホントだったら団体の中枢を担ってもおかしくないですけどね。
安生　本来であれば、幹部でやらなきゃおかしいポジションですよ。そこがやっぱりリストラの対象になったりしちゃうんですよね。プロレスではある意味一番大事な部分なのに。
――要は選手単体で見たら「こいつは脇役だからいいや」「この選手では客が呼べないだろう!」みたいな、短絡的な発想になるんですかね。
安生　そういう短絡的なことをやってますよね。じつに残念ですけど……。そうなると、団体自体が大会を一つのものとして考えられなくなるんですよ。それがどういうことになるかといえば、選手それぞれが勝手に試合して、一つの大会じゃなくて試合単体が評価されるようになっていくんです。
――そうなると、現

ザ・エスペランサーVS坂田亘の試合は目指すハッスル・レスリングの究極型です

場の選手は勝手に暴走しますよね。
安生　だから「この試合に求められてるものは何か?」という意図を団体側が選手に伝えないから、それぞれが勝手に自分が目立つことをやって、お客さんが沸いたら評価がいい、沸かなかったら評価が悪いという考え方になっていく。団体側もそういう評価しか下せない。それがつまらない大会を作るんじゃないですかね。
――となると、求められるのは客観的な視点ですね。
安生　いまは大会全体を見るというポジションの人が、たぶんいないと思うんですよ。選手任せにしちゃってるっていうのがよろしくないですね。
――振り返ると90年代のプロレス黄金期から、そこがブレ始めてしまった気がしますね。
安生　80年代はやっぱり第一試合は第一試合の役割があって、べつに言われなくても選手はそれをできてたんですよ。第一試合の役割があって、メインにつなぐためにはこういう試合をやったほうがいいっていうのは、僕も80年代からリングに上がってたんでわかるんですけど。そういう雰囲気はまだ確実にあったんですよ。
――なるほど。
安生　でもいまは選手任せだから。みんなで一つの大会を作るっていう意識じゃなく、やっぱり自分が目立たないと評価されないっていう現実があるんで、それが逆にプロレスのおもしろさを失なわせちゃってるんじゃないかな、と思いますけどね。
――もう一回デザインし直す必要がありますよね、大会自体を。
安生　『ハッスル』ではそこを徹底してますから。無意味な動きは徹底的に排除してますから。そういう点でいくと、『ハッスル』というのは80年代の新日本プロレスのようなリングでもありますね、ある意味（笑）。そういうものをベースに作ってるし、もっと徹底的にプロレスとは何かっていうのをみんなでディスカッションして大会を作り上げていきたいですね。実際『ハッスル』はそういうディスカッションをやってますから。それがプロレス界復興のキーワードかもしれません。

【07年12月11日／都内・ハッスル道場にて収録】

大会をデザインするとは何か？　空間的な演出はもちろんだが、試合順、試合内容、選手のキャラクター、しぐさや言葉使いにいたるまで、あらゆる要素を精査するという作業である。

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

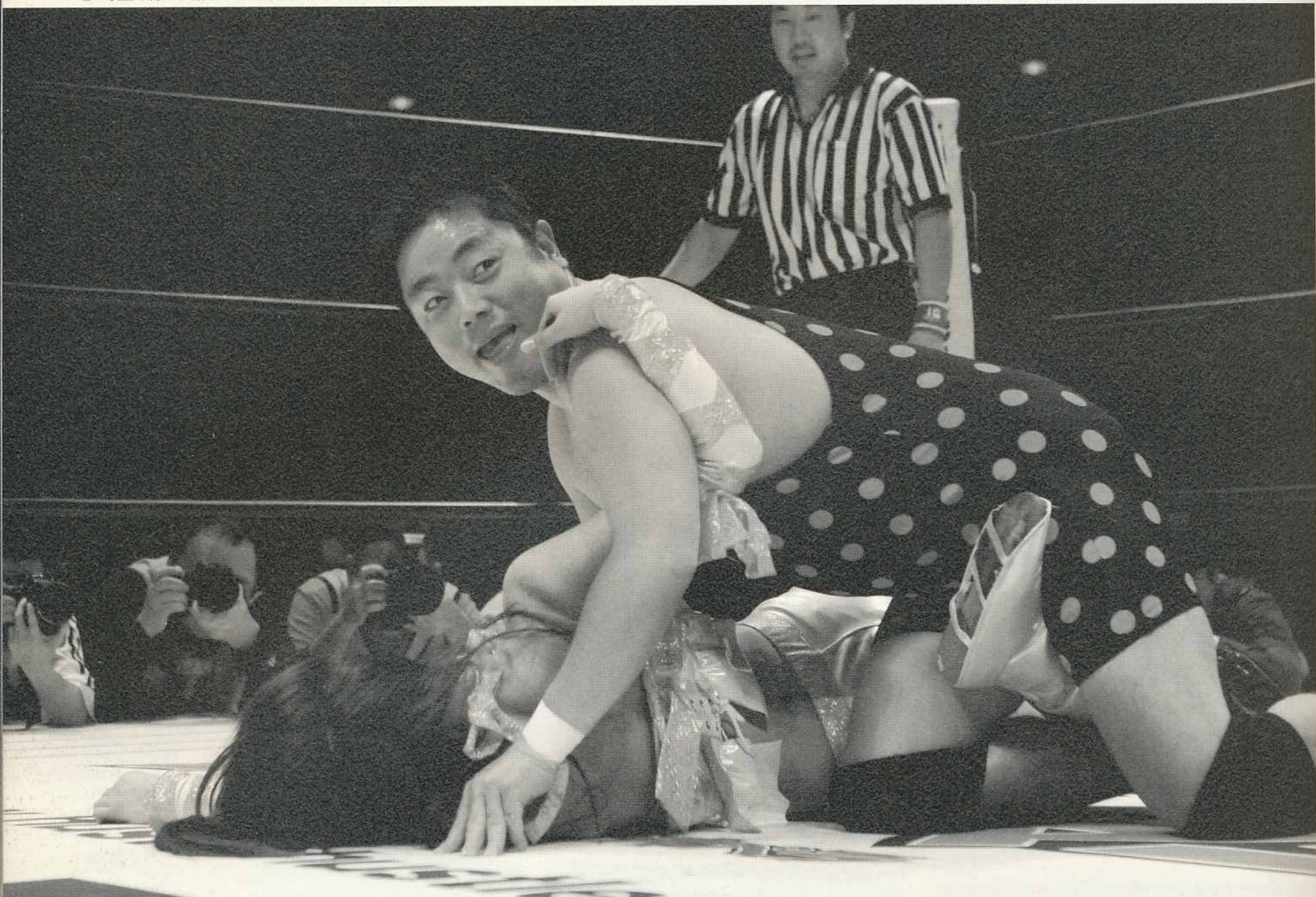
あん・じょー・しれいちょうかん■高田モンスター軍で辣腕を振るうアン・ジョー司令長官は生年月日、出身地ともに不明。安生洋二さんは1967年3月28日、東京都出身。1985年にデビュー後、各団体を渡り歩いてきた。幼少期をニュージーランドで過ごしており英語は堪能で外国人レスラーとの折衝も担当していた。180センチ、110キロ。

サイコロジーはマレンコ道場、哲学はUWFやリングスから学んだ……ような気がする

ハッスル発 バック・トゥ・レスリング Back To Wrestling

島田二等兵

聞き手／井上崇宏（THE PEHLWANS）　撮影／平工幸雄　山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント

11.25『ハッスル・マニア2007』で島田二等兵は海川ひとみと対戦。二等兵が繰り出した唯一の技がこちらのエロチカロック。己の欲望を満たす瞬間、最高の表情を見せる二等兵。エロい！

俺様は〝プロレスラー〟じゃない!! 『ハッスル』を表現する〝ハッスラー〟だ

—今回のインタビューは、たまには実のある話がしたいですねえ。

島田　なんだよ！　俺様はいつだって実のある話しかしねえじゃん!!

—いやいや、せっかく最近プロレスラーとしてのポテンシャルの高さを評価されてるんですから、そろそろ言動も賢いノリでいきません？

島田　おまえ……!!　さてはまだ『ハッスル・マニア2007』の興奮が冷めやらぬようだなっ！（笑）。

—さすがにもう忘れつつありますけど、悔しいけど二等兵は凄かったですよ（笑）。

島田　でも、おまえ、いま〝プロレスラー〟って言ったろ？　俺様は〝ハッスラー〟なの!!　もういいかげんに呼び方を統一してくれよ！

—でもですね、ハッスルの携帯サイトでTAJIRI選手が「二等兵は一流のプロレスラー」って高い評価をしてたんですよ。

島田　ガハハハハハ!!　マジぃ!?　あの世界のスーパースターにほめられたってことは……、俺もWWEに行けちゃったりするかなあ？

—じゃあやっぱりプロレスラーって名乗っちゃう？

島田　……いや、やっぱりプロレスラーって言われると抵抗があるんですよぉ。俺はやっぱりプロレスラーじゃない！　俺たちは『ハッスル』を表現するパフォーマーであり、ハッスラーだから。（恍惚の表情を浮かべながら）しっかし、一流だなんて、さすがに評価高すぎるよぉ。デヘヘヘ……。

—……了解しました。で、やっぱりこれもTAJIRIさんの評なんですけど、「あの試合にはプロレスに必要不可欠な三大要素が全部詰まっていた」と。

島田　ギャハハハハ!!　困ったな～、ベタぼめだな～（と、頭をかきむしる）。

—一つは「勧善懲悪」。そして「起承転結」。そして最後が「ハッピーエンド」。つまり、〝希代のワル〟である島田二等兵がやられたっていうのがハッピーエンドだったというわけですけど（笑）。

島田　会場のみんなも喜んでたもんな～（笑）。俺様の足が破壊されたにもかかわらず!!

—最後のカイカワロック（アンクルロック）は本当に効いてたんですか？

島田　効いたねぇ～！　「バキッ！」って音がしたもんね。

—音がしましたか！（笑）。

島田　音したねぇ。まあ海川ひとみに負けたというよりも、あそこにいる観客全員に負けたね。アンクルロックの体勢から立ち上がって、俺のスーパーミラクル延髄切りでポーンと立ち上がろうと思ったんだけど、その瞬間に「もうおまえなんか負けちまえ！」っていうみんなの熱意が伝わってきてさ。

—凄い重圧がありましたか（笑）。

島田　あの重圧が俺様をタップアウトさせたね！　あれが道場マッチだったら、海川をボコボコにしてたよ、ああ。だから海

ハッスル発 バック・トゥ・レスリング Back To Wrestling

“ヤドカリ野郎” 島田二等兵 ROAD TO HUSTLE

もしサダハルンバ（谷川P）と闘ったら、猪木vsウィリーみたいな試合になるぞ！

川じゃない、客に負けたんだよ。だって一年前は、海川にブーイングが飛んでたんだよ!? それが一年後には大声援だもんなあ（ニヤリ）。
――しっかし、あのアンクル・ロックでやられてるときのやられっぷり、あれは天性のものですか？
島田　天性、天性！（笑）。というか、やられたら痛いじゃん!! 俺様は痛みを我慢できない体質なんだよね。
――天性の痛がりなんですか？
島田　痛がり、痛がり！ 我慢が嫌いだもん。俺ってば、ちょっと指が切れただけでも「痛いっ！」って大騒ぎするから。まあ、〝みんなに振り向いてほしい症候群〟だろうな。
――ああ、かまってほしいんだ？
島田　昔っから大げさに「痛たたたたたっ!!」って騒いで、病院へ行ったら「たいしたことないです」っていうパターンが多かったね。俺様はちょっと狼少年っぽいところがあるんだよ。
――狼少年っぽいところがいまだに全然直ってないわけですね。そのあたりが谷川（貞治K―1イベントプロデューサー）さんとの軋轢を生んだ原因なんでしょうか？
島田　おいおい！ おまえ、俺様のことを気持ちよくさせておいて、ここでなんでサダハルンバの名前を出すんだよ!? サダハルンバの話はもうしばらく気持ちのいい話をしてからにしようよ！
――さすが、痛がりですねえ（笑）。そんな狼少年は今年いくつになりました？
島田　二等兵は年齢不詳だな。
――あっ、じゃあ島田裕二さんは？
島田　島田裕二は41歳。
――ハアッ!? 島田さん、もう40過ぎてたんですか!?
島田　そうだよ！ それなのにリングに上げるなんて酷だろ？（笑）。
――しかも大観衆の前であんな醜態をさらして！（笑）。
島田　あったりまえじゃん！ ファンのニーズがあるからだよ。泥水をすすってこそハッスルが世界に誇るエンターテインメントになるわけだ。エリック・ビショフだってやってただろう？ 島田二等兵はエリック・ビショフになんか負けませんよ！
――二等兵にはお子さんがいらっしゃるんでしたっけ？
島田　いないいない。独身だよ。
――いつも島田裕二さんのお子さんたちはハッスルの会場に来てますよね。
島田　ああ、観に来てるね～！ PRIDEもよく観に来てたなあ。
――あの子たちはこないだの二等兵の試合はご覧になったんですか？
島田　いや、たまたま電車を乗り違えたみたいで、会場に着いたらもうマーク・ハントが出てたって。
――ああ、間に合わなかったんですか。それは観られなくて良かったですねえ。
島田　どうして？ やっぱ子どもたちもあれを観たら感動するんじゃないの？
――ハアッ!? どこを観て感動します!?（笑）。
島田　まあ、正直観てないって聞いて、安心したけどね。ガハハハハ！ ただ、子どもはマズいかもしれないけどさ、世の中の中年にはパワーを与えたよね。二等兵の背中を見ることによって、「こういう愛すべき中年が頑張ってるんだなぁ。俺も頑張るぞ！」っていう。こないだもさ、青木功が65歳でエージシュートしただろ？ 二等兵は青木功とともに〝中年の星〟として愛されているわけだよ。
――なるほど、ユージシュートですか。
島田　うまいね～。俺様と海川の試合は、素人同士がやるわけじゃん？ そこで大事なことはやっぱとにかくお客さんにわかりやすく伝えること。そのためには自分ができないハードルを越えようとしないことだね。
――あ、できないことには無理にトライしない。
島田　絶対やろうとしない。やっぱ素人だからさ、100パーセントのものを出そうとしたら絶対にミスってたと思うんだ。80パーセントくらいでいいんじゃない？ それなら自分のできるものが出せるし、海川も自分ができることだけを出してくるから、ああやって試合がうまくスイングしたんだと思うよ。あと信頼関係だね。プロレスの中の信頼関係ができてた気がするな。
――二等兵と海川ちゃんのあいだに？
島田　これまでの数々の遺恨がありつつも！ なぜその遺恨を俺様が作らされてるのかいまだによくわかんねえんだけど……。
――これ以上ない適役じゃないですか（笑）。
島田　その遺恨の過程の中で愛が芽生えてると思うね。愛というか友情だね。
――戦友みたいなもんですか。
島田　そうそう。やっぱり「この大舞台で、ほかのカードに埋もれない試合にしようぜ」っていう。あの～、いまのプロレ

藤原組

“関節技の鬼” 藤原喜明率いる藤原組には船木誠勝、鈴木みのるらが在籍していたが離脱。藤原組でレフェリーとして活躍していた。島田裕二を中心に、藤原組長を慕って入門してきた若手選手が結束。石川雄規、池田大輔、船木勝一、田中稔、小坪弘良、小野武志など多くの人材を輩出している。

マレンコ道場

島田裕ニレフェリーはフロリダのマレンコ道場で修業してニンジャ２号としてデビューし、10戦ほど試合を行なっているのだ。マレンコ道場は往年の名レスラー、ボリス・マレンコの道場でジョー＆ディーンのマレンコ兄弟がコーチを務めた。石川雄規やカール・マレンコ（ボリスの義理の息子・左）らも在籍。

ス界ってさ、ハイスパートばっかじゃん。そう思うだろ？

——ええ、ハイスパート・レスリングが大豊作ですよ。

島田　で、個々のレスラーも出たがりだし、すべての技を出したがるんだよね。その結果、まったく目立たないんだよ。結局、どの技が本当にダメージを与えてるかが観ててわからないんだよ。だけど、二等兵はエロチカロックっていうフィニッシュホールドを決めてやることにしか集中してないわけだ。

——一点集中型ですね。

島田　ただ一点にかけた。そこも良かったんだろうね。

——ムカつくくらい的確な自己分析ですねえ（笑）。そのあたりのプロレス哲学はやっぱりマレンコ道場で教わったんですか？

島田　いや、誰だろう……。振り返ると、UWFとかリングスから教わった気もするね。

——ぷぷぷぷっ！　確かにあの試合はそこはかとなくU系の香りもしましたね（笑）。ロープエスケープを試みるも、リング中央に戻されちゃうあたりとか。

島田　だろ～？　だからそういう意味では、あの日の俺様にはヴォルク・ハンが乗り移ってたかもしれないね。

——ハアッ⁉　ハンが二等兵に⁉

島田　おう。だから俺様と海川の攻防なんて、ヴォルク・ハン vs 田村潔司みたいな感じだったよね。

——ハン vs 田村ってあんなでしたっけ⁉

島田　もう一回、ビデオで確認してみろよ。そっくりだから。ボリス・マレンコさんがね、昔、俺様に「プロレスはサイコロジー（心理学）だ」って教えてくれたけど、それは最近、本当にそうだなって思えるようになってきたね。

——「ああ、そういうことだったのか」って。

島田　そうそう。こないだ天龍（源一郎）さんとお話しすることがあってさ、話を聞いてるとやっぱり天龍さんも修行時代のアメリカでプロレスのサイコロジーを叩き込まれたって言うんだよね。

——ああ、意外と源流をたどると同じなわけですね。

島田　うん。やっぱり外国に行くとさあ、言葉はしゃべれないし、観客に喜ばれないと次の試合を組んでもらえないじゃん？　いまの日本のレスラーはさ、どうやっても試合を組んでもらえるじゃん。そうするとシビアさに欠けるよな。言葉が怪しくてもさ、レスラー同士で女の話とか酒の話で盛り上がっちゃえば、仲良くなれるじゃん。そういうコミュニケーションをとりながらツアーしてるうちに仲良くなってさ。最終的にレスラーが一丸となって、観客みんなを喜ばせようという方向にベクトルが向くわけだよ。それが大事なんだよ。

——ああ、一座じゃないですけど、共通の意識を持って闘うわけですね。そのあたりの姿勢は確かに『ハッスル』は徹底

ファンの前で醜態をさらすのはあたりまえ ファンのニーズがあるから泥水をすする

PRIDE

リングサイドのスタッフが太田真一郎アナによってコールされるおなじみのオープニング。レフェリー兼ルールディレクターとして一番最後に紹介される島田裕二氏には、いつの頃からか会場全体が一つになって盛大なブーイングが送られるようになった。おそらく、これが二等兵のヒールキャラを醸成させたのだろう。

リングス

91年に旗揚げした前田日明率いるリングスで初期の頃からレフェリーを行なっていた島田裕二氏。前田 vs ディック・フライなど危険な匂いのする試合も多く裁いてきた。どんな状況にでも対応できる臨機応変さ、そしてPRIDEで多くの名勝負を裁いてきた確かなレフェリング技術の源流はここにあるのではないだろうか。

バトラーツ

藤原組から独立した若手選手だけで作り上げたプロレス団体、それがバトラーツだ。昭和・新日本プロレスの前座試合のような"バチバチ"ファイトで注目を集めた。アレクサンダー大塚がPRIDEで活躍するようになると注目度も一層高まった。ここで島田裕二氏はレフェリーと団体運営と広報をマルチに担当。

してますよね。

島田　なんかプロレスってさあ、じつはそこなんだなって思うよね。お互いがお互いを高め合う、素晴らしい競技なんだなって。「自分だけ目立てばいいや」ってヤツが多いけど、そんなんだから人に感動を与えられないんだよ。あとは観客を喜ばせる気持ち。お笑いの人がよく言うけどさ、「笑わせる」のと「笑われる」のって違うじゃん？

——ええ、それはよくわかります。確かに僕も試合中、「俺はいま、島田二等兵に笑わされてる！」って気づいて悔しかったんですよ（笑）。

島田　（流し目で）でしょ～？

——話題を変えますが、島田二等兵があれだけのポテンシャルを披露した以上、逆に二等兵が熱望している谷川貞治戦はちょっと遠のいちゃった気がするんですよね（笑）。

島田　ああ、なるほどな～。サダハルンバじゃちょっと俺様の相手は荷が重すぎるかもな～。でもさ！　サダハルンバと俺様がやることになったら、俺は猪木 vs ウィリー（・ウィリアムス）のような試合をやるつもりなんだよ。

——ギャハハハ‼　そう来ましたかあ（笑）。どっちが猪木さんですか？

島田　そりゃ俺だろう！　ヤツはもともと極真が好きだし、K—1も立ち技じゃん。猪木 vs ウィリーをやったときは、俺も正座して観てたし、ヤツも観てたって聞いた。でもヤツはウィリーを応援してたし、俺様は猪木さんを応援してたんだよ！

——ファン時代から相容れない二人だったわけですね（笑）。

島田　そう！　だから俺とサダハルンバがやったら異種格闘技戦だね！

いつ何時でもパンツ一丁でオッパッピー！
それができる男がプロレスラーなんだよ

文字通り「パンツ一丁でオッパッピーする男」、それが"モンスターK"川田利明である。ハッスルのプロレス学校では、このような人材が作られていくのだろうか？

ハッスル バック・トゥ・レスリング Back To Wrestling

—すみません、そこまで考えが及びませんでした（笑）。それは観たいです！

島田 （流し目で）でしょ〜⁉ 俺とヤッじゃあファンタジックなプロレスは無理だと思う。だっていま、お互いに信頼関係がないからさ……。

—ぷぷぷぷっ！

島田 髙田延彦vs武藤敬司みたいな試合はできないよ。

—無理でしょうねえ。

島田 でも、前田日明vsドン・ナカヤ・ニールセンみたいな殺伐感は出せる！

—さっきからずいぶんと自分たちを高いポジションに設定しているのは気になりますが、でも確かにそれ観てみたい……（笑）。

島田 まあ来年の『ハッスル・エイド』で実現だな！ でも、いきなりシングルに持っていくのもったいないので、焚いて焚いて焚いて、『エイド』でタッグマッチ、それで『マニア』でシングル激突！ これでどうだ⁉

—谷川さん、ハッスルに連続参戦しなきゃいけないんだ（笑）。

島田 2008年、俺様は後厄の年だからさ、サダハルンバに勝って厄を祓ってやりますよ！

—しかし、こうして話をうかがっていても、二等兵は類いまれなるプロレス哲学を持ってるわけじゃないですか。ここは一丁、プロレス学校でもやったらいいんじゃないですか？

島田 （驚いた表情で）ええっ、鋭い‼ 俺、本当にプロレス学校をやろうと思ってるんだよね‼

—あ、ホントですか！

島田 2008年はやるよ！ 『ハッスル』の一流ハッスラーたちが講師陣となり、歌にダンス、一人芝居あり、パフォーマンスありのアカデミーを。

—ハアッ⁉ ダンス⁉ 一人芝居⁉

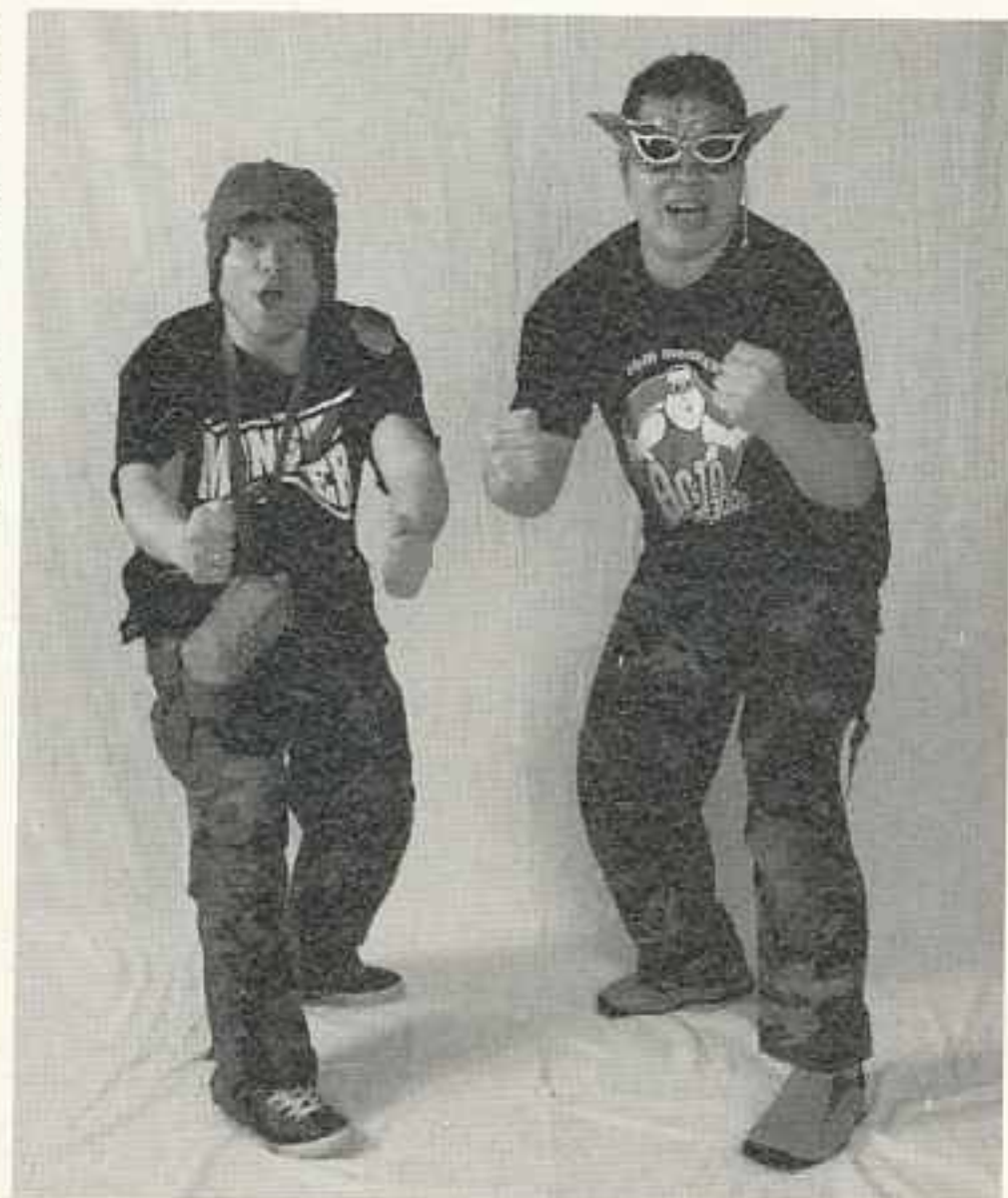
島田 そういう授業を多角的にどんどんやっていくんだよ！ プロレスばっか教えてると●●●みたいになっちゃうからさ。バボが典型的な例じゃん？ 動きは悪いわ、マイクは持てないわ、常にオドオドするわ。やっぱ背中で試合してないんだよ、みんな。リングばっか見てんだよ。

—要するにプロ根性を鍛える学校を経営するんですね。

島田 そうそうそう。やっぱりね、昔はいつ何時でもパンツ一丁でさ、小島よしおのように「オッパッピー！」できる男がプロレスラーだったんだよ。

—わかったような、わからないような（笑）。ところで、なんで谷川さんにそんなに嫌われてるんですか？

島田 いやあ、思い当たる節がありすぎて、どれで怒ってんのかわかんねえんだよお〜‼

【07年12月11日／都内、ハッスル道場にて収録】

しまだ・にとうへい■生年月日、出身地が不明。中村カントクとの大喧嘩や海川ひとみへのセクハラなど、局地的な抗争を行なっている髙田モンスター軍のムードメイカー。ちなみに島田裕二氏は1966年11月24日、広島県出身。『PRIDE・1』で髙田延彦vsヒクソン・グレイシーを裁いて日本の総合格闘技レフェリーの第一人者となる。『ハッスル』においてはチーフプロデューサーの肩書きを持つ。経営するフィットネスジム『BCG（Body Check Gym）』は浜松町に移転する予定。

12.31 さいたまスーパーアリーナ

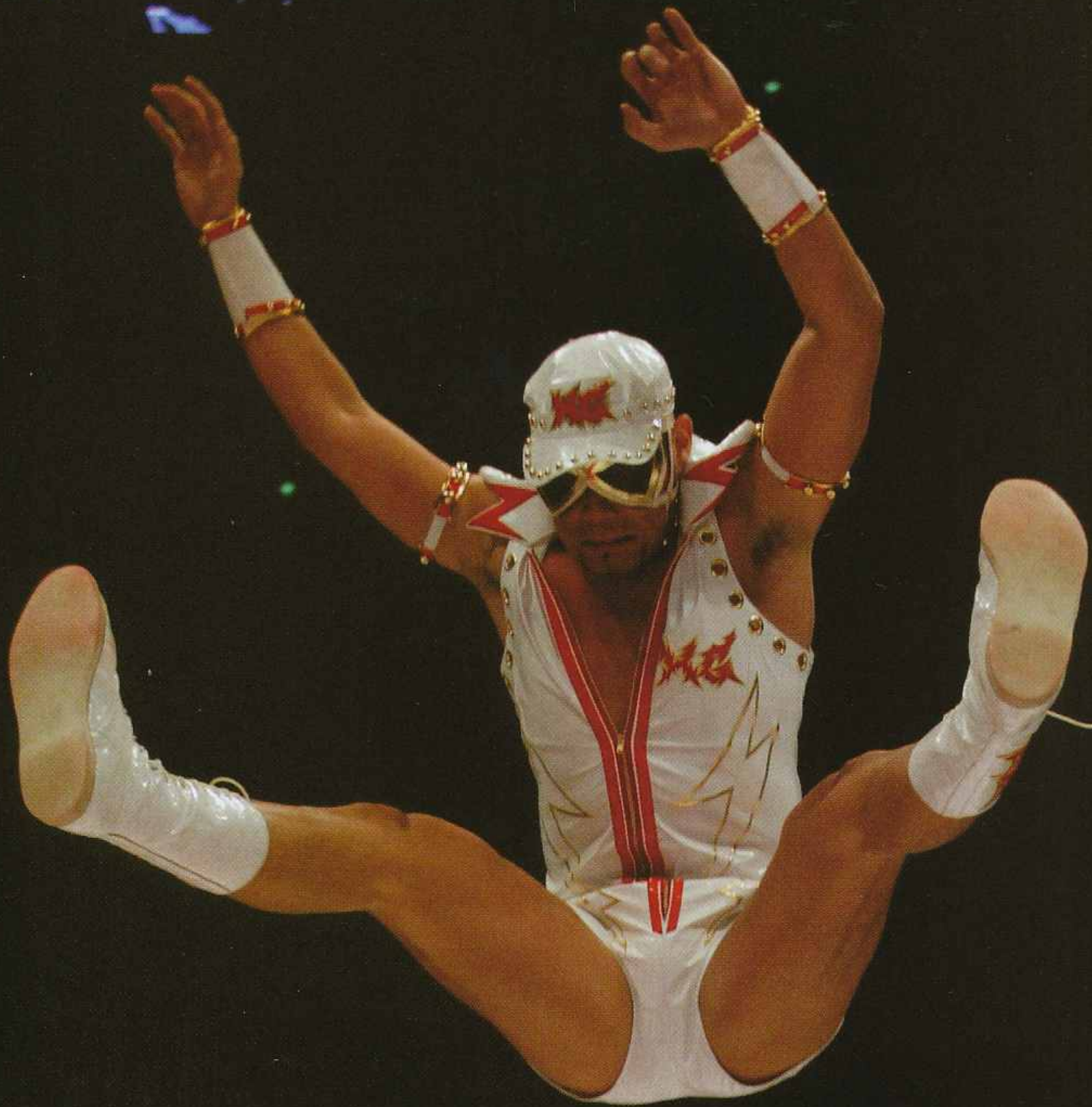
大みそか 年忘れKYORAKUスペシャル ハッスル祭り2007

15ページぶち抜き大会レポート

有田総統も出現!!

プロレスからの脱出

目指すは格闘新ジャンル

プロレスを脱出したその先には いったい何があったのだろうか!?

大みそか 年忘れKYORAKUスペシャル ハッスル祭り2007

スポーツエンターテインメントの 舞台裏ドキュメンタリー

地上波放送という武器を得て、世間との闘いに挑んだ大晦日の『ハッスル祭り』。現場では壮絶な闘いが繰り広げられていた――。『ハッスル』が『読売新聞』紙上で口火を切ったカミングアウト戦略の向こう側にあるものとはなんなのか？　初めて舞台裏の部分にまで踏み込んで、この一大イベントをレポートしてみたい。

構成／坂井ノブ　撮影／平工幸雄、山口比佐夫、平専英
写真提供／ハッスルエンターテインメント

まず、最初に宣言しておきたい。『ハッスル』はプロレスか、否か？

ここで、そのテーマを論じるつもりはない。本誌は「プロレス界を背負って立つ専門誌でございます」と大風呂敷を広げたこともなければ、そこにプロレス的な要素さえあればUFOだろうと亀田問題だろうと首を突っ込んできた。もっと言えばここ数年は、ずっとMMAをメインで扱っている。それはプロレスに対する読者のニーズがどんどん縮小する一方だからだ。

誰のせいでもない。きっと、それが時代の流れなのだろう。時代は常に流れていく。流れに乗らずに踏ん張ることをよしとする価値観もあれば、流れに乗って時代の先を行くことにプライオリティを置く価値観もある。『ハッスル』は言うまでもなく後者だ。その『ハッスル』が大晦日という晴れの舞台で、いかに世間へ挑んだのか？　ここでは舞台裏にまで踏み込んで、闘いのドキュメンタリーを伝えてみたい。

読売新聞と地上波とカミングアウト問題

まず紹介しておきたい記事がある。12月19日付の『読売新聞』の夕刊で2面に渡って掲載された『ハッスル』の紹介記事だ。HGと山口日昇ハッスルエンターテインメント社長のインタビューが掲載されているのだが、その中で山口社長は『ハッスル』の〝作り方〟に言及している。

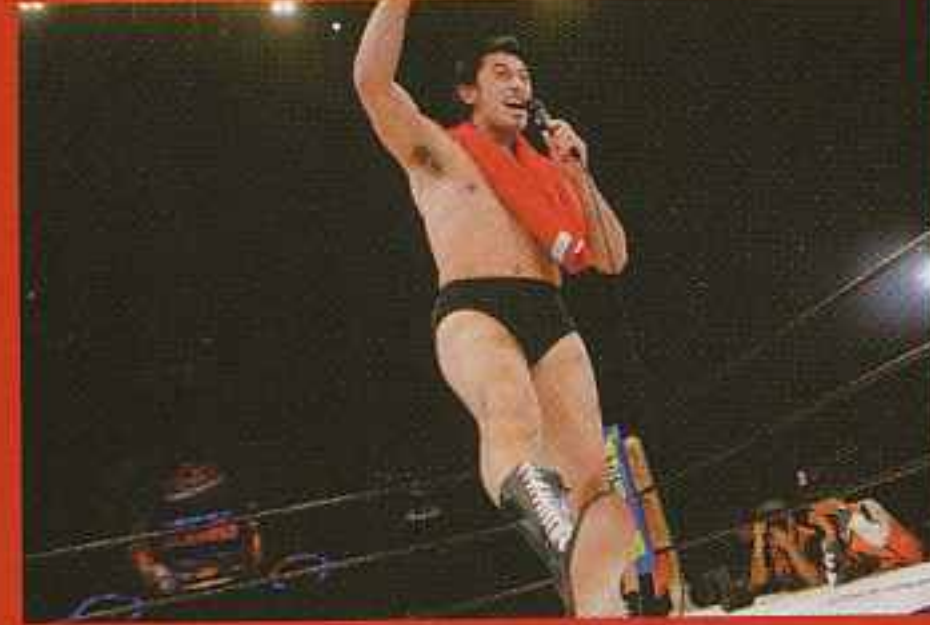
「最初はプロレスラーをリハーサルに参加させるだけでも大変でした。そこで、牽引役を髙田延彦さんにやっていただいた。『髙田モンスター軍』という悪の軍団を率いる、ファンタジーの中の登場人物になっていただこうと思ったんです」

「ストーリーラインの打ち合わせは毎回5〜6時間かけます」

「和泉元彌さんのデビュー戦は、たった5、6分の試合に、200時間もかけて準備をしました」

いまだかつて、ここまで『ハッスル』の舞台裏が明確に語られたことはなかった。なぜなら、この発言はプロレス界においてはタブーとされている部分にまで踏み込んでいるからだ。1000万部という世界最大の部数を誇る『読売新聞』という媒体だからここまで踏み込んだ、という部分もあるだろう。プロレス界の顔色をうかがっていたら、こんな発言が飛び出すはずがない。世間に向かって『ハッスル』というソフトを打ち出すために、不透明な部分をできるかぎり透明にする必要に迫られていたのだ。

ところが、『ハッスル』のこうした動きはプロレス界にはまったく歓迎されていない。2007年の『プロレス大賞』では箸にも棒にもかからず、唯一のプロレス専門週刊誌は、やたらと挑発的な大会レポートばかり。結局、プロレス界のルールに従っていないということで排除するか、別物扱いするしか

プロレスからの脱出

ジャイアント白田、池谷銀牙（幸雄）、ほしのあき、ミルコ・クロコップ、アントキの猪木など、とにかく有名人を次々と投入した『ハッスル祭り』。視聴率戦争の最前線で闘うとは、つまり一人でも多くの人の目を引きつけるための仕掛けを用意するということである。結果的にその方法が正しかったのかどうかはわからない。この闘いが今後の血となり肉となることだけは間違いない。

プロレス界ではまったく評価されないまま
大晦日のゴールデンタイムで世間との闘いへ

ないようだ。『ハッスル』が台頭すると、いろんなことの辻褄が合わなくなるのかもしれない。

前置きが長くなったが今回の『ハッスル祭り』の背景には、こういった状況があった。

プロレス界ではまったく評価されない一方、世間との闘いに臨むことになった『ハッスル』は、「ファイティング・オペラ」に替わる新しいスローガンを打ち出した。

それが「スポーツエンターテインメント」だ。

実際、『ハッスル・マニア2007』のリング上で、坂田亘の口から「俺たちはスポーツエンターテインメントの頂点を目指す！」という宣言も飛び出している。この言葉に込められているのは、ほかのプロレス団体とは差別化しようという意思であり、プロレス業界に向けてではなく世間に向けて発信していこうという決意だ。

主催者は今回の『ハッスル祭り』を世間の人に広く認知してもらうためのきっかけと位置づけた。その結果、過去最多の芸能人を投入し、凝った演出を数多く用意して、あらゆる年齢層、性別に対してアピールすることになったのだ。

前説にアントキの猪木、第1試合はケロロ軍曹、第2試合はジャイアント白田、第3試合は池谷銀牙（幸雄）、第4試合にはほしのあきとミルコ・クロコップ、セミはグレート・ムタ、モンスター・ボノ（曙）、メインは大晦日視聴率男のジャイアント・シルバ、試合後の劇場には髙田将軍と有田総統と、イレギュラーな要素をパンパンになるまで詰め込んだ。そして、大晦日のゴールデンタイムに、世間というつかみどころのない相手に向かって2時間にわたって銃弾を撃ち続けた。

1月2日に発表された平均視聴率は4・0パーセント。21時30分から2時間という枠が設定されたテレビ東京のここ5年間をさかのぼっても過去最高の数字を弾き出している。だが、これは決して高い数字ではない。『ハッスル』関係者の目論見を完全に下回っている数字だ。唯一の明るい材料といえば、3・2パーセントという驚異的な低視聴率となった〝因縁〟のフジテレビを上回ったことぐらいだ。

観た人の評価は賛否両論で、『ハッスル』の熱心なファンよりも、一見さんのほうが『ハッスル祭り』を高く評価しているようだ。

実際いままで作り上げてきた世界観にプラスアルファを加えた〝よそ行き〟の、とっつきやすい内容ではあった。その根底にはあらゆる視聴者をターゲットにして『ハッスル』を印象づけたいという動機があった。

ミルコの蹴りで金村のプロレスラー魂が炸裂

地上波放送はゴールデンタイムだが、『ハッスル祭り』のイベント自体は13時開演だった。『ハッスル・マニア』などビッグマッチの場合は開演の6〜7時間前から入念なリハーサルが始まるのだが、開演時間の早さを考慮して『ハッスル祭り』は大会前日にリハーサルが行なわれた。これは『ハッスル』としても初の試みである。

かつて『PRIDE武士道』のリングでミルコのハイキックを受けてKO負けを喫したドスカラスJr.が、意識を取り戻して「俺の頭はどこにいったんだ?」という名言を残したが……。そんな危険な蹴りを防備せず受けるキンターマン。プロレスラーの中のプロレスラーだよ！

リハーサルが終わって迎えた大会当日。会場入りしようとしたRGがファンと間違われて警備員に止められるというハプニングがあったこと以外は、すべて順調だった。

前説のアントキの猪木が登場した時点で観客のノリはかなり良かった。『ハッスル・ハウス クリスマスSP2007』から導入された前説は会場の空気を温めて、イベントの潤滑油として成果をあげている。『ハッスル』は試合だけ盛り上がればいい、という考え方ではない。試合前のオープニング劇場こそが前説的な役割を持っているはずなのだが、そのさらに前の段階から盛り上げていくのだ。

ジャイアント白田はフラフラになりながらも最後まで闘い抜いて喝采を浴びた。川田が放ったバックスピンキックをもろに食らったジャイ白は、控室でもずっと顔を冷やしていた。アゴを痛めたという話だったが、その日の夜からバラエティ番組に出演して大食いに挑戦している。さすが大食いチャンピオン、これぞ王者の魂であろう。

そもそも、ジャイ白参戦の企画が持ち上がった当初は大食い対決をやろう、という案だった。しかし、むしろプロレスをやりたいと言ったのはジャイ白本人だった。ジャイ白の「やるからには本気でやりたい」という姿勢が、結果的に川田の〝デンジャラスK〟な部分を呼び込んだ。大晦日のゴールデンタイムに他局と勝負することを考えれば、芸人とネタバトルをする〝モンスターK〟よりも、暴力的な〝デンジャラスK〟のほうがインパクトは確かに強い。実際、フィニッシュシーンは非常に強烈なものだった。

池谷銀牙の試合は驚異的な空中殺法を連発して場内のあちこちでため息が聞こえてきた。池谷は体操選手のポテンシャルの高さを見事に証明してみせた。池谷と同じくバルセロナ五輪で銀メダルを獲得した小川直也は2007年、遠い世界へと旅立ってしまったが、新たなる銀メダリストは、今後も『ハッスル』で活躍するはずだ。

ここまでは順調だったがウエポンマッチで異変が起きた。スペシャルウエポンとして登場したミルコ・クロコップの右ハイキックがキンターマン（金村キンタロー）にクリーンヒット！　リングサイドにいたカメラマンによると金村はダウンしているあいだ、いびきをかいていたという。

上に掲載した写真を見てもらえばわかるが、ミルコのハイキックを金村はノーガードで受けている。手で防ごうともせずに、危険なミルコのハイキックを受けきった。プロレスラーの意地と誇りがそうさせたのだろう。

だが、その代償は大きかった。いびきをかいてリングで横たわる金村にスタッフは騒然となり担架で運び出す。控室に戻った金村は、試合の記憶がまったくないという状態だった。非常に危険だ。しかし、金村の大晦日はまだ終わっていなかった。この日の夜に控えていた『プロレスサミット』と、深夜2時から開催される『プロレス・ターミナル』に出場する予定だったのだ。24時間から48時間は絶対安静というリングドクターの診断を「あれはいびきじゃな

くて鼻息！　俺は鼻息が荒いんや！」と強引に振りきって、試合に出ようとする金村を女房役の黒田が必死に止めようとするが、組まれた試合は絶対に休まないという金村の意志は本当に固かった。

しかし、負傷の箇所が箇所だけに周囲も今回ばかりは全力で止めた。『ハッスル』のスタッフも後楽園まで行き、ギリギリまで説得を続け、最終的に黒田が代わりに出場することで金村の穴を埋めることになった。

プロレスには常に危険がつきまとう。だからこそ、いま目の前にある生命の危険は絶対に軽視できない。それでも欠場をよしとしない金村を突き動かしていたのは、まぎれもなくプロレスラーとしてのプライドだろう。

こんなプロレスラーたちが大勢で支えているのが『ハッスル』という舞台である。「『ハッスル』はプロレスではない」と言いきってしまうのは簡単だ。しかし根っこにある魂の部分は、プロレスとしか言いようがないではないか。

爆発しなかった盾
爆発した有田総統

舞台裏でそんなやりとりが繰り広げられている最中、リング上ではセミの6人タッグが始まっていた。この試合はムタ、インリン様、ボノの親子ドラマが軸となっており、いままでの『ハッスル』の世界観を踏襲した内容だ。感情表現が豊かなボノちゃんに泣かされたファンも多かった。64代横綱が「パパー!!」と泣き叫ぶ姿は、バカバカしさを通り越して心を鷲づかみにされてしまうリアリティと切なさがあった。

メインは『ハッスル祭り』の中でも最もオーソドックスな顔合わせとなった。坂田亘＆HGとスコット・ノートン＆ジャイアント・シルバがタッグで激突するという試合で、特別な演出は一切なし。しかし、これは嵐の前の静けさだった。

試合後に、髙田総統の新たなる闘う化身・髙田将軍が登場する。鎧兜に身を包み、たいまつとともにステージにせり上がってきた将軍は坂田にレーザービターンを放った。

妖精さんからもらった盾を構える坂田。轟音が何度か響き、坂田は不自然な間で、その場に倒れ込んだ。

爆発するはずの盾は、なぜか爆発しなかった。

このあと登場した髙田総統はステージ上から「レーザービターンで盾が爆発するはずだったのに、爆発しなかったじゃないかよ！　アホの坂田くんが困っちゃったじゃないか。演出チーム、しっかりやってくれよ！」と激怒。盾が爆発しなかった代わりに、怒りを爆発させたのだった。

プロレスの大会の最中に「おい、演出チーム！」と激怒した人は、おそらく髙田総統が初めてだろう。会場内に充満したおかしな空気をすばやく察知してネタにしてしまう髙田総統はさすがというか、なんというか。スタッフにとってはたまらないだろうが、これは髙田総統でなければできない見事な一代芸だった。

**プロレスか、否か？
なんていまさら
どうでもいい話だ
そこには闘いがあり
本物のプロレスラーが
いるのだから——**

イベント終了後、演出スタッフの一人はこの場面のミスを本気で悔しがって落ち込んでいた。二日前から泊まり込みで仕込みを行なっているだけに、肉体的・精神的な疲労もピークに達していたはずだ。前日にリハーサルをやった影響なのだろうか？　とはいえ、たった一度のミスが命とりにもなってしまう厳しい世界である。とにかく、盾は爆発しなかった。

そんな空気を一気に挽回したのは突如、降臨してきた有田総統だ。「くりぃむしちゅーの有田さんですよね？」というツッコミに「別人という設定にしてくれたまえ！」と堂々と言い切っていたが、どう見ても『kamipro No.118』でハッスルLOVEを語ってくれたくりぃむしちゅーの有田哲平だ。あのときは「（『ハッスル』に出るには）いろんな事情をクリアしなきゃいけない」と語っていたが、そのへんはクリアできたのだろう。出てきただけで会場の空気を一変させてしまった。

有田総統はかつて一度だけ『ハッスル』のリングに登場したことがある。フジテレビによる地上波放送打ち切りで窮地に陥った06年6月、いきなり登場してファンを鼓舞したのだ。今回も『ハッスル』は有田総統にピンチを救われた。

有田総統は髙田総統のモノマネで、髙田総統本人とマイク合戦を繰り広げた。総統に「このアゴ男！」と罵られれば「元気ですかッ！　元気があればなんでもできるッ！　ンムフフ」とアントニオ猪木になって見事に切り返し、長州力や天龍源一郎のモノマネまで披露！　誰も手がつけられないほどの暴れっぷりに、さすがの髙田総統も「押されてるよ」とつぶやいた。

会場のファンの大声援を受けた有田総統は、最後に誰のモノマネでもない素の声で「大晦日に、プロレスファンとともに過ごせることに感動しています！」と締めくくった。

結果的に『ハッスル祭り』は大団円となったが、選手、スタッフは今回のイベントの出来には決して満足はしていない。

昨年11月の『ハッスル・マニア』終了直後にTAJIRIが「WWEよりもはるかに少ないスタッフで、ミスもなくこれだけのイベントを終えたのは本当に凄い」と感心していた。スポーツエンターテインメントの総本山、WWEで長年闘ってきたTAJIRIの言葉は、この格闘新ジャンルを考える上でのヒントとなる。裏を返せば、「ミスがない」というのは、スポーツエンターテインメントにおいて非常に重要で、なおかつあたりまえで難しいことなのだ。たった一つのミスでも、すべての世界観を崩壊させてしまう危険性がある。だから失敗は許されないのだ。

『ハッスル』は数々のミスを積み重ねてここまでやってきたとはいえ、一つのミスですべてが崩壊してしまうという緊張感は常にバックステージに漂っている。それでもミスは起こる。

そこには常に闘いがある。

選手も、スタッフも、命を削るような闘いの中で『ハッスル』を作り上げているのだ。

リング上だけを観て「『ハッスル』は肉体を酷使していない」というのは簡単だ。そんな定義に当てはめて、「プロレスではない」と『ハッスル』を断罪するのも勝手だ。

だが、『ハッスル』には間違いなく闘いがあり、リング上には本物のプロレスラーがいる。

ミスで落ち込むスタッフも、ミルコのハイキックをくらった金村キンタローも、いろんな事情をクリアして登場した有田総統も、みんな闘っている。RGでさえも会場の入り口で警備員と闘っているのだ。

プロレスか、否か？　なんていまさら、本当にどうでもいい話だ。

バルセロナ五輪体操銀メダリスト

池谷幸雄が語る 池谷銀牙デビュー戦

ハッスルにおけるプロレスと他ジャンルとの異種交配実験

「プロレスと体操は似てますね」

プロレスからの脱出

狂言師、プロ野球選手、グラビアタレントなど他ジャンルとプロレスとの異種交配を行なってきた『ハッスル』のリングでバルセロナ五輪の体操銀メダリストがデビューした。プロレスラーの中には体操経験者も多く、ルチャの空中技は体操との共通点も非常に多い。プロレスと『ハッスル』についてデビュー戦直後の池谷幸雄に直撃した。

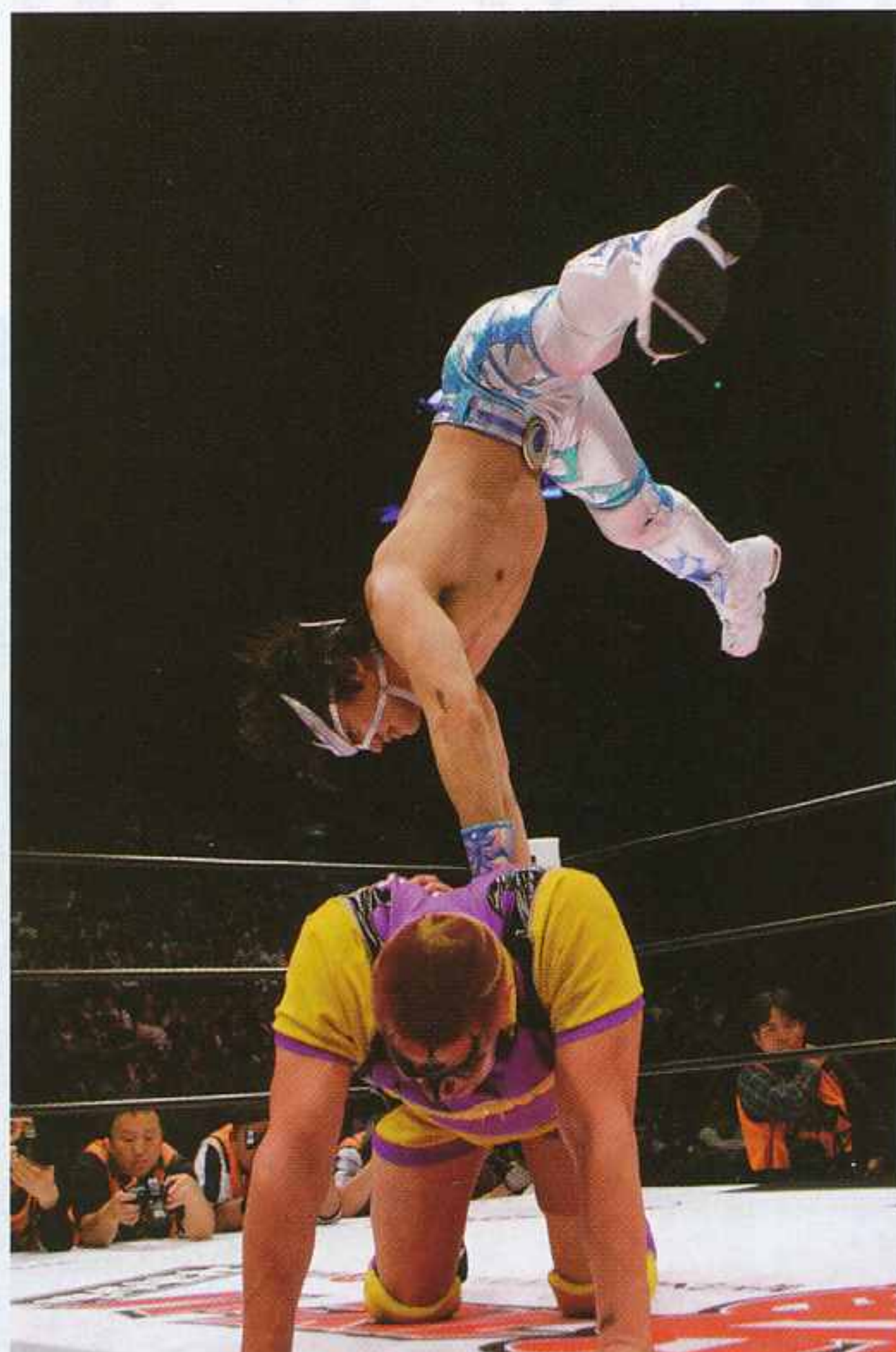
聞き手／坂井ノブ　撮影／平工幸雄

池谷幸雄がマスクマン・池谷銀牙として、『ハッスル』でのデビューを見事に勝利で飾った直後に、今回のインタビュー取材を敢行した。ダメージに顔をしかめながらも、プレッシャーのかかる中でデビュー戦をやりきった充実感もあり、インタビュー中にはおなじみのさわやかな笑顔も飛び出した。

バルセロナオリンピックで銀メダルを獲得した超トップクラスのアスリートである池谷が、『ハッスル』のリングでどのようなパフォーマンスをするのか？　と世間の注目も集めていたこの一戦。ザ・グレート・サスケというパートナーを得て、ルチャリブレの動きを取り入れた池谷は、デビュー戦とは思えないほどの素晴らしい動きを披露。それは、かつてプロレスのリングでは観たことがないほどのハイレベルな身体能力を活かした、まったく新しいムーブの数々だった。

長身のジャイアント・バボにロープへ振られれば逆立ちでしのぎ、あん馬のような動きから相手を押し潰すヒーリープレス、空中で二回スピンして相手にアタックする池谷跳びなど独創的な攻撃がいくつも飛び出した。華麗な身のこなしは観客にため息をつかせ、驚異的な跳躍力はどよめきを起こした。「空中殺法」という殺伐とした単語よりも、「空中芸術」と呼びたくなるような美しさだった。

これはかつてちびっ子からおとなにまで衝撃を与えたタイガーマスクの再来と言っても過言ではないのではないのか!?

とにかく、この日本を代表するトップアスリートが、なぜ『ハッスル』に参戦したのか？　そして、池谷の目に映ったプロレス、そして『ハッスル』とはどのようなものだったのか？

ご覧のように池谷のムーブはプロレスのそれとは明らかに異質な、それでいて芸術性の高いものだった。体操という採点された点数を争う競技で世界のトップに立っているだけに、人に観られることの厳しさも肌で感じている。

体操もプロレスもお客さんの前でやるという部分は同じ。練習が本当にしんどいのも同じ

——腰がだいぶつらそうですが、ケガはありませんでしたか？

池谷　じつは僕、腰の骨が割れててくっつかないんですよ。

——ええ～っ!?　そんな重傷のまま試合をしてたんですか？

池谷　いえいえ、高校1年生の頃からずっとこの状態なんです。この腰のまま体操をやってましたから。

——そ、そうなんですか？

池谷　運動するとすぐに痛くなってしまうんですよ。だから今回も一日練習をしたら3日は治療を受けるという状態でしたね。もう老体なんで（笑）。

——何をおっしゃいますか！　素晴らしいデビュー戦でしたよ。

池谷　そう言ってもらえるとありがたいです（笑）。体操と同じでお客さんにライブで観てもらえるというのは、凄くいいですね。

——お客さんも大歓声でした。

池谷　その場で拍手がもらえるのは最高に気持ちいいし、嬉しいです（ニッコリ）。

——観客からは「銀牙」コールも発生してましたね。

池谷　僕はお客さんが応援してくれたり、盛り上がってくれると燃えるタイプなんです。

——なるほど。どちらかというと練習よりも本番で力を発揮するタイプというか（笑）。

池谷　そうです。体操もプロレスもお客さんの前でやるという部分では共通点がありますよね。そのぶん、練習が本当にしんどいところも同じなんですけど。

——体操はお客さんの前で競技をして、点数で評価されるというスポーツですよね。プロスポーツ的な側面もあります。

池谷　そうですね。いまはプロもアマも関係ないですね。体操もお客さんにウケないと点数も出ませんから。

——そういうものなんですか。

池谷　お客さんがドーッと拍手してくれるような演技は、やっぱり点数が高くなります。どれだけお客さんをのせて、盛り

12.31『ハッスル祭り』参戦までの流れ

決戦まであと11日の12月20日、池谷幸雄が大晦日のハッスル祭りでデビューすることを発表した。「五次元、六次元の空中殺法を見せたい」と意気込みを語った。そこにモンスター軍が乱入、一触即発の睨み合いとなった。

参戦発表前からトレーニングを一緒に行なっていたというザ・グレート・サスケと12月26日に公開練習を行なった池谷。ブリッジで首を鍛えるなど、もともとの身体能力に加えてプロレス用の強化トレーニングも取り入れた。

いよいよ決戦当日の大晦日。注目度が高いデビュー戦とあって、試合前には控室レポートも行なわれた。この模様は会場のビジョンにも流された。テレビ東京・大竹佐知アナが緊迫感あふれる控室を直撃！　だが、ドアを開けると……。

なんとY字開脚でバランスを取る池谷の姿がそこにはあった！　横では一心不乱にシャドーボクシングを繰り返すザ・グレート・サスケ。Y字開脚のバランスは絶品だったが、絵づらとしてのアンバランスさはとんでもないことになっていた。

上げるかという部分はプロレスと一緒なんですよ。もちろん、勝ったり負けたりすることはありますけど、プロレスも見せるスポーツですからね。

―プロレスならではの難しい部分はありましたか?

池谷 あたりまえの話なんですけど、体操の器具は動かないですよね（笑）。でも、プロレスの場合は相手が動くし、その動く相手に合わせて技を仕掛けるのが難しかったなぁ（しみじみ）。あれは体操とは違う難しさですね。

―でも、あん馬のように相手に乗って、そこからプレスする技は、体操とプロレスの融合といった感じで凄く美しかったですよ!

池谷 あれはね、ヒーリープレスという技なんですけど、平行棒のヒーリーという技を応用したプレス技です。

―『ハッスル』の会場には目の肥えたプロレスファンのお客さんも多いんですけど、みんな沸いてましたよ。

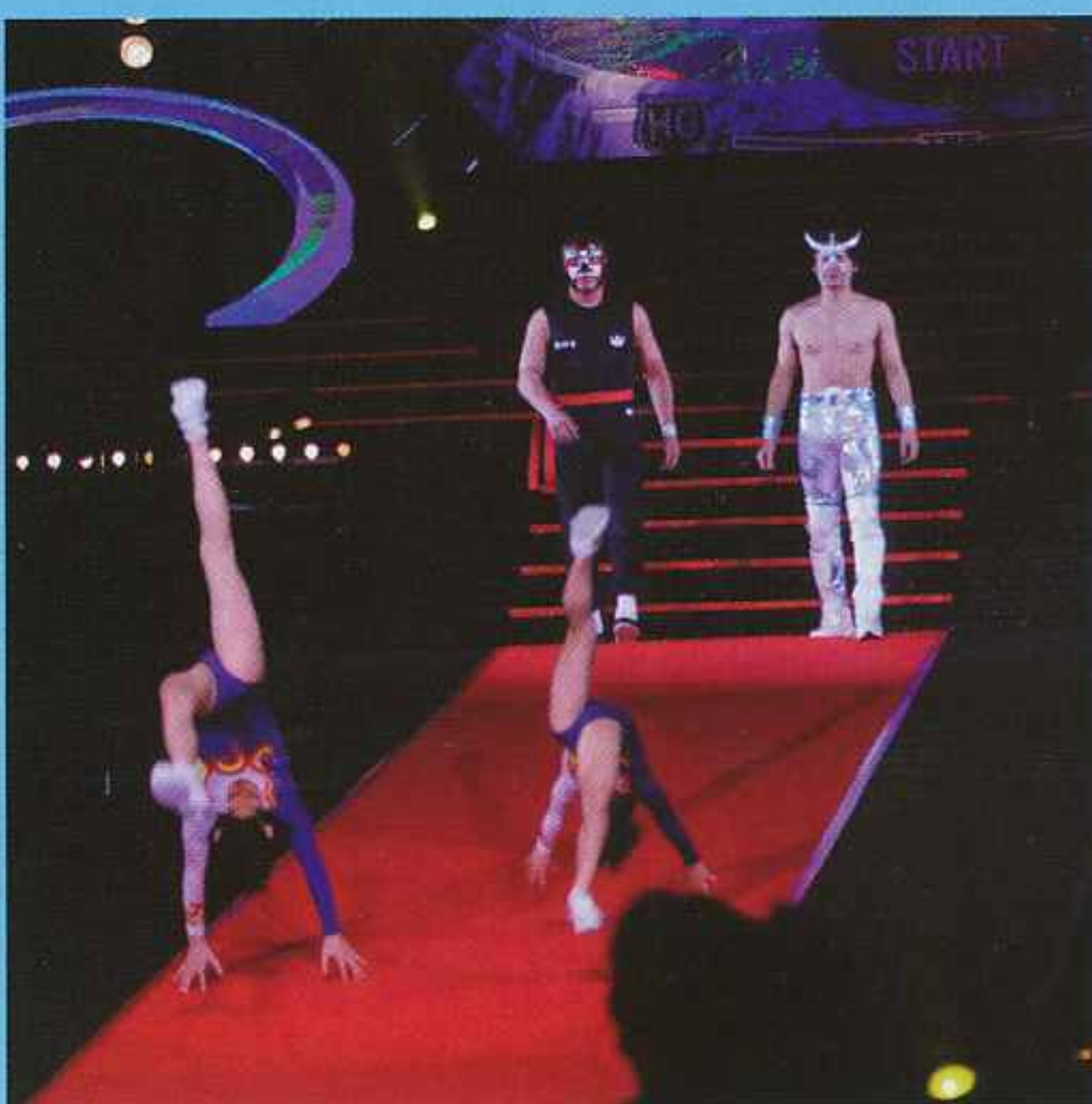
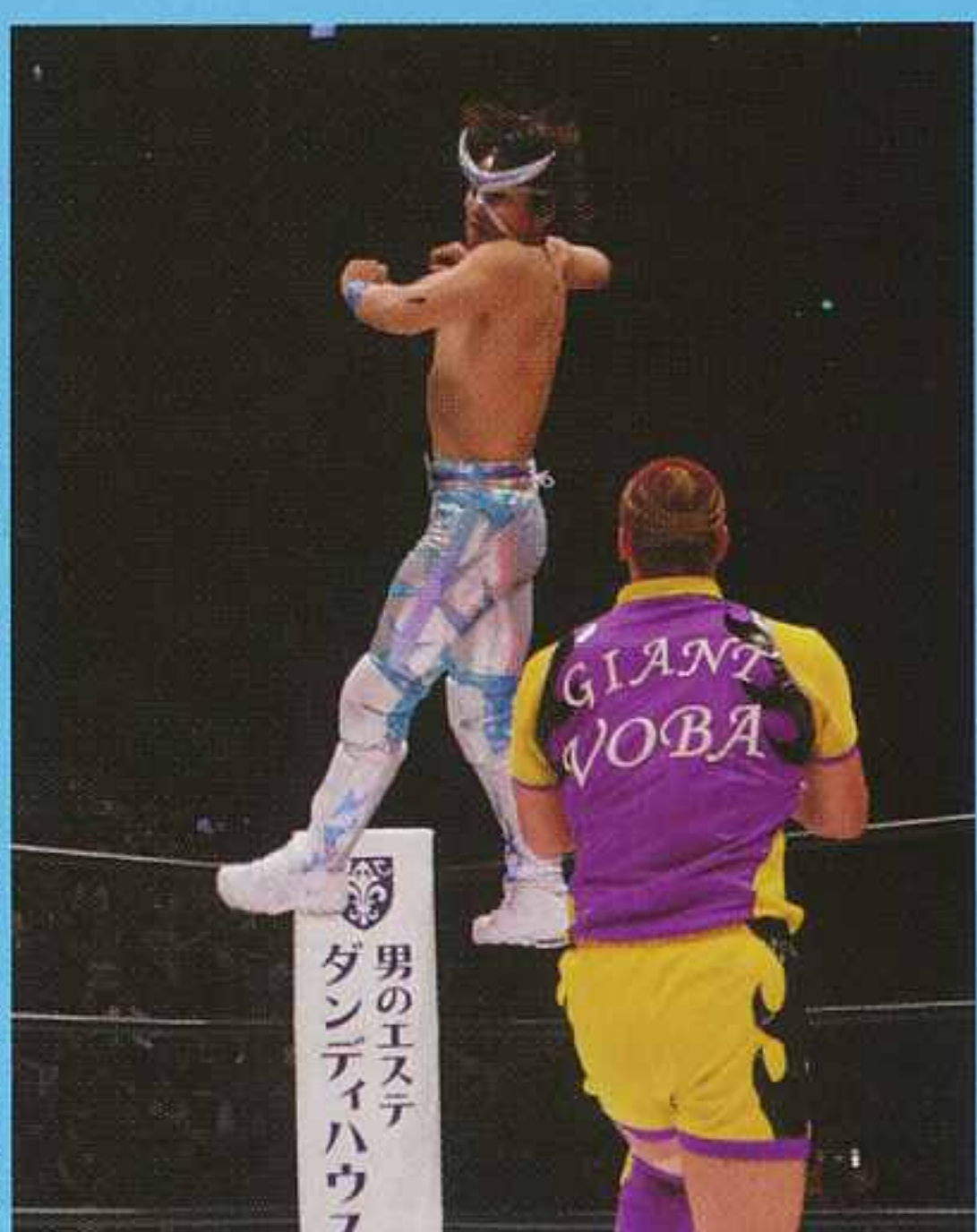
池谷 そうですか（笑）。昔、アニメの『タイガーマスク』は観てましたけど、本物のプロレスを会場で生観戦したことはなかったんで、どういうのが本当のプロレスなのかわからない状態だったんですよね。だから、参戦することが決まってからはいろいろ勉強しました。

―どんな部分ですか?

池谷 見せ方だったり、間の取り方だったり、不自然にならないように心がけました。どういうふうにしたらいいのかということをずっと考えてましたね。

―試合で闘う上で一番注意したのは?

池谷 相手の動きに合わせながら、タイミング良く攻撃したり、受けたりするという部分ですね。練習と試合ではタイミ

池谷銀牙デビュー戦のすべて!!

池谷幸雄体操倶楽部で指導している生徒さんが、先生の晴れ舞台を入場を華麗に盛り上げる! 側転や宙返りを次々と披露して、さいたまスーパーアリーナは大きくどよめいた。

コーナー最上段から二回転しながら相手にぶつかるという観たこともない技で高田モンスター軍をキリキリ舞いさせた。これが池谷跳びである。身体の軸がぶれない回転は本当にお見事だ。

僕はスポーツ選手として一流でやってきた人間だから、中途半端なことはできない!

ングの取り方も全然違うし、お客さんのリアクションで少しずつ変えていかないといけない。お客さんがいる中だと間の取り方や雰囲気が凄く難しいですね。

―デビュー戦でそこまで考えて動ける選手は、なかなかいないですよ（笑）。さすが銀メダリストですねぇ。

池谷 いろんなアンテナを張り巡らせてましたよ。相手だけを見て闘えばいい、というものではないですね。飛んだり跳ねたりするだけなら、練習をいっぱいやればいいんですけど、プロレスは相手あってのものですからね。プレス技を仕掛けるときの落ちる位置もかなり気をつけました。体操やってた頃はきれいに立って着地することだけを考えて練習をやってたんで（笑）。

―まあ、全然違いますよね。空中で相手にぶつかったり、受け身をとるのも難しかったんじゃないですか?

池谷 受け身は体操時代にも腹から着地したり、背中から着地する練習はしてたんです。ただ、体操のときはマットがありましたけど、こっちはリングですからね（笑）。痛かったですよ。

―腰以外のダメージはなかったですか?

池谷 じつは昨日の練習のときに池谷跳びをやって足首をひねってしまったんです。

―えっ、そうなんですか? 試合中はまったくそんなことは気がつきませんでしたけど。

池谷 テーピングをぐるぐる巻きにしてガッチリ固めてました。じつは、ちょっと不安だったんですけど。

―ケガの影響をまったく感じさせないというのもプロですねぇ。リング上では「ハッスルのリングに上がりたいと思っている体操の選手はまだいます。もしよければ銀牙軍団を作ります!」と宣言しましたが、これはおもしろい展開になりそうですね。

池谷 今日、自分が試合をやったことで、体操をやってる選手も『ハッスル』のリングに立てるんだよという可能性を示せたと思うんですよ。

―確かに、体操選手の身体能力の高さは、リングでも応用できるということが今回の池谷さんの試合でハッキリわかりましたね。

池谷 それに、僕が『ハッスル』のリングに上がって多くの人に観てもらうことで、体操という競技のことも認知してもらえると思うんですよ。「体操をやれば体力がつくんだ」とか「体操選手の跳躍って凄いな」とか、体操のことを知ってもらういい機会になりますよね。

―今日、池谷さんと一緒に入場した二人の女の子は凄くレベルが高かったですね。池谷さんの教え子なんですか?

池谷 ウチ（池谷体操倶楽部）の小学校5年生と6年生の生徒です。彼女たちは2012年のロンドン五輪を目指してて、日本でもトップレベルの子たちなんですよ。

―へぇ～っ、彼女たちもいずれ『ハッスル』でデビューしたらおもしろそうですね!

プロレスからの脱出

池谷　僕のほかにも体操選手はまだまだいますから！　銀牙軍団が続々と登場したら、もっと驚くことになると思いますよ（笑）。

――ちなみに、元体操選手でタレントとして活躍中の弟・池谷直樹さんが銀牙軍団に加入する可能性はあるんでしょうか？

池谷　それはちょっとわからないですけど（笑）。

――『ハッスル』はいろんなジャンルの人たちが上がってくる舞台なんですが、他ジャンルから参戦してくると、その人の素の部分とかバックボーンがハッキリとお客さんに見えてしまうんですよね。そういう部分でのプレッシャーはありませんでしたか？

池谷　僕はスポーツ選手として一流でやってきた人間ですから、『ハッスル』のリングで中途半端なことは絶対にできないなと思ったんです。

――体操というジャンルを背負って、リングに立っていたという部分もあったわけですね。

池谷　だから、もの凄いプレッシャーでしたねぇ（しみじみ）。ひさびさに現役を思い出したというか、頭の中で毎日寝る前にイメージトレーニングをしてました。凄く真剣だったし、怖かったし、緊張しましたよ。

――参戦が決まってから、時間もあまりなかったですよね。

池谷　そうなんですよ。身体を治す時間もあまりなかったので、痛い状態のままトレーニングを始めたんですよね。

――参戦を決意したときには、葛藤はありませんでしたか？

池谷　今回のお話をいただいたときは嬉しかったですよ。それと同時に「大丈夫かな？」という不安もありましたね。ただ、最近は子どもたちを教えることが多くて、自分が舞台に立つ機会がそんなになかったんですよ。いいチャンスだなと思ったし、もう一度自分の身体を鍛え直す絶好のチャンスだと思ったんです。どうしても子どもたちの指導ばかりしていると、自分の身体を鍛えることは二の次になっちゃいますからね。

――ひさびさに自分を鍛え直してみていかがでしたか？　『ハッスル』のリングに継続的に上がってみたいという気持ちになりましたか？

池谷　もちろん、今後もチャンスがあれば上がってみたいですけど、まずは今回のダメージがどれぐらいで回復するかを見極めたいですね。体操ではあまり殴られることもないので、殴られたアゴが凄く痛い（笑）。

――キャメルクラッチもカナディアン・バックブリーカーも体操にはないでしょうからね（笑）。

池谷　ないです、ないです（笑）。経験したことのない痛みでしたね。

――たとえば、学生時代にプロレスごっことか、ケンカとかしたことはなかったんですか？

池谷　子どもの頃からずっと体操をやってましたから、体操以外のことでケガをするのはご法度だったんです。だからプロレスごっこはもってのほかだったんですよね。

――やはりオリンピックを目指すアスリートは、日常生活の中から非常に厳しいんですね。

池谷　そうですね。ほかのスポーツでケガでもしたら元も子もないですから、僕は学生の頃は体操以外のスポーツをやったことがないんです。プロレスや格闘技には興味を持たないような生活をあえてしてたんですよ。

――そこまで厳しく自分を律していたんですか！

池谷　それがこの歳になって、『ハッスル』参戦のお話をいただけるとは夢にも思っていなかったです。だから本当に感謝してます。

――では、最後になりますが「次の試合はこんな相手と対戦してみたい！」という希望はありますか？

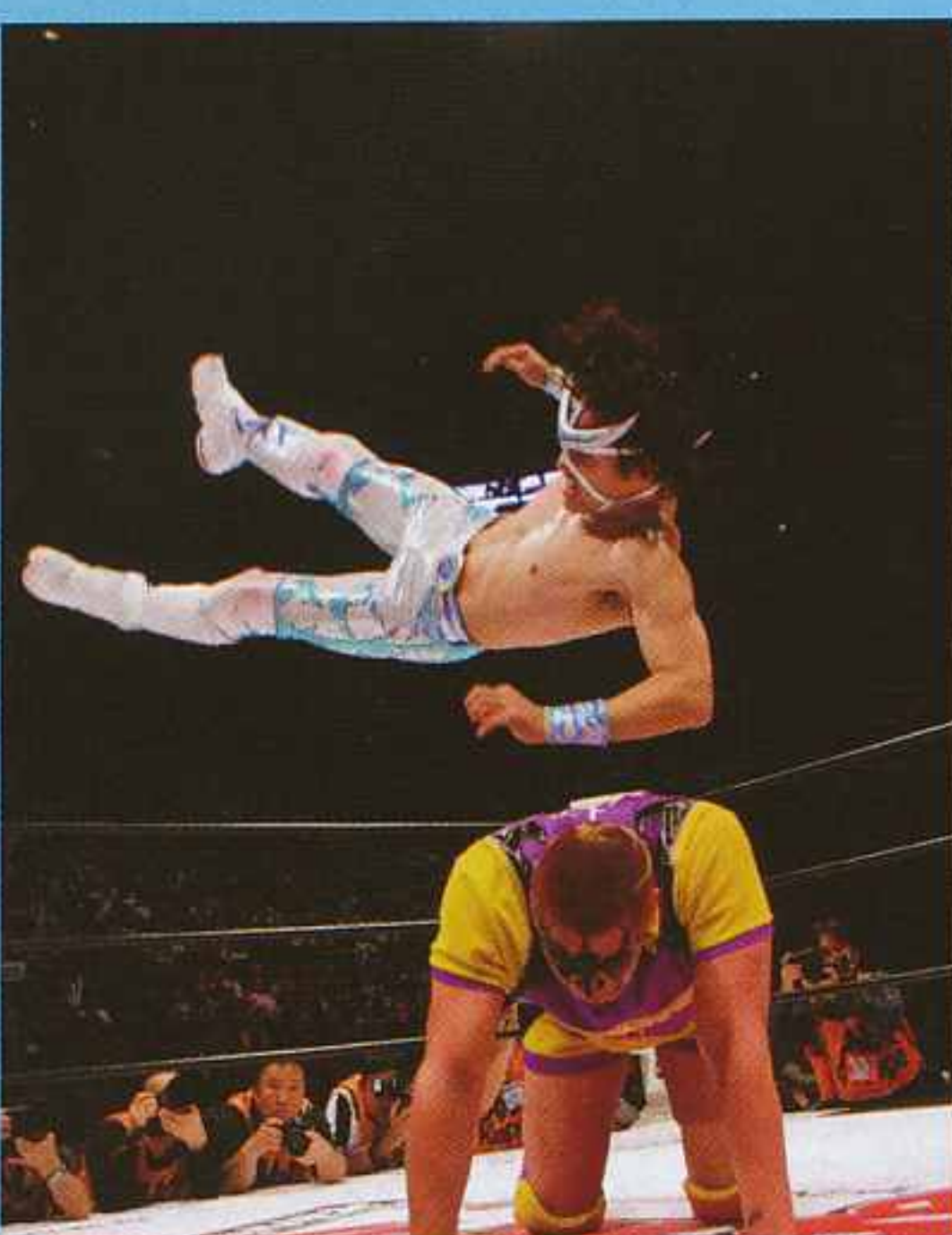
池谷　やっぱり大きい選手と対戦してみたいですね。自分はあまり大きくないですから、そのほうが逆におもしろい試合になるんじゃないかなと思うんですよ。

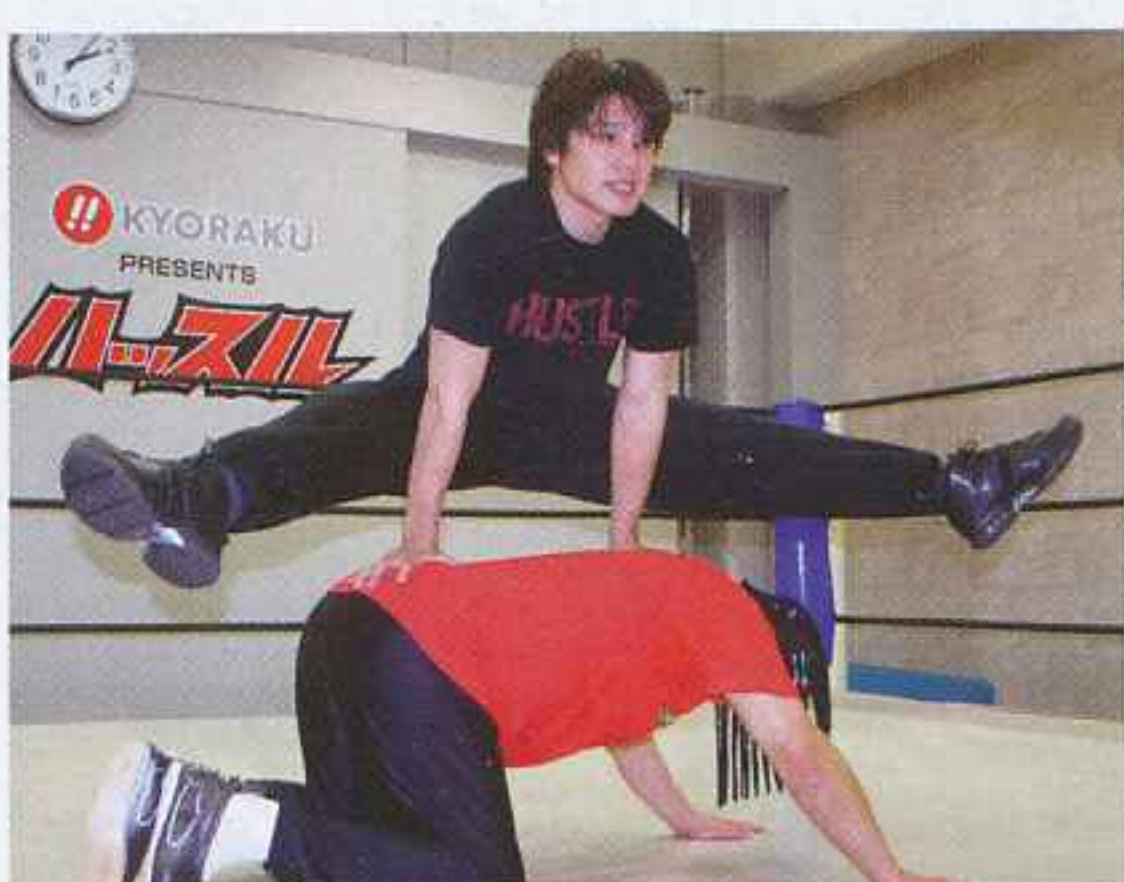
――確かにそうですね。

池谷　そのほうが見栄えもするし、空中殺法も効果的に使えると思いますからね。

――次回の『ハッスル』参戦もおおいに期待してます！

【07年12月31日／さいたまスーパーアリーナにて収録】

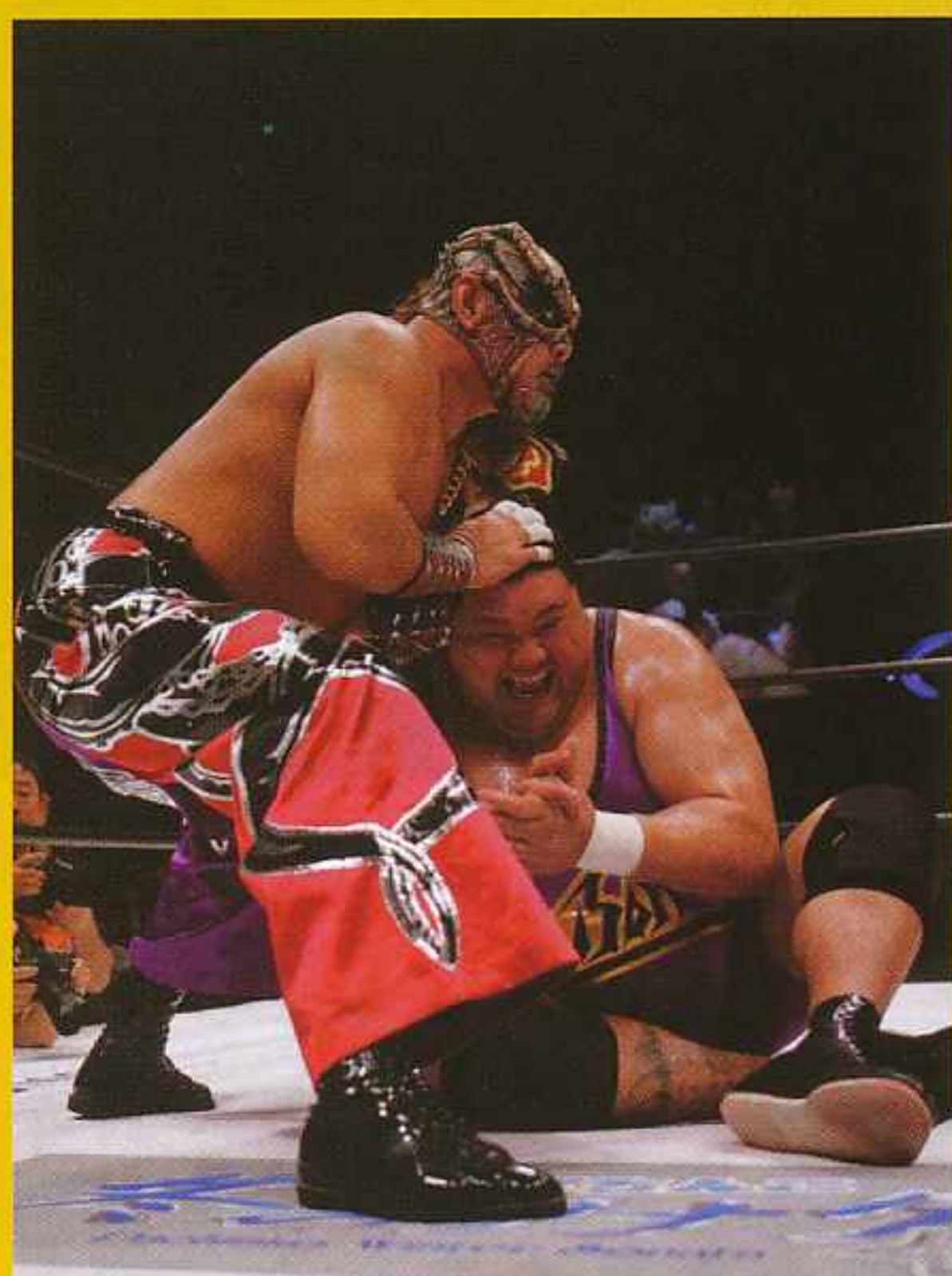
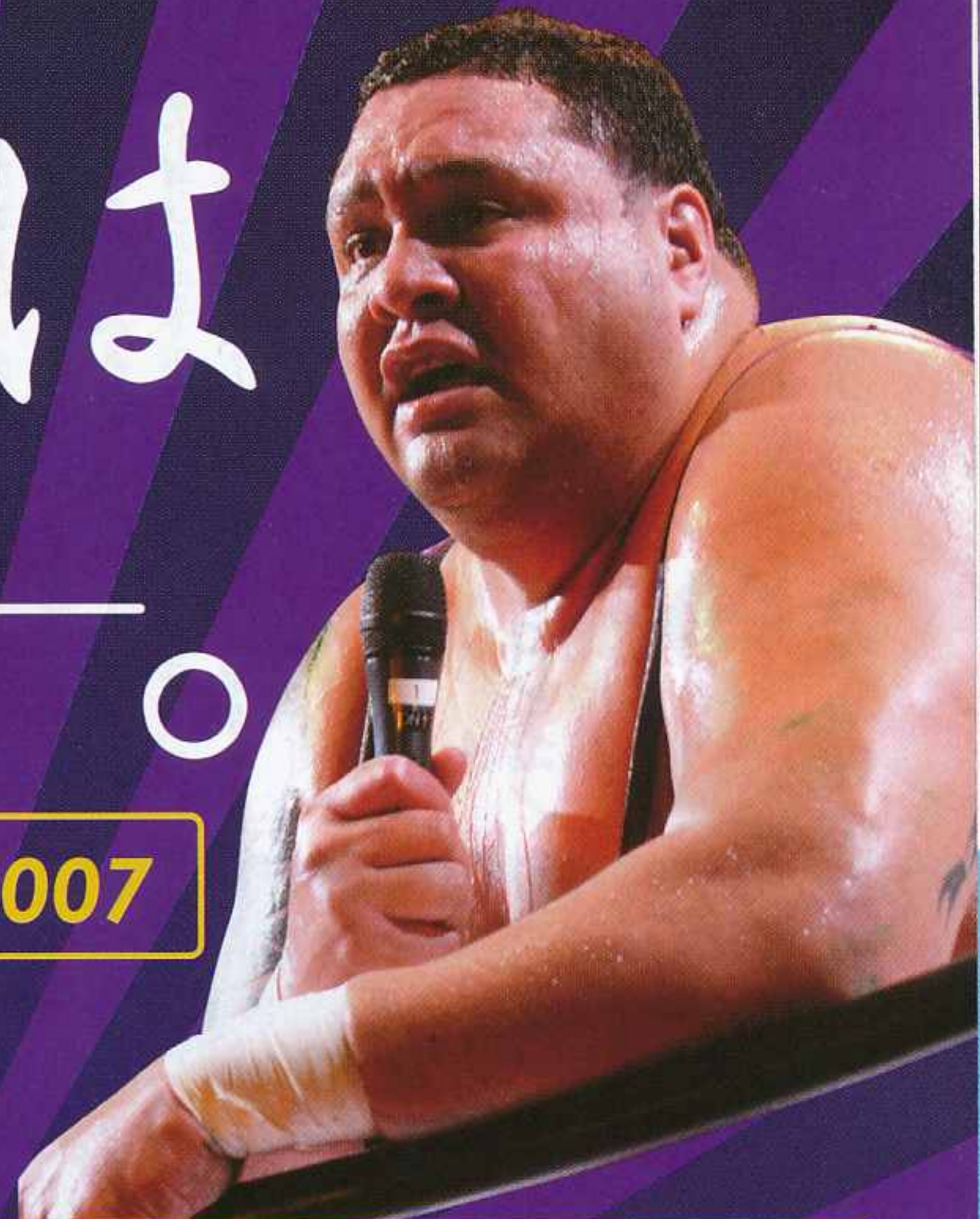
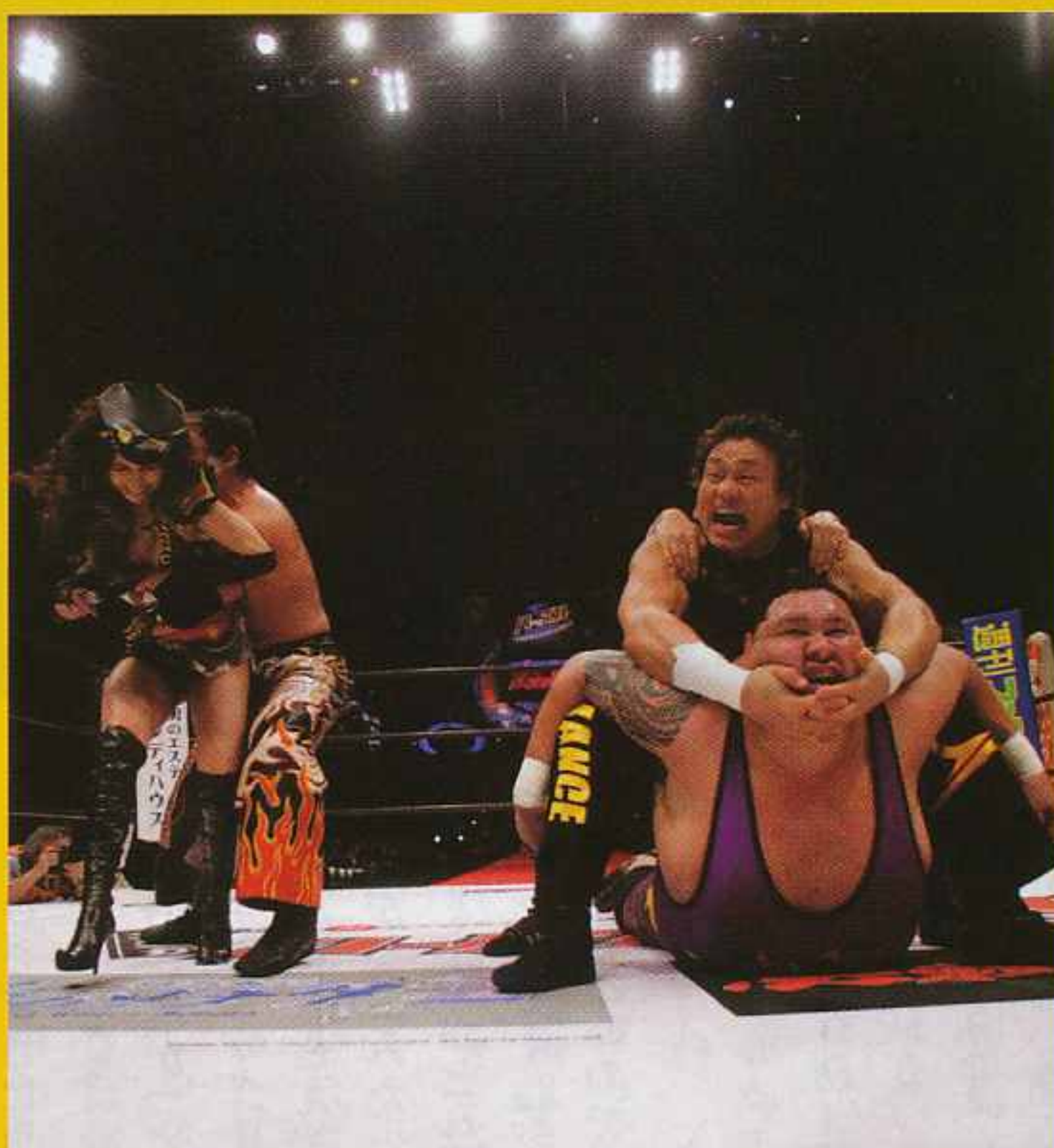
しかし、中盤からは体格で勝るモンスター軍が反撃を開始。ジャイアント・バボにつかまってしまい、カナディアン・バックブリーカーの体勢からヒザをマットにつけて銀牙の腰と背中に大ダメージを負わせた。

しかし、最後には見事に逆転！　体操のあん馬のように四つんばいのバボの上に乗った池谷は背中で逆立ち。そこで体勢を入れ替えると背中からバボに落下。重力と自分の体重を利用した衝撃とスピードのある技だ。

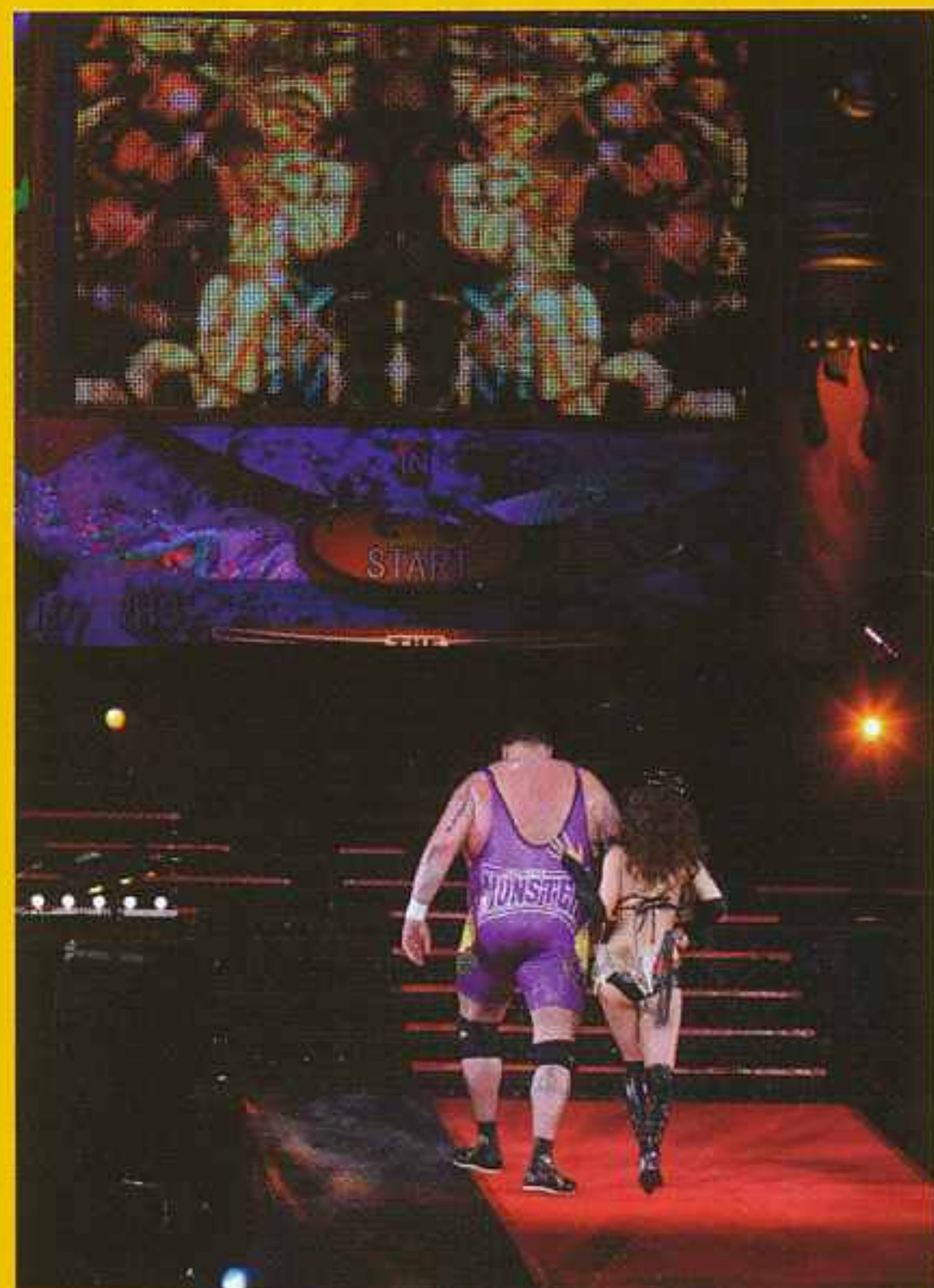
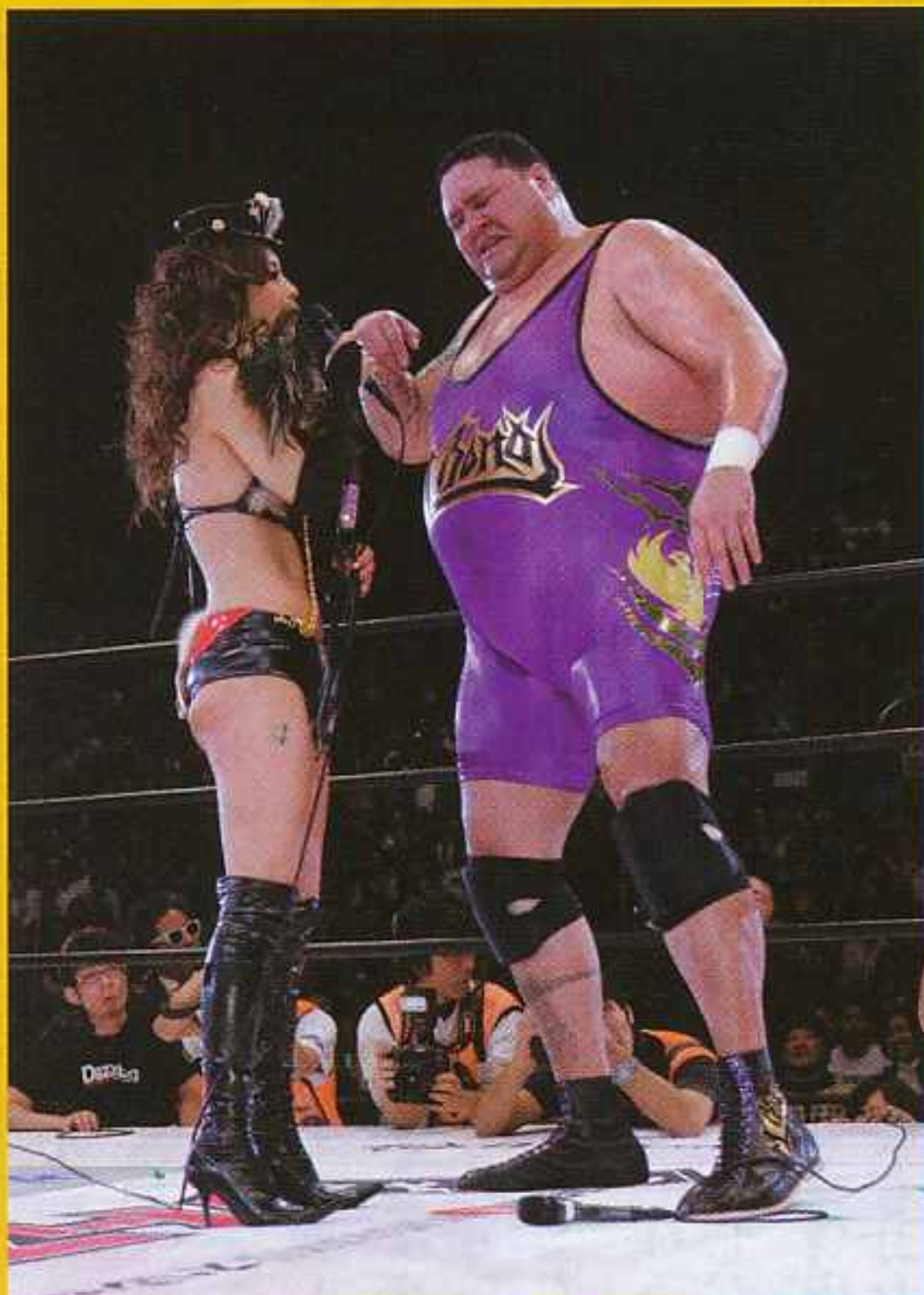
必殺技の銀牙プレス（コーナー最上段からひねりを加えたムーンサルトプレス）でジャイアント・バボをプレスして3カウント！　喜びをリング上で爆発させた。

いけたに・ゆきお■1970年9月26日、東京都府中市出身。4歳から体操を始めて、名門・清風高校在籍時に注目を集める。88年のソウル五輪の体操で団体と個人床で銅メダル、92年のバルセロナ五輪では団体の銅メダルと個人床の銀メダルを獲得。現在はタレントとしての活動とともに池谷幸雄体操倶楽部で子どもたちの指導も行なっている。170cm、61kg。

ボノちゃんは美しい――。

麗しのモンスター・ボノ写真館inハッスル祭り2007

グレート・ムタとインリン様の息子、ボノちゃん。その愛くるしい（not 暑苦しい）キャラクターは『ハッスル』の世界で誰からも親しまれている。毎年、大晦日になるとうなだれる曙の姿ばかりを観ていた気がするけど、今年ボノちゃんが流した涙は最高に美しかった！

構成／坂井ノブ　撮影／山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント

グレート・ムタはいぶかしげにボノのことを見つめると、ゆっくりと近づいて頭をなで回す！　待望のパパに会えてボノちゃんは大喜びだ。よかったね、ボノちゃん……。

しかし、パパは現われずママとボノちゃんは大ピンチに。天龍のキャメルクラッチを受けるボノちゃんはホントに苦しそう！　しかし、ここでどこからともなく鐘の音が鳴り響き、花道から不気味にグレート・ムタが登場した。

「パパに会いたいの！」「パパ、ボクのこと嫌いなの？」放蕩オヤジのムタに会えない寂しさを募らせるボノちゃんは、ママに泣いてせがむのだが……。嗚呼、美しき親子愛！

「さあ、おうちに帰って年越しそばを食べましょう」とママになだめられたボノちゃんは、ようやく笑顔を取り戻した。強くて寂しい二人の背中に、さいたまスーパーアリーナが号泣した。

しかし、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。パパの背中にボノちゃんは「一緒に3人で暮らそうよ！」と号泣。ママは「パパにはパパの生き方があるのよ」と優しくなだめた。

前回、インリン様をバズソーキックでＫＯしたTAJIRIに親子タッグは集中砲火。ムタのシャイニング・ウィザードとインリン様のハイキックがズバッと決まって親子水いらずでフォール。嗚呼、家族愛！　これが新しい家族の肖像だ！

2007年最後の日にふさわしいド派手な話題がテンコ盛り

♪祭〜りだ祭りだ祭りだハッスル祭〜り

ハッスル祭りトピックス

『ハッスル』がド派手なのはリングの上だけではない。『ハッスル祭り』のリングサイドにいた人をざっと挙げてみるだけでも凄い！　女子レスリングの吉田沙保里と伊調姉妹、ドクター中松、アンタッチャブル山崎、そして〝小池の旦那〟坂田亘の夫人である小池栄子さん！

最も目を引いたのは、ジャイアント・シルバやスコット・ノートンの猛攻に苦闘する坂田を心配そうに見つめる小池さんの祈るような表情。妖精さんは妖精さんとして力は発揮できなくても、ハッスル軍を見守っているのだろう。

大会の内容については81ページからの記事で触れているが、ケロロ軍曹の試合について補足しておきたい。07年プロレス大賞MVP受賞者のような見事な体型になって帰ってきた軍曹は、仲間のタママ二等兵、ギロロ伍長を同伴しており、声優3人がいっぺんにしゃべりながら試合をするという前代未聞の騒がしい試合になった。勝ってよかったであります！（敬礼）。

リングサイドで妖精さ……じゃなかった、坂田の妻・小池栄子さんが祈るような表情で観戦。視線の先にはジャイアント・シルバと坂田亘。あまり知られていないが坂田の腰は爆発寸前で1月にも手術を受ける予定になっている。

見事な腹になって帰ってきたケロロ軍曹。ちびっ子ファンも納得のスカ勝ちで長い大晦日の最初の試合を勝利で飾った。

ある意味で、大晦日最大のサプライズか!? "発明王"ドクター中松がリングサイドで『ハッスル祭り』を観戦した。是非とも登場していただきたい！

すでに3回ぐらい『ハッスル』をリングサイドで観戦している吉田沙保里と伊調姉妹。中京女子大レスリング部出身の\(^o^)/チエとともに汗を流した間柄なのだ。

ハッスル今後の大会スケジュール

KYORAKU PRESENTS
ハッスル27 ファイティングオペラ
1月13日（日）愛知県体育館　16:00開場／17:00開演
［チケット料金］ハッスルVIP 10,000円／S 5,000円／こどもS 2,500円
A 3,000円／こどもA 1,500円

KYORAKU PRESENTS
ハッスル・ハウス vol.32
1月17日（木）後楽園ホール　18:00開場／19:00開演
［チケット料金］ハッスルVIP 10,000円／スタンドS 7,000円
スタンドA 5,000円／スタンドB 3,000円

KYORAKU PRESENTS
ハッスル・ハウス vol.33
2月21日（木）後楽園ホール　18:00開場／19:00開演
［チケット料金］ハッスルVIP 10,000円／スタンドS 7,000円
スタンドA 5,000円／スタンドB 3,000円

KYORAKU PRESENTS
ハッスル28 ファイティングオペラ
2月24日（日）さいたまスーパーアリーナ コミュニティアリーナ　16:00開場／17:00開演
［チケット料金］ハッスルVIP 10,000円／S 5,000円／こどもS 2,500円
A 3,000円／こどもA 1,500円

［問い合わせ］ハッスルエンターテインメイト TEL.03-5464-1731 http://www.hustlehustle.com/

フードファイトに
“闘い”はあるのか!?

GK探検ファイル
番外編

ジャイアント白田が大食いの神髄をレクチャー!!

GK隊長
かなざわ・かつひこ■元『週刊ゴング』編集長。現『Gリング』統括プロデューサー。テレビ朝日『ワールドプロレスリング』の解説も務める。プロレスマスコミの重鎮として幅広い取材活動を行なう一方、探検隊を結成し体当たりで取材に挑んでいる。

小松隊員
こまつ・しんたろう■元『SRS・DX』編集部。以前からGKと親交があり、『週刊ゴング』で座談会も担当していた。元相撲部でもあり非常にグッドルッキンなボディを持つ。“受け”の美学は今回も全開だ!! 通称「モグラ」。

11.25『ハッスル・マニア2007』でデビューを宣言、大晦日の『ハッスル祭り』でデビューをはたしたジャイアント白田。そんなデビュー戦の直前にプロレス探険隊が直撃!! 大食いとプロレスに共通する要素はあるのか!? ぜひホットドッグを食べながらお読みください!!

構成／坂井ノブ　撮影／平工幸雄

GKスペシャル プロレス探検隊

プロレス探検隊が満腹の向こう側を目指す!!

小松隊員の栄光と受難

順調に
完食！

小松隊員はジャイ白から教わったテクで隊長よりも早くホットドッグを完食してしまった。これが若さか？　あるいは単に腹ペコだった？

なぜだっ!?
隊長は不満顔

ジャイアント白田も小松隊員の頑張りを認めているが、一人だけおもしろくない顔をしている隊長。完全にダメ出ししている。

ギョエ〜
どんだけ〜!?

「私より目立つなと言っただろう！」まるで高田総統のようなセリフで小松隊員に襲いかかるGK隊長。またもご乱心か!?

フゴフゴ
ハガハガ

ホットドッグを口に突っ込み、「さあ食べろ！」と第2ラウンドのゴングを鳴らす隊長。自分より早く食べたのが気に食わなかったのか。

さすが王者だ！

ジャイアント白田が仲裁に入って探険隊の仲間割れは回避。王者の器の大きさに感服した探検隊だった。ちなみに小松隊員は2本目も完食。

GK隊長の人生初大食い

いきなり
むせてます

いざ食べ始めようと口に水を含んだとたんにいきなり咳き込む隊長。ちょっと緊張気味なのか!?　気合いは充分、いざチャレンジ！

味わって
食べてます

「うわ〜、これおいしい！」といきなりホットドッグを味わい始めた隊長。しかし、今回の探検はグルメ企画ではないのだが……。

あせらず
水を飲もう

まったりと舌の上でホットドッグを転がしていた隊長だったが、ようやく企画の趣旨を思い出して大食いのテクを実践。水だ、水！

ラストだ
押し込め

ホットドッグの大食いでは口の中にすべてを押し込めば“食べた”ことになる。噛んで、飲みながら、押し込むのはけっこうしんどい。

やったぜ隊長！

ホットドッグ1本を完食！　さすがにジャイアント白田よりはスピードは遅いが、食べることに意義がある！　隊長が輝いて見える。

ジャイアント白田の模範大食い

まずは口に
水を含みます

大食いには技術が必要。ただ単に勢いよく食べればいいというものではない。まずは水を含んで口を湿らせる。これで準備完了だ！

大きく
ひと口!!

細かくかじっていきながら大きくひと口!! これを3回でホットドッグ一本を食べてしまうのがジャイアント白田流なのである。

水と交互に
口に入れろ

とにかくスムーズに胃の中に食べ物を流し込むためには水が不可欠。のどに詰まる危険性を回避するという効果もあるのだ。

三口で
き、消えた

細かくかじりながら大きく三口で本当に目の前からホットドッグがなくなってしまった！　フードファイター熟練の技である。

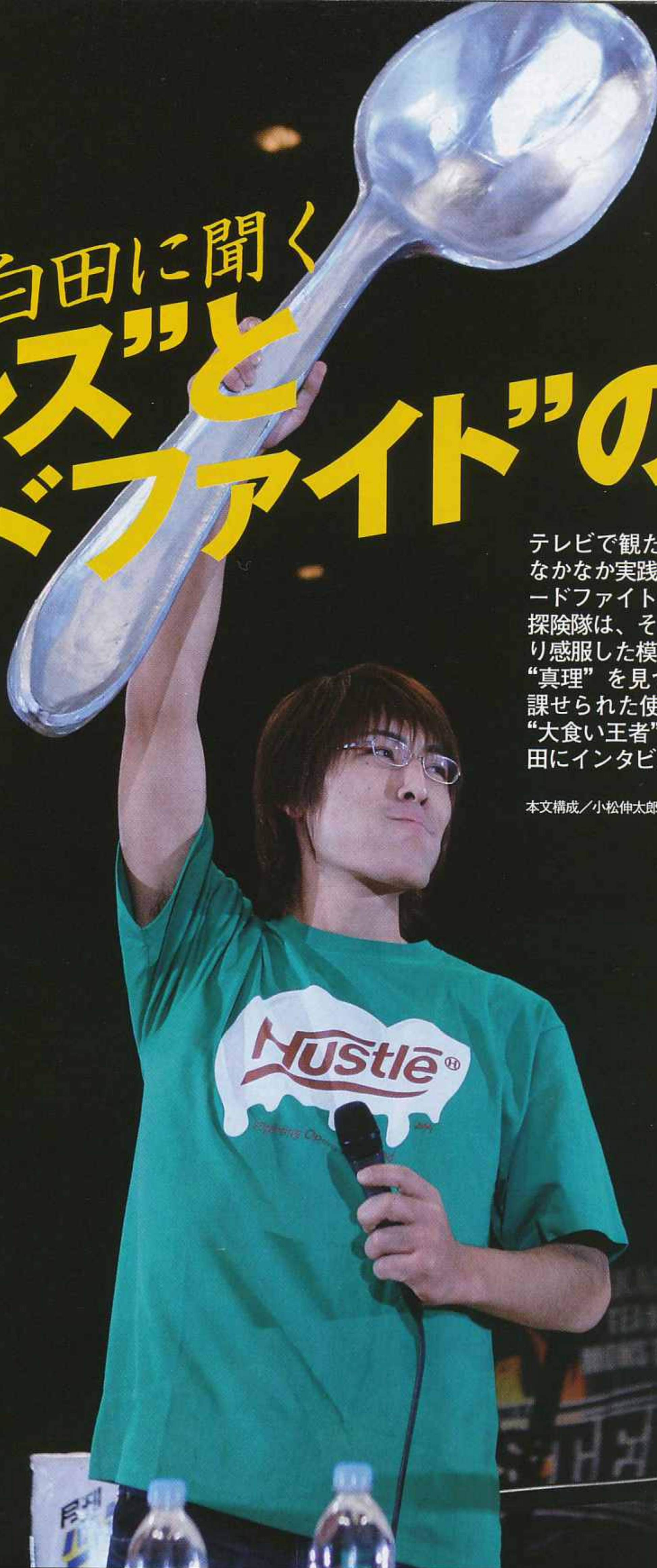
すげえスピード

王者の神髄を目の当たりにして大興奮の探険隊。大食い王者は余裕の表情（あたりまえ）。さあ、探険隊もレッツ・チャレンジ！

GK探検ファイル
番外編

ジャイアント白田に聞く “プロレス”と“フードファイト”の共通点

テレビで観たことはあっても、なかなか実践する機会のないフードファイトにチャレンジした探険隊は、その奥深さにすっかり感服した模様。その奥にある“真理”を見つけるのが彼らに課せられた使命である。いざ、“大食い王者”ジャイアント白田にインタビュー！

本文構成／小松伸太郎

GK　さて、小松隊員！　さっそく「フードファイトはプロレスである」という命題に……（と、テーブルの上のホットドッグを見つける）。白田さん、食いながらでもいいすかぁ？

白田　どうぞ、どうぞ（笑）。

GK　いただきま〜す！　パクパクパク。

小松　た、隊長！　ま、まだ食べるんですか？

GK　（無視して食べながら）モグモグ。ということで、白田さん、フードファイトはプロレスですか？

小松　いつもながらなんと単刀直入なご質問！

GK　黙るんだ、小松隊員！　私が聞いたのは白田さんだ。さあ、白田さん、どうですか？

白田　フードファイトは格闘ですよ（キッパリ）。

GK　（不敵な顔で）フフフ、言いきりましたね！　して、その根拠は？

白田　やっぱり、トレーニングをするんですよ。僕らの場合はより食べられる胃を作ります。まあ、胃を広げるんですけど、そういう部分ではプロレスや格闘技と共通点があると思いますね。

小松　い、胃を広げるって、そんな無茶な！

GK　黙って話を聞け、小松隊員！　白田さん、具体的にはどのようなトレーニングをするんですか？

白田　たとえば、2ヵ月後にホットドッグの大会があるとすると、まず最初にホットドッグを食べられるだけ食べるんです。で、その時点で30本食べれたら、その二日後には34本っていうふうに、少しずつ食べる量を増やしていく。自分の胃の許容量を詰め込むことによってドンドン広げていくんですね。

小松　そ、その方法で胃は広がるものなんですか？

11.25『ハッスル・マニア2007』でデビューを宣言。挨拶がわりにカレーをたいらげてみせた。

「トレーニングに時間を割けないのは、相手に失礼。だから大食い競技をやめる」

白田　胃袋って筋肉なんで、胃の内側から圧力をかけてやると胃壁が伸びていくんです。ちなみに、僕の胃はマックスで12・5〜13キロ弱ぐらいまで伸びますね。

小松　はあ？　そ、その○○キロっていう数値は何を表わしているんですか？

白田　胃袋の容量です。

小松　ギョエ〜！　つまり、白田さんの胃には13キロもの食べ物が入るんですか!?

GK　（ホットドッグをくわえながら）モグモグ。これはたまげたねぇ！　ちなみに、日本のほかにフードファイトをやっている国はあるんですか？

白田　ほとんどがただの大食い自慢が出ているような段階で、競技的なのはアメリカのホットドッグ大会ぐらいですね。フードファイトに関して日本は先進国ですよ。

GK　（2本目のホットドッグを食べながら）モグモグ。アメリカのホットドッグ大会ってのは、いまや国際的にも有名になった『ネイサンズ国際ホットドッグ早食い選手権』ですよね？

白田　そうですね。もともとは盛岡のわんこそば大会みたいなノリだったんですけど、いまは世界大会というかたちになってますね。

GK　じゃあ、その大会も日本人のように胃袋を鍛えた人たちが出てきたことによって、競技化したって感じなんですかね。

白田　そうですね。小林くんっていう人を知ってますか？

小松　小林尊さん。その大会で6連覇を達成された方ですよね。

白田　はい。彼が圧倒的な力の差を見せたことで、アメリカ人もトレーニング方法を模索していって、競技のレベルがドンドン上がっていったんですよ。

小松　なるほど。そう考えると、小林さんは初期UFCにおけるホイス・グレイシーの存在に似ていますね!?　そうでしょう、隊長!?

GK　ふっ。その指摘は甘いぞ、小松隊員。日本のマット界でいえば逆黒船だよな。逆ヒクソンだよぉ！

小松　（興奮しながら）た、隊長！　つまり、フードファイトイコール、グレイシー柔術だった、と！

GK　（小声で）ま、待て。それではフードファイトイコール、プロレスにならないではないか。結論を急ぐな。

小松　ラ、ラジャーです……。

GK　（ホットドッグは3本目に突入）モグモグ。

インタビュー中もホットドッグが止まらなくなってしまった隊長。確かにおいしかったけどさ……。

ところで、白田さんは9月に大食い競技から引退されたそうですね。

白田　じつは飲食店を開きたいという夢があって、今年の春から動いているんですけど、そうするとトレーニングに時間を割けないんですよ。自分のベストを出すには、ほかのものをすべて捨てて、半年から一年はトレーニングをしないとダメですからね。まあ、ベストじゃなくても、うまくやれば勝てます。でも、それだと自分も不完全燃焼だし、相手に対して失礼ですから。相手が本気で向かってくる以上は僕も本気で取り組みたい。それができないならやめちゃおうということですね。

GK　くぅ〜、聞いたか、小松隊員!?　この闘いへの気持ちのぶつけ方！　トレーニングは凄いストイックで総合格闘技的だけど、闘いは間違いなくプロレス的だ！　だいたいフードファイトだって命懸けでしょ？

白田　命懸けですね。内臓を痛めますからね。僕も胃炎や食道炎になりました。あと、ちょっと硬いものを食べると、引っかかって、食道が切れたりしますね。粘膜が剥がれることなんてザラですよ。

小松　な、なんて壮絶なんだ……（絶句）。

GK　いや、この身の削り方は間違いなくプロレスラーです！（白田の手をギュッと握りしめ）この金沢、大晦日は白田さんをトコトン応援しますぞ！　そうだろ、小松隊員？

小松　はい、レッツゴー・ジャイ白です！

GK　それでは白田さんの勝利を祈願して、もう1本、ホットドッグをいただきま〜す！　モグモグ。

小松　ゲゲ〜！　まだ、食べるんですか！　もう、隊長の姿を見ているだけで胸焼けがします……。

【07年12月14日／都内、ハッスル道場にて収録】

じゃいあんと・しろた■1979年4月20日、栃木県出身。テレビ東京系『TVチャンピオン』でデビュー。大食いの舞台で数々の優勝を飾り、バラエティ番組などにも出演。07年9月に大食い大会からの引退を宣言。07年大晦日、『ハッスル祭り』でプロレスデビューをはたす。ちなみにリングネームの「ジャイアント白田」はテレビ東京の番組制作者が名付けたもの。195センチ、90キロ。

金沢"GK"克彦隊長の 探検レポート

ジャイ白さんはいい人だった。まあ、でっかい人がたいていいい人だってことは知っている。なんせ、でっかい人たちに囲まれて20年以上も仕事をしてきたのだから。じゃあ、もし馬場さんの在命中、「早食い、大食いってなんですかね？」と聞いたら、絶対に「それもプロレスや」と答えが返ってきたと思うのだ。「相手が本気でくる以上、僕も本気で取り組まないと。それができないならやめる」って……ジャイ白さん、アンタ男の中の男だよぉ。

小松伸太郎隊員の 探検レポート

じつはこの取材の日、私も早食いチャレンジで2本、そしてインタビュー中にも3本、計5本のホットドッグをたいらげていたのだ。その結果、この日はひどい胸焼けに苦しむこととなった。そして、翌日。まだ胸焼けが残る中、昼に食べた唐揚げ弁当と缶コーヒーの食い合わせの悪さも手伝って、胸焼けがさらに悪化。吐き気までこみ上げてくるひどいものだった。フードファイターの胃袋や食道の丈夫さを身をもって実感した次第である。

こが世界最高峰だ！

これがMMA界のメジャーリーグ、UFCのいまの力なのか。UFC年末のビッグイベント、12.29『UFC79』ラスベガス大会は異常興奮に包まれた。その原動力となったのは、ついに実現したチャック・リデルvsヴァンダレイ・シウバと、UFCウェルター級暫定王座決定戦、ジョルジュ・サンピエールvsマット・ヒューズ。この二大スーパーカードが、いずれも試合内容、試合レベルともに申し分のない、年間ベストバウト級の大爆発を見せたのだ。“大連立”によって、ようやく活気を取り戻した日本マット界。しかし、いまのMMAの頂点はやはりUFCだ。

文／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

EGA-BATTLE!!

2007.12.29 UFC79 NEMESIS

CHUCK LIDDELL vs WANDERLEI SILVA
GEORGES St-PIERR vs MATT HUGHES

間 違 い な い こ こ か

ULTIMATE ME

ベガス炎上!

見たか！　これがヴァンダレイ・シウバだ!!
血しぶきを上げながら前に出続ける

［12.29 UFC79 NEMESIS］
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
○チャック・リデル vs ヴァンダレイ・シウバ×
（3R終了 判定 3-0）

ついに実現した“宿命の対決”は、歴史に残る激闘となった。試合開始早々から真っ向から殴り合いを挑むシウバ。それにリデルも呼応し、終始、パンチが交差。2Rにはシウバがついにダウンを奪うが、サッカーボールキックが禁止のためそれ以上攻め込めない。逆にリデルが強烈なヒジで逆襲。結局、パンチの正確さでリデルが上回り判定勝ちしたが、敗れたシウバもまったく価値が落ちない凄まじい闘いぶりだった。

地鳴りのような歓声とは、このことをいうのだろう。ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンター。1万2000人（超満員札止め）の観客が文字どおり総立ちになって叫び声を上げている。

オクタゴンの中にいるのは、〝ミスターUFC〟チャック・リデルと、かつて〝ミスターPRIDE〟と呼ばれた男、ヴァンダレイ・シウバ。その大歓声は、二人の入場前から始まり、3ラウンド終了まで、途切れることがなかった。

試合前、ダナ・ホワイトは「7年間、待ち望んでいたカードがついに実現する。この試合を実現させるために、PRIDEを買収したんだ」とうそぶいた。

昨年3月、ロレンゾ・フェティータがPRIDEを買収し、それに伴ない、多くのPRIDEトップファイターがUFCと契約。そこからクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソンvsダン・ヘンダーソンやフォレスト・グリフィンvsマウリシオ・ショーグンなど、スーパーファイトが次々と実現していった。しかし、リデルvsシウバはその中でも特別だ。

チャック・リデルといえばUFCのスーパースター中のスーパースター。その人気と知名度は、日本では考えられないほど群を抜いている。そんなリデルの宿命のライバルとして、今回登場したのがシウバだ。

日本では絶大な人気を誇るシウバも、アメリカではコアなファン以外には無名な存在だった。しかし、UFCはPRIDE買収により得た、シウバの試合映像をここ半年間、テレビで「これでもか！」と流し、〝まだ見ぬ強豪〟シウバを煽りに煽った。その結果、シウバの知名度は急上昇。こうしてリデルvsシウバ戦は、コアなファンだけでなく、一般層をも巻き込んだスーパーカードへと磨き上げられたのだ。

そんな二人の運命の一戦が満を持して組まれたのが、12・29『UFC79』。年末のビッグマッチは、日本の大晦日がそうであるように、UFCにとっても年間最大級のビッグイベントだ。現に06年12月27日にチャック・リデルvsティト・オーティズをメインにした『UFC66』のPPVは100万件を超え、UFC史上最高の契約数を記録した。そしてリデルvsシウバ、GSP（ジョルジュ・サンピエール）vsヒューズの二大スーパーファイトが実現した今回は、さらなる記録更新が予想されているのだ。

チケットは数週間前にソールドアウト。急きょ、会場に隣接したボールルームで行なうことになったクローズド・サーキットのチケットも売り切れた。メディアも10数カ国、100社以上が殺到するフィーバーぶりだ。

そして、そんな極限まで高まった期待をさらに上回る激闘をリデルとシウバはやってのけたのだ。とくにシウバが素晴らしかった。ほかのPRIDEファイターがリングとオクタゴンの違いに苦しむ中、シウバがとった戦法は、なんとまったくPRIDEと同じ。ひたすら前に出てパンチを叩き込む、それだけだった。

〝負けないこと〟が重要視される現在のUFCでは考えられない戦法。そしてカウンターを得意とするリデル相手に自殺行為とも思えるその闘い方。しかし、シウバは殴られても殴れても一歩も引かず、血しぶきを上げながらパンチを叩き込んでいった。まさに男と男の殴り合いだ。

あのマット・ヒューズが何もできない!
新世代のスーパースター誕生
その名はGSP!!

［12.29 UFC79 NEMESIS］
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
【UFCウェルター級暫定王座決定戦】

○ジョルジュ・サンピエール vs マット・ヒューズ×

（2R 4分54秒 アームバー） ※サンピエールが暫定王者に

ウェルター級の頂点に長らく君臨したヒューズと、急成長を続けるGSP。これまで1勝1敗の戦績である両者の決着戦は、GSPの圧勝となった。1Rから得意の打撃で攻めるGSPは、組んでもヒューズをテイクダウンしグラウンド・コントロール。完璧にポジションを支配し、最後はマウントを奪い、アームロックからアームバーのコンビネーションで一本勝ち。UFCウェルター級暫定王者となった。

ラスベガス炎上!
UFC79
MMA WORLD SERIES
THE BIG FIGHT

最終的には何度もヒットしたリデルのカウンターと強烈なヒジのダメージで、シウバは判定負けを喫したが、何も恥じることはない。ＵＦＣ史上最大級の興奮を呼び込んだのは、間違いなくシウバの恐れを知らぬ闘いぶりだったのだから。

ＰＲＩＤＥファンはシウバの闘いを誇りに思っていい。見たかＵＦＣ！　これがヴァンダレイ・シウバだ！　これが俺たちのチャンピオンだ！　これがＰＲＩＤＥの闘い方だ！

シウバはたった一試合で、ＵＦＣにおいても特別な存在となった。敗れることで、その存在感をさらに増幅させる。それもまさにＰＲＩＤＥだ。

セミファイナルがあまりにも凄まじかったため、メインのＵＦＣウェルター級暫定王座決定戦は静かなスタートとなった。しかし、そんな散漫な空気を驚愕の声に変えたのがＧＳＰ、ジョルジュ・サンピエールだ。

ＧＰＳは極真空手を学んだカナダ人の格闘家。試合毎に成長を続け、層の厚いウェルター級戦線を駆け上がり、07年、一度はベルトを腰に巻いている。この男こそ、ＵＦＣ新世代の一番手。いまのＧＳＰは、新たなスーパースター誕生直前の輝きに満ち溢れている。

当初、この日のメインはマット・セラvsマット・ヒューズのリアリティショー『ＴＵＦ　シーズン6』のコーチ同士によるタイトルマッチだった。しかし、セラが負傷欠場。急きょ、ＧＳＰが代わって出場することになったのだが、それによって興行人気は逆に上がった。そう、いまのＧＳＰ人気は、ＴＵＦコーチ対決という、近代ＵＦＣを牽引した切り札的なシチュエーションをも上回っているのだ。そして、〝ブレイク寸前〟だったその人気は、今回ついに大爆発した。

アメリカ人vsカナダ人の対決にも関わらず、ヒューズへの「ＵＳＡ」コールをかき消す「ＧＳＰ」コール。その声援を背に受けて、ＧＳＰは終始試合をリード。得意の打撃で上回るだけでなく、レスリングの猛者であるヒューズを何度もテイクダウンし、最後はマウントを奪ってからのアームバーで完璧な一本勝ち！

信じられないことに、あのマット・ヒューズが何もできずに完敗を喫してしまったのだ。

いまのＧＳＰの上昇感は、かつてＰＲＩＤＥに桜庭和志が現われたときのようだ。信じられないようなムーブを連発し、ＭＭＡの常識を覆しながら、試合をするたびに競技を進化させていく。そして、桜庭が90年代のＭＭＡ界で強さの象徴であったグレイシー一族を〝過去の人〟にしたのと同じように、ＧＳＰは長らくウェルター級の頂点に君臨したヒューズを過去の人とした。

ＧＳＰの登場は正直言ってショックだ。我々が世界一と信じて疑わなかった日本のリングに一度も上がったことのない男が、いま世界で最も旬な輝きを放っている。そして、さらにリデルvsシウバや、ＧＳＰvsヒューズのような凄まじい試合が、日本ではテレビですら観られないことへの理不尽さを感じずにはいられない。

しかし、いまマット界の頂点は間違いなくＵＦＣ。そして日本はそこから切り離されている。それこそが圧倒的現実なのである。

ファイター、関係者も大熱狂！

12.29 UFC79

チャックvsヴァンダレイ、GSPvsヒューズ

証言集

ラスベガス発上！ UFC79 MMA WORLD SERIES THE BIG FIGHT

チャック・リデルvsヴァンダレイ・シウバ、ジョルジュ・サンピエールvsマット・ヒューズという好試合連発で大熱狂に包まれた『UFC79』ラスベガス大会。その盛り上がりには、ファンのみならず、ファイターや関係者までヒートアップ。そんな彼らを会場でキャッチ！　オクタゴンの熱をそのままお届けします!!

聞き手／石井史彦　構成／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

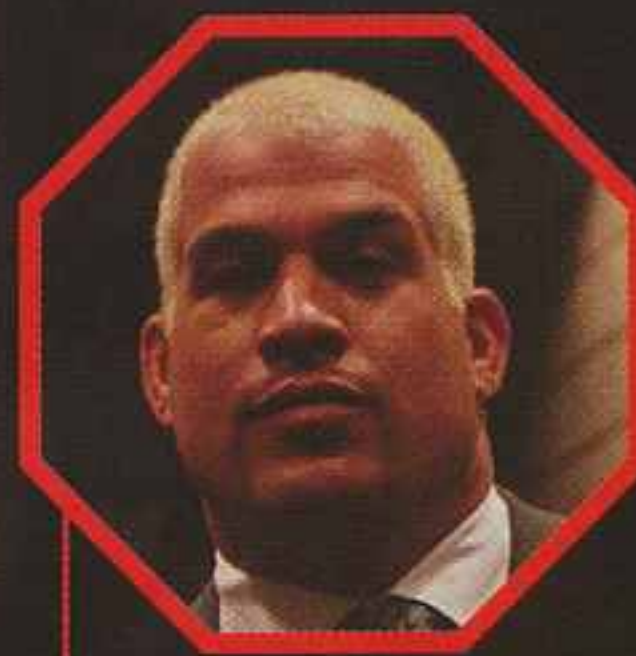
柔術界の神童

マルセロ・ガルシア

Marcero Garcia

“寝技世界一決定戦” アブダビ・コンバット77キロ級を3連覇した世界屈指のグラップラー。しかし、総合デビューとなった昨年10月の『HERO'S』韓国大会では、キム・デウォンの打撃でKO負け。巻き返しに期待！

「シウバとリデルの試合は本当に楽しかったよ」

「(今日のベストファイトは?) リデルとシウバだね。試合開始から試合終了までまったく目が離せなかった。楽しかったよ。(メインは?) GSPが凄かったね。(ソクジュは?) 彼とはチームクエストで一度、一緒にトレーニングしたこともあるけど、今日のソクジュはいつものソクジュには見えなかったね。本当はあんなもんじゃないんだ。今日はオクタゴンデビューだったけど、次からは本領を発揮するんじゃないかな」

UFCのミスター・ガッカリ

ティト・オーティズ

Tito Ortiz

元UFCライトヘビー級王者。UFC戦績20戦を誇る、長らくUFCを支えてきた選手だが、ダナ・ホワイト代表との仲は最悪。ボクシングマッチで対決するというウワサもあった。リデル、シウバ双方と対戦経験あり。

「チャックが勝ったことは俺にとってもハッピーなことだ」

「ファイトはグレートだった！ チャックは2連敗していて、もう終わったと思われていたけど、まだまだ、強いことを証明した。チャックが勝ったことは、(ライバルの) 俺にとってもハッピーなこと。こんな素晴らしい試合を観られてよかったよ。GSPは観るたびにどんどん強くなっている。ありゃ、化け物だぜ。マチダ (LYOTO) もいいパフォーマンスだった。彼は205ポンドでベストファイターの一人だろうな」

UFCのおしゃべりマシーン

ジョー・ローガン

Joe Rogan

UFCのPPV放映でおなじみの解説者。試合後のやたらハイテンションな勝利者インタビューはオクタゴン名物。自身も柔術を習っており、エディ・ブラボーから茶帯をもらっている。本業は俳優とコメディアン。

「GSPはアメージング！リデルとシウバは最高の興奮をもたらした」

「今晩のベストバウトを決めるのは難しいな。セミのチャックとヴァンダレイの試合か、メインのGSPの試合か。GSPはアメージングだった。凄い力を見せつけたから。もしかすると、セミよりもエキサイティングだったかもね。

でも、試合の緊張感ではチャックとヴァンダレイの試合はかつてないほどのものだった。二人はベストなパフォーマンスと強いハートを見せてくれたよ。

ソクジュのデビューについては、“オクタゴン・ショック”というやつだね。初めてUFCで闘う選手はこの空間に（精神的に）飲み込まれるんだ。こんなビッグイベントだし、スポットライトを浴びるわけだからね。でも、LYOTOのテクニックも大きい。彼はとても戦術的に闘うことができるんだ。そしてソクジュはトップ（ポジション）になったときはいいけど、バックを取られると何もできなかった。いつもトップを取るから、下になったときの対処法が甘いんじゃないかな。LYOTOのスイープは印象的だった。あれだけの柔道家を相手に、トップをキープし続けるのは並大抵のことじゃない。凄いパフォーマンスだった。

いずれにせよ、今日のメインとセミは、クレイ・グイダvsロジャー・フエルタと並んで、ベストファイト・オブ・ザ・イヤーと言っていいだろう。このスポーツはどんどん大きくなるよ。打撃やサブミッションの素晴らしさが多くの人にわかってもらえたと思うし、来年はもっともっと露出も増えるだろうね」

“オレ様”柔術ロッカー

エディ・ブラボー

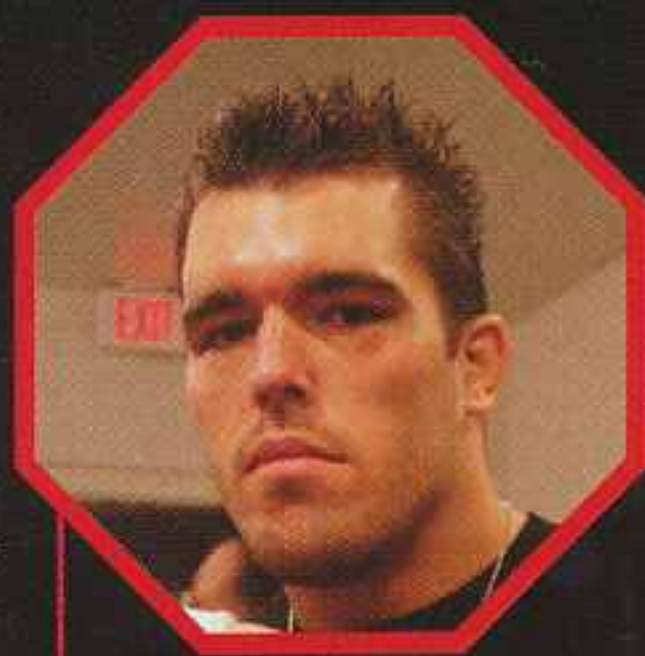
Eddie Bravo

一部のグラップリングバカのあいだで絶大な人気を誇る“オレ様”柔術家。“ラバーガード”の開発者でもあり、UFCでは解説者を務めるが、じつはMMAの試合経験はない。ミュージシャンでもあり、大麻解禁論者でもある。

「とんでもない試合だった。負けたシウバも素晴らしい」

「（今日一番印象的だった試合は？） う〜ん、メインの試合かな。GSPはヒューズを2試合連続で完全に支配したからね。ヒューズはリタイアまで考えている。そこまで追い込んだGSPは凄いよ。GSPは高校でもレスリングの経験がないのに、寝技に定評のあるヒューズの動きを封じ込めたんだからね。GSP本人に聞いたところ、彼はいろんな国のレスラーたちと練習して、テクニックを身につけているらしい。

リデルとヴァンダレイの試合はとんでもない試合だった。勝ったリデルはもちろん、負けたヴァンダレイも価値はまったく落ちていない。判定になったけど充分すぎるぐらい満足できる試合だった。

ソクジュはヒューストン・アレキサンダーと同じだね。柔術のテクニックがない。それでは勝てない。逆にLYOTOは素晴らしかったよ。とくにあのスイープはね。彼には期待しているよ」

ミルコの寝技の先生
ディーン・リスター
Dean Lister

かつてパンクラス、PRIDEへ参戦したこともある、03年のアブダビ・コンバット無差別級優勝者。昨年夏には、オクタゴン対策を積むミルコのため、クロアチア入り。金網でのグラウンド技術を教えた。

「シウバとリデルどちらも良かったとてもエンターテイニングだったよ」

「ヴァンダレイとチャック、それからGSPとヒューズは、おもしろいことにみんな、オレの友だちなんだ。みんないいヤツだよ。リデルはカウンター狙いのファイターで引いて闘う。ヴァンダレイは逆に前へ前へ出るタイプだ。そのスタイルの違いが勝敗を決めたといえるね。この闘い方だと、リデルは一発当たれば倒せるからね。でも、どっちがよかったか？　で言えば、二人ともよかった。とてもエンターテイニングだったよ。

GSPは打撃だけじゃなくて、レスリングもサブミッションも凄い。最後のアームロックを見ただろ？　これがいまのこのスポーツだ。すべての分野で強くないといけないんだ。ヒューズは弱い相手じゃないからな。ソクジュの試合は残念ながら観ることはできなかったけど、彼は素晴らしいアスリートだ。1試合負けた？　それがなんだっていうんだ？　自信をなくすことはないし、彼はいつかチャンピオンになると思うよ」

AKAの成り上がり男
マイク・スウィック
Mike Swick

『TUF』のオリジナルメンバー。選手生活のかたわら、掃除屋をするなど極貧生活を強いられてきたが、『TUF』出演後、生活環境が一変。ベンツのRV車を乗り回している。今年からウェルター級に転向。

「今日の試合はとにかくエキサイティングだった」

「今日の試合はエキサイティングだったよ。とくにリデルとヴァンダレイの試合はね。観ながら思わず、ファンのような気持ちになってしまったよ（笑）。

GSPは、パウンド・フォー・パウンドだということを再び証明したね。ボクはミドル級からウェルター級に落とすから、GSPともし闘うことになったら、いい試合になるよ。170ポンドは選手が揃っていて、いま凄いことになっている。でも、ボクのスタイルはそこで通用すると思う。ソクジュとマチダの試合は、予想したとおりだったよ。マチダはオクタゴンでの経験とテクニックがあるからね。ソクジュが勝つとしたらKOしかないと思っていた。それができないならマチダの勝利になるだろう、とね」

UFCのマッチメイカー
ジョー・シルバ
Joe Silva

ズバリ、UFCのマッチメイカー。選手発掘を手がける“タレント・リレーション担当部長”の肩書きを持っており、ズッファ社体制以前から、UFCの運営に携わってきた要人。UFCに出場したい人は、この男に連絡すべし！

「リデルとシウバの試合は伝説の一戦にふさわしいものだ」

「今日の大会には満足している。一年の締めくくりとしては最高だったよ。（今日のMVPは？）GSPかな。だって、彼が完勝した相手はこの階級で最も強いヒューズだったんだからね。しかも、GSPは1ヵ月前にこの試合をオファーされたんだから。ケガをしたマット・セラの代打としてね。

リデルvsヴァンダレイは伝説の一戦にふさわしい試合だった。メルビン・ギラードとリッチ・クレメンティの試合もよかったね。（ソクジュは？）有能な選手だよ。でもUFCの最初の試合は誰にとっても難しい。それにLYOTOは、闘うたびに強くなっている。彼の打撃はディフェンシブだけど、もっとアグレッシブに闘うようになれば、誰にも負けないファイターになるだろうね。（今日と一年間のベストファイトは？）今日はヴァンダレイとチャック。一年間なら、う〜ん、それは帰って一年間の試合を振り返ってみないとどれを選んでいいかわからないけど、ロジャー・フエルタとクレイ・グイダの試合だろうね」

ザ・カーペンター
クレイ・グイダ
Clay Guida

ロジャー・フエルタとの熱戦が、各方面から年間ベストマッチとたたえられたライト級戦士。元大工ということから、ついたキャッチフレーズは“ザ・カーペンター”。五味隆典から一本を奪ったこともあるマーカス・アウレリオにも勝っている。

「GSPのフィニッシュは圧巻だったよ！」

「今日のメインとセミの試合は素晴らしかったね。リデルとヴァンダレイの試合は見てのとおりだし、ヒューズとGSPの試合はフィニッシュが圧巻だった。（ソクジュは？）彼はまだ、ケージに慣れていない感じだったね。だけど、オクタゴンへの扉を開いたばかりだし、まだボクよりも若い。次の試合を観たいね。LYOTOはベルトに挑戦してもいいと思うよ。（2007年のベストファイトとして、多くの人があなたのvsロジャー・フエルタ戦を選んでいますが？）光栄だね。でももっといい試合ができたと思うんだ。あの試合の中で、5、6回は勝つチャンスがあったと思うしね。彼とはまた闘いたいから、それまで負けずにいてほしいね。次の試合は3月か4月になると思う。まだ相手は決まってないけどね」

UFC79 MMA WORLD SERIES THE BIG FIGHT

“ジャングル大帝”ソクジュに完勝！

“闘魂の落とし子”ついに覚醒!!

LYOTO

マチダ・リョウト

「ボクはアマゾンのジャングルで空手を学んだから勝てた！」

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／Josh Hedges（UFC）

［12.29 UFC79 NEMESIS］
米国ネバダ州ラスベガス／
マンダレイベイ・イベントセンター

○LYOTO vs ソクジュ×
（2R 4分20秒 肩固め）

PRIDEでホジェリオ、アローナを撃破したソクジュのUFCデビュー戦。相手はUFC 3戦無敗のLYOTO。ソクジュは1R早々、テイクダウンに成功するがLYOTOはすぐさまスイープ。寝技で上になると完全にLYOTOペースとなり、2Rに肩固めでソクジュはタップ。LYOTOの見事な完勝だった。

〝アントニオ猪木最後の愛弟子〟LYOTOことマチダ・リョウト。

現在まで総合無敗。UFCでも連勝を重ねていながら、地味な試合ぶりから、なかなかチャンスが与えられなかったが、〝PRIDEの超新星〟ソクジュを相手についに覚醒！　これまでには見られなかったアグレッシブな闘いで、終始ソクジュをコントロールし、完勝。アントンのゲノムを持った陽気な闘魂に試合後のバックステージで直撃した！

——元気ですかーッ！

LYOTO　ゲンキデース！

——それにしても凄い試合でしたね。あの、PRIDEのゴールデン・ルーキー、ソクジュを相手に何もさせずに完勝。

LYOTO　（元気よく）ハイ！

——ソクジュがあんなに完璧に負けるとは思いませんでした。

LYOTO　でも、ソクジュは強かったよ。なんと言っても（ヒカルド・）アローナ、そしてミノトゥーロ（アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ）に勝ったんだからね。だからこそボクも必死でトレーニングして、完璧なコンディションで挑んだんだ。

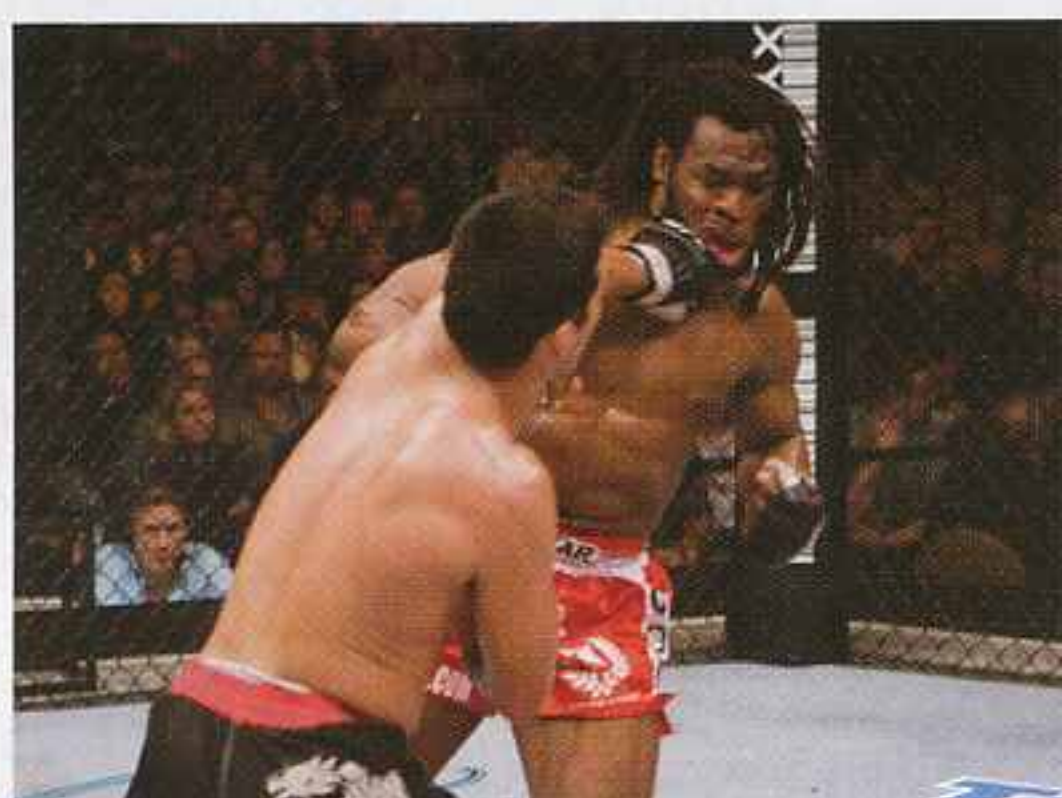
——では、もともとソクジュに勝つ自信はありました？

LYOTO　あったよ。とくに、スタンドではね。でもテイクダウンされてグラウンド・ゲームなったけど、闘っていくにつれて、寝技でも負けないと思った。

——テイクダウンされても、すぐにスイープしてましたし、不利な場面はありませんでしたもんね。

LYOTO　ソクジュは「自分はアフリカのジャングルで鍛えられたから勝つ」なんて言ってたけど、ボクだってアマゾンのジャングルで鍛えられてきたんだからね。

——あ、そういえばそうですね（笑）。

LYOTO　しかも、ソクジュはいまアメリカに住んでいるけど、ボクはいまでもアマゾンに住んでいる。アマゾンのジャングルで空手を学んでいるから、ボクはUFCでも勝つことができたんだ。ソクジュもUFCで成功したかったら、アマゾンに来ることを勧めるよ（笑）。

ソクジュからダウンを奪ったLYOTOのパンチは、空手の正拳突きのようなストレート。キックの間合いといい、すり足ぎみのステップといい、確かにLYOTOのUFCでの闘い方には空手が活きている。

——確かにソクジュをダウンさせたストレートは、空手の突きのような打ち方でしたよね？

LYOTO　そう。あれは空手の技だよ。父から学んだ空手がMMAで活きているんだ。

——ちなみに猪木さんから学んだことで、いまでも役に立っていることはありますか？

LYOTO　イノキさんから学んだことは多くあるよ。それは、ファイトというより、人生を生きるうえで大事なことだね。イノキさんは、いまでもたまに電話をしてくれるよ。

——ところで、これまでLYOTOさんは、正直なところ、消極的に見える試合になることが多かったと思うんですけど、今回はガラリとスタイルが変わったように見えました。

LYOTO　そう！　じつは、これまでと考えを変えた部分があるんだ。もっとアグレッシブな試合をして、観客を喜ばせることが大事だとね。そうしないと、ベルトに手が届かない。今日のヴァンダレイ（・シウバ）と（チャック・）リデルの試合はエキサイティングだったし、それに負けないような激しい試合をしないとタイトルには挑戦できないだろうね。

——チャンピオンの（クイントン・〝ランペイジ〟・）ジャクソンと、もし闘えば勝つ自信はありますか？

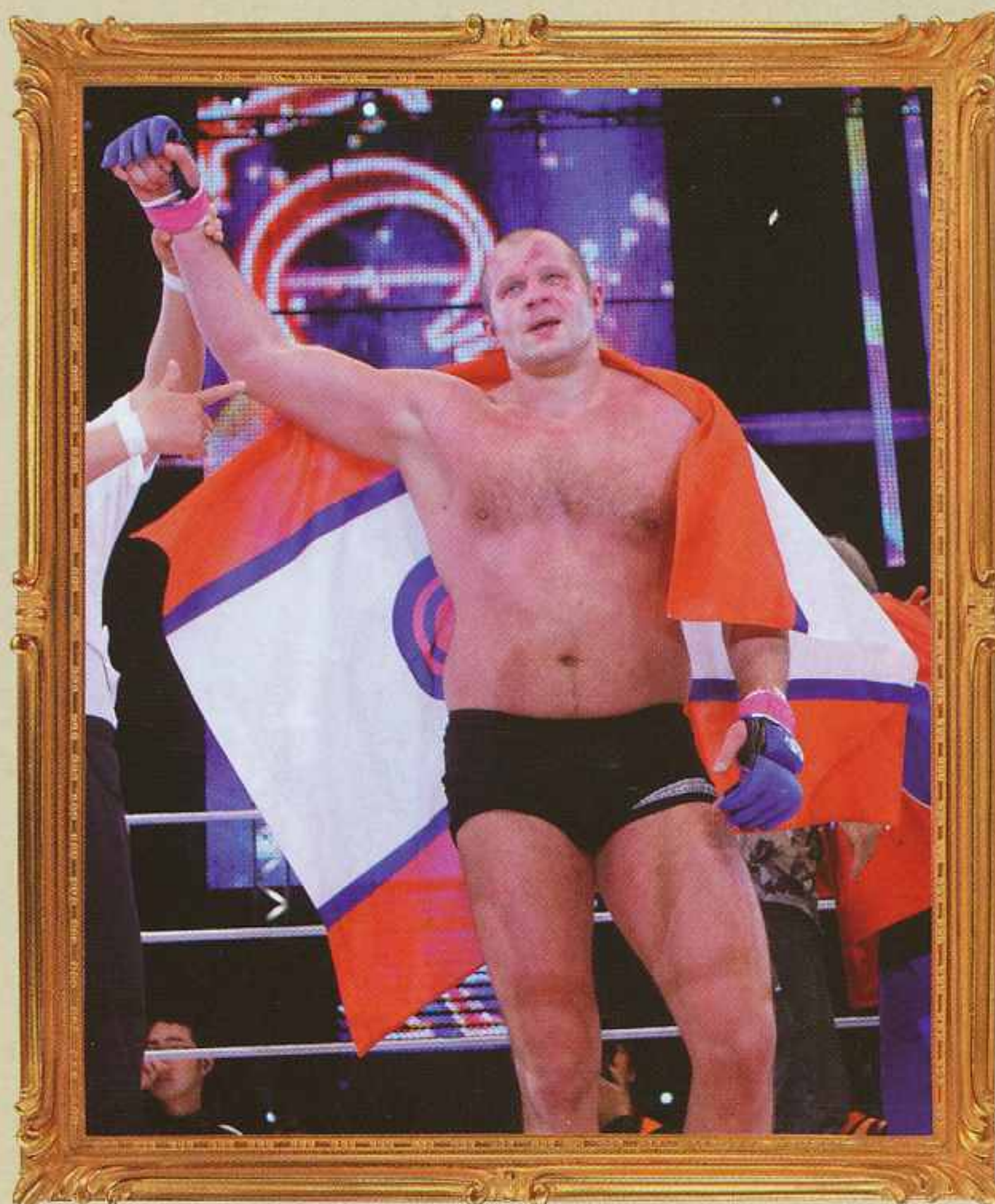
LYOTO　もちろん！　自信はあるさ。今日の試合を観たら、わかるだろう？

——そうですね。ではLYOTO選手、次の機会まで元気でッ！

【07年12月29日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

LYOTO■1978年5月30日、ブラジル出身の日系2世。本名はリョウト・カルヴァーリョ・マチダ。アントニオ猪木にスカウトされ、03年『アルティメット・クラッシュ』でプロデビュー。07年2月よりUFCに参戦。現在MMA12戦全勝。185センチ、93キロ。

“ジャイアン”が昨年のMMA界を大総括！
この男の毒舌は2008年も止まらない!!

ラスベガス炎上！
UFC79
MMA WORLD SERIES
THE BIG FIGHT

2007年 ジョーク・オブ・ザ・イヤーは ヒョードルだ！

言いたい放題、やりたい放題の“俺はジャイアン～♪”スタイルで2007年マット界の主役となったダナ・ホワイトUFC代表。その功績をたたえて、勝手にマン・オブ・ザ・イヤーに選ばせてもらった本誌は報告を兼ねて、12.29『UFC79』ラスベガス大会で独占インタビュー！激動の一年を総括してもらうと、その毒舌がまたしても爆発した!!

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　試合写真／Josh Hedges（UFC）

本誌が勝手に選定　2007年MMA界のマン・オブ・ザ・イヤー
DANA WHITE

ダナ・ホワイト UFC代表

五味隆典がUFCに上がるかどうかは彼次第だ こちらは彼とサインしたいと思っているんだからね

——代表！　大会直前のお忙しいところ、お時間をいただいてありがとうございます！　毎回毎回、日本のメディアに出ていただいて恐縮です。

ダナ　何を言ってるんだ。私たちにとって日本は大事なマーケットだ。そして『kamipro』は特別だからな。

——それ、ほかの媒体にも言っていませんか？（笑）。

ダナ　そんなことはない。今日だって、私がマガジンのインタビューを受けたのは、君たちだけだからな。

——ありがとうございます！　では、さっそくですが、今回はいろんなことがあった2007年のUFC、そしてMMAシーンを振り返っていただきたいのですが。

ダナ　いいだろう。どんどん聞いてくれ。

——今年、代表は「"MMAのワールドシリーズ"を行なう」と公言されていて、実際にこれまでありえなかったようなマッチメイクが次々と実現したわけですが、そういった中で、代表にとってのベストバウトというと、どの試合ですか？

ダナ　今年のベストバウト？　それは今夜行なわれるチャックvsヴァンダレイに決まってるだろう（ニヤリ）。

——やる前からベストバウト決定ですか！（笑）。

ダナ　二人がオクタゴンの中で相対する姿を想像するだけでゾクゾクする、文字どおりのスーパーカードだからな。きっと歴史に残る闘いになるだろう。それ以外で言えば、ロジャー・フェルタvsクレイ・グイダが挙げられるだろう。

——12月8日の『TUF6 フィナーレ』大会で行なわれた試合ですよね。いきなりシブいところをついてきますね（笑）。

ダナ　日本のファンにはなじみがないかもしれないが、この試合はスパイクTVで放映され、凄まじいばかりの反響があった。私だけでなくこの国にいるMMAファンの多くがベストファイトとして、一番に挙げるぐらいの試合だ。

——へぇ～、そうでしたか。

ダナ　あとでフェルタvsグイダのDVDをプレゼントするから、ぜひ観てくれたまえ。UFCの素晴らしさがよりわかってもらえるはずだ。

——ありがとうございます（笑）。

ダナ　そのほかにも、ビッグカードで言えば、クイントン（・"ランペイジ"・ジャクソン）vsダン・ヘンダーソンも、もちろんベストバウトと言っていいし、（フォレスト・）グリフィンvs（マウリシオ・）ショーグンもいい試合だった。ベストバウトは腐るほどあるから、どれを挙げていいかわからないよ。ハッハッハ！

——ベストバウトは腐るほどありましたか。

ダナ　2007年は本当に恵まれた。そして、それはオクタゴン上だけでなく、ビジネスでも同じだ。まずPRIDEとWECを買収しただろう。『スポーツ・イラストレーテッド』（アメリカで人気の総合スポーツ誌）の表紙も獲った。それからイギリスに進出して、大きなアリーナを満員にできた。素晴らしい年だったよ。

——ビジネスとしても躍進の年だったわけですね。

ダナ　2005年と、来年2008年のビジネス規模を比べてみれば、その成長の度合いがわかるだろう。そして、もう一つ言えることは、私たちは毎年、成長してきたが、来年からUFCは完全に次のレベルに移行することになるだろう。

——それは、何か大きな発表があるということでしょうか？

ダナ　（ニヤリとしながら）いまは言うことはできないが、世間を驚かせるニュースがある。もうすでに合意には達していて、あとはサインをするだけなんだ。それまで、残念ながら話すことはできないが、これは凄いことになるよ。スポーツビジネス全体を揺るがす発表になると言っても過言じゃない。もうしばらくすればアナウンスする。

——それは、ウワサされているアメリカでの地上波放送の開始と考えてもいいんでしょうか？　3大ネットワークの一つ、CBSとの契約が決まりそうだという報道もありましたよね。

ダナ　さあね。これ以上は言えないな。テレビについては、何ヵ月か前に（リアリティショー『TUF』を放映している）スパイクTVとの契約を更新した。2012年までね。そして、我々はいま別のテレビ契約について動いているところとだけ言っておこう。CBSとも話している。が、ほかの局とも話している。いろんな可能性があるよ。

——それは期待しています！　UFCにとって2007年は、飛躍の年だったと思いますが、MMAシーン全体については、どんな年だったと思います？

ダナ　多くの人間が、この業界に参入してきた。少し投資すれば、儲けられると思ってね。それはいいことだよ。結果的にお金をジャンジャン落としてくれたわけだからな。そういった団体のおかげで、多くの若い選手がファイトで収入を得て、生活できるようになった。だから彼らのおかげで業界が大きくなっているし、彼らがこの業界を下から支えてくれているとも言えるんだ。

——なんだか、ずいぶん見下したような発言にも聞こえますけど（笑）。ちなみに『kamipro』では、いろんな意味でダナ・ホワイトこそが、マン・オブ・ザ・イヤーだということで意見が一致しているんですけど、それについてはどう思いますか？

ダナ　ハッハッハ！　そうなのかい？

ダナ・ホワイトが選ぶ
【2007年 ベストバウト】
12.8 米国ネバダ州ラスベガス、ザ・パール
ロジャー・フエルタvsクレイ・グイダ

ダナ以外にも、多くの関係者がベストバウトに選んだのが、UFC本戦以外で行なわれたこの試合。ライト級次期エース候補同士によるアグレッシブに攻守が入れ替わる試合内容は、UFCがいまや世界最高峰の舞台であることを証明するに足るもの。ネットでチェックすべし！

ダナ・ホワイトが選ぶ
【2007年 MVP】
アンデウソン・シウバ

07年は3試合オールKO&一本勝ちし、圧倒的な強さを見せつけたミドル級王者、アンデウソン。ムエタイ仕込みのファイトスタイルがアメリカのファンにもマッチし、絶大な人気を獲得。今年3月、PRIDEミドル級王者、ダンヘンと王座を懸けて激突する。

それは光栄だよ。今日まで、ひたすら一所懸命にやってきただけで、そんなものに選ばれるとは思わなかったが、こうやって選ばれるのも悪くないな。サンキューと言っておこうかな。

――いえいえ、なんといっても今年、もっとも『kami-pro』のインタビューにたくさん登場した人ですからね。多くのネタを提供していただいて、ずいぶん助かりました（笑）。

ダナ　まあ、私の仕事はこれからもMMAをよりメジャーにしていくことだ。UFCの成長により、業界が大きくなったのは、間違いない。（MMAアパレルブランドの）『TAPOUT』を見ればわかるように、関連ビジネスも大きく成長しているからな。

――シーンを引っぱってきた自負はある、と。ところで、今年、そのシーンで一番大きな事件といえば、なんでしたか？

ダナ　それは、もちろん、今夜のヴァンダレイ・シウバとチャック（・リデル）の試合をはじめとした、たくさんのスーパーカードを提供できたことだろう。PRIDEやWECを買収したのも、すべてはMMAワールドシリーズのためだよ。

――他団体の大物でいえば、元PRIDEの五味隆典選手が、今夜の大会に来場するようですが、彼との契約はまとまりそうですか？

ダナ　そう願っているよ。あとはゴミ次第だ。我々はぜひとも彼とサインしたいと思っているし、条件も提示しているわけだからね。

――契約に至るには、あと何が問題ですか？

ダナ　金銭面を含めた条件の合意だけだよ。我々は彼の実力を高く評価しているが、ハッキリ言って、ここアメリカでは誰も彼のことは知らない。だから、まずタカノリ・ゴミがどんなファイターであるかをファンに知らせることに金を使わなきゃいけないんだ。大金を手にするのは、自分の名前でアリーナに客を呼び、PPVを購入させられるようになってからだ。それをゴミサイドがわかれば、すぐにでも彼のUFC参戦は実現するだろう。

PRIDE買収により、多くのスーパーカードが実現した2007年のUFC。まだまだ夢のあるマッチメイクは残っており、今年もこの勢いは止まりそうもない。

07年のUFCはベストバウトが腐るほどあった どれを選んでいいかわからないよ。ハッハッハ！

――なるほど。では、2007年を振り返る話に戻しますが、UFCで一番活躍した選手というと、誰になりますか？

ダナ　それは難しい質問だ。それぞれの選手に大事な役割があるからな。チャック・リデルは最も多くの人に知られているファイターだが、それ以外のみんなもUFCを盛り上げてくれた。たとえば、ジョルジュ・サンピエールやアンデウソン・シウバ、リッチ・フランクリン、ロジャー・フエルタ、クイントン、マット・ヒューズ、マット・セラたちだ、彼らはみんなUFCのビジネスを支えてきたファイターたちだ。

――その中でもあえて一人、ファイター・オブ・ザ・イヤーを選ぶとしたら、誰ですか？

ダナ　そうなったら、その賞はアンデウソンに贈られるべきだろうな。そしてダン・ヘンダーソンに勝ったランペイジや、みんなが勝つと思っていたショーグンを破ったグリフィンは次点だろう。

――UFCに行ってからのアンデウソンの活躍は凄いですよね。では、ルーキー・オブ・ザ・イヤーは誰になります？

ダナ　ルーキーはロジャー・フエルタかな。今年、UFCで4試合も闘った彼を、いまだにルーキーと呼んでいいかどうかはちょっと難しいが、彼は『スポーツ・イラストレーテッド』の表紙になるほど活躍した。それに、さっきもベストバウトだと言ったが、なんといってもグイダとの試合は素晴らしい内容だったよ。

――逆に、もっとも期待はずれというか、ガッカリした選手は誰ですか？

ダナ　それはいつもどおり、ティト・オーティズだ！

――いつもどおり、ティトですか！　彼とは仲がよろしくないみたいですね（笑）。

ダナ　つまらない試合をさせたら、彼にかなうヤツはいない。〝ミスター・ガッカリ〟の称号をくれてやるよ（笑）。せっかく試合を組んでやったら、「ケガした」とか言いやがるしな。

――オクタゴンでは、新しく参戦した元PRIDEファイターの連敗が続きましたが、それにはガッカリしてませんか？

ダナ　（首を横に振って）ノー。それはこういうことだ。どんなにネームバリューのある選手でも、実際に、このオクタゴンで闘ってみるまでその実力はわからない。そして、ここ世

ヒョードルはある意味、かわいそうなファイターだ
マネージャーたちの金儲けに利用されてるんだからな

界最高峰の舞台で闘い続ける以上、誰にでも負ける日が来る、とね。

——ちなみにミルコやショーグンの今後のスケジュールは決まっていますか？

ダナ　ミルコについては、いままさに話し合っているところだ。まず、彼がUFCで闘い続けることができるどうかを見ないといけないな。ショーグンは近いうちに試合をすることになるだろう。

——それから代表は今年「ジョーク」という言葉を流行らせましたが、最もジョークだった人物、ジョーク・オブ・ザ・イヤーを贈るとすれば、誰に贈りますか？

ダナ　ふん、誰だと思う？　それは、ヒョードルだ！

——ダハハハ！

ダナ　ヒョードルは完璧にプロテクトされている。そして、彼自身もトップファイターと闘いたくないと考えている。この大晦日だって、誰も気にしないような相手とジョーク・ファイトをするんだろう？　そんな男を、世界中のMMAメディアがナンバーワン・ファイターだとたたえているんだから、存在自体がジョーク以外の何ものでもない（キッパリ）。

——ずいぶん、言いますねぇ（苦笑）。

ダナ　いいか、これまでにもう何度も言っているが、ヒョードルは2005年にミルコと闘って以来、強いファイターと一度も闘ってないんだからな。毎回毎回、ジョークみたいな試合を見せられる日本のファンが不憫でならないよ。

——ヒョードルが闘うチェ・ホンマンについては、どういう印象を持っていますか？

ダナ　ホンマン？　誰も、そんなヤツのことなんか知らないだろう。誰がこの試合を観たがるのか不思議だ。とはいえ、ヒョードルがKOされないことを祈ってるよ。ランディ・クートゥアーやティム・シルビアやノゲイラにKOされても、評価が下がることはないが、そんな誰も知らない選手に負けたら、彼は終わってしまうからな（ニヤリ）。ただ、一つ言いたいのは、ヒョードルはかわいそうなファイターだということだ。UFCに上がれなくなったのも、彼が選んだことじゃない。彼のマネージャーたちが決めたことだ。ヤツらはヒョードル本人のことなんか、真剣に考えてもいない。ヒョードルにとって何がベストかということよりも、彼らがいくら儲けられるかしか考えていないのだからな。

——ヒョードルとは直接交渉されたことは、当然ないわけですよね？

ダナ　ヒョードルと直接話したことはない。それが、ヒョードルの悲劇だ。マネージャーたちが好き勝手にヒョードルを利用しているんだ。ヤツらの関係者にボクシングのプロモーターをやっている人間がいるらしいが、マネージャーたちが望んでいることは、そういった怪しい人間と組んで、UFCロシア大会を開くことなんだ。

——ロシアでのUFCの興行権をよこせ、ということですか？

ダナ　そうだ。笑わせてくれるだろう。私たちが交渉しているのは、そういう馬鹿げた連中なんだ。クレージー・ロシアンどもめが！（吐き捨てるように）。

——またまた、出ましたね、そのフレーズ！（笑）。で、そのロシア人たちがいる『M−1グローバル』がサポートしている『やれんのか！』については、どう思ってますか？

ダナ　とくになんとも思ってない。ヒョードルのジョーク・ファイトがメインらしいから、最低限アンダーカードがマシなものになることを願っているよ。じゃないと、ファンがかわいそうだろ（笑）。

——ガハハハ！　言いたい放題ですね。では、『やれんのか！』は、″ジョーク団体″ということになりますか？

ダナ　それはイベントが終わってみないとわからない。しかし、ジョーク団体といえば、あの犯罪者集団、ボードッグを超えるものはないだろうな。

——アメリカで法規制のかかったオンライン・カジノ事業を展開しているボードッグですね。

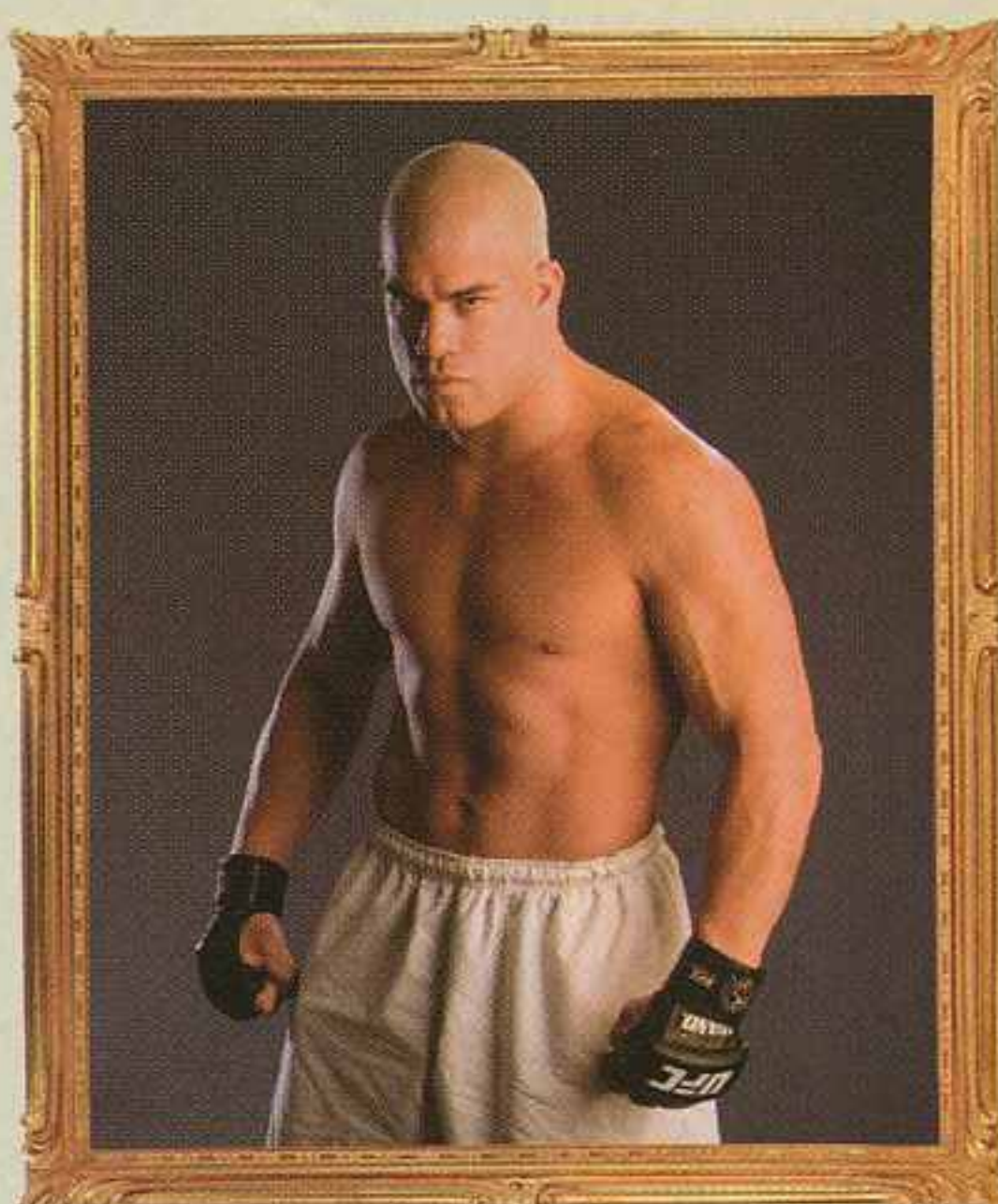
ダナ　もはや、すでに違法に稼いだ金は、ドブに捨てて使いきってしまったようだがな。ハッハッハ！　あの、ビッグマウスを叩いていた男も、どこかに隠れているんだろう。

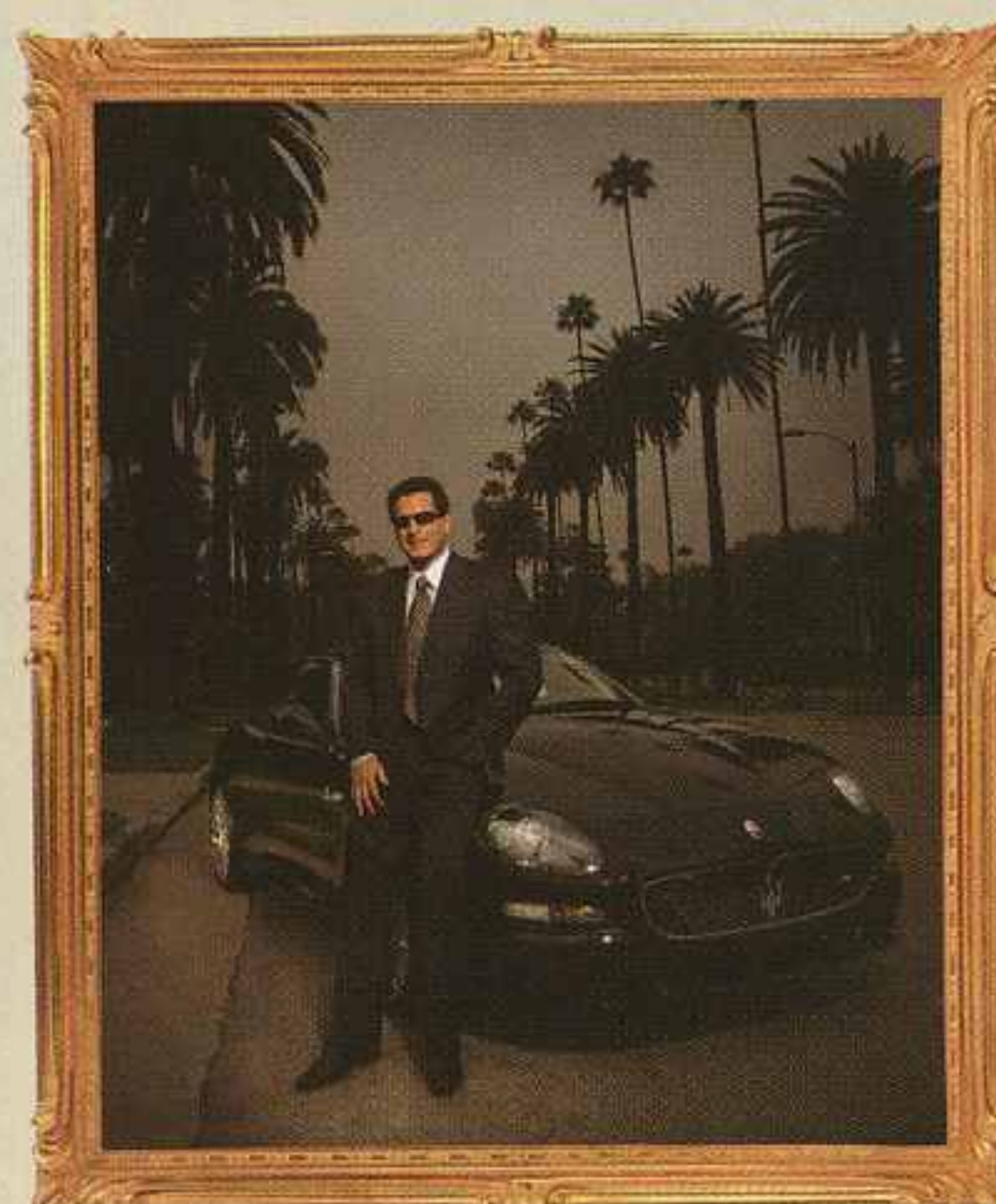
——カルビン・エアー総帥のことですね。

ダナ　コスタリカまで追い詰められていたが、いまではどこにいるのかすら、わからない（笑）。私がジョーク団体だと呼んだとおりだ。ハッキリ言おう。このMMAビジネスは簡単に参入して、儲けられる業界ではない。そんな中で、我々は成長あるのみだ。来年はヨーロッパ進出を拡大して、ドイツでもイベントを行なう計画を立てているよ。

——日本への進出はあきらめたのですか？

ダナ　そんなことはない。もちろん日本には行きたいよ。そこに大きなマーケットがすでにできているからな。だが、いまは行けない。その理由は、日本人がよくわかっているとおりだ。だが、問題がクリアされれば、すぐにでも日本に行くつもりだ。だから、それまで読者にUFCの素晴らしさをちゃんと伝えておいてくれよ。では、今日はここまでだ！

【2007年12月29日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイ・イベントセンターにて収録】

ダナ・ホワイトが選ぶ
【2007年 モースト・ガッカリ・ファイター】
ティト・オーティズ

『UFC73』でラシャド・エバンスと引き分け、ダナに再戦を直訴したティト。ファンも俄然盛り上がったのだが、実際に試合が組まれると、今度は「ケガの治療」を理由に対戦拒否！ さすが“バッドボーイ”と言うしかないが、これが受賞の決め手となった。

ダナ・ホワイトが選ぶ
【2007年 ジョーク・オブ・ザ・イヤー プロモーター編】
カルビン・エアー

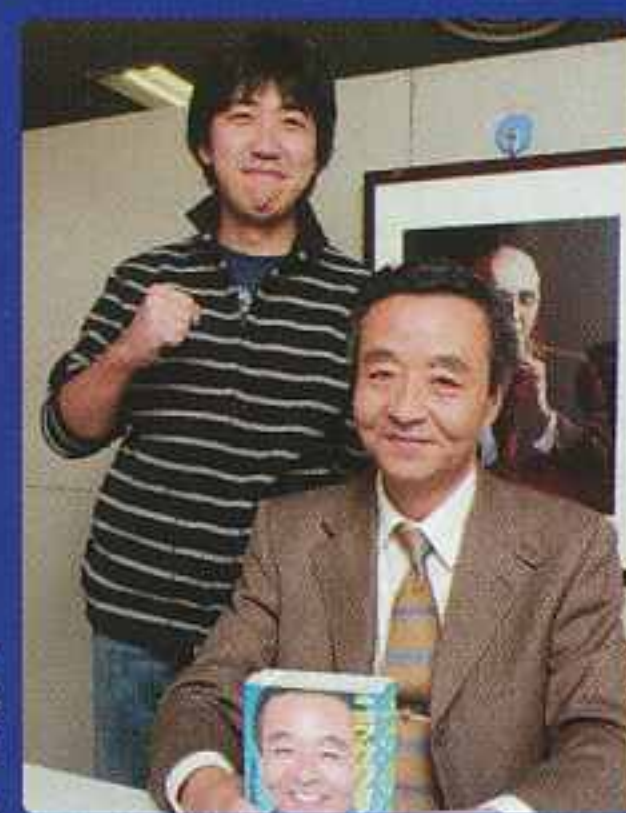
莫大な資本を背景に、ロシアで大会を開催し、ヒョードルを参戦させるなど去年、MMAに本格参入したボードッグ。しかし、肝心のアメリカ初進出となったニュージャージー大会は大ゴケ。レッドデビルとも決裂し、自主興行を打つこともなくなった凋落ぶりは、まさにジョーク！

ラスベガス炎上!
UFC79
MMA WORLD SERIES
THE BIG FIGHT

堀江ガンツの

UFC79 LAS VEGAS 旅日記

またまたやってまいりました、ラスベガス！『やれんのか！』ムード一色の年末の日本を離れ、いまやMMAのメッカともなったこのギャンブルとエンターテインメントの街で、『UFC79』を徹底取材。こちらもメチャクチャ盛り上がってました。では、ベガスの裏話、いってみよう！

旅人／堀江ガンツ

ラスベガスで自分の写真を撮らなかったので、年末といえばこの人、"超常現象絶対肯定派"のニラサワさんとのツーショットです。

12月27日（日本時間）

この日から『UFC79』取材のためにラスベガス出張。シウバvsリデル、GSPvsヒューズ、ソクジュvsLYOTOなど、スーパーファイトが生で観られるということで、「ヒャッホー！」と浮かれたいところだが、今回ばかりは憂鬱だった。なぜなら、この取材に行ってしまうと、大晦日の『やれんのか！』が観られなくなってしまうかもしれないのである！

年の瀬の航空券はあっという間になくなってしまうもの。というわけで、今回のユナイテッド航空のサンフランシスコ経由ラスベガス行き航空券を押さえたのは9月中旬。もちろん、この時点では『やれんのか！』開催が決定しているどころか、そんなプランすらない段階だ。

というわけで、ボクが押さえていた航空券は12・29『UFC79』を取材後、30日にラスベガスを発って、31日の17時10分に帰国するというもの。明らかに大晦日取材を考慮してないフライトスケジュールだ。

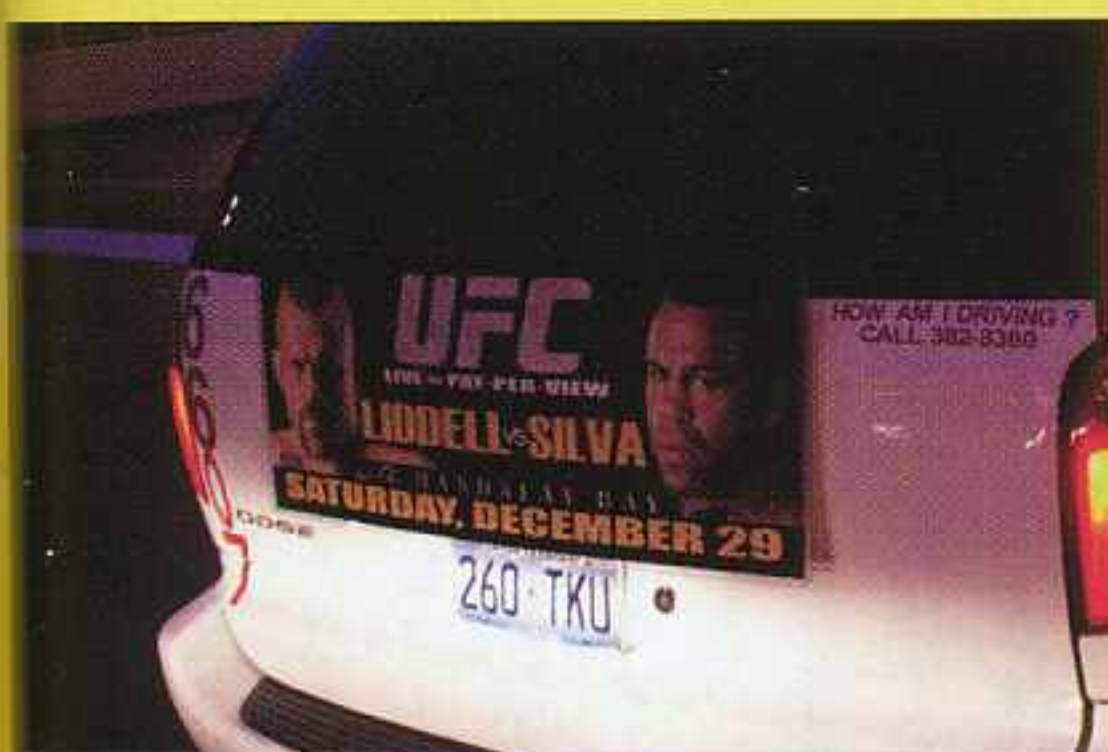
しかし、ご存知のとおり11月中旬に『やれんのか！』開催が正式決定！うーん、これは観たい。しかも、ちゃんと佐藤大輔入魂のオープニング映像を観るために最初から観たい。ただ、調べてみると、オープニングに間に合うためには、18時10分のスカイライナーに乗らなければならないのだ。ちゃんと17時10分に到着したとしても、入国審査や荷物のピックアップなどの時間を考えると極めてギリギリだ。しかも、アメリカ方面からの飛行機というのは、ちょくちょく遅れることで有名。1時間ぐらいの遅れはザラなのだ。状況は極めて厳しいと言える。

そんなわけで若干憂鬱な気持ちを胸に成田へ向かい、本誌編集次長・松林貴と合流。松林さんはボクのユナイテッドより高い全日空の航空券で、こちらは31日の16時半到着予定。ダブルクロスとエンターブレインの使える経費の違いをうらめしく思いながらチェックイン。しかも、機材の到着が遅れてるとかなんとかで、出発が2時間遅れたのである。もし帰りの飛行機が同じく2時間遅れたら、完全にアウトではないか！　絶望的な気持ちで機上の人となる。

12月27日（アメリカ現地時間）

結局、ラスベガスには現地時間の27日正午に到着する予定が、遅れに遅れて17時到着。

ラスベガスは空港内にもそこら中にスロットマシンが設置してあり、着いた途端に非日常の世界に強引に導いてくれる。荷物のピックアップのためにバゲージクレイムに行くと、シルク・ドゥ・ソレイユのショーや、ランス・バートンのマジックなどの看板に混じって、リデルvsシウバの看板を発見。

UFCの看板はここだけでなくタクシーの看板や、フリーウェイの一番目立つところなど、いたるところで見かけた。

ラスベガスのいたるところで見られたUFCの看板。とくにホテルのメインエントランスの絨毯になっているのは圧巻だ。

また、タクシー内にある無料のラスベガス情報誌12月号の表紙がなんと、リデルvsシウバなのだ。いかに現地での宣伝が行き届いているかがわかる。

さらに『UFC79』の大会会場でもある、マンダレイベイ・ホテルに着くと、正面玄関の絨毯にもシウバvsリデル、サンピエールvsヒューズの文字がデカデカと描かれ、さらにホテルの中はそれこそUFCの看板だらけ。もうホテル全体がUFC仕様なのだ。ベガスに着いて1時間で、UFCのパワーを嫌というほど感じさせてもらった。

このあと本誌アメリカ通信員の石井史彦さんと合流。結局、この日はクタクタなので、ビールを飲んですぐ就寝。

12月28日

この日から本格的に仕事開始。正午からダン・ヘンダーソンのインタビュー。これは1月22日発売予定の『kamipro』119号に掲載予定です。お楽しみに。

夕方からは『UFC79』出場全選手の公開計量。これに参加できるのは、UFCのファンクラブ会員のみだが、約1000人のファンでギッシリ。UFCに対するファンの熱を感じることができた。一番人気はやはり"ミスターUFC"チャック・リデル。しかし、ヴァンダレイも大きな歓声を浴びていたし、UFC初参戦のソクジュにも予想外の大歓声。それだけ熱心な青い目の格闘セレブが集まっているのだろう。この公開記者会見ではシウバとリデルが乱闘寸前になったりとヒートアップ。翌日に控えた決戦へのムードが一気に高まっていった。

ひさびさにギラギラした目を見せていたシウバ。試合に敗れたものの、かつての輝きを完全に取り戻していた。

夜、19時からはIFOなるケージファイトMMAイベントを観戦。じつは、この大会でテレビ解説を務めるフィル・バローニが、旧知の石井さんを通じて我々を招待してくれたのだ。

それにしても、IFOなんてまったく聞いたこともない。ちなみにIFOはインターナショナル・ファイティング・オーガニゼーションの略らしいが、なんともひねりのない名前だ。前日、テレビでスポーツ専門チャンネルを観ていたら、たまたまこのIFOのCMが流れていたのだが、対戦カードや出場選手紹介などは一切なく、金網の中での暴力的なシーンと「30ドル！」と激安のチケット代を連呼するのみ。ここから想像するに、初期UFCのように、とにかくビールを飲みながら「ぶっ殺せ～！」と騒ぐような大会なのだろう。

マンダレイベイから、IFOが開催されるリビエラホテルにタクシーで移動。このホテル、かつての名門ホテルなのだが、かなり老朽化している。しかし、それがかえって古き良きラスベガスのムードを醸し出していて、怪しげなMMAイベントを開催するにはじつにいい感じ。会場入り口ではTバックのラウンドガー

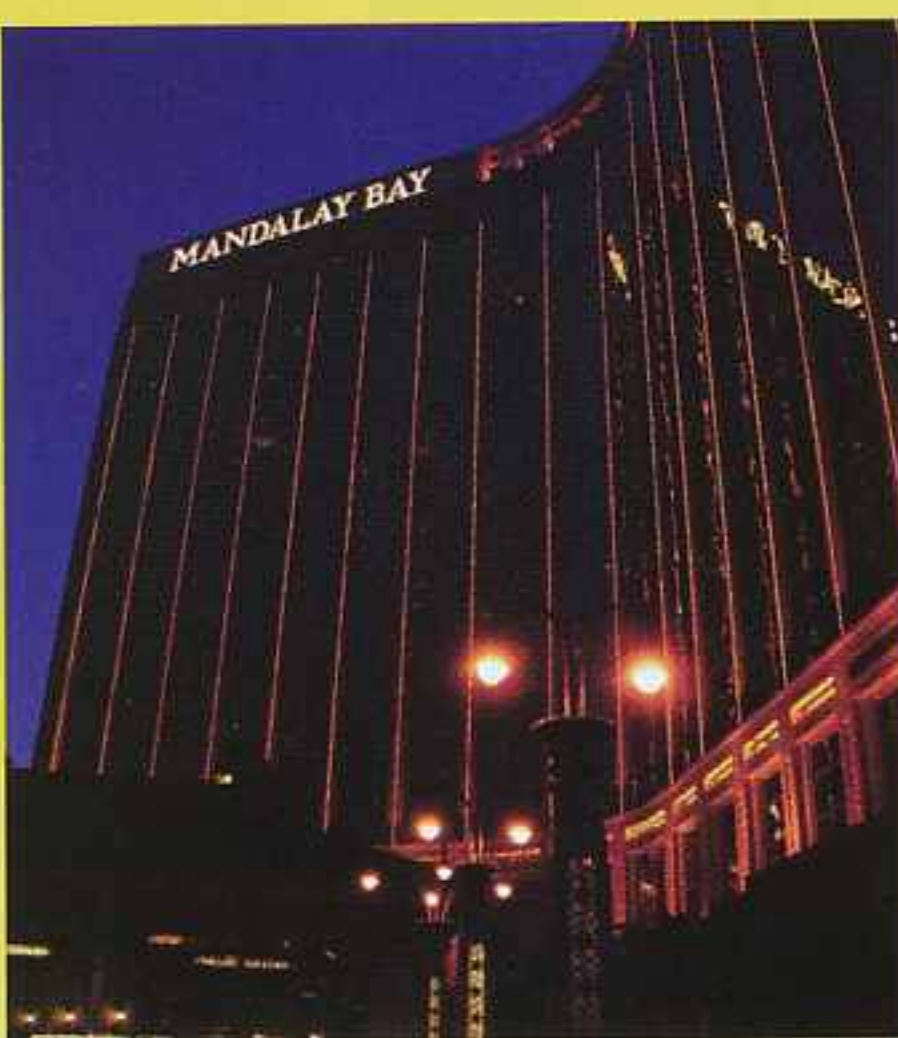
ルがお出迎えしてくれて、まさに〝地下プロレス〟のような感じなのだ。
しかし、そこで行なわれた試合は、血で血を洗う凄惨な殺し合い……ではなく、ビックリするぐらい低レベルなMMA。どこかのプロレスラーのようにベーシックな負け方をする選手が続出なのだ！　会場後方ではのんきに焼きそばを売っていたりして（ホントに）、地下プロレスというより、全日本女子プロレスの地方会場にいるかのよう。思わず心地よくなって、石井さん、松林さんと3人で試合を観ながら寝てしまったのでした。

IFOのポスターには、PRIDEにも出場した"ザ・スネーク"シリル・ディアバテの写真が掲載されていた。しかし、実際はなんのアナウンスもなく欠場。ひどいよ！

試合開始前のIFOの開場。天井の低さがまた"地下プロレス"的なムードを強めていた。

おなじみフィル・バローニはすっかり太ってコメンテーターに。しかし、今年はちゃんと減量して日本マットでの復帰を熱望していた。

12月29日

いよいよ大会当日。ホテル内を歩くと、そこら中にUFCのTシャツやらパーカーやらを着た人がいる。ファンだけでなく、ファイターや関係者も多数集まっているので、この日ばかりはホテル全体がUFC一色だ。
16時より開場前のオクタゴンサイドでダナ・ホワイト代表インタビュー。いまやアメリカのスポーツ界においても有名人であり、大物であるダナは、テレビの取材はともかく、最近では雑誌の取材はほとんど受けておらず、ネットメディアに至っては相手にすらしてない状態だが、なぜか本誌のインタビューは短い時間ながら毎回受けてくれる。今回もまたまた毒舌爆発。08年もジャイアンぶりは止まりそうにない。
17時15分から『UFC79』開始。前半から好勝負連発。そして注目のリデルvsシウバは、UFC史上、MMA史上に間違いなく残る激戦。このスーパーファイトを、会場に来ていたファイターたちはどう見たのか、大会後、いろんな選手に短いインタビューを次々と取っていたのだが、その最中、バックステージで〝渦中の人〟JZカルバンの姿を発見！
おいおい、『やれんのか！』の会場で欠場を詫びるんじゃなかったの？　なんでこんなところにいるんだよ！　しかも、けっこう元気そうじゃないか。普通に歩いてるし。くぅ～、やっぱり青木戦キャンセルは仮病だったのか！　と、そんな怒りを胸に日本の『kamipro』編集部に電話し、JZがUFC会場に来ていたことを報告。
しかし、しばらくすると編集部から折り返しの電話がケータイにかかってきて「JZカルバン、もう来日してるみたいですよ」とのこと。
へ？　もしかして見間違い？　どうやら単なるソックリさんだったようです。いや～、危うく☆マークでおなじみの自称ジャーナリストや、某・架空対談ばりに、ガセネタを撒き散らしちゃうところでした。危ない。危ない。
そんなこんなでやっぱり深夜1時近くに本日の取材ようやく終了。結局、部屋に戻ってから写真やインタビューの音声データを編集部に送信してるうちに、ほとんど徹夜になってしまいました。

これが会場であり宿泊先でもあるマンダレイベイ・カジノ&リゾート。UFCのメッカと言える場所だ。

12月30日

1時間の仮眠ののち4時半起床。ボクの飛行機は10時発なのだが、石井さんが8時発の飛行機なので一緒に空港に行く。そこで、『やれんのか！』に間に合わせるために、ダメ元でボクも早い便に変更できないかとお願いしてみると、なんとサンフランシスコ－成田の早い便に空きがあるので、可能とのこと。でも、ボクの持ってる航空券は変更不可のフィックスチケットなのだが、なんとか交渉の結果、替えてもらえたのだ。なんたる幸運！　これで『やれんのか！』にもなんとか間に合うだろう。
しかし、そんなにいいことばかりは続かない。変更してもらった便に乗り込むと、ボクの隣の席にスーパーデブなアメリカ人二人が座ってきたのだ！　DEEPの佐伯代表よりはるかに太った、推定体重135キロが二人！　エコノミークラスの狭い席にマクガイヤー・ブラザーズが座っちゃダメでしょう！
この二人、真冬なのに両者ともにTシャツ一枚。しかも、座ったとたんに座席上の送風口を全開にしてるのだ。冬なのに暑いのかよ！　3人掛けシートにマクガイヤー・ブラザーズの隣で、小さくなりながら、行きの成田空港内の書店で買った岡田斗司夫の『いつまでもデブと思うなよ！』を読んでるボク。なんとシュールな光景でしょうか。明らかに彼ら二人が読んだほうがいい本だ。
もう、もうこれは一刻も早く寝るしかない、と本を置いて寝る体勢に入るボク。寝不足だったからなんとか眠れたものの、なんとも圧迫感を感じる11時間だった。

12月31日（日本時間）

そして飛行機は日本時間31日の16時に成田着。19時にさいたま新都心駅に到着し、しっかりと『やれんのか！』をオープニングから観られたのでした。なんともハードな年末。そんな感じで作った〝カミスペ〟を存分に楽しんでいただけたらと思います。今年もよろしく！

スポーツベッティングチャレンジ企画

"本誌編集次長"
松林貴のギャンブル大将!!

ソクジュー点買いで1000ドルの損害!! 日本人（日系ブラジル人）は強いんです!!

3度目を迎えた、ラスベガス恒例企画『ギャンブル大将』。今回、本誌編集次長・松林貴はなんと、UFC初参戦のソクジュで一点勝負！　しかも投入金額は1000ドル!!　日本円にしてじつに約12万円だ。
この男気溢れる張り方となったのには、理由がある。昨年2月、『PRIDE.33』ラスベガス大会で、ホジェリオと闘うソクジュに無謀にも1000ドル賭けようとした松林。しかし、そのロマンあるギャンブルは、当時二人の実績に差がありすぎたため「賭けとして不成立」。ところが、そんな超大穴のソクジュがまさかの衝撃KO勝ち！　もし賭けが成立していたら、ハッスル・山口社長のような超高級腕時計をはめていたかも……。
そのときの無念を晴らす機会が、このたびついに訪れたのだ。しかし、いまのソクジュはもちろん下馬評も高く、前日の時点でオッズは2.2倍。試合当日にはさらに前人気が高まり、約1.77倍にまで落ちてしまった。
ここで、もう勝った気でいる松林は「いや～、前日に買っていたら2200ドルだったのに、430ドルも取り損ねちゃったよ～」と皮算用。しかし、結果はソクジュの完敗！　儲けるどころか、ラスベガスの質屋にいまはめている腕時計を……といった状況になってしまった。
これはきっと、前回のPRIDEラスベガス大会で五味、三崎、マッハという日本人に賭けず、その対戦相手すべてに賭けてなぜか大儲けしてしまったバチが当たったのであろう。
試合前は胸をドンドンと叩くソクジュのパフォーマンスではしゃいでいた松林だが、試合後は1000ドルの投票券を握りしめて、呆然と立ち尽くすのみ。
そんな松林に今回の感想を聞いてみると「ソクジュは負けちゃったけど、シウバvsリデルとサンピエールvsヒューズの2試合で1万ドルくらいの感動をもらったから、俺は満足だよ！　まあ、2月にリベンジだな!!」と、なぜか充実感いっぱいの表情。
松林のギャンブルロードはまだまだ終わらない……!?

Special PRESENTS

「やるなら殺せ!」手加減なしで応募してこいよ!

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます（商品は2008年1月6日以降発送予定です）。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦07年の大晦日はどう過ごした?⑧あなたの考える今年、マット界で起こりそうな大事件は?

【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス『kamipro』編集部「今日から敵だ!」係まで
※締切は2008年2月9日（土）当日消印有効

kamipro Special 応募券 貼れんのか!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

YARENNOKA!

やれんのか! http://www.yarennoka.com/

やれんのか! 大会記念Tシャツ

各1名様

［ホワイト&ブラック／¥3,990（税込）］

格闘技界奇跡の大連立が実現! 07年最後にして最大のクライマックスとなった大晦日『やれんのか!』開催記念Tシャツ2種を各1名様に提供。着れんのか?

でか! やれんのか! Tシャツ

［ホワイト／¥3,990円（税込）］

着てこいや～! PRIDE時代の髙田統括本部長の『おまえは男だ!』シャツを彷彿させる、男気あふれまくったデザインの『でか! やれんのか! Tシャツ』も堂々放出!

やれんのか! シュートボクセTシャツ

［ホワイト／¥3,990円（税込）］

大晦日には川尻と激突したルイス・アゼレードが所属するシュートボクセのロゴと『やれんのか!』ロゴが奇跡の融合! レアアイテム間違いなしのこの逸品を1名様に!

K-1 & Dynamite!!

YAHOO! ショッピング "K-1 STORE" http://store.yahoo.co.jp/k-1store/

"Tetsuo Hara×K-1" Tシャツ —Mono.Ver.—

2名様

［ホワイト／¥4,410（税込）］

巨大さではラオウに匹敵! チェ・ホンマンが「我が生涯に一片の悔いなし!」と咆哮しそうな原哲夫先生入魂イラスト・線画バージョンの貴重なTシャツを2名様に!

2008 K-1カレンダー（卓上版）

2名様

［¥1,575（税込）］

妹のため「負けられない理由がある」でおなじみ"MAX王者"ブアカーオの背中に浮かぶ"K-1"の文字! 07年のK-1を彩ったオールスターが集結した濃厚なカレンダーを2名様に。

パンフレット K-1 WORLD GP 2007 FINAL

1名様

［¥2,100（税込）］

ブラッディクロスを撃て! 表紙は『北斗の拳』で知られる劇画界のレジェンド、原哲夫先生描き下ろし。GP出場選手のインタビューも満載の大会パンフレットを1名様に!

船木誠勝 "RED ZONE" フェイスタオル

1名様

［レッド／¥1,890（税込）］

あのヒクソン戦から7年……。12.31『Dynamite!!』で復活をはたした"ミスター・マッドネス"こと船木誠勝の情念がほとばしる真っ赤なタオルを1名様に!

船木誠勝 "RED ZONE" Tシャツ

1名様

［レッド／¥4,410（税込）］

桜庭戦の直前にはなんと"殺人剣"修得のため、居合いの剣術修行まで行なっていた、いつ何時も狂気あふれる船木の新作シャツで、君も"RED ZONE"突入間違いなし!

HUSTLE 各1名様

ハッスル■http://www.hustlehustle.com/
エンターブレイン■http://www.enterbrain.co.jp/

『ハッスル EPISODE II DVD 1』

［180分／5,040円（税込）］

高田総統の買収劇から幕を明けた07年上半期の『ハッスル』を圧縮してお届け！ コブクロの『桜』の熱唱から、テツ&トモとの共演まで川田のオープニング劇場ももちろん収録！

『ハッスル EPISODE II DVD 2』

［180分／5,040円（税込）］

「おまえが打たなきゃ〜明日は雨〜♪」と"最強の助っ人"クロマティまで参戦した上半期の天王山『ハッスル・エイド2007』を完全収録。インリン様のご懐卵シーンも見逃すな！

RG DEAD OR DEAD Tシャツ

［ブラック／¥3,990（税込）］

過剰なリアクション芸でその評価は上がる一方のRGがついにTシャツ化！ 裏には「DEAD OR ALIVE」ならぬ「DEAD OR DEAD」の文字。まさにRGの生き様そのものの一枚が登場！

Back

インリン様M字Tシャツ

［ピンク／¥3,990（税込）］

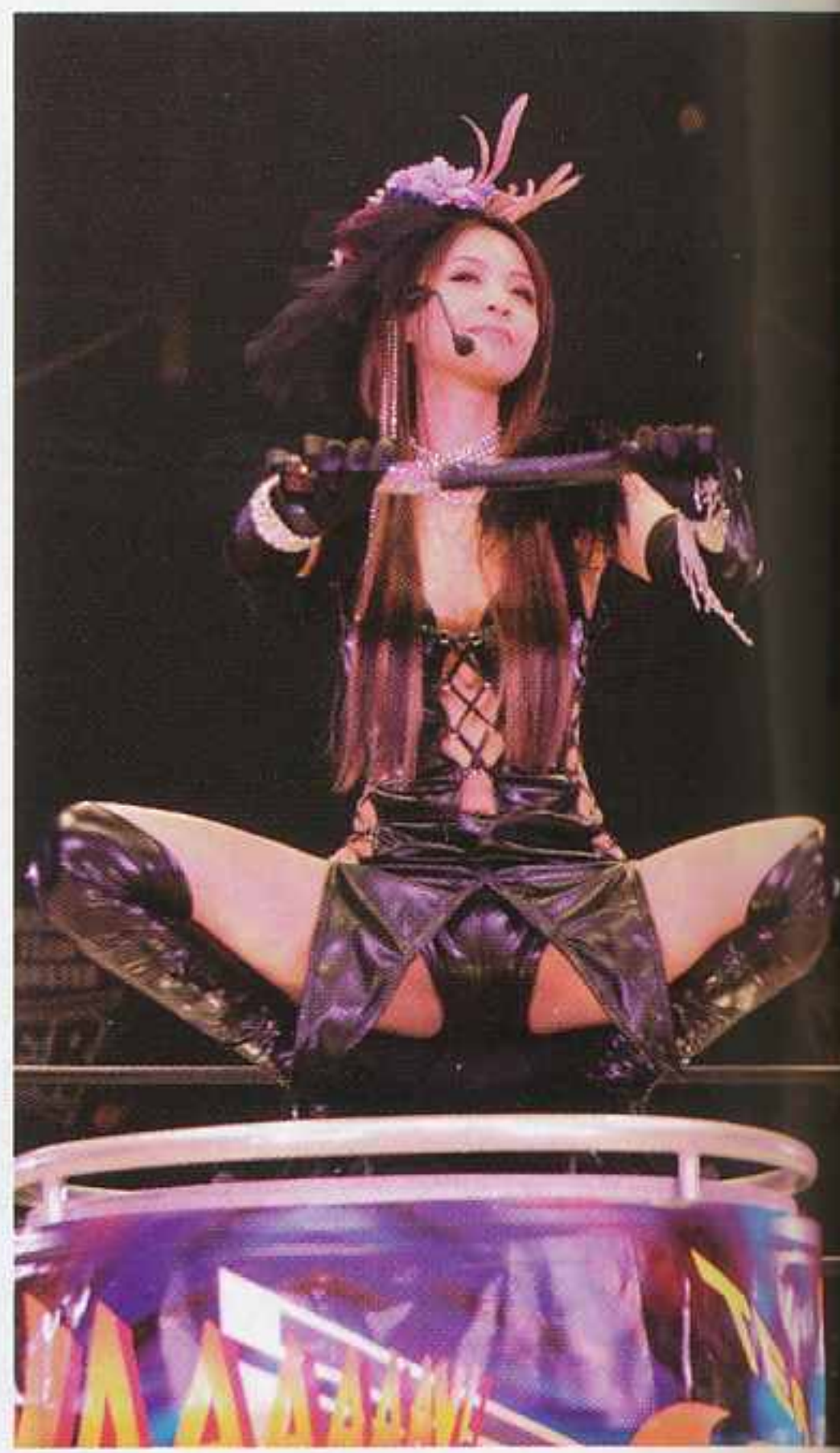
モンスターッ！ と大晦日の地上波でお茶の間を震撼させた（？）"愛と美と闘いの女神"インリン様のM字開脚をプリント。アーティスティックかつエロティックなTシャツな一枚。

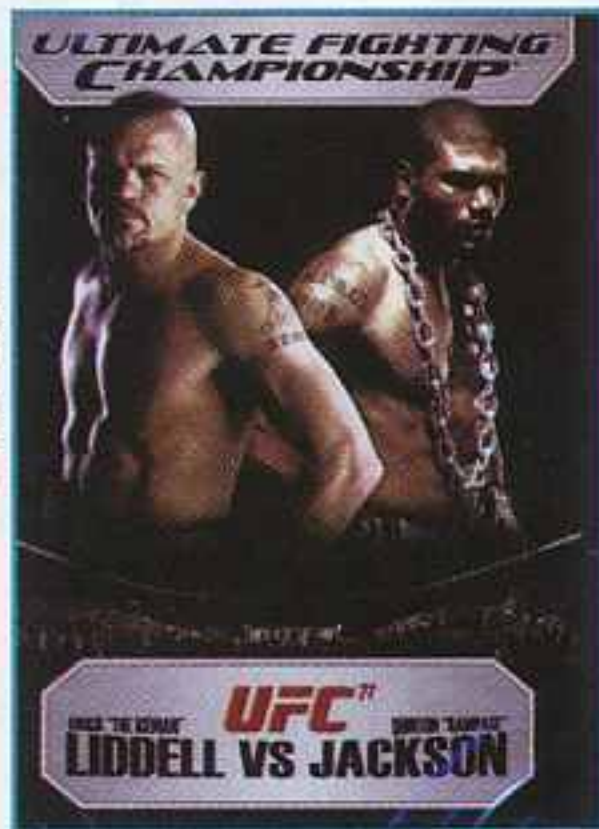
インリン様抱き枕

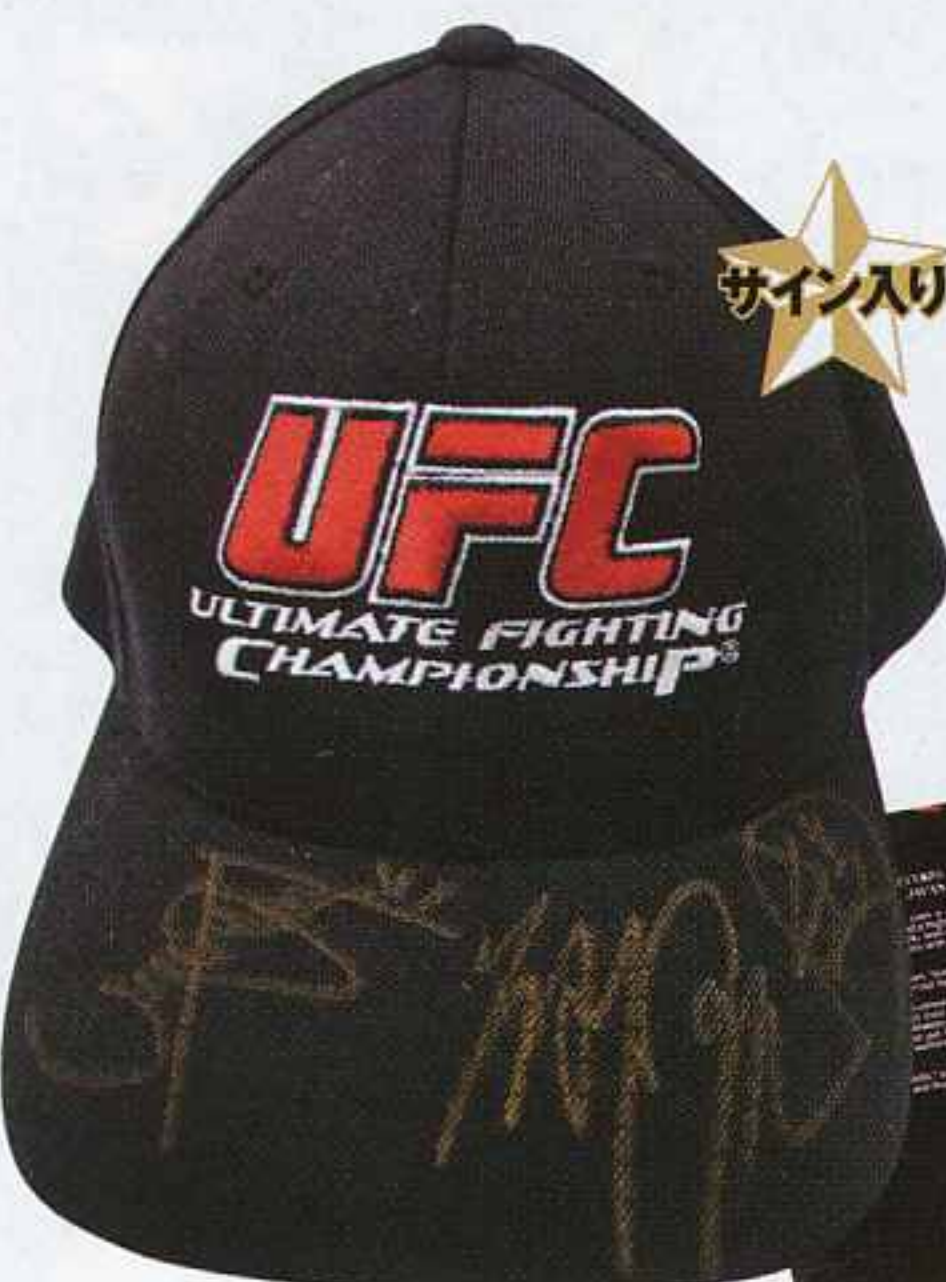
［¥9,450（税込）］

その柔らかい感触とふんわり感はまさにインリン様そのもの？ 究極の癒しアイテムを1名様に提供。寂しい夜はこの"インリン様抱き枕"をハグして心地よく夢の中へ。

UFC 各1名様

UFC■http://www.ufc.com/

『UFC71 LIDDELL vs JACKSON』

UFCの"絶対王者"チャック・リデルに"狂犬"ジャクソンが挑んだ王者戦は壮絶な結末に……。そこへ"PRIDE2冠王"ダン・ヘンが登場！ とドラマチックな展開を見せた『UFC71』のDVDを1名様に。

『UFC73 STACKED』

UFCでもやれんのか？ 大注目のアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラのUFCデビュー戦は、ヒース・ヒーリングとスリリングな好勝負に。UFCのミドル、ライト級の二大王座戦も完全収録！

長南&郷野サイン入りUFCキャップ

サイン入り

格闘技大連立もどこ吹く風、世界最大のMMA帝国として揺るぎないUFC、そのロゴ入りキャップをこちらも長南&郷野のサイン入りで1名様に。アゲ♂アゲ♂で提供ッ！

長南&郷野サイン入り『UFC78』大会パンフレット

サイン入り

今号では"UFC初参戦"対談も実現！ 長南&郷野が出場したサイン入り『UFC78』の大会パンフレット。本人たちも「持っていない」という超貴重な逸品をズバリ、1名様に！

DVD 各1名様

ビデオ・パック・ニッポン■http://www.vpn.co.jp/

『王者の系譜』

［200分／¥7,140（税込）］

新日本35年の歴史とともに移り変わった"王者の系譜"をいまこそプレイバック！ アントン、初代タイガーから、破壊王など幾多のチャンピオンシップ、名勝負を徹底検証！

『熾烈！軍団対抗戦録』

［200分／¥7,140（税込）］

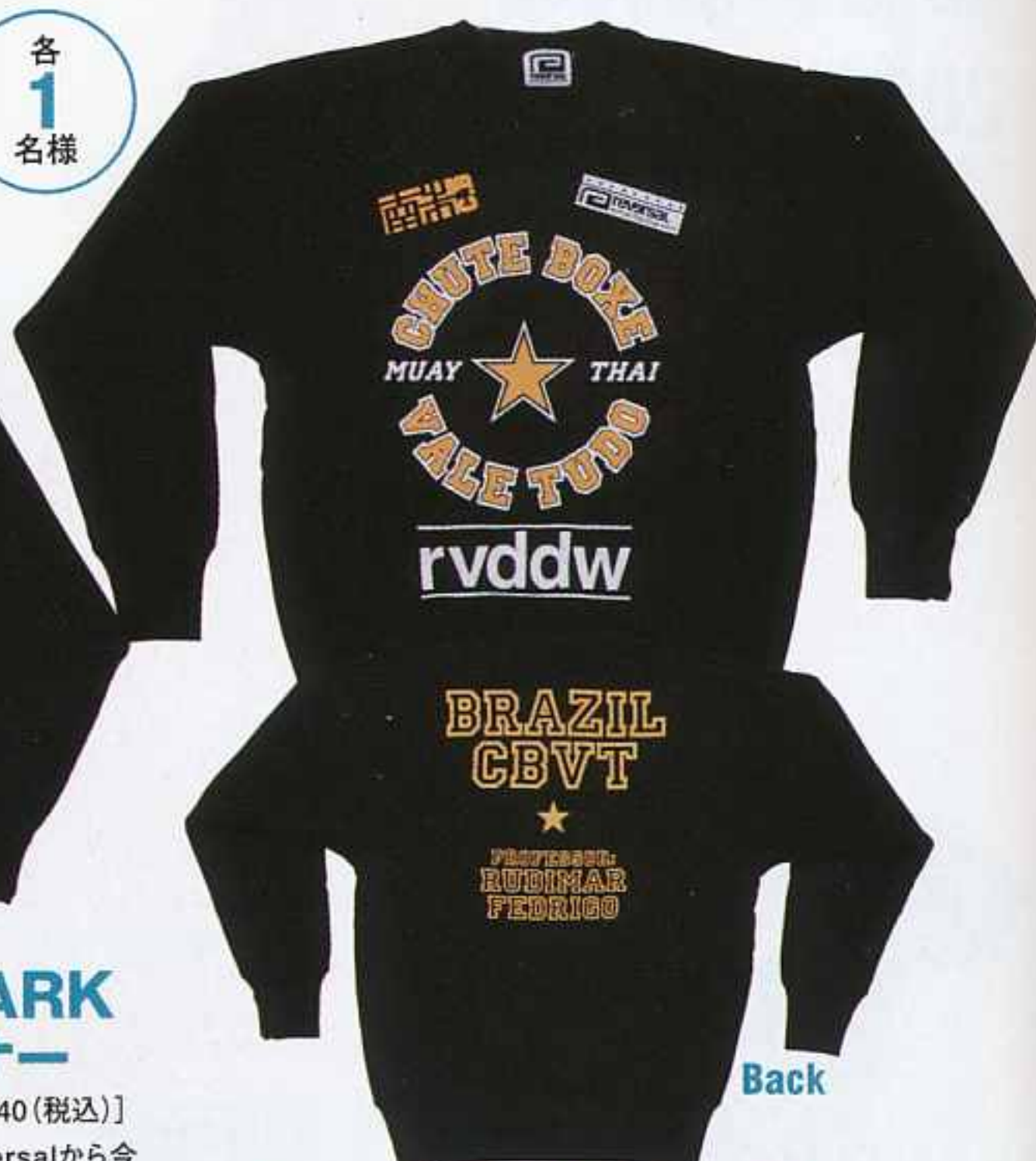
"はぐれ国際軍団"との哀愁漂う抗争劇から、旧UWF勢との危険すぎる邂逅、「新日本はハンパじゃないぞ！」とマサ斉藤が吠える天龍らWAR軍との激突など、熾烈な軍団抗争史ばかりを完全収録！

REVERSAL 各1名様

reversal■http://www.rvddw.com/

BIGMARKトレーナー

［ブラック／¥9,240（税込）］

おなじみのreversalから今回は大きくロゴが入ったその名もBIG MARK スウェットトレーナーが到着！ 13オンスの厚手素材でビンテージ感覚なサイドパネル仕様。オシャレで暖かい逸品だ。

Back

シュートボクセトレーナー

［ブラック／¥9,240（税込）］

クリチバの虎の穴！ シウバやショーグンらPRIDEチャンピオンを続々輩出したブラジルの名門、シュートボクセ・アカデミーとreversalがコラボレーションしたトレーナーを1名様に。

Back

PRIDE日本事務所閉鎖以上の衝撃!?

『富士そば』はお休みでした!!

1月1日から4日まで

ワオ木さん、新年早々ついてませんな。合掌!

その後の格闘大連立を徹底展望!
“真”のプロレス大賞も決定する
kamipro No.119は
1月22日(火)発売予定!!
※地域によって発売日は多少遅れます。

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2008 SPRING
2008年1月25日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
八木賢太郎（子作り温泉旅行のため非番）

定時帰宅厳守!
上杉天才

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子
能登くん

編集次長（ベガスで惨敗）
松林 貴

デザイン大将
出田さん（TwoThree）

デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
黒田史夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
梅木麗子
大甲邦喜

お勘定&衣料部
ニュー林様

現役フードファイター
ジャイアント入江（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本“新年会の生贄”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

編集チアマダム
廣橋久美子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。
［カスタマーサポート］ ☎0570-060-555（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00） メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

青木真也ふんどしTシャツの詳細は
kamipro Handでチェスト!!

kamipro Special 2008 SPRING
亡国PRIDEにKAMIKAZE吹いた!!

2008年1月25日
発行人／浜村弘一 編集人／斉藤康一 発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／大日本印刷株式会社

enterbrain

9784757739550

定価:本体743円+税
雑誌 61955-67 Ⓗ2009.2
Printed in Japan 大日本印刷

ISBN978-4-7577-3955-0
C9476 ¥743E

1929476007438